ハイスクール全裸

ａｎｕｒｉｔｏ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
ハイスクール全裸

【Ｎコード】
Ｎ６５０３ＥＳ

【作者名】
ａｎｕｒｉｔｏ

【あらすじ】
いろいろなシチュエーションで、
普通の女子高生が、校舎やあちこちでヌードを披露しちゃいます。
（いくつか、男生徒が脱がされちゃう話も混ざっています）

各エピソードは１話完結であり、
全て、別の学校のお話だと考えて、お読みください。
爽やかなエピソードもあれば、陰湿な内容のものもあります。
その点は、あらかじめ、ご留意ください。

最初の方のエピソードこそ、シノプシスでしたが、
後半のエピソードになるほど、
筆者の古い作品をリメイクしたような小話が増えていきます。

「骨折り」などの一部のエピソードにつきましては、
パブーの私のページや「大人のケータイ官能小説」の方にも、転載
する事にしました。

～　はじめに　～

前作「脱衣ゲーム」を書き進めていますと、ある時、感想をいただきました。それは、

「次回は、美術の時間のヌードモデルのお話はどうでしょう？」

という提案だったのです。

私も、このシチュエーションには心惹かれましたが、いかんせん「脱衣ゲーム」は「元ネタ」付きという設定（ルール）のもとで書いてましたので、うまくヌードモデルと結びつく元ネタが見つかりません。

そこで、この度、本作「ハイスクール全裸」という新作を立ち上げまして、こちらでヌードモデルの話を書かせていただいた次第なのです。

本作「ハイスクール全裸」は、前作「脱衣ゲーム」とは、かなり趣向を変えさせていただきました。前作「脱衣ゲーム」は、元ネタに詳しい味付けをして、内容を大きく膨らまし、エロ描写も細かく書き込んだのですが、こちらの「ハイスクール全裸」は、思いっきり内容を簡略化し、特定の主役も明記せず、ほんとに、あらすじみたいなストーリーにしてみたのです。

いわば、「脱衣ゲーム」とは反対の、これまで「脱衣ゲーム」の元ネタに使ってきたような物語を書いてみたのであります。だから、内容が雑すぎて、「男子生徒の存在はどうしたのだ？」とか「裸になった生徒は早退を許してもらえないのか？」など、ツッコミどころも多かったかもしれませんが、その辺は気付いていても、あえて放置して、きちんと説明しない事にしました。同時に、エッチ描写も限りなく上っ面のものにとどめており、あとは、読者の想像に任せる形にした次第です。

バカバカしいエピソードの連続なので、逆に、加工しがいがあって、創作者（クリエーター）の方なら、想像力を掻き立てられたかもしれません。ア

ダルトＤＶＤの元ネタなどにも向いているかも。本作のマンガ・イラスト化（１８禁）や映像化（１８禁）の話の持ち掛けは、大いに歓迎いたします。

美術部のモデル

うちの高校の美術部は、部内だけの秘密にして、特別な練習を行なっていた。

それは、ローテーションで女子部員たちにモデルをやらせて、皆で、本格的な裸婦像を描く勉強に取り組んでいたのだ。モデルになる子は、もちろん、他の部員たちの前ですっぽんぽんになってしまうのである。美術部としては、真面目な活動の一環のつもりだったのかもしれないが、こんな事が知れ渡ってしまうと、芸術に関心のない興味本位の生徒たちまで入部してくる恐れがある為、あえて口外禁止にしていたらしい。

その日は、授業が始まる前の早朝から、美術部は、裸婦像を描く活動を行なっていたようだ。そのあと、事件が起こった。朝の部活時間が終了したので、モデルの女子も授業に出る準備を始めようとしたのだが、脱いでいた制服が見当たらないのだ。下着も含めて、全ての衣服がである。

どうも、部内に、その子の事を妬んだ人がいたらしい。その謎の犯人が、そのモデルになった子の服をどこかに隠してしまったようなのだ。

どんなに探しても、衣服は何一つ見つからなかった。とうとう、授業が始まる時間がやって来たのである。

その女子は、止むを得ず、モデルをしている最中の休憩時間に使っていたバスタオルを体に巻いて、今日の授業には出席する事にしたのだった。それは、まるで、風呂上がりのような格好なのだ。

その女子が在籍していたクラスが、すっかり、ざわついてしまったのは言うまでもない。何しろ、普通の制服姿の生徒たちの中に混ざって、一人だけ、バスタオルにくるまったクラスメートの女子がいるのだ。異様であり、否が応でもエッチな気持ちを駆り立てられ

てしまう光景なのであった。
それでも、時間が経つうちに、そんな状況にも、周囲も、バスタオルをつけた本人も、だいぶ慣れてきたようだ。
しかし、その油断が命取りなのである。自分の格好が特殊だった事も忘れて、他の事に夢中になってしまっていたバスタオルの女子は、時々、バスタオルの結び目が緩んできた事に気付き遅れて、バスタオルをポロリと落としてしまった。周りには、沢山のクラスメートがいたと言うのに、うっかり全裸を晒してしまったのだ。その場に居合わせた男子のクラスメートたちも、この思わぬハプニングには大喜びなのである。
そんな事が、その日のうちに数回あった。その女子は、美術部員たちのみならず、クラスメートたちにも自分の体の細部まで見られてしまった始末なのだ。
この出来事があって以降、我が校では、美術の授業では、クラス内の女子の一人を任意でモデルに選び、その子のヌードの絵を描く事が、課題として組み込まれるようになったのだった。

了

クイーンの日

うちの高校には、クイーンの日という、独自のイベントがある。クイーンの日は、一学期につき一回、開催された。その日は、全女子生徒のうちから一人だけ選ばれたクイーンが校内を練り歩くのであるが、それは、あまり栄誉なものでもなかった。と言うのも、クイーンとなった女生徒は、その日一日、全裸で学校に居なくてはいけなかったからである。

クイーンがどのような基準で決められていたのかは、よく分かっていない。前学期のテストの成績が一番悪かった者だとも、校則の違反が特に多かった女子なのではないか、とも言われていた。とにかく、クイーンにだけはなりたくないものだから、うちの学校の女子たちは誰もが、勉学でも生活態度でも、学校に悪い印象を持たれないように、ひどく気を付けていたのだった。

それでも、誰かは必ずクイーンに選ばれる。クイーンを命じられちゃった子は、恥ずかしくても、学校の指図どおりに、校内では裸となり、クイーンの任務を全うするしかないのであった。

本人にとっては最悪でも、周囲の生徒たちにしてみたら、最高の見世物なのだ。何たって、女の子の裸を、学校公認で見物できちゃうのだから。特に、男子生徒たちにはウケがいいのである。

クイーンは、朝っぱらから、全校集会の朝礼の台にと立たされた。全校生徒に、その一糸まとわぬヌードをお披露目するのである。しかも、各教室を一つ一つ回って、そのクラスの生徒たちにじかに挨拶する時間も設けられていた。その裸を、全ての生徒たちに、じっくりと、目に焼き付けてもらうのである。

ここまでハデな行動をとると、クイーンにイタズラしようとする生徒も現れそうなものだが、そこは、クイーンには常に護衛の教師が付き添っていたので、大丈夫なのだ。

こうやって、一人の女生徒が犠牲となって裸を晒す事は、むしろ、思春期である生徒たちのモヤモヤしていた性欲の受け皿になっていたようで、気になっていた女のヌードを堂々と見て満足できたせいか、我が校では、男子による性的な問題がいっさい起きていなかったのだった。

そして、素行や学業成績が悪すぎる男子に対しては、クイーンの日の登校が禁止されたりもしていたのである。この素敵なイベントの日に学校に入れてもらえないだなんて、あまりにも辛すぎるので、男子生徒たちもまた、日頃からの勉強や正しい礼節に務めるようになっていったのだった。

クイーンの日は、生徒たちの非行化を防止するのにも、大いに役立っていたみたいなのである。

了

全裸スポーツ部

うちの高校では、伝統的に、スポーツを行なう時は裸になる決まりとなっていた。男子だけではなく、女子もだ。下着一枚残さずに、完全にすっぽんぽんになってしまうのである。それには、なにやら、神聖なる儀式的意味合いも込められていたらしかった。

そんな訳だから、放課後のグラウンドでの体育系の部活の練習などを眺めてみたら、なかなかの壮観さなのである。男子もなのだが、それ以上に、女子の姿が目を引いた。ソフトボール部も、女子サッカー部も、陸上部も、皆、全裸で練習しているのである。

大量の女の裸だ。誰もが、乳房を揺らし、性毛を風になびかせて、練習に励んでいるのである。体育系の部活に入る子たちだから、体格のいい子が多かった。肉も引き締まっていたものだから、体の線はとても綺麗で、ヌードであっても、あまり卑猥さはなく、その汗をかいている勇姿は、清々しさすら感じられたのである。

我が校へと他校のチームを招き、対抗試合をした時などは、面白い光景を拝見する事ができた。他校の生徒にまでは、裸になる事を強要したりはしない。しかし、我が校のチームは、いつものように裸のままなのである。

着衣チーム対ヌードチームという、違和感ただよう絵面（えずら）の試合となったのだ。

他校のチームも、相手チームの選手が全員裸だと、かなりヘンな気分を味わわされて、調子を狂わされたらしい。我が校内で対抗試合をした時は、ほとんどが、我が校のチームの圧勝で終わったのだった。

しかし、そんな我が校のスポーツ部であるが、地区大会などに出場すると、なぜか、まるで勝てなかったのである。その原因は、どうも、他所で行われる大会では、きちんと体操着（ユニフォーム）を着用しないとい

けない事にあったらしい。裸での運動に慣れてしまった我が校の生徒たちは、服を身につけると、普段通りの鮮やかな動きができないらしく、十分な実力を発揮できなかったようなのであった。

了

服装検査

うちの高校は、柄も悪ければ、不良も多く、そのおかげで、校則もやたらと厳しくて、数ヶ月に一度、抜き打ちの服装・持ち物検査も行われていた。この服装検査が、なかなか、やっかいだったのである。

不良女子たちの大半が、この服装検査に引っかかってしまう。しかも、それだけでは終わらず、校則違反と判断された制服は、そのまま、学校に没収されてしまうのだ。もちろん、このやり方には生徒たちも不満タラタラだったのだが、うちの学校の先生たちはなかなか強いので、逆らう事ができなかったのだった。

同時に、持ち物検査も行われていて、予備の制服を隠していたとしても、取り上げられてしまう。体操着（ジャージ）で授業に出席する事さえもが許してもらえなかったのである。これでは、制服を没収されてしまった生徒は、制服なしのだらしない格好で、校内に居るしかないのであった。学校側としては、それを制服違反者に対する見せしめと罰則と言う事にしていたのであろう。

でも、不良女子たちだって負けてはいない。服装検査で、制服を没収されてしまった後は、彼女たちもすぐに行動を開始するのだ。今度は、彼女たちが、自分が着る為の制服を、他の一般生徒から巻き上げたのである。だから、結局は、いくら制服を取り上げられようと、不良女子たちはちっともこたえないのであった。

哀れなのは一年生である。こうやって、制服の奪い合いが始まると、最後のしわ寄せが集中するのは、一番弱い下級生だったからだ。一年生の間でも、制服の取り合いとなり、最終的には、一年生の中でも特に弱く善良な一般生徒ばかりが、制服を着られない状態に追い込まれてしまうのだった。彼女たちは、しっかりと校則を守っており、全く罪もなかったにも関わらずだ。

こんな風に、生徒の間でイザコザが起こっていたと言うのに、学校や先生たちはまるで無関心だった。学校側としては、表面上の校則検査さえ徹底していれば、自分たちの義務は果たしていたので、生徒間の問題にまではいっさい干渉する気が無かったのだ。よって、制服を着る事ができない生徒が本当の校則違反者じゃなかろうと、もう、そこはどうでも良かったのだった。

制服検査があった後は、校内のあちこちで、セーラー服なしの下着丸出し女子の姿を見かける事ができるようになった。真夏の暑い日だったりすると、パンストもスリップも身につけていないから、セーラー服を取られてしまうと、嫌でもブラジャーむき出しの姿になってしまったのだ。

セーラー服ではなく、スカートの方を奪われてしまい、パンティが見えてしまっている子もいた。もとがノーブラだったのか、セーラー服がないと、上半身の肌が全て露出してしまい、乳房がモロ出しになっている子もいた。セーラー服もスカートも両方取られてしまったらしく、ブラジャーとパンティだけの露骨な下着姿の子もいた。ふざけた不良たちに下着まで持っていかれちゃったのか、ブラジャーどころか、パンティさえも履いていない、完全に素っ裸の子までいたのだった。当然ながら、その子は、性毛や大事な部分まで晒してしまっていた。弱くて、無力な生徒ほど、悲惨な有様なのである。

このような状況は、その日の学校が終わるまで続いたのだった。

了

女ずもう

うちの高校では、なぜか、相撲大会が校内行事の一つに組み込まれていた。

女生徒たちが、全員、トーナメントで相撲の勝ち抜き戦を行なうのである。しかも、試合の際の服装（スタイル）も本格的なのだ。制服も下着も全て脱いで、まわしだけの姿になるのである。

恥ずかしがったって、欠場は許されない。全員が強制参加なのだ。でも、女同士の相撲というのは、それはそれで、男の相撲とは違う面白みがあったのだった。

たとえば、女ならではの技を仕掛ける事もできた。選手は全員、まわし一丁で、おっぱいだって晒していたのだが、このおっぱいを利用したのだ。女同士が相撲で組み合うと、どうしても、お互いのおっぱいが当たったり、擦れたりしてしまう。なにぶん、敏感な部分だがら、そんな事になると、つい感じてしまう女生徒も多かったのだ。本気で勝ちを狙っている生徒は、そこに目をつけた。自分から、わざとおっぱいを相手の胸へとこすりつけていき、相手をドキッとさせて、心の動揺を誘ったのだ。そして、相手がうろたえて、動きが鈍ると、すかさず一気に攻めて、負かしてしまったのである。

胸の大きい子の場合は、相手をあと少しで押し出せそうな時に、ここぞとばかりにグンと胸を張ってみれば、その勢いで相手の体を土俵の外へ突き飛ばしてしまう事もできた。まさに女の力士ならではのテクニックなのである。

また、普段つけ慣れていないまわしを巻いてみるものだから、その締め付け方は緩く、試合の最中にまわしが取れてしまうような子も続出したのだった。試合中に、相手のまわしを握り、引っ張ったりするので、ますます緩んでいき、外れやすくなったのだ。そうやって、まわしが落ちてしまっても、試合は続行するので、そのよう

な選手は全裸で相撲を取り続けたのである。ひどい場合は、両方の選手のまわしが取れてしまい、ただの裸の取っ組み合いみたくなってしまう事もあった。

さて、我が校のこの相撲行事の話が、文科省の耳へと入ったのだが、すると、急に、この相撲大会は今後は開催中止するようにとの勧告がくだったのだった。よって、その後は、我が校では、このユニークな大会も行われてはいない。

その内容があまりにも猥褻だったからではなく、士俵は神聖な場所だから女性は入ってはいけない、と言うのが禁止にされた理由なのであった。

了

カンニング対策

とにかく、テストでカンニングをする生徒が多かったものだから、うちの高校では、とうとう、極め付きの対策が採用されてしまった。

スマホやカンニング道具をいっさい隠させない為に、生徒は全員、下着姿になって、テストを受ける事に決まったのだ。もちろん、生徒たちは猛反対したが、元はと言えば、カンニングばかりしている自分たちの方が悪いので、学校側の強行決定を阻止はできなかったのだった。

身につける下着の種類まで指定されている。

男子は、白のブリーフ一枚だ。トランクスやボクサーブリーフですら、物を隠せる余地があるとして、認めてもらえないのである。

女子の方も似たようなもので、上は白のノーマルブラ、下は白のビキニのショーツを履くのが、標準として定められた。やたらとフリルや装飾品がついた下着はＮＧだ。逆に、表面積の少ないＴバッグや紐パンなどは、ビキニ以上に推奨された。布地の表面のレース部分が多くて、内側がいっぱい透けて見えるパンティは、もっと歓迎されたのだった。女子の場合、膣の中にだってモノを隠すのが可能なので、いっその事、ノーパンにした方がいいのではないか、という意見まであったほどなのである。

実際に、それに近いような出来事も起こった。

ビキニになるのを恥ずかしがって、ワンピースの水着を着て、テストを受けようとした女生徒が現れたのだ。

たとえ、白色でも、ワンピースでテストを受けるのは禁止なのである。ところが、その女生徒も意地を張っていたので、ワンピース水着以外の下着は学校に持ってきていなかった。

教師たちがじっくりと相談し合った結果、その女生徒はワンピースを脱いで、テストを受ける事が決まったのだ。代わりのものは、

何も着させてもらえない。全裸でテストを受けるのである。
　こうして、その女生徒は、ヘンに学校に逆らったばかりに、全校生徒で唯一、真っ裸でテストを受ける試みを経験してしまったのだった。豊満なおっぱいも、陰毛が密集した股間も丸出しにして、これなら、絶対にカンニング道具は隠せそうになかった。
　この女子の一件は、我が校では、のちのちまで語り継がれる事になったのだった。

了

野球拳

うちのクラスの女子の間では、野球拳が流行っていた。あの、ジャンケンをして、負けた方が服を脱いでいくという遊びだ。なぜか、このゲームに、女子たちはハマってしまったようなのである。

彼女たちは、仲良し同士で勝負をして、負けたら本当に服を脱いでいったのだが、たいていは、お互いが下着姿になってしまう前に、痛み分けにして、終わりにしてしまうのであった。

もっとも、相手によっては、決着がつくまで続行する事もあったのである。クラス内の、人の良い、おとなしい女子たちをゲームに参加させた時などだ。その時は、女子たちも、鬼のような態度で、最後までゲームを遂行したのである。

いずれのおとなしい女子たちも、付き合いがあるので、誘われたら、拒めないのであった。そして、他の女子たちは、最初っから、そのおとなしい女子の事ばかりを脱がせる気で満々だったのである。

この時ばかりは、女子たちも、かなり卑怯な手を使いまくった。後出しジャンケンをしたり、おとなしい女子にグーだけを出すように強要したり、要するに、おとなしい女子ばかりが服を脱ぐように、わざと仕組んだのである。

かわいそうに、おとなしい女子らは人が良かったものだから、そんな意地悪をされても、愛想笑いをしながら、下着だけの姿になるまで、きちんと付き合ったのだった。

中でも、特に標的にされていた弱い子がいた。その子は、普段から他の女子にイジられていたので、野球拳をする時も、容赦してもらえなかったのである。つまり、最後の一枚まで脱がされちゃったのだ。

教室の中で、彼女が野球拳に参加する事が分かると、たちまち、その周りには見物の輪ができた。これから、彼女のヌードを拝める

事がはっきりしていたからだ。オレたち男子も、それを楽しみにして、見物人の中に加わっていた。

こうして、その子は、完全な見世物となって、野球拳遊びで服を脱がされていったのである。周囲の様子から、彼女自身も、裸を見られてしまう事に気付いていたのかもしれない。しかし、それでも、お人好しの彼女は、付き合いもある事だし、この野球拳遊びを断る事ができなかったのだった。

クラスメート全員の視線が集まっている中、案の定、彼女だけが服を脱がされ、裸になっていく。下着だけの姿になり、とうとう、ブラジャーも外してしまう。貧弱なおっぱいがむき出しになってしまうが、それでもゲームは終わりにならない。ついに、彼女は、最後まで残っていたパンティも取ってしまうのだった。

教室の中だと言うのに、真っ裸になってしまったクラスメートの女子。乳首もお尻も丸見えだ。この子ときたら、手で隠すのがヘタで、股間の性毛も割れ目もすっかり見えてしまっていた。女体の恥ずかしい部分をことごとく晒していた級友を鑑賞して、女子たちは、優越感に浸りながら、ゲラゲラ笑っている。脱がされた弱い子自身も、どう反応すればいいか分からなくて、躊躇しながらも、一緒になって、愛想笑いを浮かべているのだった。イジられている側の人間というのは、内心じゃ辛くても、そんな態度をとるしかないのである。こんな彼女の気持ちなど分かろうともせず、他の女子たちは、ただ自分たちさえ楽しければ良かったのだ。

ほんとに、女というのは、やる事が残酷なのである。

ただし、オレたち男子も、本音を言うと、少しドキドキしながら、クラスで一番弱い女子の裸を眺めさせてもらっていたのだった。はじめて間近で見た、女のヌードだったからだ。彼女の事が好きだった訳ではないが、それでも、同級生の女子の、大人になりかけの肉体というのは、まだまだ子供だったオレたちにとっては、十分に刺激的で、興奮させられる代物だったのである。

こんな感じで、その女子は、教室の中で、確実に数回は、野球拳

遊びによって全裸にされていた。その度に、オレたちも、クラス内の弱者の屈辱のヌードを見物させてもらったのである。高校生のうちから、これほど女の裸を観察する機会があったなんて、よくよく考えても、とても恵まれた話なのだ。

これが、オレにとっても、女性の裸身を見た最初の記憶でもあったのだった。

了

鬼ごっこ（前書き）

この話は前章「野球拳」の続きです。

鬼ごっこ

うちのクラスの女子の間で野球拳遊びが流行っていて、いつも、一番弱い女子が全裸になるまで服を脱がされていた事は、前にも話したと思うが、この話にはまだ続きがあった。

教室の中で、クラスメートの皆が見ている前だと言うのに、野球拳によって、最後の一枚のパンティまで脱がされてしまった弱い女子は、そのあとも、さらにジャンケン勝負をやらされていたのである。この状況で負けても、もちろん、もう脱ぐものは何もない。

しかし、一緒に遊んでいた女子たちは、代わりのペナルティを用意していたのだ。

弱い女子が全裸の状態で野球拳に負けてしまった後、女子のリーダーは、その弱い女子の使っているリコーダーを持ってこさせた。弱い女子を教室の床にと座らせて、開脚させると、露出した彼女の女陰へと、そのリコーダーの先を突っ込んだのである。

「ほら、下の口で、吹いてごらんよ」と、女子のリーダーは笑って、言ったのだった。

当然だが、音など出るはずもないのである。しかし、女子のリーダーは、それでもグイグイとリコーダーをもっと中へと押し込んだのだ。リコーダーの半分以上が、弱い女子の膣の中へ潜り込んでしまっていた。リコーダーの先端部分は、彼女の子宮の入り口にまで到達していたかもしれない。その弱い女子は、実は、すでに処女ではなかったらしくて、そこまでリコーダーを挿入しても、出血するような事はなかった。

このあと、膣の中でリコーダーをグリグリ回したあと、ようやく、このリコーダーを引き抜くのだ。取り出したリコーダーは愛液でべっとり濡れており、表面はいびつに光っていた。

このリコーダーを使って、皆は、もうひと遊びするのだ。

「○○のマン汁、あーげる！」と言って、このリコーダーをクラスメートの誰かに手渡し、押し付け合うのである。渡されちゃた子は鬼となり、そのリコーダーを別の誰かに押し付けるべく、皆を追いかけ回すのだった。実にガキっぽい遊びなのだが、当時のオレたちは十分に面白がっていたのである。

この段階になると、野球拳の方は完全にお開きとなっていた。裸を晒していた弱い女子も、ようやく、服を着る事が出来たのである。級友の男子にも女子にも、自分の全裸や挿入自慰を見られた上に、自分の恥ずかしい体液をネタに使って、皆が鬼ごっこをしている事に、彼女がどう感じていたのかは、まるで知る由もなかった。

逆に、クラスの皆の前で裸やオナニーを披露して、アソコの汁まで皆の遊びの道具になんか使われている女子なんかとは、男子の誰も付き合いたいとは思わなかったし、お嫁さんにする事とかも想像もつかなかったのであった。自分の性器に押し込んだリコーダーを、翌日、何事もなかったように、普通に口でくわえて、吹いたりしていたから、なおさらなのである。

了

アイドルコンサート

うちの高校の学校祭において、当代でも人気ナンバーワンのアイドル歌手のコージローが、ステージショーのゲストとして招かれる事となった。これには学校中の女子が大喜びとなったのだが、男子は全く面白くないのである。

そこで、コージローが出番のコンサートステージには、男子はいっせいにボイコットして、観に行かない事となったのだった。ただし、男子のそんなジェラシーなぞ、女子にはちっとも関係ない訳で、女子は女子で、皆で相談しあって、愛しのコージローをどう歓迎するかで、盛り上がっていたのである。

そして、学校祭の、コージローが参加するコンサートの日がやって来た。

コージローがステージに上がると、観客席の異様な光景に、普段はクールさが売りのコージローも、つい動揺してしまったのだった。

広い観客席は、女子生徒たちの姿だけで完全に埋まっている。しかし、その女生徒たちが全員、素っ裸だったのだ。誰一人として、パンティ一枚履いていないのである。観客席いっぱいの女の子たちが皆、オールヌードだなんて、ものすごい圧巻なのだ。

女子たちにしてみれば、コージローに喜んで見てもらえるんだったら、裸も全然平気、という意気込みだったのかもしれないが、これはこれで、ちょっと強烈すぎるのである。

こうして、コージローのスペシャル歌謡コンサートが始まったのだが、目の前で波のように揺れる女の裸の群れに、コージローもすっかりペースを乱されてしまったようだった。コンサートの途中、コージローは何度となく歌詞や手順を間違えてしまい、かつてない最悪のコンサートとなったのである。

どうも、このコンサートが原因だったらしく、この後、しばらく

の間、コージローは、理由も明かさずに、全ての芸能活動を休止したのだった。男子からしてみれば、ザマミロな話なのだ。

了

ヌード吹奏楽部

うちの高校の吹奏楽部は、他の生徒や先生らには内緒で、独自の練習方法を行なっていた。

彼らは、部室で楽器を演奏する時は、皆、服を脱いでいたのだ。制服も下着も、全て、外してしまうのである。男子も女子も、どちらもだ。

はじめは、部員の一人が、冗談で、下着姿で楽器を吹いてみたらしい。ところが、ふざけたつもりが、そのだらけた格好で楽器を操ってみると、楽器の音色も響きも全然違って聞こえる事が分かったのである。恐らくは、自身も衣類をつけずに、素肌を晒していた方が、より自然な音を感知する事ができたのだろう。しかも、明らかに、その方が、音の聞こえ方もきれいなのだ。

この話は、瞬く間に吹奏楽部内で広まり、さっそく、部員の誰もが、ヌードで自分の楽器を演奏する事を試しだしたのだった。そして、一度、ヌード演奏の魅力にはまってしまうと、とても着衣状態の演奏などできなくなってしまったのである。

もちろん、女子部員は裸になるのは恥ずかしかったりもしたかもしれない。だが、彼女たちも音楽を愛する人間のはしくれだ。ヌード演奏の優位性さえ分かれば、いくらでも服なんかは脱いでしまえるのである。

そして、ある日、校内にて、この吹奏楽部による発表会が行なわれたのだった。

彼らは、ステージの上に勢ぞろいし、全校生徒に見守られる中、本格的なオーケストラ演奏を始めたのだ。

ところが、どうも何かがしっくりいかない。

「よーし！みんな！脱ぐぞ！」と、いきなり指揮者をしていた部長が叫んだ。

すると、その一言を待っていたかのように、奏者の部員たちは、いっせいに服を脱ぎ始めたのだった。全校生徒の前だと言うのに、全員が一糸まとわぬ素っ裸になってしまったのである。

そのあとの彼らは、何事もなかったかのように、ヌード姿での鮮やかなオーケストラ演奏を、校内の全ての人たちの前で披露してみせたのであった。

了

女マネージャー

あまりにもスポーツ系部活が弱すぎた我が高校では、苦肉の策で、次のようなご褒美制度が採用される事となった。

それは、もし、スポーツ部が大会を勝ち進めるようであれば、大会終了後に、その勝ったスポーツ部の女子マネージャーが、勝ち進んだ状況と見合わせた分の服を脱いでみせる、と言う集団慰労会を開催する事にしたのだ。

たとえば、地区大会で優勝すれば、マネージャーは、制服を全て脱いで、下着姿を披露する。全国大会で、上位にまで残れたら、ブラジャーも外してしまうのだ。そして、もし全国大会でも優勝して、日本一になれたら、皆の憧れのマネージャーは完全なオールヌードをも見せてくれるのである。

これで、スポーツ部の男子たちも、一気に張り切りだした。我が校のスポーツ部は、たちまち好成績をマークするようになったのだ。

意図的に、校内でも特に美人の生徒ばかりをマネージャーに配置するような工作も施されていた。集団慰労会には、スポーツ部以外の一般生徒も出席していて、彼らも女子マネージャーたちのヌードショーを楽しみにしていたので、スポーツ部の選手たちはますます校内中の皆からプレッシャーをかけられる事となったのである。人気のある女生徒がマネージャーをしていたスポーツ部は、なおさら優勝への待望が高まる事になり、選手たちも必死で試合に勝たなくてはいけなくなったのだ。

さて、この話には、まだ続きがある。

こうして、マネージャーの特別システムが施行された事によって、我が校のスポーツ部はぐんぐん強くなっていったのだが、とうとう全国大会で優勝するばかりではなく、世界大会の日本代表にも選ばれるような部員まで現れるようになったのだ。

果たして、この部員たちが世界大会でも勝ち抜いて、優勝でもするような事になれば、全裸まで披露してしまった美人マネージャーは、次は何を拝ませてくれるのだろうか？その事を考えて、我が校では、早くも期待で大いに盛り上がっている始末なのだった。

了

割礼教室

うちのクラスでは、高校卒業の日が近づくにつれて、女子たちの元気がいっぺんに無くなっていった。

と言うのも、うちのクラスの担任の女教師は、アフリカの地方出身者で、記念すべき高校卒業日には、自分のクラスの女子を全員、自らの手でクリトリス割礼して、大人の女にしてやろう、と張り切っていたからだ。先生自身が、割礼経験者だったのである。

暗く落ち込んでいる女子たちがあまりにも不憫だったので、医者を親に持つ生徒が、ちょっと皆を助けてあげる事にした。彼女たちに、自主的に割礼してきた事を証明するニセの診断書を配ってやったのである。先に自分で割礼しちゃった事にすれば、担任の先生にクリトリスをちょん切られなくて済む訳だ。

そして、運命の卒業の日がやって来た。クラスの最後のホームルームの時間、担任の先生は、植木ばさみを手にして、割礼式を始めるのを楽しみにしていたのだが、教え子の女生徒たちは、そんな先生に、次々に割礼済みの診断書を渡していったのだった。

ところが、一人だけ、診断書を持っていなかった女子がいた。付き合いの悪かった、ガリ勉の優等生だ。女子たちは、彼女の事が気に入らなくて、わざと意地悪して、診断書を分けてあげなかったのである。それに、せっかくなので、一人ぐらいなら、クリトリスを割礼されるところを見てみたい気もしたのだった。ちなみに、彼女は、うちのクラスでは、一番いい大学への進学が決まっていた。

哀れにも、その真面目で、おとなしく、勉強のできた女子は、一人だけ、本当に割礼を受ける事になってしまったのである。

自分だけが割礼されると知り、うろたえていた彼女の体を、他の女子たちは、面白がって押さえつけた。続けて、服も脱がして、素っ裸にしてしまう。両足も左右に広げて固定して、性器をあらわに

すると、割礼の準備は整った。

割礼って、性器も皆に見られてしまって、ますます恥ずかしいのだ。

普段はすました優等生でも、股間には立派なお豆をつけていた。担任の先生は手慣れた感じで、それをチョキンと切り落としてしまったのである。大きかったので、かなり手応えがあったようだ。えぐられた肉片はボトリと下に落ち、切断面からはピュッと勢いよく血が噴き出した。

想像した以上の痛さに、優等生は、目いっぱいに涙を溜め、股間を両手で押さえながら、ピョンピョン飛び跳ねたが、彼女の周りを囲んでいたクラスメートたちは、大笑いして、割礼の儀式が無事に遂行された事を、手を叩いて祝福したのだった。

了

未来のバレンタインデー

今年も、間もなく、バレンタインデーがやって来る。

科学の進歩に伴い、４、５年前に比べると、プレゼント用のチョコの作り方も、さらに驚く形にと進化を遂げていた。

この時代は、３Ｄプリンタによって、人間の全身像まで、型を取る事が可能になっていたのだ。そこで、最先端の流行に乗っかった女の子は、３Ｄプリンタで自分の体の型を取り、そのミニサイズのものを作って、それにチョコを流し込んで、自分の形をした手作りチョコを、彼氏や片思いの男性へと渡したのである。

さらに、猛烈に自分をアピールしたい女は、服を着ている姿の自分のチョコではなく、ヌード状態の自分のチョコまで作り出した。まさしく「私を食べてね」なのだ。実物も、このような形のバストや女性器をしているのだろうかと思って、そのヌードのチョコを食べると、貰った側の男も、さぞドキドキした事だろう。

ところが、これを、もっと上回る事をやり出した女も現われたらしい。そうした女性たちは、自分のヌード姿のチョコだけでは飽き足らず、とうとう、そのチョコの中に、自分の愛液まで混ぜ始めたと言うのである。これぞ、その子のアソコの味まで知る事のできる、究極の分身チョコ、って訳だ。女たちは、好きな男性の為には、そこまで、やっちゃうのである。

うちの高校でも、バレンタインの日には、そんな悩ましいチョコが、大量に出回る事となった。貰えるのは、校内でも人気者のイケメンの男子たちばかりだ。しかし、彼女の存在に困っていない彼らイケメン男子たちは、知らない女生徒から、そんなチョコを貰っても、苦笑いして、ただ困るだけなのであった。

だから、そんなイケメン男子たちは、貰ったチョコは、気前よく、友達や後輩たちに配り分けた。お裾分けしてもらえた男子たちの方

は、自分が好きだった女子のチョコを見つけると、優先して、それを譲ってもらったのである。

こうして、乙女の情愛は、自分が好きだった男子に食べてもらえるのではなく、たいがいは、その女子に片思いしていた別の男子にと食べられてしまったのであった。

了

リアル妖精

学校祭で、うちのクラスは「ピーター・パンとネバーランドの世界」と言う、展示を行なう事になった。

教室は展示会場となり、案内係を担当した女子は、妖精ティンカー・ベルに扮して、教室の前の廊下に立ったのだが、その姿を見た来客の小学生に、いきなり、笑われてしまった。

「わあ。この妖精、ヘンだあ！服、着てるう～」

その案内係の女子は、制服の上に、作り物の羽根を付けただけの扮装だったのである。

展示の執行委員だった我々は、急いで、案内係の女子を、奥にと引っ込めた。

言われてみたら、確かに、幻想世界の存在のはずの妖精が、人間みたいな服を着ているのは、リアルさに欠けていて、子供にだって笑われてしまうのである。

そこで、我々は、案内係の女子の制服を脱がしてしまった。それぱかりか、下着も靴下も剥ぎ取っちゃったのだ。真っ裸にしちゃったのである。その子は、顔は可愛いのに、体はまだ発育途中で、背も低いし、胸もぺちゃんこで、ずん胴で、お尻も小ぶりなのだった。少しだけ生えていた性毛は、きれいに剃り落としてしまった。外陰部の上には、前貼りを付けて、そこだけ隠す事にした。と言うのも、妖精が生殖器などを持っていたら、メルヘンらしくないからである。こうして、その女子も、ようやく、全裸の小妖精っぽく見えてきたのだ。

我々は、この姿で、案内係をするように、彼女を説得した。クラスの為だと言う大義名分で、強要してみると、気が弱くて、善良だった彼女は、ためらいつつも、承諾してくれたのだった。

服を着ていない彼女が、教室の前に立つと、たちまち、うちのク

ラスの展示には、大勢の見物客が集まる事となった。リアルすぎる妖精がいる、と言う評判が、一気に学校中に広まったからだ。

実際に、そばで、彼女を拝見した人たちは、そのコスプレの徹底ぶりに感心したはずであろう。裸の精霊になりきった彼女は、ピンク色の乳首も、可愛らしいおへそも、鼠蹊部のVラインも、丸いお尻も、どれも、きちんと自分のものを晒していたのだ。かろうじて、彼女が身につけていたのは、ティアラやネックレス、ブレスレッドに魔法のスティック、サンダルなどの小物だけだった。その上で、背中には、作り物の大きな羽根を、肌の上にじかに取り付けていたのである。

大賑わいになってからも、案内係のその女子は、この妖精姿のままで、一生懸命に、来客の接待を務めた。皆に好奇な目で見られて、写真にも撮られていたが、体を隠すような事はしなかった。裸が当たり前の妖精が、恥ずかしがったりしては、おかしいからである。

やがて、案内係の交代時間がやって来たが、交代要員だった女子たちは、皆、どこかへ逃げ出してしまった。自分も、案内係をする事で、同じ目にあわされたくなかったのだ。

結局、その最初の案内係の女子は、この日は、一日が終わるまで、全裸で、案内係をやらされたのだった。

了

リアル妖精（後書き）

蛇足

この女子の妖精コスプレは、ＳＮＳにも上げられてしまい、学校を離れて、ネットでも広く拡散されてしまった。巨大掲示板でも、本当の裸なのか、実は裸スーツだったのかで、大いに熱くなったのである。彼女の妖精姿をリスペクトしたイラストやフィギュアなども出回る事となった。

この女子自身も、まさか、ここまで大袈裟になるとは思ってもいなかったであろう。自分の裸の話で、全国で盛り上がってしまったなんて、とっても恥ずかしいのである。

今でも、「高校の可愛い妖精」で検索してみたら、この時の画像は見つかるかもしれない。

優生法

その国では、国民全体のレベルを上げて、国家を強くしようと言う意図から、優生法が採用される事となった。

手っ取り早く言ってしまえば、それは、質の悪い国民には子供を作らせないようにして、優秀な国民の子供だけを未来に残すようにしよう、と言う法律である。民主国の目から見たら、とんだ人権侵害の政策のようにも感じられるが、その国は、施政者たちによる独裁国家だったので、こんな法律の決定も十分にありえたのだ。しかも、強制的に実行されたのである。

優生法による国民選別は、高校生の段階から適用された。毎回の学力テストで、各クラスの最下位の生徒の男女各5名が、優生法の劣等国民にと認定されたのだ。彼らには、将来的に子供を作る自由が許してもらえず、この未成年の時点で、その宣告が行われたのである。さらには、物理的な不妊・去勢の手術まで施されたのだ。

高校の学力テスト終了後には、この優生法に引っかかった劣等生たちが、体育館のステージの上に、ずらりと並べられた。そこで、彼らは全裸になって、不妊・去勢の手術をすぐに受けさせられて、全校生徒の前で、最高の屈辱を味わわされたのだ。逆に、このイベントは、見学する側の生徒たちには、自分たちは優生法を免れた優秀な国民だと言う優越意識を与え、より自信を持つようになる効果があるだろう、とも言われていた。

さて、この時代は、医術も進んでいたので、簡単に不妊・去勢の手術が行なえたのだった。手術対象者の睾丸や卵巣に、体外の皮膚の上から、ちょっとした光線を当てるだけで、その機能をダメにする事ができたのだ。よって、一般の学校でも、片っ端から不能の生徒を作り出す事ができたのである。

ところが、この優生法は、１０年ほど実行していくうち、当初の

思惑通りではない狂いが生じだした。

学力テストのたびに、劣等国民に指定される成績不良生徒がコロコロと変わってしまったのである。すでに、不妊・去勢手術を受けてしまった生徒ほど、のちの学力テストでは、めざましく成績が良くなったのだ。どうも、これは、無理に不妊の体にされてしまった事で、彼らは、将来的な家族を作る夢を失ってしまい、その分、家族以外の事を生きる目的にし、学問や技能などに熱心に打ち込むようになったからだったらしい。

その結果、高校時代の三年間に、全校生徒のほとんどが、一度は手術対象の劣等ランクを経験するようになり、学校の中は劣等国民ばかりとなって、手術を受けずに済んだのは、ほんの一握りの超エリートだけとなってしまった。

それから、さらに数十年が経つと、その国では、子供を生める国民があまりにも少なすぎて、一気に少子化が進行してしまい、人口不足で、国は滅びた。

了

絵画の少女（前書き）

このエピソードは、同時進行公開中の拙作「ピンクの怪物」の「笑う裸婦像」の章と連動企画になっています。

絵画の少女

その夜、僕は、忘れ物を取りに、こっそりと高校の校舎にと忍び込んだのである。たわいのない忘れ物であったが、それでも、取ってこない事には、次の授業の時にさしつかえたのだ。

忘れ物は美術室に置いてあった。暗い美術室の中に侵入した僕は、すぐに忘れ物を発見し、手に取った。

その時、声を掛けられたのである。

「ねえ、あなた。そこで、何をしてるの？」

僕は、ギクッとして、声の方に顔を向けた。

そこには、裸の美少女が立っていた。僕と同い年ぐらいの子である。なぜ、裸なのだろうか。そして、その子の顔や体に見覚えがあるのだが、どうも思い出せなかったのだった。

「君こそ、どうしたの？」と、僕は逆に尋ねてみた。

「うふふ。あたしも、皆と一緒に、授業を受けてみたいの。だから、飛び出してきちゃった」

彼女は、無邪気に微笑んだ。彼女が目を向けた方には、一枚の絵が飾られていた。

それを見て、僕も全てがピンときたのだった。その少女は、その飾られた絵の中に描かれていた全裸の少女だったのである。今のその絵には、少女の姿が消えて、背景しか無かった。不思議な話だが、彼女は、絵の中から現実に飛び出してきたようなのだ。

「とりあえず、その格好じゃマズいよ。備品室へ行ってみよう。きっと、予備の制服とかも置いてあると思う」僕は彼女に忠告した。

「分かった。そう、するわ」彼女が素直に受け入れた。

「でも、君だけじゃなくて、こっちも何とかしておかないと」

そう言うと、僕は、少女の姿の無くなった絵の方にも、目をやったのだった。そして、そばにあった筆と絵の具を手にしたのである。

翌日から、我が校の女生徒は一人増えていたのだが、それに気付いた教師や生徒は、まるで居なかった。

と言うのも、そんな事よりも、学校内では、美術室にあった有名画家よりの贈呈品の絵が、突然、修復されてしまい、写実的に描かれていた少女の部分が、すっかりピカソの絵みたいになっていたものだから、そっちの問題に、皆、大慌てになってしまったからである。

了

ノーパン学校

うちの高校では、下着の着用が禁止されていた。なんでも「健全な精神は、下着に締めつけられない、伸び伸びした肉体に宿る」みたいな教えが、本校の創設者のモットーだったからしい。

そんな訳で、うちの学校の女生徒たちは、全員、ノーパンノーブラなのだ。もちろん、スカートめくりなどは、絶対にやってはいけない禁止行為に指定されていたのだが、それでも、女子たちのスカートの中を覗けてしまう機会は、いくらでもあった。

だらしない女子とかは、がに股で椅子に座ったり、足を広げて床に座ったりするので、ほんの少しスカートがめくれていただけでも、内側が見えちゃっている事があるのだ。階段の下から見上げてみても、上階にいる女生徒のスカートの中が、チラッと目に飛び込んできたりもした。風の強い日などには、野外にいた女生徒のスカートが、強風で大きくひるがえって、そんな時は、その子のお尻が完全に丸見えにもなったのである。

しかし、何よりも、男子たちは、女子の着替えを見たがった。ノーパンノーブラだから、着替えをする時は、女子は確実に全裸になっていたはずだからだ。体育の授業前後の集団着替えは、女子全員がヌードになってしまっただろうから、その光景は圧巻だったであろう。

と言う事で、昔から、うちの学校の男子たちは、女子の着替えを覗く為に悪戦苦闘していたのだった。昔と比べたら、現在は、スマホと言う、便利な秘密道具がある。男子たちは、女子たちの着替え場所に、こっそりと自分のスマホを隠し潜ませておいて、後から、そのスマホを回収して、クラスメートの女子たちがいっせいに裸になってしまう、超お宝の映像を、ドキドキしながら、拝見させてもらったのだった。

高校卒業後、何年も経ってから、同窓会が行われた時、男子がこんなイケナイ事をしていたと言う話を、女子たちにあらためて白状してみた。すると、女子も、実は、隠しスマホが設置されていた事には気付いていたのだと言う。知っていて、わざと、隠しスマホの前で、着替えてみせて、男子の反応を楽しんでいたとの話なのだ。

なるほど、今思い出してみたら、隠しスマホの前で着替えていた彼女たちの態度は、やけにわざとらしいところもあって、いつも、あとちょっとで見えそうな部分が、スマホの画面の外にとハズレていたのだった。

こうして考えてみると、実は、女子の方がずっと、したたかなのだ。

了

人体見本

今年の高校生部門の女子の人体見本には、私が選ばれる事となった。これは、たいへん名誉な話なのだ。

人体見本とは、要するに、人間の肉体のもっとも標準的な外見を、数年おきに、記録として採集しておいて、後世に残しておこうと言う、国家的科学プロジェクトである。それに私が選ばれたと言う事は、私が、現代の１０代少女のもっとも平均値のルックスを有していると言う意味に他ならず、実に誇れる話なのだ。

この人体見本の決定には、まず、あらゆる人体データの全国平均を調べ上げて、そのデータに当てはまる人材を選出する事から始まる。身長や体重はもちろん、体の各パーツのサイズや色彩まで平均値を出して、その値に全体的に一番近い人材が、人体見本の候補となるのだ。よって、あくまで、我が国の人種の一番ノーマルな外見と言う事になるので、必ずしも美女やハンサムがなるとは限らない。

審査は、さらに厳しいのだ。体の表面に、傷やデキモノなどがあっても、それだけでも候補から外されてしまう。一定以上の虫歯でさえ許されないのであった。目立ちすぎるホクロだって、審査に引っかかる場合がある。

そして、２０歳以下の女性の人体見本の場合は、処女膜の存在も、判断対象に含まれていたのだった。高校生女子部門では、他の全項目が完璧（パーフェクト）であったにも関わらず、この処女膜がすでに破れていたばかりに、不採用になる子も少なくないらしい。とまあ、そんな訳で、私自身は、生粋のバージンなのだ。

さて、こんな感じで、全ての条件をクリアして、人体見本の代表に選ばれた後は、体の全面サンプル写真を撮影される事になる。人体見本なのだから、もちろん、衣類はいっさい身につけずに、全裸で写真を写すのだ。しかも、全体を俯瞰した写真だけではなく、体

の各パーツのアップ写真まで揃えるのである。それこそ、顔のパーツの一つ一つから、手足の指先に到るまで、全てだ。口を開いて、口の中まで写してしまう。同じように、性器の内部も撮影するのである。処女膜が無傷じゃないといけなかったのも、その為だ。さらに、乳首や陰核（クリトリス）に関しては、形が変わるので、数バージョンを撮影しておく。男性の人体見本は、陰茎（ペニス）の形状別バージョンを揃える事になるらしい。

こうして、苦労して撮り終えた人体写真は、他の全年代の人体見本の写真と併せて、一冊のカラー写真集の中に収録される。これが、国家公認の人体見本写真集だ。この本は、学術書として、全ての国民が拝見する事ができる。各学校にも、必ず、一冊は配布されるのだ。よって、私のヌードは、私の高校の学友たち全員に見られてしまうのである。それどころか、私の体の隅々までもが、この国の全国民に、資料として、使われてしまうのだ。この国で一番有名な女子高生の裸になってしまうのである。

でも、恥ずかしい事なんて、一つもない。これは名誉な話なのだ。私は、次回の人体見本の代表にも選ばれたいと思っているぐらいなのである。

了

人体見本（後書き）

このお話は、Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ　に収録されている性器の画像を見ていて、思いつきました。

ツッパリブームの闇（前書き）

注・本章は、特に偏見の強い文章が多く含まれています。

ツッパリブームの闇

学校のいじめについて、「今のいじめと比べると、昔のいじめはまだマシだった」なんて言い方をする人たちもいるようだが、本当はそんな事もない。と言うのも、昔は昔で、学校にはツッパリとかスケ番などと呼ばれる学生ギャングどもがはびこっていて、暴力的に荒んでいたからだ。もっとも、本物のツッパリやスケ番に関して言えば、どちらかと言うと、彼らは、他のツッパリ組織相手の抗争にと夢中になっていたようで、一般生徒ばかりが被害を受けるような事もなかった。

本当に恐ろしかった時代は、大体、１９８０年代の、ツッパリやスケ番らが衰退し始めた頃で、この時期は、真性のツッパリやスケ番が居なくなっていった一方で、その風俗や文化だけが、中途半端に、ただの不良学生や一般生徒へと、ファッションとして受け継がれていった。その結果、ツッパリやスケ番たちが行なっていた、恐ろしい私刑（リンチ）や制裁までもが、一般生徒間でのいじめの中へと組み込まれていく事になったのだ。一般生徒でも、根性焼きを平気で受けさせられるようになりだしたのも、この頃からである。

しかも、この当時は、いじめに対する認識も「いじめられる側に問題がある」と言う考え方の方が優勢だった。その為、いじめられた子供は、どんな酷い事をされても、いじめられる自分の方が悪いと、泣き寝入りするしかなかったのだ。逆に、いじめる側は、残酷な暴力行為をやり放題となったのである。被害者が怪我をした場合ですらも、犯罪扱いはされず、事故で片付けてもらえたのだった。

いじめられる子供と言うのは、今も昔も、クラスで一番おとなしくて、気が弱く、無抵抗な生徒たちだ。本来なら、ツッパリやスケ番からは一番遠い場所にいた、善良な子供たちが、ツッパリたちの怖い一面だけを押し付けられ、学校生活も地獄に変わってしまった

のである。彼らは「いじめられっ子」と言うレッテルを貼られ、彼らが特別であるかのような扱いを受けたのだった。

服を全部、脱がしてしまういじめを「カイボウ」と言う。当時としては、もっともポピュラーないじめ方で、男子も女子も、ごく自然に行なっていた。男子の場合は、カイボウした上で、露出したイチモツを自分で握らせて、皆の見ている前でセンズリをする事を強要した。女子でも、特におとなしい子には、自分で自分の胸やアソコを揉ませてみて、感じてくるように仕向けてみた。このような行為までやらされる女子は、いじめられっ子の中でも、より身分が低いのである。どちらも、本当に、チンポから白い液が出たり、アソコが濡れてくるまで、自慰をやらせた。教室や校舎内で、卑猥な液を垂れ流したりして、連中の処遇はまるでブタ並みなのだ。

ちなみに、いじめられる子は真面目な子が多かったので、こうしたいじめを通して、はじめて射精をしたり、イッちゃったりして、オナニーを覚えてしまった子も、少なくなかったかもしれない。

そして、いじめられっ子たちにくわえた呵責も、この程度のものではなかったのである。

陰毛をタバコの火などで焼くのが「土手焼き」だ。肛門に小石を詰め込んだりもする。「言う事を聞かないなら、キンタマ潰すぞ」は、脅し言葉の定番だった。実際に、いじめられっ子の睾丸を、強く握りしめたり、靴で踏みつけたりもした。陰嚢の皮や亀頭の先も、根性焼きをする対象だった。これが女子だと、乳首に対して同じ事をした。根性焼きもするし、クリップで挟んで、潰したりもした。乳首を引っ張って、その付け根に剃刀の刃を当て、削ぎ落とすマネをすると、それだけで怖くて、小便を漏らしちゃう子もいた。いじめられっ子を失禁するまで追い込む事ができると、いじめっ子の間では、自慢できたのだった。

女子には、さらに、男子にはない「茶巾ずし」と言ういじめもあった。これは、スカートを上半身の方にめくり上げて、頭の上で、裾の部分を縛ってしまうと言うものだ。当時のセーラー服や制服は、

丈が長かったので、そんな芸当もできたのである。もちろん、元々は、スケ番たちが、リンチの一環として、行なっていた行為だ。この茶巾ずしにしてしまうと、犠牲者は、上半身が一切使えなくなってしまう上、下半身が完全にノーガードになってしまい、もっと激しいリンチをするのには、もってこいなのである。

それは、いじめの場合でも同じなのだ。茶巾ずしにされたいじめられっ子は、運が良ければ、それだけで終わらせてもらえるが、たいがいは、パンストやパンツも脱がされて、股間をむき出しにされてしまう。いじめっ子たちも、その子の性器部を存分におもちゃにしたのだ。

例えば、陰毛を全部、剃ってしまった。マジックで、足やお腹の一面にイタズラ書きを書いた。小陰唇（ビラビラ）を引っ張って、そこに根性焼きをした。クリトリスの包皮をひん剥（む）いた。さらには、そのクリトリスを爪でグリグリいじって、無理やり勃起させた。いじめられっ子がまだバージンだったなら、指や道具を使って、その子の処女膜も破いてしまう。クソ真面目で内気な独身女が、男性経験がないはずなのに、すでに非処女なのは、その女が、高校時代にいじめられていたからだ。

了

万引き娘

うちの高校には、かなり手クセの悪い女子がいた。学校で、何かが盗まれたり、お金が無くなってしまうような事件が起きた時は、たいがいは、彼女が犯人ではないかと疑われたのだった。

しかし、彼女だって、ヘタな証拠は残さない。ほぼ彼女が犯人で間違いないはずなのだが、物証がない為、いつも彼女は、まんまと無罪放免となったのだった。

それでも、こう盗難事件が続きすぎると、いい加減、教師たちだって、腹が立ってくる。今度、学校のお金が無くなった時には、教師たちも、ついに決心して、徹底的に、その女子の事を調べ上げる事にしたのだった。

ある時、急に、臨時の全校集会が開かれる事となった。生徒たちが、何事かと思って、集会を行なう体育館に集まると、例の女子だけが、体育館のステージの方に呼び出されたのだった。

彼女がステージに上がると、教頭先生が、また学校のお金が無くなった事を、生徒たちに報告した。今回こそは、犯人を突き止める為、容疑者である彼女をステージで晒し者にして、徹底的に聴取しようと言うのだ。

もちろん、犯人扱いにされて、その女子は怒りまくった。しかし、その間にも、教師の別働隊が、彼女の机やら持ち物やらを、すでに調べに行っていたのだ。でも、彼らは、残念ながら、盗品を見つけ出す事はできなかった。

あとは、この女子が、盗んだものをじかに隠し持っているのを暴き出すのみである。

女子の方も、この教師たちの強引な捜査には、そうとう頭にきていた。自分の身の潔白を証明してやるとばかりに、ステージの上で、いきなり、自ら制服を脱ぎだしたのだ。彼女は、皆の見ている前で、

ブラジャーとパンティだけの下着姿になってしまったのである。かなり派手な色の下着をつけていた。

だが、とうとう、彼女の体からも、盗まれたお金は出てこなかったのである。完全に彼女の無実確定かに見えた。

ところが、ここで、身体検査を行なった教師は、妙な事に気が付いたのだ。

その女子の下着は、今日はじめて着た新品だったらしく、大きなタグも全部、ついたままだったのである。彼女の方も、今日あたり、こんな学校側の追及がある事を予測して、わざわざ、きれいな下着を身につけて、臨んでいたのかもしれない。

しかし、下着についていたタグをよく見ると、本来レジでお店が抜き取ってしまうはずの商品管理の札まで、混ざっていたのだった。

「君、なんだね、これは?もしかして、万引きした下着と違うのかね?」

これで、形勢はいっぺんに逆転した。

その女子は、マズイ言い訳を必死に並べて、抵抗したのだが、教師たちは全然聞いてはいなかった。どう考えても、彼女が身につけていた下着は万引き品なのである。

盗んだものならば、早く、取り上げなくてはいけない。教師たちは、いっせいに、彼女に飛びかかって、ブラジャーもパンティも脱がしてしまったのだ。

哀れ、ドロボウ女子は、全校生徒が見ている目前で素っ裸にされてしまい、泣きながら、胸と股間だけを手で隠して、ステージの上に座り込んでしまったのだった。

のちに、盗まれたお金や品物の数々も、彼女の秘密の隠し場所から発見されたのである。

了

おしおきショー

うちの高校では、月に一度、おしおきショーと言うイベントが行われていた。これは、その月の一番素行の悪かった生徒を、全校集会の時に、全生徒が見ているステージの上に立たせて、公開で体罰を与えると言う催しである。

元々は、うちの学校にいた手クセの悪い女生徒を、全校集会の際、ステージに立たせて、吊るし上げてみたところ、教師の間では大変好評であり、そのまま、行事化してしまったものだった。

おしおきショーで、その主役に選ばれた生徒、いわゆる、一番素行の悪かった生徒は、全裸になって、ステージの上に立たねばならない。それだけでも、十分に屈辱的な罰なのであるが、その上で、その生徒はさらなる体罰を受けなくてはいけなかったのだった。

基本的には、尻叩き（スパンキング）の刑に処せられたのである。でも、たかが尻叩きなどと侮るなかれ。何たって、全裸で受ける尻叩きなのだ。最高に恥ずかしいのである。

その罰を受ける生徒は、ステージの上では、観客の方に背中を向けて、椅子にと寄り掛からされた。すると、思いっきり、尻を後ろに突き出した格好になったのである。その尻を、執行官の教師に、容赦なく叩かれるのであった。

大人と大差のない高校生のお尻が、赤くなるまで叩かれ続けた。静まり返った体育館の中には、お尻を叩くパチーンと言う音と、叩かれている生徒の痛そうな呻き声だけが響き渡るのだ。

観ている生徒たちにとっては、ちょっとエロチックな気分にさせられる光景であり、叩かれている生徒にしてみれば、とことん恥ずかしすぎる刑罰なのであった。

こうなると、もちろん、誰だって、おしおきショーの対象には選ばれたくないと考えるようになるのだ。かくて、うちの高校では、

生徒たちが、競うように、素行を正すようになっていったのだった。
しかし、それでも、おしおきショーの慣例は無くならなかったのだ。どんな些細な生活の乱れであろうと、一番素行が良くないと判断された生徒は、やっぱり、公開おしおきを受けさせられたのである。

その日のおしおきショーの主役となった女生徒も、教科書を一度忘れてきただけの罪で、おしおきを受けさせられる事になってしまった。

彼女は、全校生徒の見ている前で、裸でステージの上に立ち、ガクガク震えながら、皆の方にお尻を突き出していた。これまで通りに、尻を叩かれるのを待っていたのだ。

ところが、この日は、教師たちは、違う事を企んでいたのである。執行官の教師は、いきなり、イチジク浣腸を取り出した。その先端を、罰を受ける女生徒の肛門へと突っ込んだのだ。その女生徒は、いっさい拒否する事を許されない。浣腸液は、全て、彼女の腹の中にと注入されてしまったのである。

間もなく、その女生徒が苦しみだした。猛烈に腹を下してしまい、今にも排泄しそうなのである。しかし、学校中の生徒が見ている前で、脱糞などしたら、もう恥ずかしくて、登校できなくなっちゃうのだ。

ピチピチの女子高生が、今にも漏らしそうなのを我慢して、悶え苦しんでいる姿は、スパンキングとも異なる、エロさに溢れる光景だった。そして、とうとう、彼女も限界に達してしまったのである。

彼女が、排泄しそうなギリギリの瞬間に、教師たちは、彼女の元へオマルを持っていき、ステージの幕も下ろしてしまった。それが、教師たちのかろうじての情けだったのだ。生徒たちは、刑を受けた女生徒が排泄物をひり出している音だけを聞く事になったのだった。

どうやら、おしおきショーの内容は、これからも、どんどん進化していきそうなのである。

了

トイレのハダカさん

どこの学校にも七不思議と呼ばれるものがあって、そのうちの一つは、たいていは「トイレの花子さん」なのだが、うちの高校では、なぜか、それが「トイレのハダカさん」と呼ばれていた。

名前の通り、うちの高校に現れる花子さんはヌードだったのである。真夜中の2時に、ウワサされている女子トイレに行けば、青ざめた亡霊のような姿のハダカさんに会えるのだと言う。しかし、現れるハダカさんは、どう言う訳か、全裸なのだ。

ハダカさんの正体は、恋仲になった担任の先生に捨てられて、当てつけに、トイレで裸で首吊り自殺した女生徒だとも、不良男子生徒たちにトイレで集団レイプされてから殺された女生徒だとも、言われていた。うちの高校の開校以来の記録を調べてみても、自殺したり、殺された生徒は、一人もいないのにも関わらずだ。

ある日、ハダカさんを本当に見た、と言う話が、学校中に広がった。誰が見たのかもはっきりしないのに、そんなウワサだけが、一人歩きして、全学年の間を席巻したのである。普通に考えたら、ハダカさんに会う為の条件はハードルが高いので、たまたま目撃してしまうような人もいない感じがするのだが、それでも、皆は、その情報を真剣に信じてしまったのだ。

その結果、スポーツ部の屈強な男子生徒ら5、6名が、その真偽を確かめてみる事になった。場所が女子トイレだったのにだ。連中は、幽霊の存在が気になったのではなく、そこまでして、女の子の裸が見たかったらしい。

で、彼らがどうなったのかと言うと、夜中の校舎の女子トイレで、ハダカさんの出現を待ち続けていた彼らは、2時になった途端、パニックになって、トイレから逃げ出してしまったのだった。どうも、メンバーの一人が、勘違いか何かでハダカさんが見えたと、急に騒

いでしまったようなのだ。それで、他の仲間もびっくりして、訳も分からぬまま、慌てて、トイレから退散してしまったのである。

今、考えたら、こんな出来事があった事も、高校時代の懐かしい思い出の一つなのだ。

了

講演会

ある高校で、私の講演会が開かれる事になった。ところが、私が講演するにあたり、いつも実演のサポートをしてくれるヌードモデルが、その職業柄から、校内への出入りを認めてもらえなかった。

私の講演の内容というのは、女体の仕組みの新発見の話だったので、いつも、裸の女性を隣に置いて、彼女の体を指さしながら、講演を行っていたのだ。

普通なら、こんなトラブルが生じたら、講演を中止にするか、実物の女性の代わりに、スライドででも代用するところなのだが、そういう訳にもいかなかった。私の新発見は世界的に注目されているもので、ノーベル賞候補にもあがっていたからだ。学校の方も講演をキャンセルしたくなかったし、私の方も、いくらでも無理を言い張る事ができたのである。

結果的に、学校側が私に忖度した事で、ヌードモデルを校内に持ち込まない代わり、学校が私に講演用のサポートを用意してくれる事になった。在学中の女生徒を一人差し出してくれたので、その子をヌードモデル代わりに使っていいと言う話になったのである。

こうして、私の講演会は無事に開かれたのだ。私は、提供された女生徒を真っ裸にすると、十字の形で板に磔にして、講演する私の横に置いた。そして、ヌードモデルに対して行うのと変わらない行為を、彼女にも行ったのだ。

客席は満席だった。お客たちには、この講演は大変に好評で、大喝采のもと、講演も終了したのだ。大成功で終わったのである。

講演の終了直後、まだ裸で板に磔状態だったサポートの女生徒が、私に声をかけてきた。

「先生。早く、ここから降ろしてください」

「おお、すまん、すまん」

私は、彼女のそばに駆け寄った。すると、彼女が、何やら、はにかんでいる事に気がついた。

私は、ハッとして、彼女の股間を触ってみた。

「何だい、君！濡れてるじゃないか！講演中、ずっと、こんな状態だったのかい？」

女生徒は、答えずに、顔を赤らめていた。

この子ときたら、沢山の観客に自分の裸を見られて、エッチな気分になってしまったのか、大真面目な講演の最中に、愛液を漏らしていたのである。

しかし、こんな経験は、二度とできるものでもないだろうし、この子にとっても、良い記念になったかもしれない。

了

講演会・抜粋（前書き）

この話は、前話「講演会」の一部を、詳しく書き直してみたものです。

講演会・抜粋

（前略）

高校の体育館を会場に使った講演会が始まった。

私は、講演内容を分かりやすく伝える為に、私にあてがわれたサポート用女生徒の方に寄ってみた。彼女の体の部位を、随時、指さしながら、講演テーマを説明してゆくのである。

しかし、彼女の姿を見た途端、私はウッと思ったのだった。

その子は、スクール水着を着ていたのである。その状態で、垂直に立てた板の前に、両腕を左右に広げ、十字状に固定されていたのだ。はっきり言って、私の指示通りの形ではなかったのだった。私は、全裸の状態の女性を用意しておくように注文していたのである。生身の体の上を指し示さなければ、私の講演の内容は、うまく聴衆たちに伝わるはずがないからだ。

私は、ポケットからハサミを取り出した。

「君。悪いが、少し衣装を直させてもらうよ」私は、その女生徒に言った。

「え。あの、その・・・」と、女生徒は困っていた。

でも、私は、彼女のスクール水着の肩の部分を引っ張ると、そこにハサミの刃を差し込んだのである。

チョキン！

私は、スクール水着の肩の位置の布を前後に切り離してしまったのだ。彼女の鎖骨が露出した。

「あ。だめ、だめぇ」と、女生徒はうろたえていた。

「心配しないでよろしい！水着は、あとで学校に弁償させるから！」

私は、水着のもう片方の肩の部分も切り離してしまったのだった。

彼女の両肩は、全部、剥き出しになってしまったのである。彼女は、狼狽しながら、さらけ出た肩をくねらせていた。

私は、さらに、スクール水着の両脇の部分を持つと、グイグイと下へ引き下ろしていったのだ。肩紐が無くなっていたので、楽にずらしていけるのである。

「あ、あ。いや、やめて」と、女生徒が泣きそうな声を出した。

「いいから！黙って、従いなさい」私は、強引に押し通したのだ。

女生徒の水着はどんどん脱げていき、小振りだった胸が、おへそのくぼみが、腰のくびれが、次々に露出していった。彼女は、嫌がっても、磔になっているから、逃げられずに、されるがままなのである。

彼女の上半身だけではなく、股間もあらわになっていった。彼女のモサモサ生えた性毛も全部、晒してしまったのだ。そして、私は、とうとう、彼女の水着の全てを、彼女の足元にまで下ろしてしまったのだった。

その女生徒は、これで、私の希望通りの全裸になったのである。彼女は、諦めて、私に従う気になったのか、おとなしくしていたが、それでも、沢山の聴衆にヌードを見られてしまって、とても恥ずかしそうだった。

しかし、私には、まだ気に入らない部分があったのだ。あのデルタ地帯に生えた性毛である。

「こんなに毛があったら、ちょっと見えづらいな」

私は、今度はポケットから電気カミソリを取り出した。それを作動させると、女生徒のデルタ地帯に押し当てて、彼女の性毛を根元から剃り出したのである。

「あぁぁ。あああぁ」と、女生徒は慌てていた。

でも、私は、彼女の下腹部の表面にカミソリを滑らせ続け、構わずに、彼女の生やしていた性毛を全部、剃ってしまったのだ。この子ときたら、毛が濃い割には、鼠蹊部ぐらいしかムダ毛処理をしていなかったようで、剃るのも一仕事なのである。

やがて、彼女の股間は、ツルツルの無毛（パイパン）になり、肌もきれいに露呈した。まだ体が未熟だったから、陰裂もだいぶ正面寄りなのだ。

「大丈夫だ。二ヶ月もすれば、また生え揃うから」
私はそう告げたが、女生徒は、目を潤ませて、うなだれていた。
とにかく、これで、彼女の体は、講演に使える状態にまで整ったのだ。
ステージの上には、剃り落としたアソコの毛が、あちこちに散らばっていた。女生徒にしてみれば、これまで大事にして伸ばしてきた体の一部だったのかもしれないが、今となっては、もう、何にも使えない廃物（ゴミ）なのである。私は、舞台係を呼びつけて、ステージを軽く掃かせたのだ。
（中略）
私としては、これは、あくまで真面目な講演会だったのである。その女生徒の体だって、イヤラシイ気持ちは微塵もなく、講演内容に合わせて、淡々と触れていたつもりなのだ。
それなのに、この子ときたら、私の手が肌に当たるたびに、ピクリと体を震わせ、身をよじらせて、時には、小さな喘ぎ声まで漏らしていたのだった。
（中略）
講演が終了したあと、まだ板の上に磔状態だったサポートの女生徒が、恐る恐る、私に声をかけてきた。
「あ、あのう。早く、ここから降ろしてください」
「おお、すまん、すまん」
私は、彼女のそばに駆け寄った。すると、彼女が、何やら、はにかんでいる事に気がついた。
私は、ハッとして、彼女の股間を触ってみた。
「何だい、君！濡れてるじゃないか！講演中、ずっと、こんな状態だったのかい？」
女生徒は、答えずに、顔を赤らめていた。
「おい、何なんだね、これは？」と、私は、自分の指先についた粘液を彼女に見せつけながら、さらに厳しく彼女を問い詰めた。
「ご、ごめんなさい」彼女は、うろたえながら、謝ったのだった。

この子ときたら、沢山の聴衆に自分の裸を見られて、エッチな気分になってしまったのか、大真面目な講演の最中なのに、愛液を漏らしていたのである。

よく見たら、この子の胸の小さな膨らみの先にあった乳首もピンと立っていたようだ。まだまだ子供のくせに、この子の体は、どこもが熱く火照っており、すっかり発情していたみたいなのである。

「もう！こんなところまで、おっ立てていたのかね！私の真摯な講演会を、すっかり侮辱しおって！今の若い子の不真面目さときたら、ほんと、呆れてしまうよ」私は、そうどやしながら、彼女の尖った乳首を指先でパチンと弾いてやった。

彼女も、何をされても逆らわずに、真っ赤になった顔を下に向けて、おとなしく黙り込んでいた。

しかし、最初こそ私も不愉快に思えたのだが、公けの場で性の歓びに打ち震えていた彼女の心情を考えていると、次第に、その気持ちへの理解も生じてきたのだった。

こんな経験は、二度とできるものでもないだろうし、この子にとっても、良い記念になったかもしれない。

そこで、私は、彼女に、もっときちんとした形の思い出を作ってやる事にしたのである。

私は、裸の彼女のすぐそばにまで近寄った。

「な、何するんですか？」怯えた声で、彼女が私に聞いてきた。

私は彼女の横に並んで、自撮り棒を出すと、彼女と私のツーショットのスマホ写真を撮ったのである。

パシャッ！

講演中は撮影禁止だったので、これは裸の彼女を写した唯一の画像だ。

こうして写した記念写真を、私は、彼女にも進呈したのだった。

何でも写真にしてしまうのは、今時の若い子らしいプレゼントだったはずだろう。

これだけでも、いつまでも残る最高の記念になったとは思うのだ

が、後日、この画像は、ひょんな事から、ＳＮＳにもアップされてしまった。その時のキャプションが、これである。

「今日は、偉い先生の講演会のお手伝いをしてまーす。でも、あたしったら、講演会の最中に、ドキドキしすぎて、大事なところを濡らしてしまいました」

このＳＮＳ投稿は、あの「高校の可愛い妖精」を上回る「いいね！」の数を獲得したとも言われている。

了

拷問クラブ

俺は、自分の高校では、拷問クラブに所属している。ただし、この呼び名は正式名称ではない。このクラブの本当の名前は、中世文化研究会なのである。

それが、なぜ、拷問クラブと名乗っているのかと言うと、この研究会では、月に一度、中世に行われていた拷問の再現実習を楽しんでいるからなのだ。実習と言っても、自分たちが拷問を受けてみるのではない。拷問の被験者については、適当に、学内の生徒をひっさらってくる。たいがいは、放課後に一人で校内をうろついていた、不用心な女生徒だ。そんな女生徒を、うちの部室内に連れ込み、ほぼ強制的に拷問を受けさせて、俺たちは拷問執行官側の気分を堪能させてもらったのである。

誘拐してきた女生徒は、縛り上げ、猿ぐつわをし、全裸にした状態で、拷問を受けさせた。それこそ、死なない範囲で、さまざまな拷問を試してみたのである。何しろ、俺たちは中世の文化や風習の専門家だ。無数の残酷な拷問や変わった拷問の仕方を知っているのである。それらを、被験者の女生徒に対して、短時間に、次から次へと試してみたのだった。ここまで本格的にやったら、もはや、立派な学術研究と言ってもいい。

火責め水責めぐらいは当たり前なのだ。さらに、体の各部位をピンポイントで責めるような拷問も、片っ端から実行してみた。でも、普段、人前に見えてしまうような体の部分は、できるだけ、傷つけない方がいい。その子を拷問した事を、あまり大っぴらに第三者には知られたくなかったからだ。よって、どうしても、服の下に隠れる、見えない場所ばかりを痛めつける事が多くなってきた。すると、必然的に、通常は人に見せない、乳房とか外陰部ばかりを責めるようにもなってしまったのだった。

一通りの拷問を楽しませてもらうと、被験者の女生徒の事も解放してあげる。その頃には、彼女の体もボロボロになってしまっているのだ。そのまま解放すると、あとから、その被害者の女生徒によって、警察に訴えられてしまうのではないか、と皆さんは思うかも知れないが、実はこれが、絶対に訴えられないのである。

人は、あまりにも残酷な目に遭わされすぎると、精神的に麻痺してしまうらしい。絶望して、抵抗もしなくなるし、逃げ出しもしないし、誰かに助けを求めたりもしなくなるようなのだ。俺たちが拷問した女生徒たちが、解放後も、放心したように、この状態になってしまうのだった。彼女たちは、拷問魔の俺たちの事が、よっぽど恐ろしくなっていたに違いない。たとえ、自由の身になっても、まだ俺たちの事を怯えていたらしく、泣き寝入りして、拷問された事は絶対に誰にも打ち明けたりしなくなるのだった。家族にも、友人にもだ。

では、この俺たちの悪質な実習活動に対して、学校や教師は何をしていたのかと言うと、連中は、全てを気付いていながら、あえて放置してくれていたのだった。それと言うのも、自校で、こんな恐ろしい自主活動を生徒たちが密かに行なっていたなんて、もし世間に知られてしまったら、学校自体の恥や責任問題になってしまうからだ。そんな訳で、学校は、むしろ、俺たちの味方をしてくれて、俺たちの行なった暴力行為の数々は、必死に隠蔽して、学外にバレないように裏工作してくれたのだった。学校なんて、しょせんは、そんなものなのだ。てな事で、俺たちは、これからだって、拷問の実地勉強をやり放題なのである。

俺たちの高校に運悪く入学してしまった場合、俺たちに拷問を受けさせられないで済む、確実な方法はないのかって?なあに、そんなの、簡単な話だよ。君も、俺たちの拷問クラブに入部すればいいだけの事なのである。

了

フェイク学園

ある高校では、普通に制服を着た生徒たちの中に、全裸の女生徒も混ざって生活していた。

なぜ、彼女がヌードだったのかは、理由はよく分かっていない。その学校だけの特殊なイベントだったのかもしれないし、何らかの罰を受けさせられていたと言う事も考えられるだろう。

とにかく、その高校では、そのようなハレンチな事が実施されていたにも関わらず、学校の外にはいっさい口外されずに、極秘にされ続けていたのだ。

この学校の秘密ごとを、あるフリーライターが嗅ぎつけた。あいにく、そのライターの男は、あまり良心的な人間ではなかった。彼は、証拠の映像を入手すると、いきなり世間に公表したりはせず、まずは、その高校の校長のもとへと向かって、取引を持ちかけたのである。この秘密を世にバラされたくなければ、口止め料をよこせ、と言う訳だ。つまり、脅迫したのである。

ところが、校長も、その周辺の学校の重役も、ライターには、まるで応じる様子はなかった。口止め料を渡そうともしなければ、勝手にすれば、と言った態度なのである。

そこで、頭にきたライターは、本当に、裸の女生徒が学内にいる映像を、ネットに流出させてしまったのだ。

しかし、社会の反応は冷ややかだった。映像そのものは注目されたものの、誰も、本物の映像だとは思ってくれなかったのだ。警察や政府の関係者すらもである。

常識的に考えたら、こんなヌード生徒が、当たり前のようにいる学内風景などありえないだろう。だから、皆は、この映像を作り物だと判断してしまったのである。ろくに検証する事もなく、イタズラ映像として片付けてしまったのだった。こうして、ライターの目

論見も、まるで、うまくはいかなかったのである。

今の時代、ＣＧで、ＵＦＯ映像だろうと幽霊映像だろうと、いくらでも作れてしまうのだから、たとえ本物の衝撃映像であったとしても、簡単には、皆には信じてもらえないのだ。

了

イケニエ

うちの女子校では、たびたび、生徒が行方不明になっていた。消えた子は、それっきり消息不明のままで、二度と戻ってくる事もなかった。

だが、その事に怯えている生徒は、我が校には一人もいなかったのである。皆は、噂で、この蒸発事件の真相を知っていたからだ。行方不明になってしまう事は、むしろ、生徒たちにとっては名誉な事だったのである。

ある日、私は、二人の友人と共に、他に人気のない校舎の中を歩いていた。すると、目の前に、突如、おぞましい姿の化け物が現れたのだ。

「お前たちの事を連れてってやるぞお」と、怪物は、恐ろしい声で話しかけてきた。

しかし、私たちは、誰も恐れてはおらず、逃げようともしなかった。

この怪物こそが、我が校から生徒が蒸発してしまう原因だと知っていたからである。私たち生徒だけが、こうして、おとなしく、この怪物の犠牲になり続けていれば、この高校の安全も、あるいは、この国、さらには全世界の平和も保たれる事となるのだ。この怪物に身を捧げる事は英雄行為なのであり、私たち生徒にとっては、まさに栄誉だったのである。

怪物が息を吹きかけると、友人の一人の衣服が消滅し、素っ裸になった。

「よおし。お前の事は連れて行くぞ」

その友人の姿が、パッと消滅した。

続けて、怪物は、二人目の友人の体にも息を吹きかけた。その子も、服が無くなり、全裸になった。

「よし。お前も連れて行くぞ」
その二人目の友人の姿も消えて無くなった。
最後に、怪物は、私の体にも息を吹きかけた。私は裸になった。
「何だ、お前は！処女じゃないのか！こんな女はいらん！」
怪物は、いきなり、激しく怒鳴った。そして、私の事は連れて行かずに、姿を消してしまったのである。
こうして、私だけは、怪物の犠牲にはならずに、助かったのだ。
この事は、翌日、学校中の話題となっていた。でも、それは大変、不名誉な話なのである。

了

人間生け花

うちの高校の華道部の先生は、たいへん厳しいのです。いくら教えても、なかなか、うまく花を生ける事のできない女子部員がいたものだから、こないだ、先生はついにブチ切れてしまいました。

先生は、そのデキの悪い女子部員を、大きなテーブルの方へ連れて行くと、そのテーブルの上に、全裸で、仰向けにして、寝かせたのです。そして、その子の体を土台にして、花を生けてみせる、と言い出したのでした。まさしく、体にじかに花の生け方を叩き込んでくれる、という訳です。

剣山でもないのに、どうやって花を生けていったのかと言うと、腕と脇腹の隙間や両足の間に、どんどん、花を挟んでいきます。さらには、体の表面には、そのまま、花や葉っぱを乗せていきました。さすがは、生け花の先生ですから、色々なテクニックを知っているのです。

先生は、土台の女生徒のぺちゃんこな胸をいじって、ピンク色の乳首をしっかり立たせました。広めの乳輪も、いっしょに盛り上がってしまいます。その乳首のまわりに、花や葉っぱをちりばめると、不思議と、その乳首も、花びらの一つであるかのように見えてきたのでした。花や葉っぱが置かれた中央に、おへそがポツンとくぼんだ穴として存在しているのも、なかなかサマになる見栄えです。また、その子のモジャモジャな陰毛を整えて、上の方へと立たせてみると、この剛毛も、黒い植物かのように見えてきたのでした。

生け花の先生は、どんな素材でも、上手に、美しく引き立たせる事ができるのです。

最後に、先生は、一輪の赤いバラを、土台の女生徒の陰裂にと押し込みました。でも、このバラの茎には、トゲが残ったままだった

ようです。バラが奥へと差し込まれていくほど、女生徒は「痛っ、痛っ」と、悲痛な小声を漏らしたのでした。

こうして、生け花は完成しました。まるで女体盛りみたいな人間生け花なのですが、素晴らしく美しいのです。

股間に刺さったバラのトゲがまだ痛かったのか、土台になった女生徒は、終始、下半身をよじらせていました。しかし、それすらも、先生の計算のうちだったのかもしれません。女生徒が動く事によって、足の上に生けられた花も揺れて、優雅さが増していたからです。

しばらく鑑賞したあとに、私たちは、その女生徒の体に生けた花を、全て、どけてあげました。その子の股間を見せてもらうと、バラのトゲのせいで、大陰唇には擦り傷やミミズ腫れがいっぱい出来ていました。その大陰唇を軽く撫でてみると、皮膚がさかむけていて痛かったのか、その子はピクンと体を引きつらせたのでした。

了

性欲検査

その高校では、性欲検査と言うものが行われていた。その名の通り、生徒たちの性欲の程度を調べるのである。男子の場合は、ペニスをこすって、きちんと射精するかを確認したし、女子の場合は、性感帯を愛撫して、イクかどうかをチェックした。

なぜ、そんな検査を導入したのかと言うと、やはり、近年問題となっている少子化と関係している。国の人口を増やしていく為には、とにかく、若い世代に子供を作ってもらわない事には、話にならないのだ。それゆえ、基礎中の基礎として、若年層にセックスする能力そのものがあるのかを、高校生の段階で調査するようになったのだった。その高校では、単に、学力と社会マナーを備えているだけではなく、生殖能力の点でもお墨付きの人間を、世の中へ送り出す事に力を入れていたのである。

全ての生徒の性欲検査を行なう訳だから、検査の日は、そりゃあ大わらわだ。検査員の数が足りないので、その高校の校医の教え子だったボクまで、臨時検査員として駆り出されたのだった。

検査の光景は、圧巻である。全校生徒が、一人残らず裸になって、ズラリと検査会場に並んだからだ。この子たちを、一人一人、丁寧に調べてゆくのである。

男子は、まず、検査員が、その子の陰茎を手コキして、正常に勃起するのを見届けてから、一気に射精させてしまう。重要なのは、女性のアソコに陰茎を挿入できて、一定量の精液も出るかなので、ペニスの大きさや、包茎かどうかまでは、気にしない。

女子に関しては、もう少し、判定が難しくなる。イかせる前に、あちこちの性感帯の機能も点検するからだ。いじれらた乳首が固くなるか、いじられたクリトリスが勃起するか、いじられたオマ○コから愛液がにじみ出るか。それらをクリアした上で、最後は、その

子がエクスタシーも感じられるかを確認するのである。
もちろん、そこそこの人数で、正常じゃない不能の子も見つかった。でも、だとしても、それはそれで、早期に分かって、良かったと言うものなのだ。彼らは彼らで、今後の生活では、自分が性欠陥者である事を、堂々と表明できて、びくびくと隠さずに、生きていけるようになれるからだ。
しかし、ボクには、この性欲検査で、一つだけ納得のいっていない事があった。
それは、男のボクが担当するのは、女生徒だったと言う事だ。普通の身体検査ならば、検査員は同性が行なうはずであろう。なのに、この性欲検査に限っては、男子生徒は女の人が、女生徒は男性が検査するのであった。
この点について、ボクは、恩師の校医に、じかに尋ねてみた事がある。すると、校医は、このように答えてくれたのであった。
「最近は、性同一障害の人も多い。異性を相手にして、射精できたり、エクスタシーを感じられない事には、子供を作る生殖者としては、完全とは言えないのだよ。また、性愛対象が特殊化している若者も増えている。アニメや二次元の異性の裸じゃないと興奮しないとか、あるいは、特別なコスプレをした異性が相手でなければ欲情できない、と言うような人も増加しているのだ。我々が、生身の人間として、自らの手で、生徒たちの発情チェックを行なうのも、そのへんを見抜く為なのだよ」
校医の話は、確かに、もっともなのだった。
とりあえず、明日からは、今年度の性欲検査が始まるのである。

了

番長の初体験

うちの高校の番長は、まだ童貞だった。

近所の高校の不良たち相手に、ケンカに明け暮れる毎日だった番長は、根っからの硬派であり、女と遊ぶ事など、これまで考えた事もなかったのである。しかし、大将が、高校三年にもなって、まだ童貞だなんて、子分の俺たちがちょっと恥ずかしいのだ。そこで、俺たちは、番長に初体験させてやろうと決めたのだった。

俺は、番長に、誰とエッチしてみたいかを聞いてみた。すると、番長は、鬼瓦みたいな顔をしているくせに、デレデレしながら、我が校のマドンナ女生徒である蛙里いずみを指名してきたのだった。

仕方ないので、仲間の数名が、蛙里いずみを連れて来るべく、出動した。ところが、彼らは手ぶらで帰ってきた。上品で、利口な蛙里いずみは、俺たちの企みをいち早く察知して、うまく逃げてしまったのだった。

だが、すでにその気になっていた番長の方の気持ちはおさまらない。俺たちは、慌てて、蛙里いずみの代わりを見つけて、番長の元へと連れてきたのである。

それは、そこらで捕まえて、無理やり拉致した普通の女生徒だった。蛙里いずみほどの美人ではなかったが、決してブスでもない。こんな不良の溜まり場に連れてこられた彼女は、これから何をされるのかを瞬時に理解したらしく、青ざめて、ブルブルと震えていた。

さっきから性欲の方が頂点に達していた番長は、すぐさま、その女生徒に飛びかかったのである。俺たちも、番長がセックスしやすいように、その女生徒の制服を剥ぎ取り、素っ裸にして、手足を押さえつけた。

だが、ガタイのいい俺たちと比べると、女生徒の体は、あまりにも、か細すぎたようだ。

「これが乳かあ。ほう、これが女の乳かあ！」と、番長は、女生徒の乳首を力強く摘むと、グイグイと勢いよく引っ張った。

すると、あんまり強く引っ張り過ぎたものだから、女生徒の乳首はブチンと千切れてしまったのだった。馬鹿力の番長は、腕の力の加減ができないのである。

それだけでは済まなかった。

「おお！これが女の下の毛かあ！」

そう言って、番長が、女生徒のアンダーヘアを引っ張ると、その縮れた毛は片っ端からむしり抜かれていった。

さらに、番長の乱行は続いたのである。

「ほうほう。これが、女のオマ○コかあ！」

番長は、女生徒のオマ○コに、自分の両手の指を突っ込んだ。でも、牛のように体のデカイ番長の指は、単2電池並みに太かったのである。そんな指をオマ○コに何本も差し込んで、その穴を四方に広げてみようとしたのだから、たまらない。その女生徒がまだ処女だったのかどうかは知らないが、ビリビリと音がして、どうやら、彼女のオマ○コの入り口は裂けてしまったのだった。

女生徒は、激痛のあまり、目をひん剥いていた。彼女の口は、俺たちの一人が押さえていたので、悲鳴をあげる事はできない。きっと、卒倒しそうなほどの痛さだったのであろうが、俺たちは、彼女に気絶する事も許さなかった。

俺たちは、この女子の体が壊れてしまう前に、番長に、早くセックスするようにと進言した。番長も素直に従ってくれたのである。

番長の、馬みたいに太いチンポが、女生徒の裂けたオマ○コにと挿入された。女生徒にしてみれば、きっと、死の苦しみだったに違いあるまい。彼女は、痛すぎて、失神する事もできず、番長に刺し貫かれたまま、泣いて、悶え続けていた。

ほんとは、俺たちも、番長がやり終わったあとに、おこぼれを預かろうかとも思っていたのだが、どうやら、この様子だと、それは無理そうなのであった。

全く、蛙里いずみの奴も、うまい事して逃げて、命拾いしたものなのである。

了

裸族

僕は、民俗学者の父に連れられて、アフリカの奥地を訪れた。そこで、この地で暮らす裸族の部落のお世話になったのである。

ほんとに、未開の裸族たちが住む村だった。そこの住民である黒人たちは、皆、小さな腰布しか身につけていなかったのだ。男も女も、小さな子供も大人たちもである。

僕と父が泊めてもらった住居の家族も、全員が裸だった。この家には、僕と同い年ぐらいの若い娘もいたのだが、彼女も裸だったのである。その子は、日本人の僕が見ても、はっきりと美人だと分かる少女だった。

彼女も、普段から、紐のような細い腰布しか纏っていなかったのだ。小ぶりだが形のいい乳房も、引き締まった健康なお尻も、全て、丸出しなのである。プロポーションも、細めな方で、イカしているのだ。さらには、彼女がアグラをかくと、小さな腰布の隙間から、うっかり、濃い茂みや女陰の一部も見えてしまったのだった。

そこまで露骨に肉体を晒していたと言うのに、彼女は、まるで、あっけらかんとしていて、異国からの来訪者である僕に対してでも、屈託なく接してくれたのである。

のちに、この部落を離れる時、僕と父は、彼女の事も、日本へと連れ帰る事となった。部族からのたっての希望で、賢かった彼女の事を、ぜひ日本へと留学させて、外の世界を学ばせてほしいと頼まれたのである。

日本に来た彼女は、僕の通っていた高校にと転入する事となった。地元でも評判の器量よしだった彼女は、日本でも、やっぱり最高の美少女だった。彼女は、洋服だって、学校の制服だって、実にスマートに着こなしたのだ。最初っから都会育ちのように見える似合いっぷりなのだった。

頭のいい彼女は、すぐに、日本の言葉や文化を覚えてしまい、日本の生活にも馴染んでいった。勉学にも励んだし、ピュアで正直な性格ゆえに、誰からも好かれて、また、大自然の中で生きていたから、運動神経の方も抜群だったのである。彼女は、たちまち、うちの高校の中でも、皆の憧れのアイドル的存在となったのだった。

でも、僕は、彼女の裸族時代の様子を知っていたので、彼女が知的な文明人になっていくほど、彼女の赤裸々なヌード姿が思い出されてしまい、逆に照れ臭くなったのである。

了

ある女子高生の妄想

教室の隅の方で、ヤンチャな男子たちが、いじめられっ子の男子にセンズリをやらせて、遊んでいました。

いじめられていた男子は、顔を真っ赤にしてベソをかいていて、それでも、いじめっ子たちには逆らえずに、女生徒だって居る教室の中だと言うのに、スラックスの奥から自分のチンポを引っ張り出して、ゴシゴシと手でこすっていたのです。

こんな状況でやらされているセンズリでも、男の体の本能(サガ)なのか、ちっちゃなチンポが、どんどん充血してきて、一丁前に勃起しだしました。見物人たちの方も盛り上がってきて、まだチンポをシゴくのを止めさせてはもらえないのです。

とうとう、その男の子は、最後までイってしまい、チンポの先から白濁色の液を出してしまいました。その液は量も多く、清潔な床の上にもボタボタと垂れ落ちたのです。

「うわあ、汚い！」

「ははは。こいつが作った、男の子の液(ジュース)だぜ」

「おいおい。教室の中なのに、よく、そんなものを出せたな」

「こいつ、まだ童貞だろ。こりゃあ、童貞の精液だ」

「お前さあ。初体験する前に、精液だけを女子に見られちゃって、恥ずかしくないのかよ」

「へええ。そのドロドロした液って、あたしも、はじめて見た。キモーい！」

「やだあ。その液を、あたしのアソコに入れたら、子供ができちゃうのぉ？」

「いやーん。この子の精液なんて、あたし、絶対にいらなーい」

男子も女子も、そんな事を言って、笑い合っていたのでした。

しかし、そんな級友たちの中で、あたしだけは、違う事を考えて、

ドキドキしていました。あたしは、もし、自分も、この男の子と同じ目にあったら?と言う事を想像してしまったのです。

やっぱり、あたしも、教室の中でオナニーをやらされる、と想定します。どうせなら、制服を全部脱がされてしまって、いじめっ子たちに没収されてしまい、素っ裸でオナニーをやらされる、と言う設定の方が、より興奮しちゃうでしょう。

そうやって、あたしは、教室のど真ん中で、クラスの皆が見ている前で、おおっぴらにオナニーを披露するのです。仲良しの友達や好きな男子からも見られていると言うのに、自分のおっぱいを揉んだり、アソコに指を突っ込んだりするのです。

やがて、あたしも、あのセンズリ男子と同じように、気持ちよくなって、アソコから女の子の液を噴き出してしまうに違いありません。例の、愛液とかマン汁とか呼ばれている液をです。あたしも、クラスの皆に見物されながら、そのネバっこい液をいっぱい垂れ流して、きれいに磨かれた教室の床を自分の体液でたっぷり汚してしまうのです。そして、皆から笑われ、侮蔑の言葉をいっぱい浴びてしまうのであります。

あたしは、クラスの男子のイヤラシイいじめ現場を目にして以降、そんな妄想に浸りながら、毎晩、オナニーに励むようになったのでした。

了

蛸と女生徒

その港町では、昔から、女は裸で海に潜ってはいけない、と伝えられていた。もし、蛸に女陰部を見られてしまうと、トンデモない事になるからだと言う。しかし、若い女たちにこの話をすると、全員が、決まって「嘘だー、ありえなーい」と笑い飛ばしてしまうのだった。

さて、この港町の水産高校には、海女部と言うのが存在していた。少し前に海女が出てくるテレビドラマが放送された影響で、高校の中でも、海女を経験してみたいと言う女生徒が急増していたのである。そのような子たちの中には、部活動の一環で海女をするだけでは満足できず、こっそりと、自主的に潜水する子も少なくなかった。実際に、部活外で海に潜れば、お金になる海産物もしこたま取ってこれて、小遣い稼ぎにもなったからである。

そうした悪いコトをしていた女子の一人が、ある時から、急に態度がおかしくなり始めた。時々、行方をくらましてしまい、普段からも、やたらとボッとしているのである。

友人の一人が、心配して、その女子を問い詰めてみると、意外な話を打ち明けられたのだった。

その女子は、頻繁に、海への内緒の潜水を繰り返していた。その際には、何も身につけず、素っ裸になっていた。水着類を着ていて、海水に濡らしたり、汚してしまったら、秘密で潜水している事がバレてしまう恐れがあったからだ。ある日、いつものように、裸で、無人の海辺を歩いていた彼女は、いきなり、巨大な蛸にと襲われた。そのまま、岩陰に引きずり込まれて、彼女は蛸にレイプされてしまったのである。

もちろん、蛸に陵辱されるなんて、言いようのない屈辱のはずだ。しかし、そのはずなのに、大蛸は意外にもテクニシャンであり、彼

女はたちまち蛸のプレイの虜になってしまったのだった。大蛸は、彼女の体一面を触手のイボで愛撫し、彼女の肉厚な秘部がむくんで、熱い本気汁が溢れ出ると、美味しそうにすすった。さらには、小蛸まで現れて、息もできないほど激しく彼女に接吻したのである。大蛸が引っ込んでも、今度は、その小蛸が、彼女のクリトリスから肛門までを、触手の先でさんざんに責め立てて、大蛸と同じ行為を繰り返した。とうとう、彼女は、蛸相手に夢のような絶頂も感じてしまったのである。

その後、いつもの生活に戻ってからも、彼女は、この蛸との戯れが忘れられず、他の人に見つからない時間帯に、裸で海辺をウロつくようになった。すると、蛸は必ず出没して、彼女の事をまた犯してくれるようになったと言うのである。彼女が、よく姿を消すのは隠れて海辺に行っていたからで、いつもボッとしているのは蛸の事ばかり思い慕っていたからだったのだ。

友人は、この話をはじめて聞かされた時は、とてもじゃないが信じられなかった。彼女は、その女子が冗談を言っているのだとばかり考えて、あまり真剣には取り合わなかったのである。

だが、それからしばらくして、この女子は完全に行方不明になってしまった。何の手掛かりも残さずに蒸発してしまい、二度と皆の前には現れなかったのだ。海上も捜索されたが、水死体さえも発見されはしなかった。あるいは、彼女は、竜宮にでも連れていかれて、蛸たちの手で、今でもヨガり続けているのかもしれない。

了

参考・葛飾北斎「蛸と海女」

給食タイム

学校での生活は、まさに退屈の極みだった。特に、授業の時間は地獄の苦しみだったと言ってもいい。

それでも皆が我慢して学校に来ていたのは、昼間に給食の時間があるからに他ならなかった。誰もが、それだけを楽しみに、サボらず、授業を受けに来ていたのである。この国の食糧事情は悪くなるばかりであった。しかし、そんな状況下においても、学校の給食だけは上等なものが配給されたのだ。皆は、ただそれだけが目当てで、真面目に教育施設へと登校していたのである。

午前中は、アンニュイで、つまらない授業の時間が、えんえんと続いた。次第に、生徒たちも飽きてゆく。教室の中も、少しずつ、ざわめき始めるのだ。

もはや、生徒たちの辛抱も限界かと思われた。

その時、授業終了の言葉が、先生より告げられたのだった。昼休みになったのである。ようやく、給食を食べられるのだ。生徒たちも、ひと際どよめいて、盛り上がり出したのだった。

やがて、この教室にも、皆の分の給食が運び込まれた。透明のチューブだ。その中に、給食が閉じ込められていたのである。

給食は、まだ生きていた。チューブの中で、逃げようとして、必死にもがいているのだ。

その給食とは、人間だった。男もいれば、女もいる。食べやすいように、どの人間も服を剥がされて、裸になっていた。若い人間ばかりである。成長しすぎた人間は、質が落ちて、美味くないからだ。

この学校の生徒たちは、このチューブ内の人間どもを一人一体ずつ、捕食してゆくのである。それが、連中の給食だったのだ。

彼らサイクロプス人にとって、地球人（ホモ・サピエンス）の柔らかい肉は、最高級のご馳走なのである。

了

ハレンチ修学旅行・その1

修学旅行の夜の、旅館での宿泊と言うのは、どこの学校でも盛り上がるものだ。生徒たちが大部屋に一同に集められて、全員が一緒に寝起きをするのである。

いや、皆、興奮しているから、すぐに就寝したりはしないのだ。まずは、その日の旅先での出来事や秘密の恋バナなどで、お喋りに花が咲く。そのあとは、いつの間にやら、全員参加の枕投げ大会へと突入するのだ。

その女子高の修学旅行でも、そうだった。大部屋に沢山の女生徒たちが閉じこもってから、だいぶ夜も更けた時、ついに、一人の生徒が自分の枕を持ち上げた。いよいよ、恒例の枕投げ大会の始まりなのである。しかし、ただの枕投げ大会にはならなかったのだった。

「よーし！枕が当たった子には、ペナルティよ！服を一枚脱ぐのよ！」

最初に枕を掴んだ女生徒が、笑いながら、いきなり、そう宣言したのであった。

はじめは、他の女生徒たちもピンと来てなかったようだ。ところが、言い出しっぺの女生徒が、自分に枕が当たった時、本当にパジャマを脱いでみせたものだから、このルールは、たちまち、皆にも広がってしまったのだった。

皆も、修学旅行の盛り上がった夜だったので、すっかり羽目を外していたのだろう。

枕が当たった子は、パジャマだけではなく、ブラジャーやパンティも、恥ずかしげもなく、どんどん脱いでいったのだった。皆がそうしていたから、彼女たちは、ちっとも躊躇わなかったのである。

こうして、枕投げ大会も、すっかり、たけなわとなっていた。その為、皆が夢中になりすぎて、見回りの教員がこの部屋に接近して

いたのにも、完全に気付き損ねたらしい。
いきなり、この大部屋の入り口の戸が開いた。
「お前たち！一体、いつまで起きてるんだ。いい加減に寝なさい」
と、見回りの教員が、抜き打ちで、大部屋の中へと叱りつけた。
だが、次の瞬間、その教員は、言葉に詰まってしまったのだった。
と言うのも、大部屋の中では、生徒たちの誰もが、全裸だったり、下着姿だったり、あるいは、セミヌードだったりして、はしたない格好をしていたからである。沢山の女生徒が、皆、そんな状態だった訳だから、ますます圧巻だったのだ。
その見回りの男性教員も、さすがに、顔が真っ赤になり、開いた口が塞がらなかったのであった。

了

ハレンチ修学旅行・その2

その女子高のあるクラスでは、修学旅行の夜は、一番弱い女子にオナニーをやらせて、皆で見物して、楽しもうと言う事で話がまとまって、盛り上がっていた。そのクラスでは、一番弱い女子は普段から皆にいじめられていたのである。修学旅行では、さらに度の過ぎたいじめを試してみようと言う事になったのだ。

そして、修学旅行の日がやって来た。クラスの皆は、宿泊先の旅館の大部屋にと、クラスメート全員で就寝する事になった。全ては、生徒たちの予定していた通りなのである。

夕食も終え、その日のスケジュールが全て終了して、就寝時間になった途端、クラスメートたちは皆、大部屋の中へと閉じこもり、一番弱い女子を部屋の中央にと座らせて、その周りをグルリと取り囲んだ。そして、彼女たちは、一番弱い女子へとオナニーしてみるように命令したのだった。

一番弱い女子にとっても、最高に辛い修学旅行になったのである。しかし、彼女に拒否権はなく、皆の命令に従うしかないのであった。

オナニーしているのが、はっきりと見えるように、一番弱い女子は服を脱がされ、全裸にされた。さらには、太いディルドまで渡されて、それを陰部に挿入するように強要されたのである。

一番弱い女子はうろたえていたが、彼女に逃げ場はなかった。青ざめた表情のまま、本当に、ディルドを使って、自慰行為を始めたのである。

それを、周囲から、好奇心いっぱいに、クラスメートたちは眺めていた。クラスメートたちも、級友のオナニーのやり方には非常に関心があったし、クラスメート全員に見られながらの公開オナニーと言うのも、たまらない辱めなのである。これは、クラスメート側にしてみれば、一番弱い女子に対して、とびっきりの優越感に浸れ

て、ストレス発散にもなったのだ。
ところが、だいぶ経って、事態がおかしな方へ進み出したのだった。
一番弱い女子は、実は処女ではなかったのである。こんな大きなディルドをアソコに入れても、さほどキツそうではなかったし、出血もしなかったのだ。
これには、逆に、見ていたクラスメートたちの方が動揺し始めた。彼女らの大半が、まだ処女だったからである。それなのに、見下していたはずの一番弱い女子が、すでにノンバージンだったなんて、自分たちの方が遅れているような悔しい気持ちを抱かされてしまったのだ。
そして、一番弱い女子も、普段はおとなしい、真面目な生徒のふりをしていただけに、非処女である事が皆にバレてしまったのは、とてもバツが悪そうな様子なのだった。
クラスメートたちの、一番弱い女子への怒りは、一気に爆発した。彼女たちにしてみれば、今ここで、一番弱い女子を自分たちの手で女にしてやって、女の子の大切な記念日にしてやるつもりだったのである。それなのに、さっさと先に処女膜を破いていたなんて、こんな女には、もはや何の情けも無用なのだ。
このあと、クラスメートたちは、そのまま一番弱い女子にオナニーをやらせ続け、彼女を何度も何度もイかせて、その卑しい姿を、憤怒しながら、嘲笑しまくったのだった。さらには、ディルドが膣の奥まで入ってしまった光景もスマホで写して、その画像を他のクラスの生徒や違う学年の女子にまで配ったのである。
修学旅行が終わった後も、学校内で唯一はっきりと非処女をカミングアウトしちゃった生徒として、一番弱い女子はすっかり有名人になってしまったのだった。

了

ハレンチ修学旅行・その3

その高校にとって、海外への修学旅行は、これが初の試みだった。よって、学校の職員たちだって、ノウハウがまるで分かっていなかったのである。だから、無難なアメリカとかアジア諸国でも行き先に選んでおけばよかったのに、ちょっと気取って、背伸びをして、英語圏ではないヨーロッパ国なぞを修学先にしてしまったものだから、こんなトラブルも発生してしまったのだ。

言葉がうまく通じないながらも、何とかかんとか、スケジュールをこなしていった修学旅行チームなのだが、彼らが次に貸切バスで到着した場所は、その国のヌーディストビーチだった。当然、そこにいた地元の人々や観光客は、男も女も全員、裸だったのだ。

どうやら、ろくに読めもしない外国語の旅行ガイドで、見学先を探し選んだものだから、スペルを見間違えて、希望していた名所とは全然違う場所を事前予約してしまい、連れてこられてしまったみたいなのである。

焦ったのは、同行していた付き添い教員たちだ。彼らは、慌てて、バスの運転手へと、本来行きたかった名所へと向かうように指示をしたのだが、バスの運転手の方も、地元の人間だったし、最初に命令されたままに、ここへ皆を連れてきただけだったので、態度がとても頑なであり、融通がきかず、なかなかバスを発車させようとはしなかったのである。

「もう！時間がもったいないわ！来ちゃったんだから、仕方がないじゃない！皆で、ここを楽しみましょうよ！」

いきなり、女生徒の一人が、そんな事を言い出した。そして、彼女は、バスのそばから離れると、自分も学校の制服を脱ぎ、裸になって、ビーチの方へ駆けていったのだ。

その行動に、最初は、仲間の生徒たちや教員らも驚いていたが、

すぐに、生徒たちが騒ぎ出した。なんと、彼らも、先の女生徒の提案に賛同してしまったようなのである。

生徒たちが、次々に服を脱ぎ、裸になって、歓声をあげながら、ビーチの方へ走り出した。こうなったら、もう、数人しかいない教員たちの手では止めようがないのである。

彼らの修学旅行は、かくて、他ではありえないヌーディストビーチ現地体験にとなったのだった。

了

ハレンチ修学旅行・その４

今は、子供たちの個性を尊重する時代だ。よって、生徒たちに集団生活をおくらせる事が目的のはずの修学旅行も、かなり様変わりしているのである。

さる女子高の修学旅行では、宿泊先の旅館に到着した時点から、早くも、生徒たちの自己主張いっぱいの行動が始まっていた。

彼女たちは、まずは、旅館の大浴場へと浸かりに行くのだが、さっそく、彼女たちのルールに縛られない気ままぶりが展開される。仲良し同士の集団で入浴に行くものだから、たちまち、風呂場は、彼女たち女子高生だけで埋まってしまうのだ。大きな浴場を、裸の女学生だけで占領している景観は、まさに圧倒されるのである。しかも、彼女たちは、ＳＮＳにこそ上げはしないが、防水性のスマホを使って、風呂場での記念撮影まで行なっている状況なのである。

就寝場所の大部屋に戻ると、彼女たちの個々の自由度は、さらにエスカレートした。

ある女生徒などは、部屋に入るなり、すぐさま、浴衣も下着も脱ぎ捨てて、素っ裸になってしまった。他の全クラスメートと相部屋だったにも関わらずだ。その子は、自宅では、就寝時には、いつも服を身につけておらず、たとえ旅先であっても、そのルーティンを守らないと、熟睡する事ができなかったのである。

一方で、風呂上りで、大胆にもムダ毛処理をおっ始めていた女子もいた。他のクラスメートもいる前で、脇毛やすね毛だけではなく、パンツもずらして、アンダーヘアまで堂々と剃っているのだ。この子は、どうやら、神経質なほど几帳面で、入浴後は必ずムダ毛処理をしないと、気が済まなかったらしい。

かと思えば、部屋の片隅の布団の上では、ヤンチャで元気な女子たちが、一人の大人しい女生徒にプロレス技をかけて、遊んでいた。

そのヤンチャな女子たちは、普段から、その大人しい女子の事をイジって、楽しんでいたのだ。今日は修学旅行でついはしゃいでしまったのか、ふざけ方もかなりハメを外しているのである。とんだ災難の大人しい女子の方は、あまりにも痛いプロレス技の実験台にされた事で、たまらずオシッコを漏らしてしまうのであった。楽しい修学旅行の場で、失禁してパジャマのズボンを濡らしちゃった上、その事を全クラスメートにも知られてしまい、スマホで証拠写真まで撮られて、いつまでも皆には忘れてもらえず、まさか、卒業するまで笑い者にされ続けてしまうとは、実に悲惨な話なのである。

また、いつも仲良しの二人組の女子の姿が、さっきから見かけなくなっていた。どうやら、彼女たちがレズらしいと言う噂は本当だったようだ。今頃、彼女たちは、きっと、どこか人目につかないところで二人っきりになって、エッチにイチャついているのである。

さて、夜も更けて、電気を消して、皆が就寝すると、さらに、一部の生徒たちの秘密が暴露する事になるのだ。

真っ暗な部屋の中、全員が寝たはずなのに、あちこちの布団から、怪しい喘ぎ声が漏れ出すのだった。それは、性的に欲情している声なのである。その子たちは、他のクラスメートもいたと言うのに、布団の中に潜って、オナニーを始めていたのだ。元より、毎晩、オナニーに励んでいて、今夜も我慢できなかったのか、それとも、修学旅行の興奮した空気の中で、急に体が火照ってしまい、疼くのを抑えきれなくなったのか、は分からない。とにかく、彼女たちは、クラスメートたちに見られようと、恥も外見もなく、オナニーに浸っているのであった。でも、修学旅行先で行なった特別なオナニーは、きっと、彼女たちにとっては、素敵な思い出にもなった事であろう。

女子高生たちによる淫靡な修学旅行の光景は、このあとも続くのである。

了

獣姦実験

うちの高校には、とっても偉い生物学の教授が赴任していた。こんな偉い先生に授業を教えてもらえると言うだけでも、とても有り難く、名誉な話なのだ。その上で、僕なんかは、教授の専門助手まで、やらせてもらっていたのである。

教授は、日中は生徒相手に普通に教鞭を執っていた一方で、個人的には、独自の研究活動も行なっていた。僕は、その研究のお手伝いをしていたのだ。

教授の研究テーマとは、異生物同士の交配実験だった。特に、人間と他の動物の混血種を作る課題に取り組んでいたのである。もし、本当に、そのような事が可能ならば、伝説に出てくる半人半獣の英雄の存在も実証される事になるし、謎のＵＭＡ雪男の正体への足がかりにもなるはずで、まさに、ノーベル賞候補なみの研究だとも言えるのだ。

もちろん、現在の科学では、人間と動物の混血児（ハーフ）なんてものは否定されている訳なのだが、しかし、それは遺伝子学的な理論だけで導き出されたものなのであり、十分な実証実験に基づいたものではないのである。もしかすると、実際に試してみれば、偶然にでも、人間の遺伝子とうまく結合できて、子供が作れる生き物だって見つかるかもしれないのだ。教授と僕は、そのような発見ができないかと、日々、人体実験を繰り返していたのである。

幸い、人間側のモルモット、いや、被験者は、いくらでも都合ができた。学内の女生徒たちに協力を求めれば、誰もが引き受けてくれたのである。うちの高校では、そこまで教授の権力が浸透しており、何びとも嫌と言ったり、逆らったりする事ができなかったのだ。

特に、女子寮に入っている女生徒は、良い被験者となった。下校後に自宅へ帰る訳ではないので、夜は、いくらでも実験に付き合わ

す事ができたのだ。彼女は、昼間は教室で授業を受け、夜は教授の研究室に連れてこられて、動物相手に交尾をする生活を強いられたのである。

そして、僕が、そうした被験者の女生徒の調達員であり、彼女を逃がさない為の見張りの役目も兼任していたのだった。

授業が終わり、夜が来ると、僕は、被験者の女生徒をエスコートして、教授の研究室へと連行する。研究室には、その日、彼女と交配する動物がすでに用意されており、服を脱いだ裸の女生徒は、その動物にきちんと体内へと射精されるまで、真剣な性行為をやらされるのだ。

教授は、実は、ものすごい薬も開発していた。その薬を注入すると、どんな動物でも、たちまち発情してきて、相手構わず交尾行動をとるようになるのだ。それゆえに、この実験でも、どんな動物にでも人間の女性と交配させる事ができたのである。

しかし、ちょっとした問題もあって、どうも、人間側の被験者が、なかなか長持ちしないのであった。毎晩、いろんな動物とセックスをやらせると、精神的に病んできてしまうらしく、どんどん態度がおかしくなっていき、ついには重度のウツや発狂状態になって、いきなり自殺すらしてしまうのである。おかげで、度々、被験者の女生徒を交換しなくてはならず、今の被験者で、もう8人めなのだった。

その8人めの彼女も、すでに何種類もの動物と交尾をさせていたものだから、だいぶ心が壊れ始めていたらしく、活力がなくなり、普段から、やつれた表情をしていた。しかし、今夜も彼女には実験に参加してもらわなくてはならず、今日、彼女が交わる相手と言うのは、大きな蛸なのだ。

「これじゃ、まるで、葛飾北斎の『蛸と海女』だな」と、交尾の状況を観察しながら、教授は苦笑いしたのだが、その瞳の奥はいっさい笑ってはいなかった。

了

変身

ある朝、自分の部屋で目を覚ますと、一緒に寝ていたペットのココアが人間になっていた。

ココアは、1歳ちょっとのメス猫である。だから、人間に変わったら、俺と同い年ぐらいの女の子になったのだ。もともとチャーミングな猫だったから、人間になっても、とても可愛い子ちゃんなのである。活動的な猫らしく、タンクトップにホットパンツと言う、アクティブな服装をしていた。プロポーションも、猫ならではの、しなやかさである。そして、頭には猫耳がついていたのだ。

「ご主人様ぁ。大好きぃ～」と言いながら、人間の姿のココアは、俺に頭を擦り付けて、甘えてきた。

何とも不条理な話ではあったのだが、俺の方は、今日も学校に行かなくちゃいけなかったので、これ以上、ココアにかまっている訳にもいかなかったのである。

ところが、登校する為に、俺が家の外へ出ると、ココアも一緒についてきたのだった。俺のそばから離れようとしないのだ。

「ダメだよ。俺はこれから高校に行くんだから。関係ない人間は校舎には入れないよ」

「でも、あたし、猫だよ」

言われてみれば、その通りなのである。ペットならば、ぎりぎり、学内に連れ込む事も可かもしれない。

俺は、そのまま、ココアを連れて、学校へと向かったのだった。

俺が、ココアとともに、教室の中に入ると、さっそく、クラスメートたちが不思議そうに寄ってきた。何しろ、ココアは、皆が見た事もなかった美少女なのだ。そんな女の子を、俺が親しげに連れてきたら、驚くのも当然なのである。

特に女子たちの反応が激しかった。実を言えば、俺はイケメンだ

ったので、けっこう、クラスの女子からはモテていたのだ。まだ誰とも付き合っていなかったはずの俺が、こんな可愛い女の子と同伴していたものだから、彼女たちは余計に動揺していたのだった。

「皆。そんなに驚かないで。この子は猫だよ。俺の飼ってたペットが変身したんだ」俺は説明した。

「そうだよ。あたし、ココア。皆、よろしくね」と、ココアも、明るく挨拶した。

すると、女子たちが集まって、急にゴソゴソと相談を始めたのだった。話がまとまると、彼女たちは、きつくココアの事を睨みつけた。

「ねえ、あなた。本当に猫なの？もし、本当にペットなら、人間みたいに服なんか着てるんじゃないわよ！」

そう怒鳴るなり、彼女たちはいっせいにココアにと飛びかかったのだった。

あっと言う間の出来事である。

女子たちが離れた時、ココアは、ベソをかいて、床にと座り込んでいた。服を全て剥がされてしまい、丸裸になっていたのだ。ココアは、胸と股間を両手で押さえて、隠して、グスグスと泣いていたのだった。

嫉妬した女がやらかす事と言うのは、全くもって、残酷なのである。

了

ピアスブーム

若者たちの間ではピアスをつける事が大流行していた。

耳にピアスをするのは、もはや常識である。顔のあちこちにもピアスをつけ出した。いや、それどころか、体の各部位にもピアスをつける若者が増えてきた。ついには、女性器にピアスをはめる女性も続出したのだった。

皆が、他の誰よりも奇抜なピアスに挑戦しようと競った結果、性器ピアスへと行き着いてしまったのである。秘密の部分につけるピアスだからこそ、つけた本人も、より興奮できて、盛り上がれたのだ。

一般には、女性器につけるピアスは、陰唇ピアスと言う。しかし、若い女性たちは、陰唇にだけではなく、性器の表面の各所にまでピアスの穴を開いた。膣前庭の皮膚の上とか、膣や尿道の入り口、クリトリスにまでピアスを差し込んだのである。性器ピアスは、驚くべき進化を遂げる事になったのだ。

困った事に、女子高生たちまでもが、このブームにと巻き込まれていった。ピアス禁止の学校において、女子高生たちは、絶対に先生に調べられない性器ピアスへと逃げ出したのだ。その事で、ますます、女子高生の間では、性器ピアスが爆発的に流行る事となったのだった。

その潜在的ブームが、ついに外にも流出するようになった。性器ピアスをつけた女学生たちが、身内だけに見せて、こっそり楽しむのが焦ったくなってきて、次々に、自分の性器ピアス姿をＳＮＳにアップしだしたのだ。

彼女たちは、下半身だけ裸になるのではなく、オールヌードになって、顔だけ隠して、自分の性器ピアスを撮影した。初々しい１０代の少女の全裸の中、異質な性器ピアスだけが、より目立って映え

るようになる訳だ。まさしく、インスタ映えしたのである。
しかも、ピアスそのものも、味気ないリング状なのではなく、色とりどりで、かなりオシャレになっていた。星形だったり、ハート型だったり、もっと具合的なモノの形であったり、あるいは、リングはリングでも巨大なものだったりして、そんな可愛らしいピアスが、女性器から垂れ下がって、ブラブラと揺れているのだ。それは、初めて見た人にとっては、鮮烈だっただけではなく、かっこいいエロチシズムまでもが感じ取る事ができたのだった。
どハマりした女の子の中には、性器の表面全てに、こんなキラキラしたピアスをいっぱい取り付けていて、外側がピアスだらけになり、肝心の性器が内に埋もれて、見えなくなっていた子までいたのである。
こんな性器ピアスの画像や動画をＳＮＳにアップするのは、当然、公共猥褻罪に引っかかり、たちまち社会問題となっていった。だが、そんな中で、対抗するように、性器ピアスは芸術だと主張する意見も湧き上がり出した。その声は、たちまち世論を巻き込むほど広がって、大きな市民運動にまで発展したのである。
その結果、裁判では、性器ピアスのファッション性を認める側が勝利し、性器ピアスをつけた陰部に関しては、特別に、公の場で晒してもいい、と言うルールになったのであった。

了

間引き

ある時から、何らかの異常によって、急に、人類の男女の比率がおかしくなってしまった。男性の人口に対して、女性の人数は三分の一以下になってしまったのだ。

これは、かなり困った事態だった。大量の男性が、異性とカップルになる事もできずに、あぶれてしまったのだ。これが、女性の方が多かったのであれば、一夫多妻のシステムを採用する事で、うまく対処もできたのかもしれないが、多夫一妻の形にしたのでは、女の方が身がもたないのであった。子供を産むにしたって、限界がある。

そんな訳で、男女の交際を巡って、世の中は非常にピリピリするようになった。希少な女性の奪い合いが原因で、陰惨な犯罪やトラブルも起こりやすくなったのだ。

それだったら、男性の数を減らすように、何らかの調整を行なったらどうなのだ、と思われた人もいたかもしれない。しかし、そう言う訳にもいかなかったのだ。今の男性の人数が減ると、人類全体の人口そのものが激減してしまい、労働力にも影響が出てしまうからである。

そんな状況の中で、男児の間では、去勢ごっこが広まり出したのだった。これは、言葉通り、他の男子の性器を壊して、生殖能力を奪ってしまう遊びである。とんでもない話のようにも聞こえるかもしれないが、子供たちには、本能的に、男ばかりが多すぎる事が分かっていたのだ。そのような環境下では、オス同士が殺し合いをして、弱い個体を排除してしまうのは、自然界でもありふれた慣習だったのである。

そして、そんな背景があったものだから、大人や学校の教師たちも、子供たちが去勢ごっこをしていても、あえて見逃していたのだ

った。大人たちは、自分たちの判断で、男性の優劣の振り分けをするのは、心苦しくて出来なかったので、そこで、子供たちのやり方に任せる事にしたのである。

去勢ごっこは、まだ道徳観念の低い幼児たちの間でのみ広まっていたのではなく、もっと成長した高校生たちの中でも頻繁に行われていた。体が成熟してから去勢されちゃう男子と言うのは、ますますもって、哀れで、恥ずかしいのである。そのような男の子は、クラスのボス男子に睨まれて、何の前触れもなく、いきなり、学校の教室のど真ん中でシメられちゃうのだった。

去勢ごっこが始まると、まず、犠牲者の男子は、服を全部脱がされて、素っ裸で、床の上に押さえつけられてしまう。彼を押さえつけているのは、クラスの他の男子たちだ。彼らも、恋のライバルが減れば、それだけ自分の結婚できる確率が上がるので、他人への去勢行為には協力的なのである。がっしりと四肢を押さえつけられてしまうと、もう逃げる事はできない。こうして、準備が整うと、ついにボス男子の出番となり、そのボス男子は、左右の手で、犠牲者の男子の二つの睾丸を、それぞれ、包み込むように、陰嚢の上から握りしめ、キンタマ潰しに取りかかるのだ。

去勢ごっこの手順は、もはやパターン化されていたので、馴れたものなのである。

この段階で、周囲には、ギャラリーも集まっていた。他のクラスメートたちだ。彼らにとっても、この去勢ショーは楽しい見せ物なのである。特に、女生徒たちにしてみれば、男子同士のいがみ合いは完全な他人事であり、自分たちを取り合う為に、男子たちがこんな事をしているのかと思うと、より愉快に感じられたのだった。

思春期の最中で、ただでさえ人に裸を見られたくない年頃なのに、憧れの女子も含めたクラスメート全員にと、大事な性器をツブされちゃうところを、ショーとして公開してしまうなんて、犠牲者の男子にとっては、究極に恥ずかしいシチュエーションだとも言えよう。

だが、実際にキンタマ潰しの刑が始まると、そんな事をクヨクヨ

しているどころではなくなってしまうのだった。睾丸を潰されるのは、それほどの地獄の痛さだったからである。

たとえ、それが分かっていても、ボス男子は、犠牲者の睾丸を握った手の握力を、容赦なく、ぐいぐい強めていった。彼の拳の中では、感触で、だ円形だった睾丸がいびつに変形し始めたのが分かりだし、すると、犠牲者の男子も、顔から血の気が引き、口からは泡を吹いて、体もガクガクと痙攣しだすのだ。

ついには、鈍い音を立てて、犠牲者の男子の睾丸は、二つとも破裂してしまうのだった。犠牲者の男子の体が、ショックでガクンとのけぞり、彼の陰茎の先からは、血の混じった精液がじわっと漏れ出た。この子の生殖能力は失われ、将来の子作りレースからは完全に脱落してしまったのだ。

ようやく、ボス男子が、犠牲者の男子の陰嚢から両手を離す。去勢は終わったのだ。

周囲では、ギャラリーたちが、この一部始終をゾクゾクしながら見届けていた一方で、当の犠牲者の男子は、白目を剥き、ピクピクと体を引きつらせながら、ぶざまに気を失っていたのである。

翌日から、この男子は、セーラー服を着て、女生徒として、高校に登校するようになったのだった。男性を廃業する瞬間を皆にも見られてしまっては、みっともなくて、もう胸を張って、男生徒とは名乗れそうにはないのだ。こんな感じで、女子に転換した男子生徒が、このクラスだけでも、もう6人は居るのである。

了

宇宙人顔

ある日、国民の顔が全部、宇宙人になってしまった。政府の公式発表によると、これは一時的な異常現象で、少し時間が経てば正常に戻ると言われたのだが、何しろ、皆が顔も声も変わってしまった為、相手が誰なのかが、すぐには見分けがつかなくなって、大変に不便になったのである。

学校に行ってみても、この混乱は続いていて、教室の中に入っても、パッと見ただけでは、誰が誰なのかが、さっぱり分からなくなっていた。皆が、高校の制服姿だったから、なおさらなのだ。

にしても、水星人や火星人などの顔になった人は、地球人とあまり大差はないので、さほど問題はなかったのであるが、木星人や土星人になってしまった奴らの顔と言うのは、実におぞましく、とんだ悲劇なのである。

そんな中、俺は、ようやく、今カノのマッキーも探り当てたのだが、彼女の顔は金星人になっていた。皮肉にも、普段の顔よりも、ずっと美人なのだ。

俺は、何だかムラムラしてきて、たまらず、マッキーの腕を引っ張ると、有無を言わさず、人気のない校舎裏へと連れ出した。そこで、彼女の服を脱がして、裸にしてしまうと、俺の方も裸になって、構わずに、金星人顔のマッキーと、思う存分にセックスを楽しんだのである。心なしか、顔が変わっていた事で、彼女自身のセックスの仕方までもが上手くなっていたように感じられた。

翌日、皆の顔は、全て、元に戻っていたのだった。俺は、教室で、以前の顔に戻っていたマッキーと落ち合った。

「やあ、マッキー、昨日は楽しかったね。金星人顔、最高に可愛かったよ」と、俺はマッキーに明るく語りかけた。

「私がなっていた顔は、冥王星人よ！」マッキーが、ムッとした表

情で、怒鳴り返してきた。
いけない。昨日は、俺は、うっかりして、マッキーと別の女生徒を間違えていたようだ。

了

夢

ある夜、夢を見た。それが、自分が夢を見ていると気付いている夢なのだ。

専門用語で、これを明晰夢と言う。夢の中の話なのであれば、何をしたって構わないのである。

夢の舞台は、俺が通っている高校の、俺の在籍している教室の中だった。

俺は、さっそく、この環境の中に、俺の今カノのマッキーが居ないかを探し回ったのである。すると、都合よく、すぐに見つかったのだ。いきなり、俺は、彼女にと飛びかかった。そして、何の了解も得ないまま、彼女の服を引っぺがして、彼女を裸にすると、その悩ましいヌードを拝みながら、たっぷりとセックスを堪能したのである。日常では、こんな強引なセックスは、マッキー相手では、とうてい出来なかったのであった。

こうして、マッキーを犯して、目的を達成した後でも、俺はまだ目が覚めそうな気配がなかったのだ。

そこで、俺は、今度は、うちのクラスで一番の可愛い子ちゃんの女生徒の姿を探したのだった。すると、またしても、簡単に発見できたのである。俺は、彼女にも襲いかかった。そして、マッキーと同じように、力づくでレイプしてしまったのである。

夢の方は、それでも、まだ覚めなかった。

だから、俺は、その後も、目ぼしいクラスメートの可愛い女生徒を見つけ出しては、一方的なレイプを繰り返して、夢の世界を満喫したのである。夢の中では、何度射精しても、俺が萎えてしまう事はなく、いくらでもセックスを続ける事が出来たのだった。

やがて、極楽のような淫夢からも覚め、次の日、学校に登校してみて、俺は驚いた。クラスの皆から話を聞くと、どうやら、昨夜は、

皆で同じ夢を見ていたらしいと言うのだ。つまり、何か不思議な作用が働いたらしくて、クラスの全員で同一の夢を共有したようなのだ。

と言う事は、昨日、夢の中で俺がマッキーやその他のクラスの女生徒たちを強姦したと言う記憶は、彼女たちの心にも残っている、と言う事になる。

「あなたって、サイテーね！」顔を真っ赤にしたマッキーは、そう叫んで、思いっきり、俺の頬を引っぱたいた。

了

原案・拙著「ケータイ小説なんていらない」

秘密の放送室

うちの高校で校内放送を行なっていたのは、眼鏡をかけた、優等生風の女生徒だ。彼女は、大変な美声の持ち主で、彼女が担当していたお昼の全校放送は、生徒も先生も、皆が楽しみにしていた。

しかし、彼女には、誰にも知られていない、大きな秘密があったのである。お昼の校内放送を行なう時、彼女は、放送室のブースの中で全裸になっていたのだ。

放送ブースには窓がついていなかったので、密室の中に完全に閉じこもる事ができた。放送中は、気遣って誰も外からは入ってこなかったし、さらには、ブースの内側から鍵をかける事もできたので、なおさら、外部に気付かれずに、好きな事を行なえたのである。

彼女が、放送ブース内で裸になるようになったのは、ほんの些細な事がきっかけだった。昼休みに色々と用事が込み入ってしまい、時間が無かったものだから、その時、彼女は、校内放送をしながら、放送ブース内で着替える事を思い立ったのである。午後の授業までに、体操着から制服に着替え直さなくてはいけなかったのだ。

実際、彼女は、誰にも話さずに、それを本当に実行した。放送中は、度々、音楽だけを流したりもしたので、その間に、席から離れて、私用を行なう事も十分に可能だったのである。

しかし、着替えをしている途中で、下着だけの姿になってしまった時、彼女は急にドキドキした胸騒ぎに襲われてしまったのだ。真摯なお昼の全校放送中だと言うのに、はしたない下着姿になってしまった事に、不思議な興奮を覚えてしまったようなのである。

もう、彼女は、そのドキドキの衝動に魅せられてしまって、元には戻れそうにはなかった。その日は、とうとう、最後まで、下着姿で、お昼の校内放送を行なってしまったのである。

それからなのだ。彼女は、以降は、ずっと、お昼の校内放送中は、

制服を脱ぐようになったのである。制服だけでは物足りなくなってきて、やがては、下着までも取って、素っ裸で校内放送を行なうようになってしまった。学内の誰にも気付かれずに、自分は、こんなイケナイ格好で、大胆に、学校の大事な放送を行なっていると言う事が、彼女をますます高揚させたのである。その事によって、彼女の放送のノリ自体も、それまで以上に、好調で軽快になっていたようにも感じられた。

彼女は、今日も、全裸で、お昼の校内放送のアナウンスにと従事しているのである。

了

ミッチのあだ名

ミッチが、一部のクラスメートから「パンチ」と呼ばれるようになった。

ミッチと言うのは、うちのクラスの女子の一人だ。彼女は、美少女で、物静かな性格をしており、誰にでも優しかったので、元々は、皆から好かれていた。ところが、彼女が、学内でも一番のイケメン先輩と付き合い始めたとの噂が立ったものだから、彼女の生活は一変した。

ミッチに対して嫉妬した女生徒たちが、いっせいに彼女に意地悪して、いじめだしたのである。

ちなみに、ミッチとイケメン先輩の交際の噂は、早とちりの誤報だったのかもしれない。その後は、二人が接近している姿は、まるで見かけなくなったからだ。

しかし、それでも、ミッチに対する女生徒たちの執拗な嫌がらせの方は、そのまま、ずっと、おさまらなかったのである。ミッチも、人一倍おとなしかったものだから、いじめられても、されるがままで、誰にも相談せず、一人で耐え続けていたようなのだった。

そんなミッチが、「パンチ」と言う謎のあだ名で呼ばれるようになりだした。そのあだ名を広めていたのも、ミッチの事を特に目の敵にしてイジメていた意地悪女生徒グループだった。

このあだ名の意味が気になって、さりげなく、いじめっ子グループにと尋ねてみた。そしたら、彼女たちは、わざわざ、ミッチもここに連れてきて、本人立会いで、その理由を教えてくれたのである。

「ほら、ミッチ！服を脱げよ」と、いじめっ子がミッチに命令した。

すると、暗く、やつれていたミッチが、本当に自分の制服を脱ぎだしたのである。いじめられ過ぎたミッチは、完全に抵抗する気力を無くしてしまい、いじめっ子たちの奴隷人形になってしまってい

たのだ。

彼女は、下着まで取ってしまい、とうとう、全裸になってしまったのだった。

「ほら！今度は、股を開いて、オマ○コを見せなさいよ」と、さらに、いじめっ子が命令した。

ミッチは、恥ずかしがりながらも、その指示にも従ったのだった。彼女の陰部が、目の前で、丸見えになってしまったのだ。乙女の、まだまだ穢れてない、きれいな性器なのである。

そのミッチの女陰部に、いじめっ子が手を伸ばした。そして、ピンク色のふっくらした小陰唇（ビラビラ）を、グイッと引っ張ったのだ。柔らかい小陰唇（ビラビラ）は、ゴムのように、広く、長く伸びた。

それを見て、ハッとさせられたのである。

ミッチの小陰唇（ビラビラ）の表面には、丸い小さな穴がいくつも開いていたのだ。ピアスの穴を作る為のニードルでも使ったのかもしれない。とにかく、無残にも、ミッチの処女の小陰唇は、穴だらけになっていたのである。

恐らく、いじめの一環で、いじめっ子たちが、こんな事をしたのであろう。大人たちに見つからないように、さらには、ミッチ自身も、人に話したりはできないように、わざと、このような恥ずかしい部分に傷をつけたのだ。

でも、確かに、ミッチの穴あき小陰唇は、パンチカードのようにも見えたのである。

その後も、ミッチは、いじめっ子たちによって、「焼きハマグリ」とか「口裂け女」「アズキ」とか言ったあだ名で呼ばれ続けていた。恐らくは、これらのあだ名も、ミッチが性器部に受けた暴行が名前の由来となっているのである。

果たして、ミッチがどんな事をされたのかと、想像してみただけでも、十分に恐ろしかったのだった。

了

本女

その高校の図書室は、いつも閑古鳥が鳴いていた。受付をしている図書委員の男子生徒も、受付の席に座って、適当な本を開きながら、毎日のようにボッとしていたのだ。

ある日、そんな風にだらけていた図書委員の目の前に、突如、不思議な体裁の老人が現れた。その老人は、まるで仙人のような格好をしていたのである。

「わしは学問の神様じゃ。この学校の生徒は、なぜ、もっと本を読んで、勉学に励もうとしないのだ?」と、その老人が図書委員の男子に尋ねた。

「それは、僕も悩んでいる問題なんですよ」男子生徒が答えた。

「ならば、わしが良いアイディアを授けよう」

老人がそう告げた途端、男子生徒の読んでいた本が、ドロンと女の子の姿に変身したのだった。ものすごい美少女なのである。しかも、服の代わりに、本のページを一枚一枚バラバラにして、肌の上に貼り付けて、体全体にまとっていたのだ。

図書委員の男子は、思わぬ出来事に目を見張った。

「どうぞ、私の事を読んでね」と、その本のページを体にまとった美人は、笑顔で、図書委員に話しかけてきた。

よく見ると、彼女が身につけたページの一枚がぼんやりと光っている。恐らくは、そのページから読むようにと言うシグナルなのだ。

だが、興奮した図書委員は、女の指示に従わず、勝手に、ページも読まずに、彼女の周りの本の紙を剥がしてみようとした。しかし、がっちり貼り付いていて、絶対に取れなかったのである。

女の誘導通りに、指定されたページを読めば、そのページがまずペロリと剥がせるのであった。一枚取れば、今度は次のページが光る。そうやって、順番に読んでいけば、彼女の紙の衣装を、確実に

脱がしていけたのだ。
　図書委員は、夢中になって、女の表面にある本を読みだした。すると、女の姿は、どんどんヌードに近づいていったのだ。ついには、彼女のおっぱいが露出し、おへそがむき出しになり、お尻が丸出しになった。そして、最後の一ページを読み終えた時、美女は眩しいような全裸にとなったのだった。
　図書委員の男子生徒も、大いに堪能したのである。
「どうじゃ。これなら、生徒たちも、真剣に本を読むようになるじゃろう？」老人が言った。
　老人が手を振り上げた途端、図書室中の本が美男美女にと変化したのである。全員が、先ほどの美人と同様に、体の一面に本のページの衣装をまとっていた。
　こうして、翌日には、図書室内の本の全てが、在校生たちによって、怒涛の勢いで借り尽くされてしまったのである。

了

不良少女

仲間から、見慣れない女子(やつ)がいる、と連絡があったので、あたしたちは、さっそく、街の方へと向かってみた。

すると、遠くの歩道を、本当に、知らない奴が一人で歩いていたのだった。歳はあたしたちと同じぐらいなので、きっと、高校生だ。髪を奇抜に染め、顔にはきつい化粧をして、黒い革ジャンにデニムのミニスカートと言う出で立ちである。いかにもトガった感じで、他の歩行者たちは怯えており、彼女の近くからは離れて歩いていた。

でも、あたしたちは、集団で、そいつの元へ走り寄ったのだ。そいつの周りを囲んで、逃げられないように捕捉したのである。

「お前。どこから来たんだよ」あたしが、そいつに尋ねた。

「うるさい。お前らには、関係ないだろ」そいつが、低い声で言い返してきた。

「ここは、あたしらの縄張りだぞ。分かってんのかよ?」

「知らないよ。ほっといてくれよ」

「なんだと、てめえ!こっちに来い。こっちで話をつけてやる!」

ムカッときたあたしたちは、すぐに、その女を捕まえて、裏路地の方へと連行したのだった。多勢に無勢で、一人ぼっちの彼女の事は、楽に押さえつける事ができた。と言うか、彼女は口先ばかりの奴だったらしく、ほとんど抵抗もしなかったのだ。そして、周囲で見ていた歩行者たちは、不良少女たちのイザコザに巻き込まれたくなかったようで、誰もあたしたちの方には目を向けていなかったのだった。

こうして、あたしたちは、その女を、誰もいない路地裏の奥へと連れてきたのである。

彼女は、そこでも、ずっと、あたしの仲間に両手を押さえつけられていたので、逃げる事もできずに、あたしたちの捕らわれの身の

ままだった。
「姉さん。こいつの事、どうします？」と、仲間があたしに聞いてきた。
「縄張りを荒らされといて、黙っている訳にもいかねえ。見せしめに、皆でボコボコにしてやって、そのあとで、マンコには根性焼きしてやる」
あたしが、ドスのきいた声でそう発言すると、ようやく自分の置かれている状況が正しく掴めてきたのか、相手の態度がいきなり豹変したのだった。
「ご、ごめんなさい。許して。今までの事は、全部、演技よ。わ、私も本心から言った訳じゃなかったのよ。私、実は、本物の不良なんかじゃなかったの。面白そうだったから、ちょっとカッコつけて、イキがってみただけ。ほんとよ。嘘じゃないんだから。この革ジャンだって、今日、はじめて着たのよ。ねえ。あなたたちの縄張りには、もう二度と近づかないわ。こんなツッパリの真似事も、二度とやらない。だから、許して。お願い、見逃して！」
本気で暴行されそうになったのが、よほど怖かったらしくて、彼女は必死に謝りだしたのであった。こいつは、本当にただのシロウトだったのかもしれない。彼女の不良メイクの奥にある瞳は、すっかり潤んでいた。彼女の体も、目視でも分かるほど、はっきりとガクガクと震えていた。
そして、彼女のデニムの裾からは、途切れ途切れに、小さな水滴もしたたり始めたのだった。その水滴は、彼女の震えている両足の間を通って、ポタポタと下へと落ちているのだ。彼女の足元では、早くも、落ちた水滴が水たまりとなり始めていた。この女ときたら、恐怖で、ついに、おしっこまで漏らしてしまったのである。
他人をビビらせるつもりで着こなしていた不良ルックの姿で、自分の方がチビっているだなんて、全くのお笑い種なのだ。実際に、あたしたちも、彼女のぶざまな様子に呆れて、全員で爆笑したのである。

そのあと、あたしたちは、彼女の持ち物を残さず没収したのだった。時計もバッグもアクセサリーも何もかもだ。服も引っぺがしてやった。イキがった外装（アウター）だけではなく、下着の一枚まで全て脱がした。身ぐるみを剥いでやったのである。顔はどギツい不良メイクでも、首から下は素っ裸では、もはや迫力にも欠け、滑稽なだけなのだった。でも、どうせ、この女は小便たれのヘタレなんだし、これでいいのだ。こんな情けない奴には、わざわざ私刑（リンチ）まで加えるまでもないのである。

かくて、泣いて狼狽えている全裸の彼女だけを置き去りにして、あたしたちは、さっさと路地裏から出て行ったのだった。

了

人体透視装置

うちの高校の物理の先生が、ものすごい装置（マシーン）を発明した。それが、人体の内側を透視する事のできる機械なのだ。既成のいかなる同種のシステムよりも、くっきりと内臓を写し出せるようなのである。

と言う訳で、さっそく、生きた人間を被写体に使って、その性能を試してみる事になったのだった。僕は、助手として、特別に、そのテストに立ち会う事を許されたのである。

被写体として、物理室に呼び出されたのは、僕よりも年下の一年生の女生徒だった。僕とは面識のない、全く話した事もない女子なのだ。地味で、大人しそうな子だった。でも、下手にきらびやかな女の子よりも、こんな感じの平凡な子の方が、確かに、実験のサンプルには向いてはいそうなのである。

すぐさま、テストを始める事になった。被写体の女生徒は、まっすぐ、透視装置の台の上に乗っかろうとした。すると、いきなり、物理の先生のダメ出しが入ったのである。

「服をきちんと全部、脱ぎなさい。その方が、正確に透視できるから」

被写体の女子は、顔を赤らめ、はにかんだ。しかし、被写体を引き受けちゃった以上、彼女に拒否の権限はないのである。結局、彼女は、言われた通りに、自分の服を脱ぎ始めたのだった。学校の制服も、下着も、全てをである。

彼女は、僕たちの前で、素っ裸になってしまったのだ。まだ一年生とは言っても、高校生だから、体の方はだいぶ成熟しているのである。胸もそこそこに膨らんでいたし、性毛もモサモサと生えていた。

彼女は、その全裸の状態で、機械の台の上に、仰向けに寝そべったのだ。体内を透視する以上、股間の前に手を置いたりもできず、

気をつけの格好をしていないといけないのだった。

こうして、ついに、この子の体の透視テストが始まったのである。先生は、機械のカメラで、彼女の体の表面を食い入るように写しまくったのだ。

そうやって、撮影された写真は、話に聞いていた通りの、鮮やかな透視画像なのだった。レントゲンやＣＴスキャン、ＭＲＩだって目じゃない。まるで、体を解剖したか、内視鏡で写したかのような、そのままの内臓画像を撮ってみせたのだ。しかも、カラーである。なおかつ、この装置は、断面図だけではなく、内臓だけを立体的に映し出す事すら出来たのだった。

その、あまりにもリアルすぎる内臓写真に、僕は、今まで感じた事のない興奮すら覚えてしまったのである。特に、その子の内性器の画像にとゾクゾクさせられたのだった。

なんたって、それこそは女性の要となる体の部分なのだ。それも、外側が見られても恥ずかしい生殖器官の内側なのである。家族や友人にだって見せた事のないものを、僕たちが、バッチリ見せてもらったのだ。この女生徒は、この二つの卵巣を使って、女ならではの卵子や女性ホルモンを作り、その大切な卵子（たまご）は、女の宝物として、子宮の中で大事にしまっているのである。女体のそんな隠された構造を、この女子は、アカの他人である僕たちへと何もかも晒してしまったのだ。考えようによっては、ただヌードを見られるよりも、恥ずべき話なのである。男の僕にしてみれば、セックスもしてないのに、まるで、この子の全てを手に入れちゃったような気分にもなってしまったのだった。

さらに、この子の膣の断面透視画像から、この子の処女膜が、全く健全である事も判明したのである。見たところ、かなり分厚い、無傷の処女膜なのだ。すなわち、この女生徒は、清純なバージンだったにも関わらず、生殖器については、僕たちにすっかり見せ尽くしてしまった事にもなるのである。

この後、全ての透視テストが終了してから、これらの内臓透視画

像の数々を、僕は、記念として、物理の先生に頼んで、こっそり分けてもらったのだった。もちろん、透視してない、この子の基本形の全身ヌード写真も一緒にしてだ。

それ以降、僕は、自分と同じ高校に通っているという事しか知らない、この女子の子宮や卵巣、卵管を写した写真を眺め、ニンマリしながら、毎日、オナニーするようになったのだった。

了

水着禁止令

うちの高校のプール開きの日がやって来たが、今年は、ちょっと勝手が違うようである。

水着をつけて、プールの水の中に入ると、たいへん不潔で、不衛生で、水着をつけた本人の体にもバイキンがわくし、プールの水の方も汚くなって、他の生徒にまでバイキンが移ってしまうので、水着の着用がいっさい禁止になってしまったのだ。

もちろん、生徒の大半は猛反発したが、水泳の授業の方は中止にはならない。

学校と生徒たちが色々と歩み寄った結果、かろうじて、表面積の極端に少ないTバックのビキニならば、プールの中でも身につけて良い事になったのだった。

男子生徒の方は、それでもう不服は無しなのだ。

まだ駄々をこねていたのは、女生徒たちである。ビキニのパンツだけだと、下半身は隠せても、トップレスになってしまうからであった。話し合いでも、最後まで、ブラジャーの着用は認めてもらえなかったのである。

この悶着に、いい加減ウンザリしてしまった女子の中には、ビキニのパンツすらも付けずに、スッポンポンでプールを泳ぎだすような豪快な子まで現われた。

一方で大多数の女生徒は、トップレスに抵抗を示し、なかなか、プール授業の開講には漕ぎ着けなかったのだった。そこで、ようやく、ギリギリの妥協案が採用されたのだが、それは、胸にはニップレスを貼り付けると言うものだったのである。

女子たちは、それでも、まだ躊躇していたが、でも、これまで拒んだ末に、本当に、トップレスしか選択肢が無くなってしまったら、その方が困るのだ。こうして、女子たちは、プールでは、上半身は

ニップレスのみ、下半身にはTバックを履く事が決定したのである。
プール授業の時の女生徒たちの姿は、なかなか壮観だった。彼女たち全員が、乳房の膨らみも、丸いお尻も、すっかり剥き出しにして、胸も尻も揺らしながら、泳いだり、プールサイドを歩いたりしているのである。
しかも、学校側が用意したニップレスやビキニパンツは、かなり小さめだったようだ。乳首は隠れていたとは言っても、乳輪が大きめな子の場合は、乳輪の一部がニップレスの外に飛び出ていた。中途半端に、乳房の一部の赤褐色の皮膚が見えている方が、ずっとエロいのである。また、アンダーヘアが濃くて、ムダ毛処理が甘かった子などは、ビキニの隙間から黒い縮れ毛が顔を出してしまっていた。さらには、発育のいい子だと、小さなビキニの中に大事なものが収まりきらなかったようで、その子の遊泳姿を後ろから見ると、ビキニの股間部の左右から、大陰唇の盛り上がりが、はみ出したりもしていたのである。
男子生徒にとっては、大いに目の保養になったのだった。

了

水着禁止令（後書き）

水着を着てるとバイキンがわく、と言うのは本エピソード独自の見解で、実証されたものではありません。

リリちゃんの内緒ごと

女子高生のリリちゃん（仮称）は、クラスでいじめられていました。いじめていたのは、級友のヤンキーな女子たちです。彼女たちは、事あるごとに、リリちゃんに難癖をつけ、リリちゃんの方が悪かった事にして、罰と称したいじめ行為を正当化したのでした。リリちゃんも、自分の方が悪いと言う事にされてしまったら、辛くても、逆らえないのです。

いじめられるたびに、リリちゃんは服を脱がされていました。学校の制服も下着も剥がされて、丸裸にされてしまうのです。そうやって、素っ裸になってしまったリリちゃんの恥ずかしい姿を見て、いじめっ子たちは、優越感に浸って、ゲラゲラ笑うのでした。

ある日、いじめっ子たちは、リリちゃんを全裸にするだけでは飽き足らなくて、とうとう、リリちゃんの露出した陰部までいじり始めました。

リリちゃんは、小陰唇や肛門も丸見えになっていましたが、それよりも先に、いじめっ子は、リリちゃんのクリトリスにと手を伸ばしたのです。

すると、リリちゃんは、皆の想像した以上の怖がりぶりとなり、激しく叫んだのでした。

「やだ。いじらないで！破れちゃう！」

リリちゃんが泣いて懇願しても、面白がったいじめっ子は、リリちゃんのクリトリスを触り、その包皮を剥いてしまったのです。

リリちゃんが、それを目にして、死にそうな悲鳴をあげます。どうやら、性の知識が疎かったリリちゃんは、クリトリスの事をよく分かっていかったようなのでした。彼女は、クリトリスの包皮がめくれる事も知らず、そんな事はやってはダメな行為だと思っていたみたいなのです。

リリちゃんのクリトリス本体は、皮を剥がされて、すっかり露わになってしまいました。見たら、彼女のクリトリスの周辺には、白い固まりがいっぱい付いているのです。これは、恥垢です。今まで、包皮がめくった事が無かったものだから、その内側には、たっぷり恥垢が溜まっていたのです。クラスメートに、そんなものを見られてしまうなんて、女の子としては、そうとう情けないのであります。

当然、いじめっ子たちは、リリちゃんの恥垢まみれのクリトリスを見て、大笑いしました。それどころか、いじめっ子のリーダーは、リリちゃんのクリトリスに自分に指の先を押し付けたのです。そして、指先にグリグリ力を込めると、思いっきり、リリちゃんの恥垢をほじくり取ったのでした。

いじめっ子のリーダーの指先には、粘っこい恥垢の固まりが、ごっそり、こびりつきました。それを見て、「やだ。きたなーい」と冷やかしながら、いじめっ子たちは、さらに爆笑したのでした。

リリちゃんの方は、恐怖で青ざめている一方、初めて気付いた事も多かったらしくて、とても衝撃を受けていたようにも見えたのであります。

その後も、リリちゃんは、卒中、服を脱がされて、いじめられていました。しかし、あれからは、クリトリスの皮を剥かれても、彼女のクリトリス周辺は、とても清潔に保たれていて、恥垢は完全に無くなっていたのでした。恐らく、リリちゃんもクリトリスの真実をしっかりと覚えたのでしょう。いえ、リリちゃんが学んだのは、実は、それだけでは無かったようなのであります。

「お前、最近は、お豆がちっとも汚れてないな。さては、いじって、よく遊んでるんだろ？」

いじめっ子が意地悪く、リリちゃんに聞きましたが、リリちゃんは赤面しつつ、首を横に振るのでした。

了

ヨミノギャル

女子高生のカノジョが、ある時から、いきなり、ヨミノにかぶれてしまった。

ヨミノとは、東京の幻の第２４区の事で、あらゆる流行の最先端で彩られた町の事だ。

そんな町に、はまってしまった訳だから、当然、カノジョは、化粧の仕方も、洋服のファッションも、喋り方も、携えている電化製品も、全てが異質な、見た事もないものに変わってしまった。それが、ヨミノスタイルなのだ。カノジョは、すっかりヨミノギャルになってしまったのである。

しかし、どんなに見た目が変化しても、中身は、全く今まで通りのカノジョなのだった。

落ち合って、デートしたカノジョは、二人で楽しく遊んだ後、最後は、どちらかの家に立ち寄り、一緒にベッドインして、互いに裸になって、心ゆくまでセックスを楽しんだのであった。

ところが、こうして、全てを終えた後に、ちょっと展開がおかしくなってきたのである。

何度も絶頂に達して、すでに十分に満足しきっていたはずのカノジョが、急に、こんな事を持ちかけてきた。

「ねえ。あなたのタマゴを、あたしに、ちょうだい」

タマゴとは、要するに、金玉の事だ。

そこで、思い出したのだった。

ヨミノのギャルの間では、童貞狩りと言うものが流行っていたのだ。これは、自分のセックスした相手が、初心者だった場合、その睾丸を記念に切り取っちゃうと言う風習なのである。

普通に考えたら、とんでもない話だ。でも、落ち着いて考えると、これは究極の愛の形とも言えるのかもしれない。睾丸を抜き取られ

た童貞男は、そのヨミノギャルにしか、精液を渡さなかった事になるのだ。つまり、彼女だけに永遠の愛を捧げた事になるのである。

カノジョの事を心から愛していたからこそ、その提案に乗っかる事にしたのだった。

カノジョは、さっそく、鋭利な刃物を取り出すと、陰嚢の皮を切り裂いた。そして、陰嚢の中に指を突っ込むと、内側の何重もの層の膜をかき分けて、睾丸を見つけ出したのである。その睾丸を包んでいた膜もむしり剥がすと、とうとう、二つの睾丸を体の外へとえぐり出した。

これだけでも、男にとっては、凄まじい痛さなのである。

だが、カノジョは、それだけでは止めず、ついには、体外に引っ張り出した睾丸を、生のまま、コリコリと食べ始めたのだった。その睾丸は、精管を通して、まだ体と繋がっていたにも関わらずだ。

愛する女性に自分の肉体を食べてもらえる至福を感じつつも、その地獄の激痛の為に、いつしか悶絶してしまったのだった。

了

ユーチューバー生徒会長

うちの高校の生徒会長選挙に、女生徒の一人が立候補した。その子は、あんまり頭のいい方ではなかったので、何を考えたのか、当選した暁には、ユーチューバーになって、ちょっと色っぽくて楽しい動画を皆さんにお届けする、と選挙公約（マニフェスト）に掲げたのだった。

うちの高校は、生徒たち全体の質が低かったので、この女生徒が生徒会長には当選してしまったのである。

そして、新生徒会長の最初の動画配信の日がやって来た。

ワクワクしながら、スマホで動画サイトを開くと、確かに、女生徒会長の動画がアップされていた。

撮影場所は、我が校の体育館である。生徒会長は、白のレオタードに身を包んでいた。そして、彼女の横には平均台が設置されていたのである。

「これから、この平均台を、端から端まで、またいで、移動してみせまーす」と、生徒会長は解説した。

彼女は、本当に、その通りに実行したのである。平均台の上にのぼったのではない。平均台の棒に、そのまま、またがったのである。彼女の両足は床についていた。さらに、彼女の股間は、すれすれに、平均台の棒にと当たっていたのである。まさしく、平均台にまたがった格好なのだ。

この状態で、彼女はヨチヨチと歩き出した。説明通りに、平均台の端から端まで、またがったまま、歩くつもりみたいなのである。

彼女の股間は、ずっと、平均台の棒に擦れ続けていた。そこだけ注目していると、実にイヤラしく見えるのだ。

とうとう、彼女は、平均台の端から端まで渡りきったのだった。

「今日の配信は、これで終了しまーす」

彼女は、ペコッと、カメラへ向けて、お辞儀をした。

何となく、彼女のレオタードの股間部には、濡れシミが出来ていたようにも見えたのである。それが、汗だったのか、もっと違う別のものだったのかまでは分からなかった。

ともあれ、これからも、この女生徒会長は、全裸の体の表面にトイレットペーパーを巻きつけて、それに水をかけて溶かしてみせたり、あるいは、胸の谷間に膨らんだゴム風船を挟み入れて、一分間にどれだけの風船を割れるか、などの動画を配信してくれる事になるのである。

了

痛い、痛い

うちの高校には、女子の落第生にのみ、特別な救済システムが設けられていた。この救済システムを受け入れれば、たとえ追試がダメだったとしても、無事に進級も卒業もさせてもらえる。しかし、その救済システムの正体については、全くの極秘となっていた。この救済システムを実際に体験した生徒も、完全な口止めを要求されていたのだ。

実は、この救済システムの内容とは、ＳＭマニアの学園理事長のお相手をすると言うものだったのである。その事は、この救済システムに志願した後で、ようやく、その志願生徒へは伝えられた。この時点で、もう後戻りは絶対に許されないのである。

志願生徒は、理事長所有の秘密のＳＭルームへと連れていかれた。そこで、この志願生徒は、服を脱がされ、全裸になり、両手は後ろ手に拘束されて、両足も左右に広げられて、なおかつ、膝を曲げた形で縛られてしまうのである。この格好で、部屋の床の上に転がされてしまうのだ。文字通り、手も足も出ない、加虐行為やり放題の状態で放置されてしまうのである。

犠牲者側の準備が整うと、主賓の理事長も、この部屋へと姿を現わす。理事長が特に好んでいたＳＭプレイの一つが、針なのであった。

理事長が、沢山の針が入った箱を持って、志願生徒のそばに歩み寄る。それを見て、志願生徒は目を見開き、ゴクッと息を飲むのだ。彼女は、縛られてはいたが、猿ぐつわはしていない。理事長は、犠牲者が出す悲鳴も楽しんでいたからである。

多くの志願生徒は、みっともなく泣き声を張り上げたりしないように堪える覚悟で、この試練には臨んでいたようだ。でも、実際にプレイが始まると、考えていたほど我慢できるものでもなかったよ

うなのである。
しかも、理事長は、性器部への責めを、より好んだのだった。
乳房へと針を刺す責めを、歯を食いしばり、どうにか無言で耐え凌いだ女生徒でも、乳房の表面を針の山にされてしまったのを見せつけられた後、続いて、外陰部への針責めも始まると、とうとう、根をあげて、声を漏らし始めてしまう。
「痛っ！・・・痛いぃ」
志願生徒は、針を刺されるたびに、顔をしかめ、そんな悲痛な泣き声を、断続的に、何度となく、つぶやくようになるのだ。その哀れっぽい声が、よけい理事長の残虐な心を燃え上がらせてしまうみたいなのだった。
乳房に針を刺される時は、その瞬間を、志願生徒は自分の目でも確認できるので、ある程度、心の準備もできて、声が出るのを押し殺す事もできたのであろう。だが、陰部に針を刺されるのは、自分の目からは見えない。いきなり、陰部の一箇所にチクリと痛みが走るものだから、なおさら、恐怖も倍増して、思わず、小さな泣き声も漏れてしまうのであった。
こうして、彼女は、外性器の一面を針だらけにされてしまうのだ。大小の陰唇にも、その内側の皮膚にも、ブスブスと針をおっ立てられてしまうのである。
しかし、彼女の試練は、まだまだ終わりはしない。
針プレイが一通り終了すると、今度は、理事長は蝋燭を持ってくるのである。もちろん、火のついた蝋燭をだ。
志願生徒は、針が刺さっている傷口の上に蝋を垂らされて、このあとは「熱い、熱い」と泣き声を漏らし続ける羽目となるのである。

了

部分空間転送

俺の友人である通称ハカセが、とんでもない新発明をした。その知らせを受けて、さっそく、彼の家に拝見しに行くと、その新発明品とは、一種の物質転送装置だと言うのだった。物質そのものを瞬間移動（テレポート）させるのではなく、空間を切り取って、A地点とB地点を交換してしまう形で、その空間内にある物質も転移させてしまう仕組みだとの事だから、どちらかと言えば、ワープに近い技術なのかもしれない。

俺とハカセは、すぐさま、この装置の性能を試してみる事にしたのだった。

「本屋の新刊雑誌を、1ページずつ、この部屋に転送して、立ち読みしてやろう」と、ハカセが言った。

「おいおい。何だよ、そのしょーもない使い道は」呆れて、俺が言い返した。

「だったら、八百屋と直結させて、採れたてレタスを盗んでみるのはどうだ？」

「もっと、面白い事をしようぜ。この近所には、女子高がある。その女子高の生徒の体だけを、この部屋にと取り込んじゃうんだ」

俺のアイディアに、ハカセもすぐに賛成してくれたのだった。

そこで、早くも、実行してみる事になったのである。

ハカセが転送装置を作動させると、部屋のど真ん中に、急に女性の裸が出現した。これこそ、空間転送技術を使って、この部屋に持ち込んだ女子高生の生身の肉体なのだ。

全裸なのは、上手に、服だけを向こうに残して空間を切り取ったからである。この裸は胴体部分だけで、頭や手足は付いていなかった。服から出ている部分は、学校の方に残してきたのだ。このように、物質の一部だけを転送しても、物質本体を破損させないところ

が、この空間転送方式ならではの凄いところなのである。
つまり、本人にも、その周囲の人間にも気付かれぬように、一人の女子高生の肉体部分だけを、まんまと、この部屋に誘拐してみせた訳だ。
そのヌードの胴体は、高校生とは言え、なかなかのナイスバディなのだった。俺もハカセも、その裸体を見ているうちに、どんどんムラムラしてきて、とうとう、その女の裸に飛びついてしまったのである。
学校の方にいる、この女子高生の本体は、びっくりしていた事であろう。服を着ていて、いつも通りの学校生活を送っていた最中（さなか）に、なぜか、体を触られたり、イタズラされる感触だけに襲われたはずだからだ。
当然、こちらにある肉体の方も、俺たちに一方的に撫でられたり、弄ばれたりして、激しく嫌がっていた。頭も手足もない胴体は、必死に抗い、もがいていたが、しかし、装置の座標計算によって、この体を完全にロックオンして、この部屋にと転送していたので、絶対に逃れる事はできなかったのである。
俺とハカセは、この完全に遊び放題の女体相手に、それも、ピチピチした女学生の肉体に、好きなだけ猥褻行為を繰り返すと、十分に満足したので、ようやく、この体を元の空間へと戻してやったのだった。
体だけ転送されてしまった、この女の子は、死んでしまった訳ではない。これで、綺麗さっぱり、以前の姿にと戻れたのだ。部分転送された境界の部分に、ズレが生じるような事もなかったはずである。
ただし、俺たちは、この肉体の中へ、ためらわず、何度も精液の中出しもしていた。もし、ある日突然、何の身の覚えもないのに、いきなり妊娠しちゃた女子高生がいたとしたら、それは、俺たちが犯人だったのかもしれない。

了

Nの性転換

うちのクラスには、Nという男子がいたのだが、こいつが、なんともナヨナヨしていて、女みたいなのだった。だから、俺たちも、おかしくて、いつもNをイジって、遊んでいたのだ。

具体的に言うと、皆でよってかかって、Nの服を脱がして、Nを裸にしちゃったのである。

「やだよ。やめてよ、やめてくれよー」と、Nは必死に嫌がるのだが、調子に乗った俺たちは手加減をしない。とうとう、Nのブリーフまで奪って、素っ裸にしてしまうのだ。

全裸になったNは、恥ずかしがって、泣きながらも、股間だけは両手でギュッと押さえて、懸命に隠していた。その手も無理やりどかして、オチンチンを露わにしてやると、Nは顔を真っ赤にして、それこそ死にそうな声を上げたのだった。自分のシンボルを堂々と他人に見せられないあたりが、やっぱり、とても女々しいのである。

俺たちは、そんなNの姿を見て、毎回、たっぷりと笑わせてもらったのだ。

ある日、Nがセーラー服を着て、学校に登校してきた。俺たちは、驚いて、Nに理由を尋ねたのである。

「私ね、前から女の子になりたかったんだ。そしたら、昨日の晩ね、私の前に天使が現れたのよ。そして、私の願いを一つだけ叶えてくれると言ったの。だから、私、女にしてもらったんだ。私、今日から女子になったのよ。よろしくね」と、Nはニッコリと微笑んだのだった。

なるほど。Nが、前から女になりたかったと言う話は納得がいくのである。しかし、現実に女になってしまったと言う話の方は、にわかには信じられないのだ。

俺たちは、仲間うちで目配せし合うと、次の瞬間、Nに襲い掛か

った。Nの服を脱がしてみて、事実を確かめる事にしたのだ。
「いやー！やめてぇ、やめてったらー」Nは嫌がったが、俺たちはやめはしなかった。
セーラー服を脱がしてみると、Nのやつは、内側にブラジャーとパンティまで付けていた。俺たちは、それらの下着も全部剥いで、Nを裸にしてしまったのだが、全裸になったNを見て、ハッと息を飲んだのだった。
「ひどいわ、ひどいわ」と泣きじゃくるNは、股間だけを両手で必死に押さえていた。体の他の部位は、全てモロ見えなのだ。しかし、大きく膨らんだ胸も、くびれた腰も、丸みのあるお尻も、明らかに女性なのであった。それも、なかなかのプロポーションなのである。
まだ疑っていた仲間が、ついには、Nの両手をも、股間から引き剥がしにかかった。Nは抵抗したもの、片方の手を剥がされ、さらには、もう片方の手も剥がされて、その腰部の正面も丸見えになってしまった。オチンチンは付いていなかった。間違いなく、ツルンとした女の股間になっていたのだ。
手を解放してやると、Nは、急いで、その両手で、また股間だけを覆ったのだった。
「ねえ、返して！私の服、返してよお！」Nは、股間だけはしっかりと隠した状態で、オロオロと歩き回り、俺たちの方に寄ってきた。相変わらず、胸やお尻は出したままなのだ。どうやら、Nは、胸やお尻については、見られても、あまり恥ずかしがってはいないのであった。何も付いてないのに、とにかく、股間だけは絶対に見られたくないようなのだ。どうも、男だった頃の気持ちがそのままみたいなのである。
悩ましい肉体を平気で晒しつつ、俺たちの前でウロウロしているNの姿を拝みながら、俺たちは、Nの事をこれからもイジる事が、ますます楽しみになってきたのだった。

了

ヒモ社会（服なき世界）

ある時、世界中から服が消滅してしまった。正確に言うと、８センチ四方を超える面積の布を肌に当てると、途端に、粉になって、消えてしまったのだ。原因は分からなかった。とにかく、人類文明は、完全に服とはオサラバする事になったのである。

この異常事態に対して、男は、比較的早く順応していった。小さな布でも、かろうじて股間ぐらいは隠せたからだ。なんだったらフルチンのままでも構わない、と思っていた男も多かったのである。

しかし、女たちはそうはいかなかったのだ。彼女らは、どうにか服を身につけて、体のあちこちを隠したいと、あらゆる手段を模索し続けた。

その結果、細長いヒモ状のものだったら、体に付けても消滅しない事が判明したのだった。この発見によって、体に当てた８センチ四方のミニ布を、ヒモによって固定させる事は可能になったのである。しかし、そこまでだった。ミニ布を近接させて、体に当ててみると、やはり消滅してしまうのだ。

そんな訳で、女たちは、かろうじて最低限の一番隠したい部分にだけ、ミニ布を当てるようになったのだった。すなわち、胸のトップとか股間部などにだ。それは、実に異様なスタイルでもあった。

彼女たちは、体のあちこちにヒモを巻くようになったのである。そして、そのヒモの内側にミニ布を挟んで、ちょうど、その奥に性器や乳首などをピンポイントで隠すようになったのだ。８センチ四方の面積では、ほんとにギリギリである。オシャレな形に加工する事もできず、全くただの正方形の布を、彼女たちは大事な部分に素っ気なく押し当てているだけなのであった。

母親や娘、姉や妹がそんな格好をしているのも、かなり衝撃的なのだが、家の外に出れば、家族じゃない女性たちも、皆、そんな格

好をしているのだ。学校に行けば、好きな女子や憧れのミススクールまでもが、そんな悩ましい姿で動き回っているのであった。ヘタに全裸であるよりも、ずっとエロいのだ。

男たちにしてみれば、いつだって股間が膨らんでしまい、８センチ四方の小さな布切れでは、とてもアソコを隠せそうにない日々が続く事になったのである。

了

女体の勉強

俺たちは、放課後、帰路の途中で、クラスの女子の一人が来るのを待ち伏せしていた。

お目当ての子が一人でやって来ると、俺たちは、その子の周りを取り囲んだのだった。

「ねえ。女の体のことを勉強したいんだ。ちょっと手伝ってくれない？」

俺たちは、そう言って、彼女を強制的に連行したのである。

その子は、戸惑っていたが、ほとんど抗わなかった。驚いて、どう対応すればいいか、すぐには思いつかなかったらしい。それ以前に、その子は、うちのクラスの女子の中でも特に大人しくて、気が弱かったのだ。それで、俺たちも、前から目をつけていたのである。

俺たちは、他人に見られないように気をつけながら、その子の事を、近所の公衆トイレの中へと連れ込んだ。そこで、俺たちは、その子の制服も下着も脱がして、素っ裸にしてしまったのだ。

相変わらず、彼女は、悲鳴もあげなければ、逃げもしなかった。恐怖（ショック）のあまり、声も体もすくんで、うまく動かせなくなっていたのかもしれない。でも、その方が、俺たちには好都合なのである。

彼女の体は、決して豊満ではなかったが、女体を知る為には十分なものだった。

俺たちは、押さえつけた彼女の裸体を、たっぷりと観察し、触りまくったのである。はじめて生で見た女性の肉体だ。乳房の柔らかさ、いじると立ってしまう乳首、人には見せないのにタンマリと生やしていた陰毛、スベスベした肌のお尻、そして、俺たちは、女性の股の内側がどうなっているのかも、じっくりと拝見させてもらったのである。

「お前って、処女なの？ねえ、そうなんだろ？」

俺たちは、彼女に尋ねてみたが、はじめは答えようとしなかった。しかし、執拗に聞き続けると、ようやく彼女は小さく頷いたのだった。

処女の女性器でも、しつこく皆でいじり続けていると、じんわりと湿ってきたのである。

彼女の、ぐんと突き出したお尻を見ていると、俺は次第にムラムラした気持ちを抑えきれなくなってきた。どうやら、陰部そのものよりも、引き締まった裸のお尻の方が、性欲をそそるようなのだ。

「俺、もう我慢できねえ。セックスもやらせてもらおうぜ」

「うん。そうしよう」

当初は予定していなかったのだが、俺たちは、急きょ、セックスにも挑戦してみる事にしたのだった。

彼女は、拒むような態度をわずかに示したものの、すでに諦めモードだったのか、あっさりと俺たちの事を受け入れてくれた。

俺たちも初体験ならば、彼女だって、これが処女を喪失する貴重な瞬間なのだ。最初のセックスで、彼女は俺たち数人の男の相手をしてくれたのである。しかも、全員が、彼女の膣の中で射精させてもらったのだった。処女膜を破られたばかりで、すぐに膣内に肉棒を突っ込まれ、複数の男の精液を膣の中にかけられてしまうのは、どんな感触だったのであろうか。

事が終わった後、彼女は、トイレの床にうつ伏せに倒れたまま、しばらく起き上がってはこなかった。でも、俺たちだって、こんなに気持ちよかったのだから、彼女だって快感だったに違いないはずなのだ。

これらの出来事を、彼女が他人に喋ってしまう恐れは、まず無かった。一人だけ抜け駆けして、先に処女を卒業した事がクラスの仲間の女子にバレてしまえば、きっと激しく妬まれて、皆からいじめられてしまうだろうからだ。

とにかく、今日はいい勉強になった。高校生の男子は、このように、女体の仕組みとかセックスのやり方を、覚えていくのである。

了

魔女

世は空前の魔女っ子ブームだった。若い女の子たちは、神秘的な魔女と言うものに憧れて、周囲には気付かれないように、隠れ魔法少女を気取ったのである。

うちの高校にも、多数の隠れ魔法少女たちが在籍していたらしい。彼女たちは、親にも学校にも友人たちにも内緒にして、魔法にと手を染め、誰にもバレないようにしながら、彼女たちだけで密かに集まり、魔女の活動を楽しんだのである。

偶然ながら、彼女たちの集会を目撃してしまった人もいた。彼女たちは、真夜中に、公園やら雑木林などに集い、そこで魔女の集会（サバト）を行なっていたのだ。

目撃者の話によると、彼女たちは全員、裸だった。その裸体の肌一面に、何やら、魔法の秘薬を塗り合っていたようなのである。すると、彼女たちの肉体は、不思議な事に、フワフワと宙に浮かび始めたのだった。こうして、彼女たちは、一同で、楽しそうに空中浮遊の宴を満喫していたみたいなのである。その光景は、はたから見ると、とても優雅で、幻想的だったと言う。

彼女たちは、他にも、裸になって、体に秘薬を塗り、変身術やら透明化などの様々な魔術を試して、自分たちだけの世界を謳歌していたようなのである。

だが、彼女たちの楽しい日々は、それほど長くは続かなかった。

魔女たちは魔法を使ってズルい、と言う風評が広まり出したのだ。確かに、魔法を使えない人たちからしてみれば、魔女は、試験だってインチキして高得点を取れそうだし、惚れ薬を使って異性を自在に自分の恋人にしてしまえそうな感じもするのである。

たちまち、魔女たちは札付きの不良扱いされるようになり、学内でも厳しく取り締まられる事となった。

教師たちは生徒へと情報提供を呼びかけ、どうも魔女らしいと密告された女生徒たちは、次々に捕らわれて、学校側の激しい糾弾を受けるようになったのである。

彼女たちは、裸にされて、まとめて、校庭へと追いやられた。そこで、他の生徒たちにも見守られている中で、残酷な尋問と拷問を受けさせられ、魔女の証であるマークが体のどこかに付いていないかを調べられた上に、自分が魔女である事を自主的に白状する事も強いられたのである。

あまりにも苦しい拷問に耐え切れずに、本当は冤罪だった容疑者の女生徒までもが、自分は魔女だと自白しまくったのだった。

一度、魔女と疑われてしまった生徒には、もう救われる道はないのだ。こうして、罪を認めた魔女の女生徒たちは、最後は、恐ろしい火あぶりの体罰を受けさせられたのだった。

まさに、歴史とは繰り返すものなのである。

了

アルク

うちの高校に、海外から留学生がやって来た。

白い肌を持つ、その男の留学生は、アルクと言うニックネームで皆から呼ばれ、飛びっきりのハンサムだったものだから、彼の青い瞳で見つめられると、校内のあらゆる女生徒たちが一発で彼のトリコになってしまったのである。

もちろん、男子生徒たちも、そんなモテ過ぎのアルクに不快感を抱いていなかった訳ではない。しかし、アルクは、優しそうな面立ちの美形である一方で、どこか妖しい凄みもまとっていて、迂闊には手を出せないような空気を醸し出していたのだ。

そんなアルクが、とうとう、学内の一人の女生徒と本格的に付き合い始めた。それが、我が校のミス・ハイスクールだったのである。当然、ミス・ハイスクールの崇拝者たちには耐えがたい話だったのだが、前述したように、アルクには、不気味な迫力と、災難を上手に避ける不思議な直感力があったので、誰も彼らの交際を邪魔する事はできなかったのだ。

ミス・ハイスクールの方も、すっかり、アルクに夢中だった。彼へと全てを差し出す気になっており、しまいには、本当に、アルクの住む館にまで着いていき、そこで貞操も捧げてしまったのだ。

ベッドの上で、全裸で抱き合い、愛の営みを最後までやり終えた後、アルクはミス・ハイスクールに尋ねた。

「君は、本当に、全てを与えてもいいほど、僕を愛してくれているのかい？」

「ええ。もちろん」

ミス・ハイスクールの心酔した返事を聞いた途端、アルクは彼女の事を鋭く睨みつけた。すると、ミス・ハイスクールは金縛りになり、ピクリとも動けなくなってしまったのだ。

「君に話してなかった事がある。僕の名前はアルカードだから、皆にはアルクと呼ばれているのは、君も知ってるよね。でも、このアルカードも実は偽名なんだ。本当は、アルカード（Ａｌｕｃａｒｄ）をひっくり返して読んで、ドラキュラ（Ｄｒａｃｕｌａ）が僕の本名だったのさ」

そう告白するなり、アルクは、細いストローをミス・ハイスクールの腕にと突き刺した。ストローの先端は、注射針のように、ミス・ハイスクールの皮膚に食い込み、ストローの内側にドクドクと血が溜まりだしたのだ。

目を見開いているミス・ハイスクールの前で、アルクはパクンとストローの先をくわえた。そして、ちゅうちゅうとミス・ハイスクールの生き血を吸い始めたのである。

「どうだい。愛している男性に、血の最後の一滴まで捧げる事ができるなんて、最高に幸せだろう？」クールな笑顔を浮かべながら、アルクはそう告げた。

了

樹霊

ある高校の女生徒の一人が、呪いによって、突然、樹木に変わってしまった。その樹木は、校庭の隅に生えていたのだが、いきなり木が出現した事に、事情を知らない誰もが驚いた。しかし、特に邪魔になった訳でもなかったので、学校サイドも、切り倒しもせず、そのまま放置し続けたのである。

やがて、その樹木の目立った特徴に、多くの学生が気が付いた。その樹木には、乳房のような形のコブが二つと、オマ◯コのように見えるウロが備わっていたのである。乳房状のコブの先端には、乳首みたいな突起物もあって、摘むとコリコリしていて、触り心地が良かった。オマ◯コ状のウロは、柔らかくて、穴の奥にまで指を潜らせる事ができた。しかも、このウロをしつこく触っていると、粘っこい樹液が滲んでくるのだった。

木になった女生徒の方も、これらのコブやウロをいじられると、気持ちいい気分になってしまったのである。

最初は、生徒たちも、この不思議な樹木の事を面白がっていたのだが、そのうち、この樹木は風紀的に好ましくないと言う見解が広まり出した。

と言うのは、この樹木の乳首状のコブを舐めたり、くわえたり、あるいは、オマ◯コ状のウロに自分のチンポを突っ込んで、オナニーをして、射精した精液を樹木のウロの中に入れっぱなしにしておくような男子生徒までもが現われだしたのである。

ついに、学校の職員たちも動き出した。彼らが、樹木の元へ来てみると、樹木は学生たちによって、散々イタズラされた後で、コブの乳首状の部分はすでに削ぎ取られてしまっていたし、ウロの穴も大きく裂き広げられていて、もうオマ◯コのようには見えなかった。

それでも、職員たちは、予定していた処置を施したのである。樹

木に付いていた、これらのコブやウロを、刃物でえぐり取ってしまったのだ。

コブやウロをくり抜かれた瞬間、木になった女生徒の意識にも、すごい衝撃が走った。

この女生徒が、呪いが解け、人間の姿に戻ったのは、それから1時間後の事であった。

了

幽霊部員

私は、さる共学高校の女子生徒である。

ある日、参加していた写真部の部室に久々に顔を出してみたら、誰にも気付いてもらえなかった。

いや、最初に部室に入ってみた時は、なぜか、「セーラー服が宙に浮いている」と部員たちが言い出して、ちょっとした騒ぎになったのだ。

そこで、これはもしかして、と思って、私は服を全部脱いで、全裸になって、もう一度、部室の中に入ってみたのである。すると、今度は、皆が、完全に私の存在が分からなくなってしまったのだった。

どうやら、生身の私の姿だけが、部員たちには見えていないらしい。私は、長い事、この部の活動に参加してなかったものだから、心の中の記憶だけではなく、物理的にも忘れられてしまったようなのだった。

だが、それはそれで、面白い話なのだ。要するに、この写真部内においては、私は透明人間になったようなものなのである。姿を見られない事によって出来る事を、存分に楽しめると言うものなのだ。

そして、この写真部の活動に同行している限りは、部室の外に飛び出しても、私の姿は、他の第三者の目にも写ってないようなのだった。

だから、私は、この写真部の活動にくっついていって、野外でも、透明人間として、たっぷり遊ばせてもらったのだ。私の事を忘れてしまった薄情な写真部員たちを、いろいろと、見えないからこそ出来る些細なイタズラで翻弄してやったのである。実に楽しい仕返しができた訳だ。

やがて、その日撮った写真を写真部が現像してみると、今度は、

私の方が慌てる事態になってしまった。なんと、それらの写真には、あちこちに全裸の私の姿が写っていたのである。背景の一部だったり、どアップだったりと、さまざまだった。でも、写真部の奴らだって、意図して撮ったものではないのである。

私の方も、肉眼では見えない事を過信して、少し注意が足りなかったようだ。

いくら、幽霊でも、心霊写真には写るものなのである。

了

キモオタ狩り（前書き）

このお話は、男性読者のみを対象に、書かれています。

キモオタ狩り

「ねえ。あんたってさ、いっつも、私の方を見てるよね？これからさ、ちょっと付き合ってくれない？」

と、電車を降りるなり、その女子高生は君に話し掛けてきました。

確かに、彼女の言う通りだったのです。彼女とは、君は、毎日、登下校の時間がいっしょで、同じ列車に乗り合わせていました。いや、正確に言うと、君の方が、計画的に、わざと彼女の登下校の時間に合わせていて、毎回、彼女と同じ車両に乗れるように計らっていたのでした。

そんな訳だったから、彼女の方から言い寄られた時は、君はすっかり下心をさらけてしまい、彼女の誘いに簡単に乗っかってしまったのです。

彼女に連れられて、君がやって来た場所は、まるで人気のない空き倉庫の中でした。そこに到着すると、突然、彼女の仲間である女子高生たちがズラリと現れたのです。

「ねえ、こいつなの？」

「そうよ。いつも、電車の中で、あたしの姿を盗み見しているストーカーよ」

「学生服を着てるわ。きっと、近所の男子校の生徒ね。まだ童貞のキモいオタク男子に違いないわ」

女子高生たちは、君をジロジロ観察しながら、そんな会話を交わしました。

「ねえ。これから、何をするつもりなの？」

不安になって、君は尋ねてみました。

「服を脱ぐのよ。そして、裸になるの」

女子高生がそう答えたものだから、君はついニヤついてしまいました。

「バカねえ。裸になるのは、あんたよ！」

女子高生にそう言い返されて、急に、彼女たちに取り囲まれ、乱暴された君は、本当に服を全部、脱がされてしまったのでした。たとえ男の君でも、集団の女子相手では敵わないのです。

「やだ。こいつ、おちんちん立ってるよ。ボッキしてやがる」

女子高生の一人が笑って、指さしました。

恥ずかしい事に、今しがた、変な事を期待したものだから、君はだいぶ興奮していたのです。

「このキモオタ野郎め！こうしてやるぅ！」

そう言って、女子高生たちは、君を床にうつ伏せに寝かせると、大の字の形に押さえつけました。束になった女子高生たちの力は相当なもので、跳ね返す事ができないのです。

「あんた。毎日、あたしの姿を見ながら、イヤラシイ事を考えてたんでしょ？」

例の女子高生が、そう質問しながら、君を睨みつけました。

でも、彼女の姿をこっそりスマホで盗み撮りしていて、毎晩、その写真を見ながら、彼女のオールヌード姿を妄想して、オナニーを楽しんでいただなんて、絶対に白状できそうにはないのです。

「このう！あんたみたいな変態には、制裁を加えてやる！」

そう憤怒して、女子高生は、君のむき出しの股間を踏んづけました。彼女の靴の先が、がっちりと君の性器を押さえつけます。つまり、君は彼女に電気アンマをかけられちゃったのです。

女子高生の可愛らしいデザインの革靴（ローファー）が、グイグイと、君の体の不潔な部分を踏みにじりました。

「うわあ。痛い、痛い！」

と、君は叫びました。

ローファーの汚れた靴底を押しつけられたものだから、勃起してピンと立っていた君のペニスも、いびつに折れ曲がってしまい、ズル剥けて露出していた亀頭も泥まみれなのです。さらには、足の裏でしつこく陰茎を踏みしごかれた事で、尿道の穴にも白っぽい液を

滲ませてしまったのでした。
それから、女子高生は、ローファーの冷たいカカトを、君のブヨブヨした陰嚢の表皮にと食い込ませていったのです。この非情な凶器は、思いっきり、陰嚢の中の大切なアレにも当たっていました。女子高生が、全体重を乗せて、強く圧迫してくるものだから、丸くて、柔らかかった君のアレは、どうやら、平たく歪みだしているのです。
「つぶれるぅ！つぶれるよぉ！」
あまりの痛さに、君は必死に訴えました。
「本気でツブすつもりでやってるのよ！あんたみたいな痴漢同様のキモい奴は、見せしめの為に、こんなもの、つぶしちゃった方がいいのよ！」
彼女の声は、鬼気迫っています。何一つ、冗談は言ってないようなのです。
周りでは、手の空いている女子高生の一人が、この状況をスマホで写し始めました。
「ねえねえ。タイムリーで実況中継しちゃおうよ！イイネがいっぱい貰えるかもよ！」
と、その女子高生が、嬉々として、言いました。
素っ裸で、かわいい女子高生に電気アンマをかけられて、キンタマを潰されちゃうところを、ＳＮＳで世界に配信されてしまうなんて、全く、君って男は、どこまで情けないのでしょう！

了

珍品料理

今日のお昼の時間は、クラスの女子たちが、調理実習で作ったものをご馳走してくれると言っていたので、男子たちも大いに楽しみにしていたのだ。

やがて、お昼の休み時間がやって来て、女生徒たちが教室へと帰ってきた。

真っ先に入ってきたのは、調理の授業を担当した、若い女教諭である。

「男子の諸君、お待たせえ。さあ、入ってらっしゃい」と、彼女が明るく言った。

すると、寝台（ベッド）のようなテーブルがいくつか、教室の中にと運び込まれた。いや、それは、本当に寝台だったのだ。と言うのも、それらのテーブルの上に乗っていたのは、全裸になった女生徒だったからである。彼女たちが皿代わりとなって、テーブルの上に寝そべり、その裸の体の表面に、沢山のスイーツが飾り立てられていたのである。俗に言う女体盛りと言うヤツだ。

これを見ただけでも、男子たちは、オオーッと歓声をあげたのだった。

「喜ぶのは、まだ早いわよ。さあ、調味班のみんな、味付けを始めてちょうだい」女教諭が、さらに、そう指示を出した。

すると、そばで待機していた残りの女生徒たちが、次々に、皿代わりの女生徒の上にまたがり出したのだ。そうして、何をしたのかと言うと、スカートをたくし上げ、パンティを脱いで、その状態で、股間をいじり、オナニーをおっ始めたのである。

気持ちよくなってきた女生徒たちが、悩ましく体を悶えさせた。それだけではなく、お股も湿ってきたらしく、彼女たちの股間からは、ポタポタと愛液が、真下のスイートの上に落ち出したのである。

スイートにたっぷり愛液をかけてしまう子もいれば、少ししか愛液が出ない子もいた。

「このスイートの中には、パトスのエキスが染み込んでいるのよ。パトスは、愛液と混じり合うと、さらに絶品の味に変わるんだから！」女教諭が説明した。

こうして、味付けも終わり、試食会が始まったのだ。

男子は、ワーッと、それぞれの女体盛りの周りに群がって、スイートを貪り食った。愛液混じりのパトスだなんて、これまで食べた事もなく、まさに「大人の味」なのである。

中には、スイートと間違えたフリをして、皿代わりの女生徒の乳首やアンダーヘア、ワレメなどをいじって、ふざけている男子もいた。確かに、大きめの膨らんだ乳首はスイートに見えなくもなく、いじって立たせてみると、よけいスイートっぽい色や形になって、美味しそうになったのである。

「最後に、もう一つ、パトスの愉しみ方を教えてあげるわね。パトスは、愛液に加え、女性の唾液にも混ざると、さらに極上の味にと変化するのよ」女教諭が言った。

かくて、女生徒たちは、一人一人がスイートを口にふくむと、それぞれの男子へと、口移しで、その自分の口の中に入れたスイートを食べさせてくれたのだった。

了

珍品料理（後書き）

注・パトスについては、拙著「脱衣ゲーム」内の1エピソード「セントメアリー」を参照のこと。

他に「銀髪のエコ」「ピンクの怪物」などの作品にも、パトスは登場しています。

モニュメント

うちの高校の開校３０周年の記念物として、校庭に一つのモニュメントが設置される事になった。

それは、等身大の裸の少女の石膏像だった。うちの在校生の一人をモデルにして作ったヌード像なのだ。

これが、なかなかの素晴らしい出来だったのである。とてもリアルなのだ。体の細かい部分まで丁寧に作り込まれていた。頭髪や指の先まで本物の人間そっくりなのにとどまらず、乳首やヘソの穴、アンダーヘアまでもが、しっかりと揃っていたのだ。

俺は、この石膏像のモデルになった女子生徒に、直接、話を聞く機会に恵まれた。

彼女の説明によると、この石膏像は、彼女の全身の型をとって、それを元に作った、と言うのであった。なるほど、リアルすぎるのも当然なのである。この石膏像のプロポーションは、彼女の肉体の形そのままだったのだ。

そして、これを聞いて、俺は、はたと閃いた。もし、この石膏像の表面に触れてみたら、このモデルの女子の裸を間接的に触れるのと同じ事になるのではないのだろうか？

そんな訳で、人目につかない時間を狙って、俺は、この石膏像の台座にと上ってみたのだった。ちょっとしたオフザケのつもりで、この石膏像の乳房やらお尻やらを触らせてもらう事にしたのである。

あのモデルになった女子の本物のオッパイやヒップの膨らみ具合や触り心地も、こんな感じなのだろうか、と想像してみると、ちょっとニヤニヤしてきてしまったのであった。

そのうち、俺は、この直立した石膏像が、ややＯ脚気味だった事にも気が付いた。すなわち、両足の間が少し開いており、股関節のあたりに僅かな隙間ができていたのである。その為、この石膏像の

股の下にも、手を潜り込ませてみる事ができそうだったのだ。
俺は、ためらわず、それを実行した。この石膏像の股間部に、指を差し込んでみて、触ってみたのである。
すると、その部分も、きちんと型が取れていたらしく、しっかりと作り込まれていたのだった。大陰唇らしき、大きな二つの盛り上がりがあったのである。さらに、その二つの膨らみのはざまには、バッチリと深い溝も出来ていた。その割れ目の中にも、細い指ならば突っ込めたのだ。割れ目の内側は、何もなかった訳ではなく、指先でさすってみると、ひどくデコボコしていた。どうやら、この石膏像ときたら、こんな隠れた部位さえも、漏らさずに型を取って、忠実に再現していたのである。
この事に気が付いたのは、俺だけではなかったようで、この石膏像の女性器を触ってみたくて、その後も、このモニュメントの台座に上ってしまう男子生徒は、後を絶たなかったみたいだった。

了

いじめっ子のオマ○コ

うちのクラスには、不良の女生徒が数人いた。彼女たちは、自分たちだけでツルんでいて、昔のスケ番を彷彿させるような荒れっぷりを見せていて、級友は彼女たちには関わらないようにしていた。

幸い、この不良女生徒たちは、一人の女子を、パシリとして、完全に自分たちの子飼いにしており、怒りも無茶ぶりも、全て、その女子にぶつけていたようなので、他の生徒たちは被害をこうむらなくて済んでいたのだった。

ある日、僕は、この不良女生徒たちがたむろしている廃部室に行ってみた。その使われていない部室は、すっかり、彼女たちの溜まり場になっていて、彼女たちは、放課後や授業をサボった時などは、いつも、その部屋で時間を潰していたのである。

部室の中に入ってみると、案の定、その不良女子たちは、部屋の中で煙草などを吸っていた。そして、部屋の隅には、あのパシリの女子が、全裸にされて、転がされていたのだった。さるぐつわをかまされ、両手を後ろ手に縛られて、両足も広げた状態で縄で固定されており、完璧な拘束状態なのだ。この子は、不良女子たちに、外ではパシリとして使役され、廃部室の中では、このように、縛られて、連中の楽しいオモチャにされていたようなのである。

「こんな事して、大丈夫なのかい？」と、僕は、不良女子たちに聞いてみた。

「平気、平気」不良女子たちは、笑って、答えた。

不良女子のうちの一人が、パシリの子の裸の脇腹を軽く蹴った上で、腹部のヘソのあたりをグイッと踏みつけてみせた。もちろん、縛られたパシリの子は、やられる一方で、動く事すら出来ないのだ。

パシリの子の方は、その状態で、怯えた目を潤ませていた。哀れにも、いじめられている子と言うのは、抵抗したり、逃げたりする

と、後で、もっと激しくいじめられてしまうので、されるがままになっているしかないのである。

あらためて、冷静に、そのパシリの子の裸を観察してみると、あちこちに打ち身やヤケドの跡があり、乳首にも切り傷がついていて、陰毛はグチャグチャに剃り落とされていた上に、かろうじて生えていた僅かな毛も紫色にと染められていた。

「よーし。観客もいる事だし、今日もいっちょう始めるとするか」

調子に乗った感じで、笑い合う不良女子たちが、いっせいに、拘束されたパシリの子のそばへ寄っていった。

そして、何を始めたのかと言うと、いきなり、電動バイブを出してきて、それをパシリの子の股間に押し込んだのだ。パシリの子も、さすがに苦しそうに身悶えしたが、不良女子たちは、いっさい手加減をしなかった。電動バイブをグリグリと、パシリの子のアソコの中で動かし続けたのだ。

他の女子の手で、挿入オナニーを強行され、絶頂まで体験させられるなんて、女の子にとっては、相当の屈辱であろう。しかも、今は、男子の僕にまで、見物されているのだ。

このパシリの子が、すでに処女じゃなかったところを見ると、これまでもバイブを入れられた事があったものと考えられる。それどころか、この子は、このバイブによって、貞操を破られ、大人の体にされたのかもしれない。

何にせよ、バイブの振動はもっと激しくなっていき、とうとう、パシリの子はそのままイカされて、失神してしまったのだった。

でも、不良女子たちは、まだ、呵責の手を休めたりはしなかった。パシリの子が果てちゃったばかりだと言うのに、バイブを抜き取ったりはせず、そのまま動かし続けて、なおもパシリの子の事を喘がし続けたのだ。

イったばかりだから、パシリの子も、なかなか絶頂に達しそうにはない。しかし、それでも、再びエクスタシーを感じるまで、不良女子たちはパシリの子を責め立てたのである。

まさに、性の奴隷とは、この事なのであろう。パシリの子は、体じゅうを真っ赤にして悶え、汗だくになって、何度も何度もイカされ続けた。このパシリの子の性欲が特に強かった訳でもないのだろうが、それでも強引にバイブや道具を使って、体じゅうの性感帯も刺激して、無理やりイカしているのだ。不良女子たちは、このパシリの子が、全ての女性ホルモンを出し尽くしてしまうまで、この拷問を止める気はないのだろう。こんな事をずっと続けていたら、この子の体は壊れて、アソコもユルんで、ガバガバになってしまうかもしれない。たとえ、そうなろうと、不良女子たちは、お構いなしで楽しんでいるのだ。

しまいには、バイブを入れっぱなしのアソコも感覚がマヒしてきたらしく、パシリの子はオシッコを漏らしてしまい、彼女のお尻の辺りの床には、ジワッと水たまりが出来てしまったのだった。

「どう？なんだったら、お前も、この子とヤってもいいんだぜ」不良女子の一人が、僕に持ちかけた。

しかし、僕は、その申し出を丁重に辞退したのだった。僕にしてみたら、このパシリの子は全く好みではなかったからである。その為、裸や絶頂に達する姿をいくら見せられても、まるで、そそられなかったのだ。

むしろ、僕は、顔を紅潮させて、興奮していた不良女子たちに関心があった。この子たちの方が、ずっと僕のタイプだったのである。

そして、ひどく高揚していたところを見ると、この不良女子たちは、パシリの子がイク姿を見て、自分たちも熱くなっていたらしい。この興奮を味わいたくて、パシリの子をバイブで犯して、遊んでいたみたいなのだ。恐らく、この廃部室の中で、毎日のように、パシリの子相手に、このイカせ私刑（リンチ）を行なっていて、自身の性的欲求も満たしていたのであろう。

この不良女子たちも、今は、すっかり発情しているのだ。興奮のあまり、体もアソコも火照り、愛液だって噴き出しちゃっているのかもしれない。もしかすると、この不良女子たちのパンティは、今、

思いっきり濡れちゃっているのではないか、と想像すると、むしろ、その事に僕はゾクゾクさせられたのだった。

了

留学生

我が校に、はるか彼方の宇宙から交換留学生がやって来た。
ピッティアンである留学生の男子生徒は、外惑星の人間であるにも関わらず、超絶ハンサムボーイで、しかも、紳士であり、学業も優秀で、とびっきりのスポーツマンなのだった。
我が校の女生徒たちは、たちまち、彼の周りにと群がったのである。中でも、特に積極的に彼にアタックしたのが私だった。そして、私は、ついに、彼の一番のガールフレンドの座を獲得したのである。
しかし、私は、それだけでは十分には満足しなかった。どうせなら、彼が地球に滞在中に、この最高級の彼氏相手に、素敵なセックスを体験する事も望んだのである。
こうして、私は、その願いをも実現できそうになったのだった。と言うのも、私は、とうとう、彼を、私の部屋の中に連れ込む事にも成功したからである。
あとは、私の部屋で、二人で寝るだけだった。
私は、言葉巧みに、彼をそのような気にさせてゆき、二人は服を脱ぎ始めて、裸になったのだ。
しかし、そこで、私は衝撃的な事実を知ったのだった。
これほど完璧な男性だったのに、全裸になってみると、彼は、地球人のような体をしていなかったのである。股間には、排泄口と思われる小さな穴が二つ、開いていただけだった。女性の股間よりも、ツルツルなのだ。
「これって、どう言う事よ！」私は、思わず、わめいた。
「僕の星ピット星は、こちらの地球の何百倍も文明が進んでいるんです」彼が、申し訳なさそうに説明しだした。「生殖の為に、セックスは行いません。子供は全員、体外受精やクローンで作ります。その結果、我々ピッティアンの体は、男も女も、外性器が極限まで

退化してしまったのです」

了

レズいじめ　1

あたしたちは、クラスメートのA子とB子を、校舎の奥にある空き教室へと連れ込んだ。

その教室は、普段は誰も訪れない、この学校の死角のような場所なのだ。

あたしたちに取り囲まれたA子とB子は、これから何をされるのかを考えて、早くも、暗く、沈んだ表情を浮かべていたのだった。

彼女たちは、あたしたちのクラスでは、スクールカーストの最下層に位置している連中である。あたしたちは、いつも、彼女たちの事をいじめたり、あざ笑ったりして、楽しんでいたのだった。

ところが、最近、彼女たちが、最下層同士で、仲良くし始めたと言うのである。それは、あたしたちにしてみれば、たいへん不愉快な話だった。なぜなら、あたしたちは、彼女たちが、皆から除け者で、一人ぼっちだったからこそ、より優越感を抱けていたからである。

さて、あたしたちは、教室の中央で怯えていたA子とB子に、さっそく、制服を脱ぐように命令したのだった。いじめの対象である彼女たちに、拒む権利はない。彼女たちは、狼狽しながら、本当に服を脱ぎ始めたのだった。彼女たちは、とうとう、下着も外して、二人とも、素っ裸になってしまったのだ。

この二人は、顔がブスなだけではなく、体の方も、とても貧弱なのである。胸も小さければ、腰のくびれもなかった。まるで幼児のような体型をしているのだ。そのくせして、アンダーヘアだけは、一丁前にボウボウと生やしていたものだから、余計に笑えちゃったのである。

そんな彼女たちに、あたしたちは、二人で寄り合うように命令した。

普通にくっつき合うのではない。下半身の方から体を組み合わせるように指示したのだ。床の上に寝そべって、お互いの両足を交差させ、絡ませながら、近づけてゆく。すると、足の付け根まで接近してしまい、しまいには、双方の股間がくっついてしまうのだ。

この変ないじめ方に、A子とB子も閉口していたようだった。しかし、あたしたちは容赦をしなかったのである。

本当に、二人の股間が接触するまで、この行為を続けさせたのだ。

本人たちは激しく抵抗を感じていたようだが、とうとう、二人のお股にあった下の口はブチュッとキスしてしまった。そう、彼女たちの処女だったアソコが重なり合っちゃったのだ。彼女たちは、大切なアソコに最初に触れた他人の肉体の部位が、よりによって、同性のアソコになってしまったのである。これには、彼女たちも、精神的にかなり屈辱的で、ミジメに感じていたに違いあるまい。

でも、あたしたちは、さらなる蔑み行為を、彼女たちへと強いたのである。

今度は、この状態のまま、くっついたアソコを擦り合わせる事を、彼女たちに要求したのだ。

この辱めには、A子とB子も、完全に泣きべそをかいていた。このような貝合わせしているところを他人に見られてしまうなんて、真面目な女子高生にしてみれば、たまらなく恥ずかしすぎるのである。

そして、あたしたちは、そんなブザマな彼女たちの有様を、思う存分に笑いまくってやったのだった。

こんな一件があって以降、A子とB子は、すっかり仲良くするのをヤメてしまった。二人で一緒に居続ける事で、これ以上、皆からヘンな目で見られてしまうのは、彼女たちにとっても耐えられない話だったのだ。

それは、まさに、あたしたちの思惑通りの顛末なのだった。

了

レズいじめ　2

あたしたちは、クラスメートのA子とB子を、校舎の奥にある空き教室へと連れ込んだ。

その教室は、普段は誰も訪れない、この学校の死角のような場所なのだ。

A子とB子は、あたしたちのクラスでは、スクールカーストの最下層に位置していた連中だった。あたしたちは、いつも、彼女たちの事をいじめたり、あざ笑ったりして、楽しんでいたのである。

あたしたちは、教室の中央で怯えていたA子とB子に、さっそく、制服を脱ぐように命令した。いじめの対象である彼女たちに、拒む権利はないのだ。彼女たちは、狼狽しながら、本当に服を脱ぎ始めたのだった。彼女たちは、とうとう、下着も外して、二人とも、素っ裸になってしまったのである。

「これから、二人で、取っ組み合いのケンカをやってもらうよ。でも、普通のケンカじゃないからね。先に相手の事をイかせちゃった方が勝ちだよ。勝った方の子は、明日から、いじめのターゲットからは外してあげるね」あたしは、彼女たちに、そう言い聞かせたのである。

A子とB子は、困惑した表情で、相手の顔を見つめたのだった。でも、彼女たちに、選択の余地はなかったのだ。あたしに言われた通りに、すぐに、彼女たちはエッチなケンカを開始したのである。

二人とも、これ以上はいじめられたくないから、必死なのだ。本気で相手をイかせようとして、取っ組み合いになったのである。それも、通常の暴力ではなく、相手をイかせようとして責めている訳だから、よけい、おかしな感じの取っ組み合いになったのだった。

こんなダメ女子の二人でも、女の性感帯がどこなのかぐらいは、さすがに知っていたのだろう。だから、自分が責められたら気持ち

いいところを狙って、攻撃しようとする。お互いに、相手の胸や股間ばかりを標的に、手を伸ばして、小競り合いになったのだ。そして、逆に自分の方が性感帯を触られて、感じちゃっても、素直によがる訳にはいかず、懸命に我慢していたのだった。まさに、天国と地獄が一緒になった勝負なのである。

彼女たちの、この滑稽なキャットファイトを、あたしたちは、時には身勝手な声援を送って、ゲラゲラ笑いながら、楽しく見物させてもらったのだった。

こんな女子同士で組ませるのではなく、いっその事、男子のいじめられっ子も連れてきて、公開セックスでもやらせた方が、もっと面白かったんじゃないか、と言う人もいるかもしれない。でも、それは有りえない話なのだ。だって、こんな最下層の女子どもにセックスの快楽を体験させてやるのは、１００年早いのである。

了

雨女

私は、いつからか、自分の行動と結びついた、ある秘密にと気が付いた。

確か、幼少期の私は、抜群の晴れ女だったのだ。私が出かける日で、雨が降った事は一度もなかった。それどころか、私自身、身近で雨を見た記憶が全く無かったのである。実際に、詳しく調べてみれば、私が幼少時の頃の、私が住んでいた地区の天気は、抜群の晴天率を記録していたはずであろう。

それが、私が成長するにつれて、次第に、私の周りでも雨が降り始めた。しかも、何かのイベントがある時に限って、よく土砂降りになるのである。体育祭や学校祭、旅行の初日などは、確実に雨だった。

なぜなのだろう？

ふと、私は、ある偶然に気が付いた。

私は、中学生になって、性に目覚めてから、頻繁にオナニーをするようになっていたのである。それも、若い体には元気が有り余っていたものだから、何かイベントのある日は、ついワクワクしすぎて、その前日の夜は、特に、つい前哨戦のような感じでオナニーをして、はやる気持ちを紛らわせていたのだった。

そして、そんな風に、激しくオナニーしすぎて、いっぱい愛液が出ちゃった時の翌日に限って、雨の方も強く降ったみたいなのである。

それだけではない。オナニーした時の服装も、翌日の天気には大きく影響していたようだ。なるべく着込んだ状態でオナニーすれば、雨が降る範囲もかなり局地的だった。逆に、全裸でオナニーしようものなら、全国の広範囲に雨が降り注いだのである。

さらには、オナニーした時間の長さも、雨の降り続ける時間と比

例していたみたいだった。

もちろん、最初にこの事に勘づいた時は、私もおバカな妄想の一言で片付けたものだったが、その後も、この偶然の一致は続いたのであり、じょじょに無視はできなくなってきたのである。

あえて、自分から実験もしてみた。すると、私がオナニーした翌日は、完全に雨となったのだ。それどころか、上述したようなオナニーと雨の法則性も分かってきたのである。

それ以来、私は、反対に、この特殊能力を上手に活用するようになっていったのだ。楽しいイベントの前日は絶対にオナニーはやらなかったし、走りたくないマラソン大会の時などは、前夜に濃厚なオナニーに耽り、雨天中止にと追いやった。考えたら、これって、素晴らしい才能なのだ。

高校卒業を間近に控えた私は、今、気象予報士になろうと考えている。それも、全域の天気を予測するのではなく、狭い地区専門の予報士となるのだ。何しろ、私の特殊能力を使えば、快晴も豪雨も思うがままなのである。予測するのではなく、顧客のご希望通りの天気を提供できるのであり、まさに、理想的で完璧な気象予報士になれるに違いないのだった。

了

正しい性教育

我が女子校では、年に一度、特別な実演授業を行なう事が恒例となっていた。

その授業の内容と言うのが、性教育なのだ。

何しろ、若い女生徒たちは、無知のくせに怖いもの知らずなのであり、ほっとけば、次々に、男性相手の性行為に走ってしまうのである。その結果、いきなり妊娠してしまい、以前は、トラブルになってしまう生徒も決して少なくはなかったのだ。

そこで、我が校としては、先手を打つ事にして、自校の女生徒たちに、あらかじめ、正しい性教育を施す事にして、彼女たちの無謀な性行為を、事前に防ぐようになったのである。

この性教育の授業は、各クラスの教室で、内密に行われた。その授業内容も、教科書に書かれた文章をただ読み聞かせる程度のものではない。そんな言葉の解説だけでは理解できない、偏差値の低い女子も沢山いたものだから、我が校では、実物を見せて、彼女たちに正しい知識を植え付ける事にしたのだ。

その為に、講師は、まず、生徒たちの中から、一人、サンプルを選び出す事になる。その子をモデルに使って、生の肉体で、性の知識を教えていく事にしたのだ。

サンプルに選ばれた女子は、教室の前に立ち、他の生徒の眼前で裸になる事を強いられた。彼女の生身の体を用いて、女体の仕組みを丁寧に説明したのである。

それこそ、乳房の役割から、妊娠するメカニズムまで、全てを事細かく教える事となった。

と言うのも、今どきの子供たちは、あまりにも一般常識すら知らないヤツが多すぎたからである。

誰からだって母乳は出ると思っているような子がいたものだから、

まずは、おっぱいの仕組みから説明しなくちゃいけなかった。サンプルの女子の乳房を絞ってみて、母体じゃない女性からは乳が出ない事を実演してみなくちゃいけなかったのだ。あまりに揉みすぎて、サンプルの女子の乳首が、ピンと立ってしまった。実は、興奮した乳首が固くなる事を、ここで初めて知った子まで居たのである。

続いて、体毛の事も説明しなくてはいけなかった。毛を剃ると濃くなってしまう、と言う俗信を信じていて、かたくなにムダ毛や脇毛を剃らないようにしていた女子も沢山いたからである。講師は、そのような言い伝えが嘘である事を証明する為に、皆の目の前で、サンプルの女子のアンダーヘアをきれいに剃ってみせたのだ。

さらには、クリトリスの事をデキモノだと勘違いしているような女生徒もいた。そんな子の中には、自分のクリトリスを潰して、無くしてしまおうとした、危ない子もいたのだ。そのような危険行為を防止する為にも、クリトリスの事も正しく学ばせなくてはいけなかったのだった。サンプルの女子のクリトリスの皮をめくり、本体も勃起させて、いじると一番気持ちの良い部位である事を、生徒全員に教えてやったのである。

そして、授業の方も、いよいよ、メインの膣（ヴァギナ）へと移っていく。膣の中に、ポンポンとペニスをくわえてしまう女子も困りものではあったが、逆に、臆病になりすぎて、膣に何も突っ込めないような女子たちも厄介ではあった。そんな子たちは、処女膜の存在を神聖視しすぎて、タンポンすら差し込む事ができなかったのだ。そんな訳で、サンプルの女子を被験者に使って、処女でもタンポンを入れられる事をしっかりと実演してみせなくちゃいけなかったのである。

最後に授業に登場してもらったのが、ペニスの形をした性具だった。この性具は、ちょっと特別製で、亀頭の先から、精液に見立てた水を噴出する事ができたのである。この水を子宮の中で出されてしまったら、妊娠してしまう危険性が非常に高い事を、生徒たちに、とっくりと語らねばならなかったのだ。実際に、サンプルの女子の膣の中に、この性具を押し込んで、中で放水してみせた。そればか

りか、彼女以外の希望者にも同じ事をしてみせて、その感触を実地で分かってもらったのである。

我が校では、ここまで徹底した性教育を施していたのだ。さすがに、生徒たちも、ここまでトコトン教わると、安易なセックスや妊娠の恐怖が、身をもって理解できたらしくて、我が校では、いっさい、男子との不純な交際をする生徒は現れなくなったのだった。

しかし、別の問題が生じるようにもなってしまったみたいである。我が校の性教育は、あまりにも生々しかったようなのだ。その為、この性教育がきっかけで、性へと興味を持つようになった生徒も多かったらしくて、彼女たちは、男性相手のセックスこそは避けたものの、代わりに、オナニーの常習者になったり、または、レズビアンへと傾向する生徒が続出してしまったのであった。

了

もの隠しの天才

その女生徒は、いじめられっ子と言うほど酷くはなかったものの、不良女子たちの下でパシリをやらされていた。遊ぶ為のお金を調達させられたり、学校内でのマズいものの保管を任せられたりしたのだ。ここで言うマズいものとは、先生に見つかったら一発アウトの煙草の事である。

そして、資金調達の方も、彼女のなけなしの小遣いや貯金だけでは、とうてい足りなかった。カツアゲや詐欺みたいな凶悪な真似ができなかった彼女は、必然的に、お金を作る為に、万引きをやり始めたのである。

とは言え、繰り返し、万引きを続けていれば、やがて、店の方からもマークされだし、いつかは、店員に捕まってしまう恐れがあるものだ。そうなりそうな状況に何度も出くわした彼女は、それでも万引きをやめる訳にもいかず、あまりにも追い詰められた結果、盗んだものを咄嗟に自分の体の中に隠してしまったのである。

その時、盗んだのは、小さな細いルージュだった。彼女は、思わず、それを、タンポンさながらに、自分のアソコの中に突っ込んでしまったのだ。そのあと、彼女は、店の従業員に捕まって、万引きの疑いで、別室へと連れていかれた。しかし、彼女の所持品から盗んだものは見つからず、まんまと無罪放免となったのだ。さすがに、女の子の大事な部分まで探られたりはしなかったのである。

この一件があって以来、彼女は、この方法に大いに自信を抱くようになった。万引きした後は、盗品をすぐに自分のアソコの中へと隠すようになったのである。こんなベストの隠し場所はないのだ。

たとえ、体をチェックする相手が女の店員で、服を全て脱がされたとしても、さすがに、アソコの中まで覗くような下品な事はしなかった。まさに、絶対に見つかる事はなかったのである。

調子に乗ってきた彼女は、よりモノを隠しやすいように、筒状の容器を用意した。それは、ウィンナーソーセージぐらいの大きさで、その中にモノを入れてしまえば、角ばったものでも、痛くなくアソコへ収納できるようになったのだ。彼女の盗品の種類も広がり、より犯行も大胆になっていったのである。

それだけではない。この隠し方は、学校で煙草を預かった時も有効であり、まとめた煙草を容器の中に入れて、アソコの中へしまってしまえば、もう絶対に先生に見つかる心配はなかったのであった。

このヘンな技術に魅せられた彼女は、より大きなものや大量なものを隠す事に腐心しだし、アソコに入れる容器を、どんどん、大きなサイズにと変えていった。バナナぐらいの太さだった容器が、やがては、ジュース缶のような太さにまで肥大化した。太めの容器は、最初こそアソコに入れると痛かったが、それでも、慣れれば、問題なくアソコから出し入れできるようになったのである。

やがて、この女生徒は、高校を卒業する日を迎える事となった。もう、仲間の不良女子に使役される事もなく、万引きしたり、アソコに物を隠す必要もなくなったのだ。

卒業後の彼女は、新しい、伸び伸びとした人生を謳歌し、さっそく、素敵な彼氏を作った。その彼氏と、彼女は、学生時代はずっと遠慮していた性行為を、早くも試しちゃったのだ。

ところが、セックス後の彼氏の反応は、あまり好ましいものではなかった。彼氏が受けた、彼女のアソコの感触はガバガバであり、とても楽しめたものではなかったのである。

学生の頃に、アソコを間違った使い方をしたツケは、今になって、このような形で現れてしまったのだった。

了

家畜人（前書き）

この話は、リクエストに基づいて書かせていただきました。

家畜人

ホリョとトリコは、つがいの人間として、プラントの畜産学校で飼われていた。

彼らの生活は、完全に、生徒たちに見学される為だけのものであり、それ以上のものは無かった。彼らは、硬質ガラスの大きなケースの中で飼われており、彼らが外に逃げ出す事は絶対に不可能だったが、生徒たちからは一部始終を眺め放題だった。二人の自然な生活の全てが観察対象なのだから、当然なのだ。

彼らは、服を着ていなかった。二人とも真っ裸だった。何をするのも、隠さず、生徒たちに見せなくちゃいけなかったのである。食事をする姿も、寝ている姿も、体を洗っている姿も、中でも、彼らが排泄する姿は生徒たちには特に関心があるものだった。彼らの排泄物は、特上のご馳走だったからである。

彼らは、知恵を持つ事を許されなかったので、簡単な言葉しか教えられなかったし、文字だって読めなかった。考える事は、全部、プラントに任せておけばいいのである。二人に与えられるものは、暇つぶしの娯楽ですら、簡単なゲームや、ケース内でできる質素な運動ぐらいなものだった。

でも、二人でセックスする事は歓迎された。その様子も、漏らさず、生徒たちに見学されたのである。時たま、トリコは妊娠した。そのまま、子供も産んだ。その子供が自分で歩けるようになるまでは、ホリョとトリコは、その子の事を自分たちで育てなければいけなかった。人間の子育てする光景もまた、生徒たちの観察対象だったからである。歩けるようになった子供は、二人の元から引き離され、どこかに連れ去られる。二人以上の人間は、観察対象として必要なかったからだ。

そんなホリョとトリコも、時には、病気になったり、ケガをする

事もあった。そんな時は、彼らは、学校側から、親身になって、大事に、完全に治るまで治療してもらえるのだった。同じ学校で飼われている人間でも、プラントの医療学校の人間は、そうはいかない。医療学校で飼われている人間は、逆に、わざと、体を傷つけられたり、病気に感染させられたりするのだ。なぜなら、連中は、人間の体の治癒能力を調べる為に飼われているからである。医療学校の人間のほとんどは、不具者か病人であり、その死亡率も非常に高かった。

だが、学校の外にいる人間たちだって、その境遇は、ろくなものではなかったのだ。連中は、知的植物（プラント）の宿主に使われて、脳中枢を乗っ取られ、四六時中、体液を吸われながら、一つのプラントの専属奴隷として一生を送る事になる。常に過酷な重労働を強いられ、老年期まで生存できるものは、ほとんど居なかった。死ねば、その肉体は肥料として活用される。だけど、生きていたって、排泄物をプラントに提供し続けなければならない。人間は、プラントにしてみれば、何から何まで役に立つ、最良の動物だったのだ。

こんな目にあっている人間たちに比べれば、ホリョとトリコは、ぜんぜん幸せだったと言えたのである。

了

おまじない

うちの高校の野球部が、最近、やたらと強くなった。どうやら、こないだ入部した女マネージャーが関係しているらしいのだ。

その女マネージャーは、野球部の道具に、彼女独自のおまじないをかけてくれると言うのだった。おまじないをかける瞬間は見せてもらえない。しかし、そのおまじないのかかった道具を使えば、ボールなら三振を連発できるし、バットならヒットを量産できたとの話なのである。

「私の愛をいっぱい込めたからよ」と、その女マネージャーは笑って、説明した。

この話は評判になって、他のスポーツ部の生徒たちも、我先にと、その女マネージャーにおまじないを頼むようになった。

女マネージャーは、少し戸惑っていたようだが、最終的には了解してくれたのだった。相変わらず、おまじないをかける瞬間は見せてもらえない。だが、彼女におまじないをかけてもらった道具は、野球部以外のスポーツ部のものでも、やはり効果を発揮したのだ。なぜか、男子部員のみに限っていた。同じおまじないをかけてもらったにも関わらず、どうした訳なのか、女生徒には効き目がないみたいなのだった。

皆は、この女マネージャーのおまじないの秘密を知りたがった。そして、とうとう、あらゆる手を尽くして、彼女のおまじないをかける瞬間を覗き見る事に成功した者が現れたのである。

彼は、その光景を見て、愕然とした。

女マネージャーは、おまじないを頼まれた道具を前にして、服を全部脱ぎ、素っ裸になってしまったのだ。それから、道具を自分の股間へと押し当てたのである。そのまま、彼女は、念入りに、道具を自分の陰部に擦り付けて、自分の愛液を丹念に塗り込んでいたの

だった。

了

名器検査

高校三年生になった事で、僕たちのクラスの女子たちも名器検査を受ける事になりました。

これは、その名の通り、女子たちのアソコが名器かどうかを調べる学校行事です。各高校で、卒業前の女子が受けさせられる事は、国の法律で決まっているのです。と言うのも、名器の持ち主かどうかは、その女子の将来どころか、その女子のパートナーの運命にも関わってくる重大な問題だったからです。やはり、名器かどうかで、世間の評価も大幅に変わってしまうものなのです。

最初こそ、こんな名器検査は女性蔑視だと言う意見もあったのですが、結局は、廃止には至りませんでした。なぜなら、名器だと認定してもらえれば、女性としても、たいへん栄誉な事だったからです。しょせん、それに反対するのなんて、名器じゃなかった女たちがひがんでいるだけなのです。

さて、女子たちは、体育館に集められて、不正が無いように全員が裸になり、まとめて検査を受けさせられました。そのあと、名器検査の結果が分かった事で、彼女たちも一喜一憂する事になったのです。ミミズ千匹や蛸壺などの名器だと認定された女子は、いっぺんに男子たちの憧れの対象となりました。名器とルックス、家柄などはいっさい相関性がありません。だから、名器認定された事で、いきなり持ち上げられるシンデレラガールも大勢いるのでした。逆に、これまではクラスのアイドルとしてチヤホヤされていたのに、名器じゃなかったと判明した途端、評判がガタ落ちしてしまう悲惨な女子も少なくはなかったのです。

名器以外の女子は、全て、太平洋と呼ばれました。膣の中がツルツルで、名器のような快感をペニスに与える事ができなかったからです。以前は、のっぺらぼうと太平洋の二つに区別もされていたら

しいのですが、今では、太平洋に統一されてしまいました。この二つは、ほとんど差異がなかったからです。

でも、本当は、9割以上の女性が太平洋だったのです。太平洋こそが、一般的な女性器だったのであり、別に卑下する話でもなかったのです。

「ごめんね。私、太平洋だった」僕のカノジョのカコちゃんが、恥ずかしがりながら、素直に白状してくれました。

でも、僕は、そんな事、ぜんぜん構わなかったのです。なぜなら、僕は、カコちゃんの事が大好きだったからです。彼女の事を、名器かどうかで好きになった訳ではないのです。

だから、僕は、いずれ大人になって、カコちゃんの太平洋とセックスする事を、今から、とっても楽しみにしているのでした。

了

セックス研究会

僕は、高校に進学すると、セックス研究会に入部しました。なぜなら、このクラブは、その活動内容上、まだ高校生がセックスをしても許されたからです。

部室の中で、さっそく、その日の部活動が始まると、二人の女子部員がサンプルにと選ばれました。彼女たちは、裸になって、透視装置（「人体透視装置」を参照）の前に立ったのです。

彼女たちの体のうち、腰の部分だけが透視されて、スクリーンに映し出されました。二人の膣が、縦切りの断面図となって、他の部員たちの目に晒されたのです。それを見ながら、顧問の先生が解説しました。

「おやおや。こちらの子のアソコは、のっぺらぼうだな。名器と比べると、膣の内壁がスベスベで、男性器にほとんど刺激を与える事ができない。もう一人の子は、のっぺらぼうの中でも太平洋と呼ばれるタイプのものだ。アソコが大きすぎる為、ガバガバで、男性器は挿入した心地すらも味わえないだろう」

せっかく、サンプルになってくれたと言うのに、ヒドい言われようなのです。実際に、二人の女子部員は、頬を赤らめて、弱り顔になっていました。

「続いて、実習に入ろう。この子たちとセックスしてみたい男子生徒はおるかね？」先生が言いました。

僕は、のっぺらぼうの子の相手を希望して、採用してもらったのです。

こうして、僕も制服を脱ぎ、裸になったのです。セックスをする為です。

これより、二人がセックスした時の膣の状態も透視してみて、セックスの仕組みを実地で学ばせてもらうのです。

僕は、自分のペニスを勃起させて、女子の膣の中へと挿入させました。もちろん、僕にとっては、これが初体験なのです。

先生にはボロクソに言われていましたが、彼女の膣は僕のペニスを優しく受け入れてくれました。挿入しただけでも、全然快感なのです。そして、僕のペニスが突っ込まれた状態の彼女の膣もスクリーンへと映し出されて、こんなものをリアルタイムで見学しているのかと思うと、僕も不思議な気分になったのでした。

最後に、僕は、彼女の膣の中で、気持ちよく射精もさせてもらいました。その瞬間すらも、スクリーンには克明に映し出されたのでした。

「おかしいな。この女子は処女だと思ったのだが、破瓜した場面を確認できなかったぞ」先生が、怪訝そうに呟いていました。

僕もまた、何だか、やけに簡単に挿入できたな、と思っていたのでした。

了

体育系女子

俺の住んでいるアパートのそばには、体育大学附属の女子高校があった。

その女子校の生徒たちが、アパートの近くの公道を、よく集団でランニングしていたのである。俺の部屋からも見物できたが、カノジョのいない独身男の目から見たら、あまりにも眩しい光景だった。沢山の若い娘が、体操着姿で情熱的に走っているのだ。それを、俺は、いつも、目の保養として、楽しませてもらったのである。

ところが、そのうち、そんな女生徒の一人が、夕方、俺のアパートの横の枝道を、毎日、個人トレーニングで走っていた事に気が付いた。その子は、学校の体操着姿ではなく、私服に着替えていたのだが、俺には一目で分かったのである。

部屋からコソッと観察すると、その子は、ランニングシャツとホットパンツ姿で走っていた。しかし、育ち盛りのせいか、そのサイズが、もう合っていないみたいなのである。その服装は、彼女の成熟した肉体を猛アピールしていた。パンツの下の健康そうな太ももや、シャツからはみ出した乳房の一部やおへそも、大変に悩ましかった。

こんなものを毎日、見せられ続けているうちに、俺も、とうとう、自分を抑えられなくなってしまったのだ。

ある日、俺は、彼女のランニングコースの途中に隠れて、不意をついて、彼女に襲い掛かった。彼女に睡眠薬をかがせて、眠らせてしまうと、そのまま俺の部屋へと誘拐してしまったのである。幸い、この犯行現場は、誰にも見られなかった。

まんまと女子校生を手に入れた俺は、自分の部屋で、眠ったままの彼女を、あらためて観察させてもらったのだ。間近で見ると、やっぱり、ものすごいセクシーさなのである。この子は、まだ気持ち

が子供なものだから、自分の体の発育の早さに気付いておらず、それで、古い服を着続けていたのかもしれない。その結果、逆に、色っぽすぎる見た目になってしまったのである。

我慢できなくなってきて、俺は、服越しに彼女の体を触らせてもらった。シャツからハミ乳したバストも、小さなホットパンツの中ではち切れんばかりのヒップも、申し分のない触り心地なのだ。

理性が吹っ飛んだ俺は、ついに、彼女の服を脱がし始めた。汗まみれのシャツや下着を剥がした時、そこから出てきたのは、見事なまでにグラマーな裸体だった。彼女は、幼さゆえ、脇毛もムダ毛もきちんと処理していなかったが、それすらも、体育系女子らしいワイルドさに見えて、エロかっこよかったのである。

俺は、思わず唾を飲んだ。この肉体が、スポーツする為にしか使われてこなったとは、実にもったいないのだ。

そこで、彼女が、ぼんやりと目を覚ました。俺は、彼女が状況に気付く前に、慌てて、彼女の首を絞め上げて、再び気を失わせたのだった。

俺の凶行は、この先、もっともっとエスカレートしてしまうかもしれない。でも、全ては、こんな誘うような格好をしていた、この女生徒がいけないのである。

了

２２世紀の解剖ごっこ

現在でも、学校には子供たちのイジメがはびこっているが、１００年以上経っても、学校からイジメが無くなる事はなかった。

解剖ごっこと呼ばれるイジメがある。これは、イジメのターゲットになった生徒の服を全部、脱がしてしまうと言うものだ。このイジメは、２２世紀になっても、なお残り続けていた。しかも、超未来の先端科学を取り入れて、むしろ、パワーアップしていたのだ。

２２世紀でも、解剖ごっこは、まず、いじめられっ子の服を全て、脱がしてしまうところから始まる。だが、それだけでは終わらないのだ。これからが、解剖ごっこの本番となるのである。いじめっ子たちは、犠牲者の体を仰向けに押さえつけて、本当に、その体を解剖して、内臓を見物させてもらうのだ。

２２世紀では、外科治療の技術も目覚ましく進歩していた。患者の体を、痛みもなく、出血もさせずに、安全に切開できるようになっていたのだ。それも、患者を眠らせずにである。そして、切り開いた体は、その場で、痕も残さず、きれいにふさぐ事も出来たのだった。

この素晴らしい技術が、シロウトでも手軽に扱えるようになっていたものだから、学校では、生徒同士のイジメで利用されるようにもなってしまったのだ。

いじめられっ子は、裸にされた肉体を縦一直線に切り開かれてしまう。そして、文字どおり、腹の奥まで見透かされてしまうのである。

「うわあ。心臓がドキドキ動いている」

「胃の中に、今朝、食べたオカズがまだ残ってるよ」

「ねえ。この腸を引っ張り出して、どのくらい伸びるか、試してみようよ」

でも、いじめっ子たちが触るのを一番楽しみにしていた内臓は、やはり、内性器なのだった。

女子の場合は、子宮を体外へと引き摺り出す。この変わった形の内臓に、いじめる側も興味津々なのだ。

卵巣をコリコリと摘んでみたり、ぺちゃんこの子宮の分厚い皮を引っ張ってみたりする。このように内性器をいじられると、どうやら、触られる側もエッチな気分になってくるらしい。特に、膣を鷲掴みにして絞ると、膣の中にどっと愛液が溢れ出す。実は、膣の内壁が擦り合わさると、モノを挿入したみたいに気持ちがいいのだ。このまま、なおも膣をシゴき続けると、あえぎ声を出して、ついイっちゃういじめられっ子もいたのだった。

男子の場合も似たようなものである。

男子のいじめられっ子は、陰嚢を切り開いて、睾丸（キンタマ）を外へと引っ張り出された。そのまま睾丸を取り外して、抜き取ってしまうと、いじめっ子たちは、その睾丸をキャッチボールの球がわりに使って、楽しく遊ぶのである。男の子じゃなくなってしまったいじめられっ子は、股間を押さえて、オタオタしながら、あちこちに行き交う自分のタマを追い回す事となったのだった。

しかし、なにぶん、睾丸は小さいパーツゆえ、紛失してしまったり、うっかり踏み潰してしまうような事もあったのである。潰れて、センベイみたいに平たくなってしまった睾丸は、返してもらった後、元のようにくっつけてみても、もう使い物にならないのだ。

了

ニジュウ面相は誰だ？

ある女子校の中に、怪人ニジュウ面相が逃げ込んだ。ニジュウ面相を捕まえる為に追いかけていたアケチ探偵も、警官隊を引き連れて、その女子校にやって来た。

学校は、まだ昼のさなかで、授業中だった。アケチ探偵は、まずは、職員室に学校の教員や事務員を全員集めると、彼らの尋問を行なったのである。

「ニジュウ面相は変相の名人です。彼のプライドから考えても、誰かに化けるような逃げ方はしても、建物のどこかに隠れるような真似はしないでしょう」アケチ探偵は言った。

そして、学校の職員たちの中には、ニジュウ面相が化けたと思われる人間は見つからなかったのである。

次に、４００人近い女生徒たちが、一堂に、体育館へと集められた。

「ニジュウ面相は、魔法使いのような変相の名人です。女の子にだって化ける事は不可能じゃないでしょう」アケチ探偵は説明した。

しかし、４００人もいる女生徒たちは、さすがに一人ずつ、尋問で調べる訳にもいかないのだ。

「生徒の皆さん。全員、服を脱いでください。裸になるのです。いくらニジュウ面相が変相の名人だとは言っても、性別まで変える事はできないでしょう。彼は男だから、オチンチンがあるはずです。あるいは、作り物の女性器を股間につけて、ごまかしているかもしれませんので、よく観察すれば、すぐに分かるはずです」アケチ探偵は、得意げに告げたのだった。

もちろん、女生徒たちは、反感を抱いて、どよめいたのだが、相手は、警察を後ろ盾にした名探偵だから、逆らう事もできないのだ。

たちまち、体育館の中は、裸の女生徒で溢れかえったのである。

その光景は圧巻であった。

こうして、恥ずかしすぎる状況下で、生徒の中からのニジュウ面相探しが始まったのだが、なかなか、疑わしい女子は見つからなかった。

そんな矢先、校庭の方から、用務員の大声が聞こえてきた。

「うひゃああ。ぶったまげたぁ！何者かが、校長の銅像に化けておったぞ！皆、来てくれー！早く捕まえないと、逃げられちまうぞぉ！」

そこで、アケチ探偵も、ニジュウ面相が何にでも化けられる事を思い出したのである。

だが、その時、アケチ探偵は、すでに、怒った裸の女生徒たちにと取り囲まれていた。次の瞬間、彼は女生徒たちによって袋叩きにされた。

了

ニジュウ面相は誰だ？（後書き）

本エピソードは、「ルシーの明日とその他の物語」にも収録しています。

処女膜遊び

ある有名女子校内での一コマ。
優等生として知られているクラス委員長が、友人たちによって、人気のない体育館倉庫へと呼び出された。
委員長「皆。どうしたの？何の用よ？」
友人Ａ「あのさあ、委員長。あなたって、まだ処女なの？」
委員長「処女だけど。それが？」
友人Ｂ「じゃあ、ちょっと見せてよ」
友人たちは、笑いながら、バアッと委員長に飛びかかった。委員長も笑いながら、抵抗している。
だが、最終的に、委員長は服を全部ひっぺがされて、裸にされて、床に押さえつけられてしまった。
でも、格別にハレンチな事をしている訳なのでもない。なぜならば、彼女たちは、普段から、着替えやらシャワーやらで、お互いの裸をごく当たり前に眺めあっていたからだ。服を脱がすぐらいは、そんな恥ずかしい事なのでもなく、ちょっとフザけた程度の行為に過ぎないのである。
委員長「もう！皆、やめてったら～」
友人Ａ「さあて、委員長のオマンコを見せてもらいましょうか」
友人Ｂ「うふふ。どんな感じなのかな？」
友人Ｃ「わあ。本当だあ。綺麗な処女膜がついたままだ」
友人Ｄ「ねえねえ。この処女膜、破いちゃわない？面白そうよ」
友人Ｅ「委員長、いいでしょう、破いても？」
委員長「バカ！皆、何言ってるのよ！」
言い返している割には、委員長もそれほど嫌がっている感じではない。皆と一緒に笑っているのだ。
友人たちは、本気で、委員長の処女膜を破りにかかり始めたので

ある。
友人Ａ「さあて。まずは、指を一本入れてみるわね」
友人たち「ひとーつ！」
委員長「わあ。やめて、やめてったら～。くすぐったいよぉ！」
友人Ｂ「一本だけでは、まだ余裕みたいね。全然破れてないわ」
友人Ａ「よおし！次、二本め、いくわよー！」
友人たち「ふたーつ！」
　こうして、二本めも問題なく入り、そして、三本めの指を入れた時に、委員長の処女膜は、とうとう、ほんとに破れてしまったのだった。
　でも、このやり取りは、イジメでも何でもない。ごく普通の、仲の良い友達同士のお遊びなのだ。
　と言うのも、こんな風に、処女を喪失しちゃったのは、委員長だけではないからである。他の子も、何人も、似たようなオフザケで、友人たちの手によって、処女膜を破かれちゃっていたのだった。その加害者側には、今回の被害者である委員長が混ざっていた時もあった。だから、このように、お互いの処女膜を破りあうのは、彼女たちなりの、特に仲良しである事の証しだったのである。
　ものすごくお固そうに見えて、本人もまだ男性経験は無いと言っているのに、すでに処女じゃなかった女性をよく見かけるのだが、そんな子は、実は、こんな感じで、友達とのお遊びで処女を失っていたのだ。

了

女子だらけ

ある私立の女子高校が、少子化による生徒数不足の為、やむを得ず、自校を共学に変え、男子も受け入れる事にした。ただし、この学校には男子生徒を扱うノウハウが全く無かったので、まずは、試しに１０人ほど、新入生の男子を入学させてみる事になったのである。

そして、その入学させてもいい男子の選考はとても慎重なものとなったのだ。ナンパ目当ての性欲むき出しのハリキリ男子は、当然ＮＧ。また、イケメンすぎる男子も、女子の間で取り合いの闘争を起こしそうなので、外される事となった。結果的に、ナヨナヨした、貧弱な、見た目も冴えない草食系男子ばかりが、１０人前後、入学を認められたのである。

こうして、その高校内での、男女共学の生活が始まったのだが、違う人種が混ざり合った事で、かなりぎこちない空気となってしまったのだった。恋愛対象にならないようなダサいＣ級男子たちでも、男には違いないのである。

最初は、少数男子たちに気を使ってくれていた大多数女子たちであったが、やはり噛み合わない部分も多くて、彼女たちは次第に男子の存在がうっとおしくなってきた。些細な誤解や食い違いの連続は、やがて、男子への憎悪や怒りへと変わっていったのだ。

女子たちの感情が、とうとう爆発してしまった。ある日、教室にいた一人の男子の周りを、同じクラスの女子たちがグルリと取り囲んだ。次の瞬間、女子たちは、その男子に、いっせいに飛びかかった。ただでさえ多勢に無勢な上に、貧弱男子では、とても女子の集団には立ち向かえないのである。

その男子は、ものすごい勢いで服を脱がされていき、あっという間に裸にされていた。パンツまで取られてしまったのだ。女子の方

が圧倒的に強いので、そんな目に遭わされてしまうのである。
その男子は、ひ弱だったものだから、反撃する事もなく、その場に座り込み、女々しく泣き出してしまったのだった。素っ裸で、股間のオチンチンだけは懸命に両手で隠しながら。
この男子の屈辱的オールヌードを、記念にケータイで写している女子も何人もいた。彼女たちは、一人っ子や母子家庭だったりして、これまで男の裸を生で見た事が無かったのだ。ダサい男子の見苦しい体であろうと、男の裸であれば、十分に満足したのである。
この事件については、学校や教師に相談される事は無かった。たとえダサい男子であろうと、最低限の男のプライドはあるのだ。女子に服を脱がされちゃっただなんて、とてもじゃないけど、人には話せないのである。しかも、この学校の軟弱男子たちは、社交性が低いオタクばかりだったものだから、このような事態が起きたと言うのに、皆で固まって、団結して、身を守ろうとはしなかった。よって、女子たちにとっては、今後も格好のターゲットとなったのである。
以降、この高校では、スカートめくりならぬズボンおろしが流行るようになった。一人でいる男子を、いきなり女子の集団が取り囲み、その男子のズボンとパンツを奪い取ってしまうのだ。さすがに、最初の時みたいに、服全部を脱がしてしまうような事は、ほとんど無かった。それでも、下半身だけでも裸にされてしまった男子は、顔を真っ赤にして、モジモジしながら、股間だけは必死に両手で隠すハメとなったのだった。その情けないザマを、女子たちは笑ったり、興味津々に見物して、楽しませてもらったのである。
かくて、この学校での日々は、男子たちにとっては、次のエジキになるんじゃないかと、戦々恐々のものとなったのだった。

了

少女ばん馬

去年、僕が引っ越してきた雪国の町では、正月に、ちょっと変わった神事が行われていた。

僕もその神事の手伝いを頼まれたので、町の神社へ行ってみると、最初こそ、どこの町とも変わらぬような正月の祭りをやっていたのだが、いざ、その神事が始まると、急に様子が変わってきたのだった。

なんと、四人いた若い巫女たちが、鳥居の前で、いっせいに服を脱ぎ出したのだ。見たところ、雇われた地元の高校生っぽい。そんな彼女たちが、寒空の下で、ストリップを始めたのである。それなのに、まさしく恒例行事だったのか、その場にいた町民たちは、誰も驚いてはいなかったのだった。

完全に素っ裸になってしまった巫女たちは、動きやすいように、髪をポニーテールに結び直し、続いて、小さなソリから伸びた綱を自分の胴にと巻きつけ出した。その綱は、ソリを引っ張る為のロープである。最後に、僕が、そのソリにと乗るように指示されたのだった。

これが、この町の正月の神事だったのである。前の年にこの町に越してきた住民を、神への新物の捧げ物に見立てて、ソリに乗せると、巫女たちが鳥居から拝殿の前まで運ぶのだ。巫女たちは、処女である事が絶対条件なので、まだ清楚な高校生から選ばれていたのである。さらには、穢れがないように、全裸にならなくてはいけなかったのだ。ちなみに、この任務はかなり体力が必要だった為、スポーツ女子が優先的に採用されていたようで、巫女は、いずれも体格が良い子ばかりだった。

こうして、今年の神事が開始されたのである。僕は、思わぬ儲けもので、初々しい少女たちの裸を、すぐ間近から見せてもらえる事

となったのだ。

ソリが移動中、ソリを頑張って引いてくれている娘たちの後ろ姿をじっくりと鑑賞していると、僕には、次第に、それが本物の馬の後ろ姿のように感じられてきた。何しろ、ポニーテール（馬の尻尾）の下に、大きなお尻があって、ガッシリした両足が地面へと伸びているのだ。まさに、これは、牝馬の後ろ姿そのものなのである。

四匹の牝馬がひく冬ゾリだ。その御者が僕なのである。なんて、愉快なイベントなのであろうか。僕は、手綱を引っ張り、つい本気で彼女たちを制御したくなってしまったのだった。

やがて、ソリは拝殿へとたどり着いた。この楽しいプレイも、残念ながら、終了したのである。

任務を終えたばかりの、まだ全裸の彼女たちの方をチラと見てみると、びっくりした事に、その場でオシッコを漏らしている子もいたのだった。ただでさえ寒くて凍える状態で裸になり、ソリを引くのに踏ん張り過ぎて、そのあと、緊張する大役から解放されたものだから、トイレに行く前に、一気に力が抜けてしまったのかもしれない。しびれた体をコントロールできずに、すぐ失禁してしまったのだ。女の子でなくても、恥ずかしい顛末なのである。

その子は、他の人もいる野外で、突っ立ったまま、勢いよくジャーッと大量の小便を真下に垂れ流していた。その様子は、彼女の背後の方から眺めていると、まるで馬の放尿そっくりで、これまた、僕は苦笑いしたのであった。

了

高校生の交尾

お前は高校の頃、進学校で受験勉強ばっかりやってきたから、まだ性の経験なんて無いだろう、って？

いやいや、そうでもないんだよ。

確かに、僕の高校は、有名な受験校で、生徒は、誰もが勉強のことしか、頭になかった。でも、部活に入ってなくても、学年の違いを超えて、広く交流し合う事が推奨されていたんだ。と言うのも、後輩は先輩から勉強を教えてもらえるし、先輩は後輩に雑用を任せて、勉強だけに専念できたからね。学年交流は、双方の利益に繋がったんだ。

僕も、８人ほどの人数の、学年がゴッチャになった仲良しグループに所属していた。

ある放課後、皆が帰った教室で、このグループのメンバーだけで、楽しく雑談していた時のことだ。

「俺、交尾をナマで観察して、勉強しておきたいんだ。お前たち、ちょっと見せてくれないかな」と、一番上の先輩が言い出したのさ。

先輩に指名されたのは、当時一年生だった僕と、同じクラスの女生徒だった。一年生は、このグループでは、僕たち二人だけだったのさ。ちなみに、彼女は、この中では紅一点だった。

それで、先輩の命令だし、僕たちは、その言葉に素直に従った訳さ。僕も彼女も、服を脱いで、裸になった。動物らしく、全裸にね。

僕も、この時、はじめて、女の子の裸や生殖器を間近で見たよ。彼女もそうだったみたいだ。彼女ったら、僕の男性器を見て、頬を赤らめていたよ。

それから、実際に、交尾をしてみせる事になったんだ。まずは、交尾をする体位を決める。僕たちは、より動物らしく見えるように、後背位（バック）を選んだよ。すると、彼女は、四つん這いになって、大きな

お尻を僕の方へ突き出したんだ。そのお尻の下には、彼女の生殖器があった。それは、僕には、まるで貝の身のようにも見えたのさ。女の子って、皆、こんなものを股間にくっつけてたんだね。

興味深く感じていたのは、僕だけではなかったらしい。先輩たちも、ひどく気になったらしくて、交尾を始める前に、全員で、彼女の生殖器を触らせてもらっていた。すると、小陰唇（ビラビラ）を広げて、内側までイジったりしているうちに、彼女の生殖器が火照ってきちゃってね、本物の貝みたいに水をにじませたり、陰核（クリトリス）も触手みたくニョキッと外に出ちゃったんだ。

それを見ているうちに、僕もつい発情してきてしまった。僕の生殖器もピンと勃起して、大きく膨らんだ亀頭も剥き出しになっちゃったんだよ。

こうして、交尾できるだけの前準備は十分に整った。僕は、彼女の膣の中に、僕の生殖器官を入れさせてもらったのさ。彼女は処女だった。僕もそうだったけど、これが彼女のはじめての交尾となったんだ。

「どんな感じだい」と、先輩が聞いてきた。

「気持ちいいです」

「私も」と、僕たちは答えた。

実際に、双方の生殖器を組み合わせてみた状態は、とっても快感だった。彼女の膣も、僕の陰茎をグイグイ締めてきたから、すごく気持ちが良かったのだろう。

そして、僕たちは、このまま、最後の過程まで済ませてしまったのさ。つまり、僕は彼女の膣の中で射精しちゃったんだ。正式な交尾として、彼女に僕の精子をあげちゃったんだよ。その後、彼女は妊娠まではしなかったみたいだけど、それでも、先輩には、十分に参考にしてもらえたんじゃないんだろうか。

そのあと、その女子とは、どうなったかって？何もないよ。ただのクラスの友人に戻ったまでさ。別に、付き合ったり、またセックスする関係になった訳でもない。なんたって、僕たちは受験生であ

り、そんな余計な事をしている暇はなかったからね。もっとも、教室で彼女と顔を合わせるたびに、どうしても、交尾した時の事を思い出しちゃって、お互いに顔が真っ赤になってしまったのには、さすがに困っちゃったけどね。

了

人喰い

世紀末、サイクロプスが地球に襲来した。彼らの目的は、地球人類を収穫し、自分たちの主食にする事なのだ。

圧倒的に科学力に差がある上に、神出鬼没のサイクロプスに対して、地球人類は、まるで為す術もなかった。連中の思い通りに捕食されるしかなかったのだ。

サイクロプスは、地球のどの場所へも、突然、暴風のような形態で出現する。そのまま、その暴風に巻き込まれた人間は、サイクロプスの餌食となってしまい、その暴風が去った後には、食べカスの骨や破れた衣類だけが残される事となったのだ。それは、人間側にとっては、まさに対抗手段のない、恐怖の風だった。

しかし、そのような災難が続いていくうち、地球人類は、サイクロプスの襲撃に、一定のサイクルがある事に気がついた。サイクロプスは、人間の事を気まぐれに乱獲していた訳なのではなく、連中なりに周期を決めて収穫していたのだ。そう、人間が、育てた穀物を秋に刈り取るようにである。

それが分かると、地球人たちも、少しは安心したのだった。そのサイクロプスの人間収穫期間以外ならば、決して襲われる事はないのだ。四六時中、サイクロプスの襲撃ばかりを警戒する必要もなくなり、サイクロプスの現れない期間ならば、これまでのような人間らしい文明生活も送れるようになったのである。

ある日の高校での出来事だった。その時は、サイクロプスの収穫期間ではなかったはずだ。

ところが、ある教室に、サイクロプスの暴風がいきなり出没したのである。その教室にいた生徒たちは驚いた。だが、あまりに突然のハプニングであった為、誰も逃げ出す事すらできなかったのである。

たちまち、生徒のほとんどは、サイクロプスの攻撃を受けてしまった。でも、サイクロプスが去ったあと、教室内の被害者たちの状況は、ちょっと奇妙だったのである。

＜ａ＞

女生徒は、一人も襲われておらず、皆、全くの無傷だった。捕食されたのは男子生徒ばかりだったのだが、それも、丸ごと食われてしまった訳なのでもない。どの男生徒も死んではおらず、服は全て剥がされてはいたものの、特に激しい外傷もなく、あちこちに直立不動で突っ立っていたのだった。

彼らは、いずれも苦悶の表情で、モジモジしながら、両手で股間をがっちりと押さえていた。実は、サイクロプスは、男子たちの陰嚢を裂いて、中にあった睾丸だけを抜き取って、食べてしまったのだ。ここにいる男子生徒たちは、命は助かったものの、キン無しになって、生殖機能を失ってしまったのである。

＜ｂ＞

その後も、同種のサイクロプス事件が、地球のあちこちで頻発するようになったのだった。

地球人だって、魚介類などの生殖器や卵を、本体とは別に、集中的にむさぼり食ったりもするものだ。どうやら、サイクロプスの間でも、人間の精巣や卵子は、特に美味しいご馳走であったらしい。連中の中のグルメどもは、本来の収穫期以外でも、人間そのものは殺さず、珍味の精巣と卵子だけを、まとめて先に刈り取っていくようになったのである。

サイクロプスに定期的に捕食されていて、ただでさえ、人口が減りつつあった地球人類は、これでますます、種を維持していくのが難しくなってしまったようだ。

了

（ａとｂの間には、別パターンとして、以下の内容と差し替える事

ができます）

男子生徒は、一人も襲われておらず、皆、全くの無傷だった。捕食されたのは女生徒ばかりだったのだが、それも、丸ごと食われてしまった訳なのでもない。いずれの女生徒も死んではおらず、服は全て剥がされてはいたものの、特に目立つ外傷はなく、床に倒れて、ピクピク悶えていたのだった。

それらの女生徒は、誰もが、股間を両手で押さえて、ポカンとしながら痙攣していた。実は、サイクロプスは、女子たちの膣の中に侵入し、子宮を通り抜けて、その奥の卵巣や卵管の中にある卵子だけを食べていったのだ。気の毒に、これで処女膜を破かれちゃった子もいただろうし、膣内がまだゾワリとしていて、気持ち悪かった子もいたのかもしれない。何よりも、彼女たちは、全員、妊娠できなくされてしまったのだ。

骨折り

当時のユカリは、すっかり浮かれてしまっていた。と言うのも、ついに、憧れの存在だった成田先輩のカノジョにしてもらえたからだ。しかし、それは同時に、全校の女子生徒を敵に回す事も意味していたのである。

ある日の放課後、ユカリは、旧校舎の奥にある女子プロレス同好会の部室へと連れてこられた。そこは、実は我が校の不良女子たちの溜まり場であった。連中は、部活を隠れ蓑にして、そこでケンカの練習をしていたのだ。

「なあ、ユカリ！成田先輩と付き合い始めたってな？てめえ、分かってるのかよ！成田先輩は、うちの高校の女生徒全員のアイドルだったんだぞ！」部室で待っていた不良女子のリーダーが、さっそく、ユカリの事を怒鳴りつけた。

でも、ユカリも、こうなる事は、ある程度、覚悟はしていたのである。全ては、成田先輩の正式なカノジョになる為なのだ。いつかは通過せねばならない試練なのである。

不良のリーダーは、次に、入部届の紙をユカリに突きつけた。ユカリに、このプロレス同好会に入部しろと言っているのである。その上で、連中は、稽古をつけているフリをして、ユカリに制裁を下す魂胆なのだ。

この状況では、もうユカリには逃げると言う選択肢はなかった。だけど、この根性試しさえ耐え抜いてみせれば、この不良たちも、きっと、ユカリの事を、完全な成田先輩の恋人だと認めてくれるに違いない。

素直に入部届を書いたユカリに、今度は、不良のリーダーは、練習着のレオタードを押し付けた。すぐ、ここで着替えろと言うのだ。早くも、連中は、プロレスの稽古を装って、ユカリのことをシメる

つもりなのである。
新入りのユカリには、更衣室さえ使わせてもらえなかった。この場で、皆が見ている前で着替えさせられたのだ。
そうするしかなかった。ユカリは、今着ている制服を脱ぎ、下着も全て外す事を強要され、全裸になってから、そのレオタードを身につけたのであった。だいぶ使い古した、汚れたレオタードだった。
すぐさま、ユカリは、皆の試合の相手役をやらされたのである。はじめっから、稽古とか練習なんてものじゃなかった。ユカリは、皆の荒技を一方的に受けさせられる練習人形にとされたのだ。
ダイエットばかりしていて、やせ細っていたユカリでは、もとより、たくましい不良たちには歯向かえそうにはなかった。どのみち、連中の技の実験台になるしかなかったのだ。
ユカリの体に、次々に、彼女の知らなかったようなプロレスの必殺技の数々が襲いかかった。そのどれもが、かけられる側にとっては、ものすごく痛いのだ。ユカリは放り投げられ、床に叩き伏せられ、体を締めつけられ、手足をねじ曲げられて、関節技をかけられた。
一つの技が決まるたびに、ユカリは悲鳴をあげて、思わず「ギブアップ！」と叫んだ。しかし、不良たちは、全く手を緩めてはくれないのである。
「バーカ！試合してるんじゃねえよ！いくら降参しようと、絶対にやめねえからな！」
こうして、ユカリは、不良女子たちに、ひたすら、いろんなプロレス技で暴行され続けたのだった。しまいには、ユカリに尾てい骨割りをしたり、電気アンマをする奴まで現れたぐらいである。
貧弱なユカリの体は、骨もきしみ、筋肉もパンパンに腫れ上がって、肌も一面、真っ赤になってしまった。もう、全体がクタクタになり、床に伏したまま、立つ事さえできそうにないのである。それでも、あからさまな暴力ではなく、正しい型のプロレス技だけで痛めつけられたものだから、大怪我だけはしないで済んでいたような

のだった。
　そして、不良たちの必殺技のオンパレードも、そろそろ種切れかのような雰囲気になり始めていた。ユカリも、内心、少しホッとしたのである。これで、晴れて、成田先輩と愛し合えるようになれるのだ！
「も、もう許してください」頃合いを見計らって、ユカリは哀れっぽく許しを請うてみた。
「いいだろう。じゃあ、これで終わりにしてやる」
　そう言うと、不良のリーダーは、気の緩んでいたユカリのか細いスネをぐいっと踏みつけた。ユカリの弁慶の泣き所のあたりを、硬いパンプスの裏で踏んづけたものだから、ものすごい痛さなのだ。その上で、不良のリーダーは、ユカリの足首を掴み、グイグイひねったのである。これって、プロレス技なのだろうか？
「成田先輩と並んでデートをできない体にしてやるよ」と、不良のリーダーは凄んだ。
　彼女は、ユカリの足を押さえつけたままで、ユカリの足首を力任せに引っ張っていた。どうやら、関節技ではなく、骨そのものを反らさせているのだ。
　それだけではなかった。不良のリーダーは、かなり本気で、力を込めているようなのである。こんなに力を加えられたら、そのうち、いくら固い骨であっても耐えられなくて、ヒビが入ってしまうのではなかろうか。
　ユカリは、突然、これまで感じた事のなかった恐怖にとらわれた。彼女は、生まれてこの方、骨折した事がなかったのである。骨が割れるのって、今までのプロレス技なんかとも比べ物にならないほど痛いに違いない。いや、健康な骨を強制的に折られると言うシチュエーションからして、とっても怖いのだ。
　ユカリは顔面蒼白になった。
「うわ！やだ！やめて！」
　ユカリは泣きわめき、慌てて、バタバタともがいたが、その体を、

他の不良たちががんじがらめに押さえつけた。悪あがきすら、させてくれないのである。

不良のリーダーは、自慢の腕力で、じわじわと、ユカリの足首を、自分の方へと引き寄せていく。ユカリのスネはますます歪(ひず)んで、その事は、冷や汗をかくユカリにも、ダイレクトに感じ取れていた。もう、今の彼女は、本当に骨にヒビが入ってしまうのが心配で、生きた心地もしていないのだ。

周囲にも緊迫した空気が流れている。他の不良女子たちも、まさか、こんな一般生徒相手のヤキで、この地獄の処刑まで見せてもらえるとは思っていなかったからだ。リーダーのこの決め技は、敵対する不良をタイマン勝負で倒した後のトドメでぐらいしか使用した事のない、本当にリーダーのとっときの必殺技だったのである。

次の瞬間、鈍い音を立てて、ユカリの細い足は、大きく、へし折れた。ふくらはぎの真ん中あたりから、引っ張られていた方向へと、ほぼ直角に折れ曲がっちゃったのである。屈強な不良の四肢だって砕き割れる荒技なのだ。やわな一般女生徒の骨などで試したら、鉛筆さながらに、真っ二つになってしまうのである。

ユカリは、汗まみれの顔を醜く歪めて、白目をむいた。それほどの痛さだったのだ。彼女の股間のあたりの床には、漏らしちゃった小便もじんわりと広がっていた。

了

バレエ部のいたずら（前書き）

この作品は、当初、「骨折り」の続きのストーリーにするつもりでした。
その為、話の内容や小道具が、色々と「骨折り」と被っている部分があります。

バレエ部のいたずら

我が校の女子バレエ部に、大型新人が入部しました。その一年生は、３才の頃からバレエをやっていて、大きな舞台にも何度も立った事があったと言うのです。

バレエ部の顧問の先生は、それでも、その一年生を特別扱いする事なく、皆と対等に練習させる方針を取ったのですが、他の部員とその一年生の実力の差は歴然としていました。その一年生自身、ツンとしており、部長や先輩部員の事すら見下していたような雰囲気だったのです。

当然、部の中には、嫌な空気が流れ出しました。全部員が、その一年生の事を特に意識し、内心では嫌っていて、ピリピリしているような状態になってしまったのです。

そして、事件が起こりました。

その日は、顧問の先生が休みで、部長が中心になって、稽古を行なっていたのです。

部員たちは、協力して、きちんと真面目に練習に励んでいたように見えましたが、その中で、あの一年生だけ、やや様子がおかしかったのでした。程度の低い練習内容をバカにして、参加しなかったり、ダラダラやっていたと言う訳ではありません。なんとなく、モジモジしているのです。どうやら、トイレに行きたかったみたいなのであります。

でも、部長は厳しい指導をやめませんでした。その一年生に対して、稽古を中断して、トイレに行くのを認めてやらなかったのです。これまでの確執もあったせいか、なおさら、わざと、そんなキツい態度をとったのでしょう。

すると、膝がガクガク震えていた、その一年生は、とうとう、稽古場のど真ん中でお漏らししてしまったのでした。全く、バレエ部

始まって以来の珍事です。

何よりも、この失態は、この一年生自身にとって、たまらない屈辱だったに違いありません。

でも、それだけでは済まなかったのです。部員たちは、ここぞとばかりに、神聖な稽古場を汚した事で、その一年生の事を責めまくりました。今までの憎しみが、一気に表面化してしまったのです。

悪者扱いされた一年生の方もふてくされます。すると、怒った他の部員たちは、皆で、その一年生に飛びかかっていき、勢いで、制裁を加えてしまったのでした。

彼女たちは、一年生の練習着（レオタード）を無理やり引っぺがしてしまったのです。可哀想に、その一年生は、稽古場の中央で、素っ裸になってしまいました。

そして、そのヌードを見て、他の部員たちは大笑いしたのです。と言うのも、バレエの才能はあっても、その一年生は、とても貧相な体をしていたからであります。ペチャパイだし、乳首ばかりがやたらにデカくて、細い胴体にはくびれがほとんどありません。大陰唇も大きすぎて、かなり外に張り出していました。

実は、他の部員たちは、以前から、この一年生のプロポーションの悪さには、うすうすと気付いていたのです。練習着のレオタード越しに、なんとなく見えていたからであります。無い胸の真ん中でポツンと突起した乳首とか、レオタードの股間部の左右から完全にはみ出していた大陰唇などなど。

バレエ部員たちは、面白くて、その一年生の肉体の見苦しい部分を、全員で冷やかして、囃したてました。その一年生にとっては、まさに針のむしろです。

しかも、それだけでは収まりませんでした。つい興奮してきちゃった先輩部員たちは、この一年生の事を、裸の状態のまま、床の上に押さえつけて、彼女の短所である部分をじかに触りながら、バカにし始めたのです。

可哀想に、この一年生は、乳首を勃起させられたり、陰唇を引っ

張られたりして、稽古場で、皆が見ている前だと言うのに、すっかり悶えさせられちゃったのでした。

プライドの高い、その一年生にしてみれば、こんな恥ずかしい目に遭わされた事は、絶対に誰にも話せません。

彼女は、その日からバレエ部には来なくなりました。そのまま、バレエ部をやめてしまったのです。

でも、バレエ部の方は、それだけでは終わりとはしなかったのでした。

バレエ部の連中は、その後、その一年生がその場に脱ぎ捨てていったレオタードを回収し、こっそり、部室の壁に飾っておく事にしたのです。そして、このレオタードを見るたびに、あの一年生に皆でいたずらして、やっつけた事を思い出して、ゲラゲラ笑うようになったのでした。

時には、男子生徒も、このバレエ部の部室に招待されて、そのバレエ部の伝説を楽しく聞かせてもらう事もありました。実は、僕もその一人で、そうやって、この話を聞き知ったのです。

その一年生の噂のレオタードも見せてもらえました。のみならず、そのレオタードを触らせてもくれたのです。

洗濯なんかしてないので、完全に、女子の脱ぎたてのレオタードなのであります。このレオタードの内側に、その一年生の乳首やら陰部やらが確かに触れていたのです！まるで、彼女の体臭すらも匂ってきそうな気がしました。特に、レオタードの股間部を見た時には、興奮させられました。変色したシミがしっかりと残っていたからです。紛れもなく、その一年生の漏らしたオシッコの痕跡なのであります。

本当のことを言うと、その一年生は僕のクラスメートでした。今日だって、彼女の姿を教室で目にしたばかりだったのです。そんな知っている女子の脱ぎたてレオタードなのかと思うと、僕はますますドキドキさせられたのでした。

この時以来、僕は、このレオタードの感触を思い出しながら、そ

の日に見た、その子の姿や仕草も組み合わせて、夜には、こっそりとオナニーするようになったのです。

了

ぼくは超能力者

僕は、ある時から、超能力を使えるようになった。それも、透視能力と言うやつをだ。

なぜ、こんな力がいきなり身についたのか、はっきりした理由は分からなかった。あるいは、異性の裸を見たいと言う、あの思春期特有の悶々とした気持ちが、この能力を目覚めさせてくれたのかもしれない。

そう、僕は、女の裸を見る為に、この透視能力を、もっぱら使わせてもらったのである。

道を歩く見知らぬ女性でも、テレビに写った有名アイドルでも、僕は、誰の服だって、透視する事ができた。でも、僕はまだ高校生なので、日常の大半は学校で過ごしており、そんな訳で、まずは、教室内のクラスメートの女子たちの裸を、集中して、見物させてもらう事にしたのである。

この透視力を使って覗いた教室の中は、本当に凄い事になってしまった。クラスの全ての女生徒が、素っ裸になって、見えてしまうのである。まさに、圧巻の光景だった。

そして、観察してみると、やはり、女の裸と言っても、けっこう千差万別なのである。まだまだ蕾のような小学生のごときヌードの子もいれば、すでにグラマラスに完成しきっていた子もいた。顔の綺麗さと、プロポーションの良し悪しが、必ずしも一致していなかったので、その点でも、面白かったのだ。最初こそ、僕も、クラスの美人生徒の裸ばかり、選んで見ていた訳なのだが、そのうち、裸だけなら、もっと美しい子もいる事が分かったので、美人生徒ばかりを追いかけるのは止めてしまった。

また、ただ裸を拝むだけではなく、女子たちの知られざる実態まで、目の当たりにする事となったのである。

体の内側まで透けさせて、バージンかどうかの確認まで出来ちゃったのだ。すると、うちのクラスでは、考えていた以上に、もう処女じゃない子が多かったのであった。男子よりも女子の方が、はるかに進んでいるのである。

さらに、生理中の子と言うのも、毎日、そこそこの人数でいたのであった。そんな子は、真っ赤に染まったナプキンを股間の真下にと挟めている。透視で見ちゃうと、なかなか滑稽な格好なのだ。これが、タンポン使用中の子となれば、もっとエロくて、まるでローターでオナっている最中のようにも見えたのだった。

このように書けば、気付かれたかもしれないが、実は、僕は、完全な素っ裸だけではなく、任意の服や装飾品だけを透視させないで見る事だって出来た。だから、クラスの女子たちの下着姿などもチェックする事ができたのだ。これがまた、なかなか面白いのである。せっかくの美貌なのに、残念なダサい下着の子もいれば、ブスのくせに、下着だけはド派手な子もいた。いい加減、全裸を見飽きてきた僕は、こうして、同級生たちの、ブラだけ姿だとか、裸ソックス姿などのセミヌードとかも楽しむようになっていったのである。

そして、実は、ズボラで無警戒な女子だって少なくはなかった。そんな子は、僕の目の前で、大股を開いて、椅子に座ったりして、女性器までバッチリと正面から見せてくれたのだ。他にも、授業中にこっそり股間を掻いているような不謹慎な女子とか、教室の中でひそかにチョビ漏れしていたような女子とかも居て、僕には全てがお見通しだったのである。

そんな風に、さんざん、うちのクラスの女子たちの内側を見まくった末に、ついに、僕は、そのうちの一人と付き合う事に決めたのだった。それが、真面目一本やりのメガネの学級委員だったのである。そんなクソ面白くなさそうな女子に僕が目をつけた事に、僕の友人たちも驚いていたし、当の学級委員自身、いきなり僕から交際を申し込まれて、困惑していたようだった。

でも、僕は、彼女が、眼鏡を外せば、とびっきりの美形であった

事を知っていたし、何よりも、クラスで一番のプロポーションの持ち主である事も分かっていた。なおかつ、彼女は、アンダーウェアに関しては、相当なオシャレさんだったのだ。毎日、洒落たブラやパンティを惜しげもなく日替わりで履いていたし、それがきちんと彼女には似合っていた。そして、何よりも、彼女は、まごう事なき、生粋の処女だったのである。挿入行為をした事さえ無かったのか、彼女の膣の内側には、全く破損していないキレイな処女膜が、そのままの状態で備わっていた。ここまで潔癖な美しいバージン女子高生は、ちょっと他には見つからないのだ。

　つまりは、そんな子だった訳だから、僕の方では、この学級委員と交際する事には、いっさい不満は無かったのであった。

了

脱会リンチ

もうずっと昔の話になるが、うちの高校には、かなり悪質なレディース（女の暴走族）がはびこっていて、我が校を自分たちのアジトとしても使っていた。うちの高校のスケ番や不良女子は、皆、そのレディースに参加しており、うちの地域でもトップのレディース集団として恐れられていたのだ。男の暴走族からも、一目置かれていたほどである。

彼女たちの悪名高い伝説は数多くあったが、中でも、このレディースから無理に抜けようとするメンバーへの制裁の話は、噂ながらも、とても良く知れ渡っていた。

あまりの残酷さから、このレディースから抜けたい女子のほとんどは、この制裁を受けずに逃げ出そうとするらしいが、たいていは追ってに捕まってしまい、結局は、このリンチの洗礼を受けてしまうのだそうだ。

追ってに見つかって、我が校のアジトへと連れ戻された女子は、まずは服を脱がされて、丸裸にされてしまう。それから、逃げられないように、手足を拘束されて、いよいよ、恐怖のリンチが始まるのだ。

処刑官役の女子は、カミソリを取り出すと、はじめに、犠牲者の女子の両方の乳首を剃り落とす。乳首をつまむと、その根元にカミソリの刃を当てて、くり抜くように切り取ってしまうのだ。

これだけでも、女の子にとっては、かなりキツい。乳輪の中央が血まみれの平面になってしまったのを見て、犠牲者は、あまりにもショックが強くて、わあわあと泣き叫ぶのだそうである。

しかし、乳首を切り落とすリンチは、他の硬派のレディースでも行なっているものだ。うちの高校のレディースの制裁の場合は、さらにもっと凄いのである。

このあと、処刑官の女子は、乳首が無くなった犠牲者に対して、何の同情も見せず、今度は、彼女の足を左右に押し開く。これで、その子の性器が丸見えだ。中でも、クリトリスを探し当てると、その包皮をめくって、刺激を与えて勃起させた後、次はそれをバッサリやっちゃうのだ。

大きなクリトリスならば、乳首同様に、根元からカミソリでスパッと切ってしまうが、あまりにクリトリスが小さめだった場合は、彫刻刀を差し込んで、奥からゴソッとえぐり取る。どっちにしろ、刑は執行されるのだ。

ただし、これが終われば、この犠牲者の子も、ようやく解放される事になる。あと腐れなく、レディースを脱会する事を許してもらえるのだ。

とは言え、女のシンボルを三つも失った事は、かなり精神的ダメージも強いと思われ、この制裁を終えた後の犠牲者は、しばらくの間は、股間を両手で強く押さえながら、泣きじゃくり、体を丸めて、その場にうずくまっていると言う。

この話が、どこまで真実だったのかは分からない。だが、乳首に関して言えば、整形手術によって、ある程度、復活させる事も可能なはずであろう。しかし、クリトリスの方は、さすがにそうはいくまい。

もし、あなたの妻や恋人が、乳首にどこか違和感がある上、クリトリスもどこにあるのか見つからないようだったとしたら、あるいは、彼女は、うちの高校のレディース出身者だったのかもしれない。

了

制服が廃止になったら・・・

うちの高校では、新年度から、制服が廃止となった。生徒は、全員、私服で学校に来てもいい事になったのだ。これまで使われていた制服は完全に使用禁止である。校内は、一気に自由の空気に包まれたのだ。

すると、私服登校が始まって、ひと月も経たないうちに、早くも、おかしな問題が発生したのだった。誰が最初に言い始めたのかは知らないが、教室の中が臭い、と言う噂が、クラスメートの間で広まり出したのである。制服登校の頃には起きなかった事態だ。

真っ先に疑われたのは、いつも同じ服を着ていた、内気な女生徒である。彼女は、かなり貧乏な家の子だと皆には知られており、確かに、着ていた私服もかなり地味で、古くさそうなのだった。彼女には、親しい友達もおらず、いつも一人だったので、間接的に誰かに聞いて、真相を確かめる訳にもいかなかったのである。

このままでは、その女生徒は、クラスの女子たちの総スカンを食って、陰湿なイジメにあってしまうだろう。そこで、俺たち男子が、一肌脱ぐ事に決めたのだ。

俺と何人かの仲間は、放課後に、その女生徒のことを、無理やり、校舎の一番奥の男子トイレへと連れ込んだ。そこは、普段から誰も来ないような、この学校の盲点となっている場所なのだ。

そのトイレの中で、俺たちは、その子の服が本当に臭っているのかどうか、確認してみる事にしたのである。

俺たちは、嫌がっている彼女の服を無理やり引っ剥がした。あらためて見ても、ボロな古い服なのである。もしかして、親のお下がりなのだろうか。上着にもスカートにも、あちこちに、何カ所も修復した後があるのだ。よく、こんな服を、恥ずかしげもなく、学校に着てこれるものなのである。

だが、嗅いでみると、本当に、この服が臭っていたのかは、いまいち、はっきり分からなかったのであった。

俺たちは、下着姿で震えている彼女の方に目を向けた。ひょっとすると、この下着が臭っていたのかもしれない。あるいは、この子自身が、あまり風呂に入ってなくて、臭かった可能性もある。

俺たちは、今度は、迷う事なく、彼女の下着を脱がしてみた。もちろん、彼女は、泣いて抵抗したが、男子数人の力には勝てるはずもないのだ。

こうして、俺たちは、奪い取った彼女の下着に鼻を当ててみた。これまた、ヨレヨレの、汚らしい下着なのである。パンツなんて、破けた穴を縫った跡があるだけではなく、黄色いシミまで付いていたのだ。臭かったのは、これで間違いあるまいとも思われたのだが、実際に臭いを嗅いでみると、普通に小便くさい臭いはするものの、そこまで悪臭だとも思えないのであった。

俺たちは、全裸で怯えていた彼女のことを、再度、凝視した。では、次は、彼女自身の体もチェックした方がいいのだろうか。

ところが、どうするか迷っていた矢先、俺たちの仲間の一人が、いきなり、彼女めがけて、飛びかかってしまったのだった。

どんな貧乏人の臭う女子だとしても、彼女だって、女である事には違いないのである。たとえ、見苦しい貧弱な裸であろうと、見ているうちに、その俺の仲間はムラムラしてきちゃったのだ。そして、彼が、そんな風に、本能に負けてしまったものだから、俺たちも堪え切れなくなり、いっせいに彼女に襲いかかってしまったのだった。

俺たちは、よってかかって、彼女のことを犯しまくったのである。想像はついていたが、彼女はまだ処女だった。俺たちの肉棒で、彼女の体を内側からも擦(こす)ってやったのだ。中出しはしなかった。仲間の一人が、スペルマは、ボディソープ代わりに、この子の肌にかけてやろう、と言ったからである。だから、俺たちは、その意見に賛同して、その通りにしたのだ。

最後に、俺たちは、トイレのバケツで汲んできた水を、彼女の頭

の上から引っかけた。彼女の体を、ことごとく洗ってやったのだ。これで、彼女の臭いも、だいぶ落ちたはずなのである。

彼女の着ていた服については、下着も含めて、俺たちの方で、没収した。こんな臭う服を二度と着させない為である。

「明日からは、もっと綺麗な服を着てこいよ。見ろ！こんな服は破いて、もう着れなくしてやる」

実際に、彼女の前で、彼女の上着をビリビリ引き裂いてみせると、彼女は、裸のまま、泣きながら、俺たちの方を睨んでいた。

このあと、彼女のことは、そのまま、トイレに置いてきてしまったのだが、翌日にはもうトイレには居なかったので、素っ裸でも、なんとか帰宅したのだろう。

で、彼女から取り上げた服については、俺たちの方で本当に処分してしまった。校内のゴミ焼き場に持っていって、全部、燃やしてしまったのだ。女の下着については、欲しがる奴もいそうな感じがしたのだが、結局は誰も名乗りあげなかったので、まとめて焼いてしまった。

こうして、俺たちは、教室の美化活動にと一役かってやったのだ。

ところが、この一件は、のちのち、学校の方でも、大きな問題となってしまった。その結果として、私服登校は中止となり、うちの高校は再び、制服登校に逆戻りする事になったのである。

日本人と言うのは、もともと、全員同じで、一律に横並びになるのが好きな人種なのだ。皆を好き勝手にやらせてみたら、そこから各人の違いや格差が浮き彫りになり、いずれは対立とか差別とかにも発展してしまうものなのである。学校へ私服で登校する制度など、そもそもが、我が国の体質には向いていなかったのであろう。

了

変身ヒロイン

あたしは、女子高生として学校に通っている傍ら、日本の平和を守る変身ヒーローもやっています。

正義の五人戦隊レンジャーマンの紅一点のピンクこそが、このあたしなのです。ひとたび、世間で事件が発生すると、すぐに、あたしのところへも、本部から連絡が入ってきて、すると、あたしも、戦闘コスチュームを着て、変身し、直ちに現場へ向かって、悪い怪人たちをやっつけるのであります。

あたしが、ヒーローをやっている事は、学校の方にも承諾を得ていました。そうじゃないと、いざという時に、堂々と授業を抜け出せられなかったからです。先生方だけではなく、あたしの友達も、その他のクラスの生徒たちも、全員、あたしの正体は知っていたのでした。

だけど、一つ、困った事にもなっちゃいまして、実は、あたしがあんまり大活躍するものだから、とうとう、うちの学校には、あたしの非公認のファンクラブまで出来ちゃったのです。

いい事じゃないかと、皆さんは思われたかもしれませんが、そうとばかりも限りません。ファンの男子たちが、すっかり、あたしの追っかけになってしまい、あたしのヒーロー職の任務にも支障が出てきてしまったからです。

特に、ファンの男子たちが、あたしの変身シーンを見たがるのには閉口しました。

あたしの戦闘コスチュームは、本部の転送システムで、あたしの体の上にじかに送られてきます。あたしは、ほんの僅かな時間で、レンジャーマンのピンクに変身してしまえるのです。ところが、その変身の一瞬は、それまで、あたしが着ていた私服や学校の制服の方も、あたしの周囲から消えてしまいました。なぜかと言いますと、

あたしの変身の仕組みは、コスチュームと私服が互いに転送しあって、入れ替わる方式だったからであり、そこには少しタイムラグがあったので、その短い時間は、あたしはオールヌードになってしまったのです。あたしのファンの男子たちは、あたしのそんな恥ずかしい一コマまで見たがったのでした。

はなはだ迷惑であり、あたしは、学校の先生にも相談して、男子たちには注意してもらったのですが、いっこうに状況は改善されません。何よりも、授業中に、本部から連絡が来た時は、あたしだって、学校内ですぐ変身したかったのですが、いくら隠れようとしても、そのファンの男子たちが、あたしの後をついてきて、そのヌードになったところを写真にまで撮ろうとしたのでした。

ファンの男子たちの行動はエスカレートするばかりで、ついには、彼らは、あたしたちの戦闘の邪魔にもなってきました。あたしのピンクのコスチュームは、可愛いミニスカート姿だったのですが、ファンの男子たちときたら、やたらと、あたしのパンチラをカメラに撮りたがったのです。

怪人との戦闘中だと言うのに、彼らだったら、ギリギリまで、あたしのそばへと接近してきます。あやうく、あたしの技が彼らにぶつかりそうになり、慌てて技をセーブしたところ、怪人に反撃されてしまうような失態をおかしてしまう事も卒中でした。ずる賢い怪人の中には、自分が倒されそうになった時に、いきなり、あたしのファンの男子を盾にする奴も出てきたのです。おかげで、何度も、怪人を取り逃がしてしまいました。

こんな不祥事が起きてしまう度に、あたしが、リーダーのレッドに怒られてしまうのです。

ちなみに、あたしがヒーローをやっているものだから、あたしの学校も、たびたび、怪人に襲撃される事がありました。発明家の怪人が、あたしに催眠光線を浴びせて、あたしを自分たちの仲間に引き入れたエピソードの時は、けっこう可笑しかったです。この時は、あたしも、怪人の仲間になって、校内で思いっきり暴れまくってや

ったのであります。

この時ばかりは、あたしも、日頃の恨みも込めて、あたしのファンの男子たちばかりを追いかけ回して、存分にぶん殴ってやりました。これまでの借りをたっぷり返させてもらったのです。もっとも、あたしに蹴られた時、あたしのパンチラを間近で見れたと、逆に喜んでいたような男子もいた訳だったのですが。

了

スマホ世代

うちの女子高で、スマホの常時装備が解禁となった。そもそも、スマホやケータイは、緊急時に電話を掛けられてこそ意味があるものなので、そうであるのが当たり前だったのだ。

しかし、その一方で、休み時間とか授業中にスマホで遊ぶ生徒がいっぺんに増えてしまったのも、事実なのだった。特に、うちは女子高だから、やたらと、どこででも写メや動画を撮りたがる子が増加したのである。

そうした動画の撮り合いをしているうちに、次第に、皆は、決定的瞬間を撮る事を競い出した。と言っても、なんて事はない。要するに、女子同士のはしたない姿を隠し撮りする事を、皆は張り合いだしたのだ。

例えば、だらしない姿勢で座っていて、パンチラやパンモロなどをしていたら、すぐに他の女子の被写体（ターゲット）になってしまった。なにぶん、同性しかいない女子校内だから、皆、つい油断をして、ズボラな姿もうっかり晒してしまうのである。服を派手にめくって、胸や股間を下品に手で掻いているところを、がっつり、クラスメートに写されてしまったような子もいた。

また、ある放課後の話である。一人の女子が、友人と一緒に、せかせかしながら、帰路を急いでいた。実は、彼女はトイレに行きたかったのだ。彼女は、もはや限界に近い状態だった。そこで、彼女は、帰り道の途中にある公園のトイレに駆け込む事を思い付いたのである。

ところが、いざ、公園に着いて、公衆トイレの前に行くと、その女子は愕然とした。なんと、トイレは改装工事中で、使用禁止になっていたのだ。

彼女の方も、このトイレに全ての望みを託していたものだから、

もう我慢できそうにはなかった。彼女は、泣きそうな顔になって、その辺をオタオタとうろつくと、次の瞬間、ジョボジョボと、制服姿のまま、放尿してしまったのである。

そこで、彼女は、ハッとした。同行していた友人が、スマホを、自分の方に向けていたのだ。

「やだ！撮らないでよぉ！」彼女は、赤面して、慌てて、訴えた。オシッコの方も、急には止まらないのである。

「いいから、いいから」と、友人の方は、まるで応じようとせず、冷ややかに、スマホを写し続けていた。身内の女子のお漏らし現場なんて、滅多にお目にかかれるものじゃないから、この子も、このスクープを逃したくはなかったのである。

とうとう、漏らしちゃった子は、その失禁現場を、一部始終、スマホに撮られてしまったのだった。

さらに、別の教室での休み時間の出来事である。そこでは、いつもイジられていた女子が、皆から、ふざけて、服を脱がされていた。こんな遊びは、同性しか居ない空間では、よく見掛けるものなのである。だが、その日は、皆も、ちょっと調子に乗りすぎちゃったようなのだ。ついやり過ぎてしまったらしく、とうとう、そのイジられていた子のパンティまで脱がしてしまったのである。

「やだぁ、皆。もう、パンツ、返してよぉ！」と、そのイジられていた子は、頬を赤らめ、照れ笑いしながら、自分のパンティを取り戻そうとして、右往左往した。最後の一枚まで剥ぎ取られてしまった訳なのだから、当然、今の彼女は素っ裸なのだ。でも、同性しか居ない訳だし、そこまで本気で怒ったり、恥ずかしがってもいないのである。おっぱいや股間とかも、必死に隠したりはしないで、けっこう平気で露出しちゃっているのだ。

しかし、そんな彼女の姿を、周囲では、何人ものクラスメートが、さりげなくスマホで写していたのだった。

教室の中で、一人だけが全裸でウロチョロしている光景は、あとから冷静になって動画として眺めてみると、けっこう異様なのであ

る。それも、数個のスマホで、多角度から撮っているのだ。その裸の女子は、体の隅々まで、動画にと写されてしまったのである。学生時代の思い出と言うには、なかなかの赤っ恥の動画なのだ。

　このように、スマホで写された女子高生たちのあられもない日常の数々は、友人の間だけで見物されたのではなく、他のクラスや他の学年にまで拡散されてしまい、学校中の生徒の間で密かに回し見される事になっていったのだった。女子という生き物は、ほんとに、他人の失態とか、みっともない秘密とかが好きみたいなのである。

　ただ、そうした動画を入手した女子の中には、これらの他の女子のエッチな姿を見ながら、それを我が身に重ね合わせて欲情し、こっそりオナニーしていたような子も居たらしかったのであった。

了

サイクロプス、再び

彼は、なんとなく、夜の繁華街をぶらつき歩いていた。すると、その怪しい女子高生に、たまたま出くわしたのである。高校の制服を着ていたのだから、多分、女子高生だったのに違いあるまい。しかし、路上にたたずむ彼女は、明らかに、今日の夜のお供をしてくれそうな男を探していたように見えたのだった。

だから、彼の方も、多くを聞かずに、あっさり彼女の誘いにと乗ってやったのである。

二人はすぐにラブホテルへと直行した。すると、部屋に入るなり、女子高生の方はさっさと服を脱いでしまったのである。驚くほどの好色ぶりなのだった。彼も慌てて、服を脱いで、裸になったのだ。

二人は、さっそく、ベッドの上で愛の行為を行ない始めた。彼が、下になって、仰向けに横たわり、女子高生の方が、その上にまたがったのである。彼女は、彼の頭の方に自分の尻を向けて、ひたすら、彼のペニスをしゃぶり続けた。彼としては、早く本番行為にも望みたかったのだが、こうして、相手の股間を眺め続けているのも、それほど悪い気はしなかったのである。

とにかく、その女子高生は情熱的だった。激しく、彼のものをフェラチオし続けたのである。だが、あまり上手な方ではなかったのかもしれない。彼女は、時々、彼のペニスに歯を当ててしまう事があり、その度に、彼はピクンと体を引きつらせたのだ。

とても気持ちよくなり、彼も、そろそろセックスへと移行したいと思っていた矢先である。

突然、部屋のドアが、バタンと開いた。そして、外からは、黒ずくめの二人の男が入ってきたのだ。

もちろん、彼はビックリした。しかし、驚きすぎて、身がすくんだのか、体がうまく動かないのである。

女子高生の方は、そうではなかった。彼女は、落ち着いた様子で、彼の上から立ち上がると、まるで動揺もせずに、入ってきた男たちの横に並んでみせたのである。

「き、君たちは、一体？もしかして、美人局だったのか？」やっとの思いで、彼は、そう口にした。

相変わらず、彼の体は動かないのである。どうやら、いつの間にか、女子高生によって、しびれ薬か何かを嗅がされていたらしかった。

「ごめんなさい。私たちは食人種族（サイクロプス）なのよ。あなたの事を食べる為に、こうして、罠を張らせてもらったの」女子高生は、クールに、彼へと真相を告げた。

「サイクロプスだって？ぼ、僕の事を根こそぎ食べちゃうつもりなのか？」彼は震えおののいた。

「いいえ。その点は安心して。私たちは、あなたを殺さず、一部分だけを頂戴する予定よ」

そんな会話をしている間も、女子高生の仲間の男たちは、作業にと取り掛かっていて、彼の体をベッドから降ろすと、床の上にと直立させていたのである。体がしびれて、硬直していたので、まっすぐ立させる事もできたのだ。

「一部分って？目玉とか、耳とかを食いたいのか？それとも、脳みそとか、肝臓だとか？」

「いや。私が食べたいのは、これよ！」

そう言うなり、女子高生は、右手を伸ばし、彼のすでに縮み上がっていた男性器をムギュッと鷲掴みにしたのだった。彼はギクッとした。

「うふふ。さっきまでは、あんなに大きかったのに、今では、恐怖で、こんなに縮まっちゃっている。この、勃起した直後の一気に弛緩した状態の海綿体が、通常よりも肉厚になっていて、特に美味なのよ」

女子高生は、嬉しそうに、彼の縮まったペニスを軽くしごいてみ

せた。そして、皮の内側に隠れてしまっていた亀頭も無理やり外に露出させたのだ。

「でもね、このペニスの先端は、膨れ上がって、表皮がピンと張っていた方が歯ごたえがあるのよ」と、女子高生は無邪気に笑った。

「ああ！じゃあ、君はフェラチオしながら、実は、わざと僕のチンポをかじっていたのか！」

「そうよ」すました表情で、女子高生は答えた。

彼の亀頭も、今は萎縮して、しなびていたのだが、その表面には、くっきりと、女子高生の歯型が付いていたのである。そりゃあ、あれほど痛かったはずなのだ。

「あの時、あと少し力を込めないようにして、完全に噛み千切るのだけは止めてあげたのよ」

女子高生が、彼の亀頭を指先で弄びつつ、ケロッとそんな事を言ってのけたので、彼はあらためてゾッとしたのだった。

「ああ。こんな事なら、せめて、最後にきちんとヌいてほしかったよ」と、彼はぼやいた。

「ダメよ。だって、睾丸は、中に精子がいっぱい詰まっていて、放出される寸前だったものが、一番おいしいんですもの。ほら、外の皮だって、今は縮んでしまって、こんなブヨブヨで、噛みごたえがありそうになってるでしょ。両方をまとめて食べたら、きっと、とびっきりの食感だわ」そう言って、女子高生は、舌なめずりをし、今度は、彼の陰嚢を握り、中にある二つのキンタマをじりじりと擦り合わせてみせたのだ。

性器にまでは、しびれ薬が回っていなかったのか、敏感な急所をいじられると、かなり痛いのである。彼は、思わず顔をしかめた。

「さあ、お喋りも、そろそろ、おしまいよ」と、女子高生が叫んだ。

続けて、彼女の仲間の男たちが、包丁とまな板を取り出した。

男たちは、彼の男性器の真下に、ピタッとまな板を押し当てたのである。こうして、まな板の上に乗せられると、彼の男性器も、確かに食材っぽく見えてきたのだ。そして、まな板の冷たさが陰嚢か

ら伝ってきたものだから、彼も、ヒシヒシと、男性器を切除される実感が湧いてきたのである。

「あああ。あああ」と、彼は、悶えるような声を漏らした。性器への度重なる暴力と、ついには去勢されてしまう事に、何やら興奮してきちゃったのである。

いよいよ、女子高生が包丁を手にした。包丁は、とても切れ味が良さそうで、刃がギラギラと光っているのだ。女子高生は、彼のペニスの根元あたりに、包丁の狙いを定めると、まるでギロチンのように、勢いよく、その包丁を振り下ろした。

次の瞬間、主人の体から切り離された男性器は、まな板の上にゴロリと転がったのである。生殖能力も失い、それは、本当に、サイクロプスたちのただの食い物になってしまったのだった。

了

北国のユキちゃん（前書き）

本作は、あくまで地元（北海道）愛に基づいているのであり、決して、侮蔑とか偏見とかの産物ではありません。

北国のユキちゃん

うちの高校の工業科のクラスには、女子生徒が一人だけ在籍していた。それがユキちゃんなのだ。

ユキちゃんは、北海道の山奥から勉強する為に上京してきた、とてもガタイのいい少女だった。彼女は、器量はまあまあだったものの、生まれ育った北海道の大自然に似たのか、体の方は思いっきりダイナミックボディで、性格もたいへん大らかだったのである。

だから、クラスの男子たちは、全員、彼女のことが好きになり、やたらと彼女の体を触りたがったのだった。例えば、挨拶がわりに、いきなり彼女にバックハグして、ついでに大きな胸も揉ませてもらったり、あるいは、そっと背後から近づいて、お尻をギュッと両手で鷲掴みさせてもらったりもしたのだ。でも、そんな事をされても、おっとりしたユキちゃんは、まるで怒らなかったのである。

「もう、あんたったら、何すんのさあ！はんかくさいな！」と、訛りながらも、笑って、男子たちのことを軽くあしらったのであった。

そんな訳だから、クラスの男子たちは、ユキちゃんのことを、ますます好きになっていったのである。しかし、抜け駆けして、ユキちゃんを自分のカノジョにしようと企む奴とかも、不思議と現れなかったのだ。

そのうち、工業科のクラスの修学旅行の日がやって来た。この時も、男子たちは、とっても大喜びしたのだ。と言うのも、ユキちゃんと、旅行先で一緒に寝泊まりができたからである。

温泉宿に着くと、男子たちは、さっそく、単独行動しているユキちゃんの追跡を開始したのだった。

まずは、お風呂での入浴だ。女湯を秘密裏に覗いてみると、見事に、入浴中のユキちゃんと遭遇する事になったのである。大胆かつ豪快なユキちゃんは、風呂場では、自分の体を全く隠そうともして

いなかった。だから、いつも触らせてもらっていた彼女の体も、ありのままに見物させてもらえる事となったのだ。

彼女の裸は、まさに、北海道の大自然のごとし野性味に溢れていた。牛のような巨乳に、メス馬のようなデカ尻とたくましい太もも。肌は初雪のように白く、胴のくびれは滑らかな雪山の傾斜（スロープ）のようだった。デルタ地帯に生やした性毛だって、モジャモジャで、まるでヒグマの剛毛みたいなのだ。その荒々しいまでの女体の美しさに、男子たちはすっかり見とれてしまったのである。

そして、彼らのお楽しみは、これだけでは終わらなかった。就寝時間が来れば、今度は、女子の部屋の覗きにと取り掛かったのである。と言っても、女子はユキちゃん一人なのだから、その部屋は彼女だけの専用部屋なのだ。その部屋が、自分たち男子の部屋の隣だと分かると、彼らは、壁に小さな穴を開けて、さっそく、覗き行為をおっ始めたのである。

こうして覗かせてもらうと、部屋に一人っきりなものだから、ユキちゃんも完全にリラックスしていたのだった。故郷の片田舎での慣習だったのか、部屋の中の彼女は、浴衣も着ないで、全裸でくつろいでいたのだ。

しかも、あぐらをかいた彼女が、覗き穴の方に体を向けると、股間にあった大事な部分までバッチリと見えてしまった。ユキちゃんは、アソコですら、北海道産の特大ホタテだったのである。

さらに、彼女は、一人なのをいい事に、覗かれていたとも知らずに、電動バイブを出してきて、オナニーまでやり始めたのだった。女の子の恥ずかしいプライベートの一コマだ。全く、地方出身の純粋すぎる子ってのは、旅先でも、気にする事なく、普段しているのと同じ行為ができるらしい。

バイブは、ズボズボと、ユキちゃんの特大ホタテの中へと入っていった。まだまだ子供のように見えたのに、彼女は、とうの昔から、処女ではなかったのである。それも、広大な北海道育ちの娘は、アソコも広い太平洋だったと言う、衝撃的なオチなのだ。

了

しりとり鬼

その坂は、夜になると、お化けが出てくると言うウワサがたつほど、暗くて、淋しい場所だった。

その坂を、今、三人の女子高生が、ワイワイと楽しく喋りながら、ゆっくりと歩いていた。三人とも同じ制服姿であり、どうやら、学校帰りみたいなのだ。

「ねえねえ、あなたたち、知ってる？」

「何を？」

「この坂、本当にオバケが出るらしいのよ」

「ええ！やだあ」

「それが、おかしなオバケなのよ。現れたら、相手の人間にしりとりを仕掛けてくると言うの」

「しりとり？」

「そう。そして、そいつは、しりとりに負けたら、何もしないで、消えてしまうそうなのよ」

その時、この三人の目の前の道に、本当に、白いものがボーッと現れた。それは、大きさも輪郭も、なんとなく、人間っぽいのである。

「きゃあーっ！マジで出てきたわ！」

「やばーい！」

「しりとりするオバケよ！」

「しぃ、しりとり～」と、その白いものは、か細い声で話しかけてきた。

「やだ。もう、しりとりは始まってるんだわ！」

「じゃあ、『しりとり』だから、最初は『り』ね」

「リンゴ！」と、女子高生の一人が言った。

「ゴリラ！」と、次の女子高生が言った。

「ランチ！」と、もう一人の女子高生が言った。
しりとりの順番は、オバケの方へと戻ったのである。
「ちぃ、ちぃ・・・」と、白いオバケは、ボソボソとつぶやいた。
女子高生たちも、息を飲んで、オバケの返事を待っている。
「違ーうぅ！ワシが言っていたのは、この尻だあー！」
次の瞬間、白い化け物はぐんと膨れ上がり、勢いよく、女子高生たちの方へ飛びかかっていった。その両腕の先で、ギランと鋭い爪が光ったかと思うと、化け物は、一人の女子高生の服を、何もかも、ズタズタに裂き破いてしまったのだ。そして、その女子高生の剥き出しになったお尻に、お化けはガブリとかぶりついたのだった。

了

口説きゼリフ

高校に入ってから間もなく、僕にもカノジョができる事となった。でも、僕はそれまで女性との恋愛などした事がなかったものだから、二人の関係は、なかなか先には進まなかったのである。

なんとか、手を握り合えるようにはなれた。お互いの家に、相手を招待できるようにもなった。しかし、その次が、どうすればいいかが分からないのである。どう話を切り出して、友達以上の関係にと誘ってみたらいいのかが、まるで思いつかなかったのだ。その為、僕とカノジョの仲は、完全にキスの直前で止まっていた。本当は、思春期の真っ最中で、どちらも、異性の事がとても気になっていた年頃だったと言うのにだ。

ある日、僕は、カノジョの事を、僕の家へと招いた。その日は、僕の家には、家族は一人も居なかった。完全に二人っきりになれて、二人の間柄を発展させるには、絶好のチャンスだったのだ。

そこで、僕は、一緒に僕の部屋の中にいた時、カノジョへ、こう話を持ちかけてみたのである。

「ねえ。ちょっといいかな？」

「え。なあに？」

「前から、気になってた事があるんだ」

「何を？」

「女の人って、オチンチンが無いんだよね？」

「え。そ、そうだけど」

「じゃあ、お股の毛って、どんな風に生えているんだい？」

「そ、そりゃあ、普通に生えているわよ」

「でも、アソコには何もなくて、真っ平らなんだろう？」

「そ、そうよ」

「どうも、想像がつかなくて」

「気になる?」
「うん」
「見てみたい?」
「いいのかい」
こうして、僕は、まんまと、カノジョに服を脱ぐ口実を与えたのだ。そうなるのを、実は、ずっと待っていたカノジョの方も、顔を赤らめつつ、すぐ話に乗ってきてくれたのである。
カノジョは、僕の前で、スカートもパンツも脱いでみせてくれた。カノジョの下半身が、僕の目前で露わになったのだ。僕にとっても、はじめて見る、女の子の股間部だった。
「どう?」
「ふうん。なるほどね」
「きちんと毛は生えているでしょう?おかしくないでしょう?」
「うん、でも・・・」
「なあに?」
「なんだか、地面にほんのりと若草が生えているみたいだ」
「え、え!や、やあだぁ」
それまで、照れて緊張していたカノジョが、思わず、屈託なく微笑んだのだった。二人の間のよそよそしさが、一気に吹っ飛んだのである。
カノジョに対して、これ以上の事をしても大丈夫だと思えた僕は、いきなり、半裸の彼女の上にのしかかったのだ。カノジョはまるで抵抗もせず、僕にされるがままであった。
だから、僕は、すぐにカノジョの上半身の服も脱がせて、カノジョを完全に裸にしてしまったのである。その勢いで、カノジョの口にキスもさせてもらった。
こうして、二人の関係は、いっぺんに前進したのである。そのあと、僕は、カノジョと初のセックスも体験させてもらったのだった。カノジョの若草のような性毛の上に、僕の体もべったりと擦り付けながら。

了

地球人の正体

地球人の女性が転校してくると言うので、ピット星のその高校も大騒ぎになっていた。なんたって、ピッティアン（ピット星の人間）以外の人類を学校で受け入れるのは、ピット星自体にとっても初めての試みだったからだ。

しかし、実際に、その問題の地球人の女生徒がやって来ると、意外にも、その子は、普通の女子なのであった。

地球は、まだまだ、とても野蛮な星だと聞かされていたのだが、その地球人の女子は、全然、ピッティアンなみの文明人だったのである。服も着ていたし、言葉も流暢に話せた。それぱかりか、性質は理知的だし、礼儀作法（マナー）もしっかり備わっていて、たいがいの道具も難なく使いこなしたのだ。しかも、ピッティアンの基準で判断しても、十分に美形だったのである。

在学していたピッティアンの生徒たちが抱いていた地球への悪いイメージは、いっぺんに払拭した。こうして、地球から来た女生徒は、たちまち、そのピット星の高校の人気者になったのである。

あるいは、先進国のピット星に留学すると言う事で、その地球人の女生徒も、地球の中では特に優秀な人材が選ばれていたのかもしれなかった。だが、そうだったとしても、こうして、ピッティアンたちとも無事に肩を並べる事ができた訳なのだから、これ以上、細かい事まで勘ぐる必要もないのだ。

時が経ち、やがて、その地球人の女生徒にも、彼氏ができるようになった。もちろん、ピッティアンの男子生徒の彼氏だ。その彼氏のことを、他のピッティアンの生徒たちは、たいへん羨ましがったのであった。

でも、実を言うと、その彼氏のピッティアンしか知らない、ある秘密があったのだ。

地球人の女生徒は、そのピッティアンと正式に恋仲になると、すぐさま、その彼氏のことを自分の家へと誘った。それから、家の中で二人っきりになるなり、地球人の女生徒は、なんと、その彼氏へとセックスの相手をする事を求めてきたのだ。超文明人であるピッティアンは、すでに性行為などは行なわない肉体構造に進化していたとも知らずにである。

地球人の女生徒は、その彼氏の前で全裸になった。それを見て、彼氏の方も、思わず、目を見張ったのである。

と言うのも、地球人の裸体は、あまりにも野生そのものだったからだ。

胸には、赤ちゃんに乳を与える為の大きな栄養袋があり、腹には、過去に母体とつながっていた痕跡が残っていた。切開手術に失敗した跡のごとき、丸い窪みである。腰の正面には、そこにだけ、ケモノのような太い体毛がごっそりと生えているし、子供を産むのに適したボディなのか、お尻だって、やたらとデカくて、膨らんでいるのだ。さらに、股間の中心部には、排泄用の穴以外に、男性器を挿入できる第三の穴まで開いていた。その原始的な穴の左右には、ディスプレーと思われる皮膚のビラビラまで付いていたのだ。そして、それらの醜悪な器官の表面には、ヨダレ状の体液まで、したたらせていたのだった。

一見、洗練された文明人のようにも見えた地球人の女子ではあったが、生殖をつかさどる体の部位は、まだまだ未開なままで、そこに地球人の野蛮なものはまとめて集中していたのである。

了

怪しい小箱

うちのクラスには、不良の女生徒が数人いた。彼女たちは、自分たちだけでツルんでいて、昔のスケ番を彷彿させるような荒れっぷりを見せていて、級友は彼女たちには関わらないようにしていた。

幸い、この不良女生徒たちは、一人の女子を、パシリとして、完全に自分たちの子飼いにしており、怒りも無茶ぶりも、全て、その女子にぶつけていたようなので、他の生徒たちは被害をこうむらなくて済んでいたのだった。

ある日、僕は、そんな彼女たちが、校内の廊下の片隅でたむろしていたのに出くわした。彼女たちは、なにやら、可笑しそうにニヤニヤしているのだ。

「おい。ちょっと、面白いものを見せてやるよ」と、不良女生徒の一人が、僕に声をかけてきた。僕は、彼女たちとは、そこまで疎遠な関係でもなかったのだ。

そんな訳で、僕が彼女たちのそばに寄っていくと、彼女たちは、僕へと小さな木箱を差し出してきた。指輪でも入れておくような感じの小箱である。

「開けてみろよ」と、不良女生徒の一人が僕に勧めた。

僕が、言われた通りに箱の蓋を開いてみると、その小箱の底には、脱脂綿が詰まっていた。そして、その脱脂綿の上に、ちょこんと飾るように、小さな肉片が置かれていたのである。大きさは5ミリもない、丸い塊だ。色はピンクか赤褐色に近い。一見、むしり取ったイボみたいでもあった。

「何だと思う?〇〇から切り取ったもんなんだぜ」と、不良女生徒が笑いながら言った。

〇〇とは、この不良女生徒たちにパシリとして使われていた女子の名前だ。

僕は、この不良女生徒たちが、〇〇の事を、外ではパシリとして使役して、自分たちの溜まり場に戻れば、いじめて遊ぶオモチャにしていた事を知っていた。彼女たちは、裸にして拘束した〇〇を電動バイブ責めにしたりして、面白がっていたのだ。

「もしかして、乳首かい？」僕は、自分の回答にドキドキしながら、聞いてみた。

確かに、その怪しい小さな肉片は、乳首っぽくも見えたのだ。しかし、もし、乳首で当たっていたとすれば、ずいぶん酷い事をしたものなのである。だが、不良女生徒たちの答えは違った。

「ブッブー！外れー。これはクリトリスだよ。〇〇のクリトリスだ」

僕は、その正解を聞かされて、もっとドキッとさせられたのだった。

僕も、何となくは、女性の性器部にクリトリスという物がある事は知っていた。でも、実際に見た事はなかったし、それを切っちゃったなんて、あまりにもショッキングに感じられたのである。

「〇〇の奴がさ、ちょっとふて腐れた態度を取ったもんだから、お仕置きという事で、切除してやった。ちょん切られた後の〇〇は、わあわあ泣いていたよ。まあ、こうやって切り取っちゃったら、二度と元には戻んないんだしな」不良女生徒たちは、悪びれる様子もなく、笑って、そう告げたのだった。

僕は、〇〇がクリトリスを切られている光景を頭の中で想像して、ますます、激しくゾクゾクしてしまったのである。

了

インベーダー・ゲーム

私がまだ女子高生だった頃の話だから、もうかれこれ４０年も昔の話となります。

当時の私は、インベーダー・ゲームと言うものに凝っていました。これは、現代のＴＶゲームのルーツとも言うべきアーケードゲームです。当時は、ビデオゲームと言えば、このインベーダー・ゲームぐらいしか無くて、砲台でただ敵の侵攻部隊を撃つだけの単純なゲームではあったのですが、このインベーダー・ゲームのテーブル型のゲーム台が、ゲームセンターの中いっぱいに並べられていて、皆が、このゲーム台に群がって、熱中的に遊んでいたのです。

私が、このインベーダー・ゲームにハマったのは、もうブームが廃れ始めた頃でした。だから、その時期でしたら、すでにゲームセンター内もガラガラになっており、インベーダー・ゲームの方も、余裕で遊べるようになっていたのです。

私は、放課後、すぐには自宅には戻らず、ちょっと道草して、一人でゲームセンターに寄って、インベーダー・ゲームで遊んでから帰宅するのを日課としていました。

その日も、学校の制服姿のままで、ゲームセンターに立ち寄り、まるで他に人が見当たらない店内で、一人、貸切状態で、リラックスして、インベーダー・ゲームで遊んでいたのでした。

すると、どうでしょう。ゲーム機の前に座り込み、夢中になって、ゲームで遊んでいた私のもとへ、背後から忍び寄る者が現れたのです。どうやら、男性だったようです。彼は、気付かれぬように、私のそばまでソッと接近し、とうとう私の背中にまでたどり着くと、いきなり、私の事をバックハグしたのでした。

もちろん、私もビックリしました。でも、ゲームの方も山場だったものだから、ゲーム機のスクリーンから目も離せないし、両手も

ゲーム機のレバーとボタンから放す事ができなかったのです。その上で、周りには、他に誰も居ないみたいなのでした。

このように、私も逆らえないし、止めに入る者も居ないと分かると、その怪しい男は、ますます行動が大胆になってきたのであります。

私は、この時は、つい気を抜いて、大股を開いて、ラクな姿勢で椅子に座っていたのですが、怪しい男は、そんな私の下半身へと手を伸ばしてきたのです。彼は、私のスカートをめくり上げたかと思うと、無防備だった私のパンツをまさぐりだしたのでした。パンツ越しに、私の股間を力強く触っているのです。

それどころか、もっと図々しい事に、男は、自分のもう一つの手を、私の胸の方へと回してきました。そして、セーラー服越しに、堂々と、私の胸部も揉み始めたのです。

私は、身をよじらせましたが、男はやめてくれません。私の方も、今一番大事な場面なので、ゲームからは離れる事ができないのです。

私ったら、ゲームで興奮しながら、性感帯も刺激されちゃったのです。異なる二つの興奮を同時に味わって、なんだか、今まで感じた事のない緊張感に浸らされちゃったのでした。

すると、怪しい男は、もっともっと、厚かましくなってきました。今度は、私のセーラー服のボタンをパチンパチンと外し始めたのです。彼は、なんと、こんな公共の場だと言うのに、私の服を脱がしだしたのでした。

相変わらず、私は抗う事ができません。

とうとう、私のセーラー服の前ボタンは全て外されてしまい、男は、私の体からセーラー服を剥がしにかかりました。私は、上半身を裸にされそうになったのです。でも、私の両手は使用中につき、袖から腕を抜く事ができなかったものだから、かろうじて、セーラー服を完全に剥ぎ取られずには済んだのでした。しかし、ブラジャーのホックは外されて、乳房は丸出しにされてしまったのです。

次に、男は、私を強引に立たせて、私が座っていた椅子を取り除

きました。そして、あろう事か、今度は、私の下半身をも裸にし始めたのです。スカートをおろし、パンティストッキングをずり下ろし、パンツも下げていきます。私の下半身の衣類は、全て、私の足元まで下げられてしまいました。私の下半身は、すっかり剥き出しになってしまったのです。

ゲームセンターの中だと言うのに、なんて、恥ずかしいのでしょう。私は、ほぼ裸のような格好で、まだインベーダー・ゲームで遊び続けているのです。この異常なシチェーションにドキドキしていたからなのか、なぜだか、私は、普段以上にゲームの方も興奮してきて、楽しく感じられてきたのでした。

私の事を丸裸にした事で、男が、いよいよ、行動し始めました。裸の状態の私を、より本格的に後ろから抱きしめて、がっちりと私の胸や股間も触りだしたのです。

私の体に性の快感が走ります。私は、ゲームに集中しながらも、性愛にも悶えたのです。

男の絶妙なフィンガーテクニックが、私の股間を責め立てました。その為、私の肉体は、どんどん発情していき、熱くなっていったのです。こんな心地いい感覚は初めてでした。

男の猛烈な愛撫が、私の体を襲い続けます。私の精神は高揚していくばかりで、ついには、私は喘ぎながら、エクスタシーに達してしまったのでした。

意識が吹っ飛び、ようやく心が元の状態に戻ってきた時には、ゲーム機のスクリーン上でも、私の砲台の最後の一つが破壊されていて、ゲームオーバーとなっておりました。

その時には、私の肉体への侵略者（インベーダー）も姿をくらましていました。私は、ゲームセンターのど真ん中で、一人、裸でつっ立っていたのです。

了

ハートの同級生

あたしたちは、女学生仲間（クラスメート）をリンチにかけてしまった。

その女子（こ）を、校舎のトイレに連れ込むと、他の生徒がトイレに入って来ないようにして、それから、その女子に対して、これまでの気に食わなかった部分をガンガンと文句をつけたのだ。

それでも怒りが収まらないものだから、あたしたちは、トイレの中で、その子の服を脱がして、素っ裸にしてしまった。その子も、すっかり諦めモードなのか、何をしても、全く抵抗はしないのだ。

誰かが「こいつの下の毛、全部、剃ってやろうよ」と言い出した。

責められていた子の顔がサッと青くなった。でも、あたしたちの制裁をおとなしく受け入れる事で、この場は許してもらおうと考えたのか、抗う素振りは見せないのである。

こうして、今にも泣きそうな様子の彼女の、アンダーヘア剃りリンチが始まった。立ったままで、剃刀やハサミを使って、大事な部分の毛を容赦なく剃っていくのである。本当なら、このまま一本残らず剃毛して、股間をツルツルにしてしまうはずだった。

ところが、仲間の一人が、剃っている最中に、急にストップをかけたのだ。

「ねえ。パイパンにするより、もっと面白い事をしようよ」

彼女がそう強く主張するものだから、続きは彼女に任せてみる事にした。

すると、彼女は、リンチにかけている子のアンダーヘアを、器用に切り整えだし、その中央あたりだけを剃らずに残しておいて、きれいなハート型にしてみせたのだ。

あたしたちは、その毛の有様を見て、皆でゲラゲラと笑った。この子ったら、股の正面に、地毛で出来たハートマークが出来ちゃったのである。まるで、ストリッパーのバタフライなのだ。人に見ら

れたら、かなり恥ずかしいに違いあるまい。
その事は、この子自身も感じていたらしく、激しく動揺していた。これなら、パイパン（無毛）の方が、まだマシなのである。ハート型の陰毛では、奇異で、より多くの人の視線を集めてしまうだろう。
だが、あたしたちは、彼女に対して、あえて、高校在学中は、ずっと、このハートのアンダーヘアで通す事を命じたのだ。彼女も、困惑していたが、こうなると、もはや渋々でも従う以外にはなかった。
最後に、あたしたちは、彼女のハートの性毛を、たっぷりとカメラに写させてもらって、ようやく、彼女の事を解放してやったのだ。もちろん、この時に写した写真は、あとで皆で回し見をして、何度も笑わせてもらった。
それ以来、普段、教室の中にいても、その子の姿を見かけると、彼女の股間に刻まれているはずのハートマークが思い浮かんできてしまい、あたしたちはクスクス笑うようになってしまったのである。

了

イトコ

受験する大学の下見をする為に、地方に住んでいた従姉妹(いとこ)が、上京してきて、その数日間だけ、オレの家に泊まる事となった。

実に１０年ぶりぐらいに会うイトコは、今や、すっかり美しい娘にと成長していたのである。まだお転婆な小学生だった頃の面影を僅かだけ残して、彼女は清楚なセーラー服で身を包んでいた。

そんな次第だから、この美しいイトコに対して、オレもつい戸惑いながらも、でも、小学生の悪ガキ仲間だった頃と同じような態度で接してしまったのだ。

「おい。乳首は立つようになったのかい」と言って、彼女の膨らんだ胸をさすったり、「マン毛は、もう、ちゃんと生えたか」とか「彼氏はできたのか？彼氏のチンポ、見せてもらったか？もう、お股にはチンポを挟んでみたのかな？」なんて事を聞きながら、彼女のスカートを捲り上げようともしたのである。

このような、全くのセクハラ三昧だった訳だが、オレの方も、つい、１０年前のませガキだった頃の気持ちに戻って、ほんとに、ただの冗談めいた感覚で、彼女にそんな事を仕掛けてしまっただけだったのだ。そして、イトコの方もさるもので、オレのこんなガサツな猥談が、全て、照れ隠しだったと分かってくれたらしくて、こんな酷い扱いを受けたにも関わらず、軽くあしらってくれて、特に激しく嫌がったり、怒ったりもしなかったのだった。

そして、その日の夜のことである。イトコは、我が家の使っていない部屋の一つをあてがわれて、そこで一人で寝ていた。真夜中に、オレが、その部屋の前を通りかかると、何やら、部屋の中からイトコのうめき声が聞こえてきたのだ。

気になって、オレが、こっそりと部屋の中を覗いてみたら、なんと、イトコは、一人でオナニーをしていた。ここは親戚のうち、つ

まり、よそさまの家だったと言うのにだ。
イトコは、全裸で、布団の上に寝そべり、自分で自分の体のあちこちを揉みしだき、色っぽい声を上げていた。
どうやら、昼間、オレが彼女に対して、エッチな言動ばかりを繰り返したのは、彼女にとっても、全く気になっていなかった訳でもなかったらしい。実は、彼女も、内心では、やんわりと欲情してきていたらしくて、それで、たとえ他人の家であろうと、性欲処理せずには居られない心境にとなっていたようなのだ。
オレは、成長したイトコの、こんな別の姿を知り、あんぐりしてしまったのである。
さらに、オレが見つからないように観察を続けていると、イトコは、とうとう、清涼剤のスプレー缶まで持ち出してきて、そのスプレー缶の丸い先端を、性具代わりにして、自分のヴァギナへと押し込み始めた。スプレー缶は、みるみる、彼女の中へと入っていく。この子ときたら、すでに非処女だったのだ。
彼女は、挿入行為で快感を得ながら、何かを小声で呟き続けていた。耳をそばだてて、よく聞いてみると、彼女は、オレの名前を口にしながら、「いいわぁ。もっと入れてぇ。もっとぉ、深く」と呟いているではないか。この子ったら、オレに貫かれるのを妄想しながら、オナニーしていたのである。
これには、オレも思わず興奮して、すぐにでも部屋に飛び込んでいき、現実に彼女とセックスしたくもなったのだが、そこは、さすがに未成年のイトコ同士だった訳だし、すんでのところでグッと堪えた。
代わりに、オレも、イトコのオナニーを見物しながら、その場で自分の肉棒をこすり、気持ちよく抜かせてもらったのである。

了

チンポ責め（前書き）

リンチの現場で、性器をむき出しにされたオカマ君は、泣いて懇願しました。

「お願い！キンタマだけは潰さないで！」

チンポ責め

これは、私が女子高生だった時のお話です。

放課後、クラスのヤンキー男子が「これからリンチをやるんだけど、一緒に見物しない？」と誘ってきたので、私は面白そうだと思って、真っ直ぐ、ついていく事にしました。

リンチの現場に着くと、そこには、すでに他のメンバーは揃っていました。

リンチされるのは、うちのクラスでいつもイジメられていたナヨナヨした男子です。通称オカマ君です。彼は、素っ裸にされて、他の男子たちに押さえつけられていました。裸という事は、もちろん、彼の男性器も丸見えだったのですが、私は気になりませんでした。私は、すでに初体験を済ましており、恋人の性器もたっぷり拝んでいたからです。むしろ、クラスの女子にまで全裸を見られたりして、オカマ君の方が赤面していたかもしれません。

さて、参加者が集まった事で、いよいよ、リンチが始まりました。そして、男子たちのやっているエゲツない行為の数々を知る事になり、私も驚いてしまったのでした。

私も、それなりに予想をして、キンタマを蹴るとか、センズリをやらせるとかのイジメをするのかな、と想像していたのです。

ところが、ヤンキー男子の一人は、どこからか、しなった金属製の細い棒を取り出しました。それを、彼は、いきなり、オカマ君のオチンチンにあてがったのです。

まさか、と思った私の目の前で、ヤンキー男子は、棒の先端を、オカマ君のオチンチンの穴の中に突っ込み始めました。全く、はじめて見る衝撃の光景なのでした。一方通行だとばかり思っていたオチンチンの穴に、逆に、モノがグングン入っていくのです。こんな事、ほんとに、やっても良いのでしょうか。痛かったり、不衛生だ

ったりしないのでしょうか。
でも、そんな私の懸念をよそに、金属の棒は、意外と簡単にオチンチンの中にと挿入されていったのでした。
オカマ君の方も、あんまりオチンチンをいじられ続けるものだから、とうとう、オチンチンが生理的に勃起してきちゃいました。オチンチンの皮も奥までめくれて、剥き出しの亀頭もすっかり充血して膨れ上がっています。イジメられている最中に、オチンチンが立っちゃうなんて、ほんと、みっともないのです。でも、オチンチンが、ピンと長く、直立したものだから、金属の棒は、ますますスムーズに滑り込んでいったのでした。
ついに、２０センチほどあった金属の棒の大部分が、オカマ君のオチンチンの中に収まってしまいました。金属の棒のほんの僅かな先っちょだけが、体の外に出ているような状態になったのです。
それをガン見し続けていたら、次第に、私の方が恥ずかしくなってきたのでした。
だって、この子ったら、今、大事なオチンチンの中に異物を詰め込んでいるのです。尿道の奥の方にまで、金属の棒を貫通させちゃっているのです。オチンチンはオマンコの中に突っ込むものなのに、反対に、オチンチンの中にモノを入れているんです。やだ。この子、なんて、変態な事をしているのでしょうか。これでは、オカマと呼ばれても仕方がないのです。
このあと、ヤンキー男子たちは、ゆっくりと、この金属棒を、オカマ君のオチンチンから引き抜きました。入れた時と同様、すんなりと抜けちゃうのです。ほんと、オマンコへと棒を出し入れしているみたいでした。
その抜き取った金属の棒は、私も触らせてもらいました。男の尿道の中をくぐっていた棒なのかと思うと、ちょっと複雑な気分なのです。その棒の表面は、少しネチョッとしていました。
そうやって、私が棒を触らせてもらっていた最中も、次のリンチが始まっていたのです。

ヤンチャな男子は、今度は、自分の小指を、オカマ君のオチンチンの穴へと押し込もうとしているのでした。さすがに、金属棒と人間の小指では太さが違うので、オカマ君も、ものすごく痛がっていました。だけど、それでも、いじめてる男子は、強引に指を突き入れようとしているのです。

すると、無理強いすると、けっこう何とかなるもので、いじめっ子の小指は、少しずつですが、オカマ君のオチンチンの穴の中へと潜り込んでいったのでした。もしかすると、強引に穴を押し広げたものだから、尿道が多少は裂けていたかもしれません。

そんな事を続けた末に、いじめっ子の小指は、ウソみたいですが、半分以上が、オカマ君の尿道の中にと入ってしまったのでした。これまた、何とも奇怪な光景なのです。指が挿入されているオカマ君のピンク色の亀頭が、ぼんやりと、飛び出したオマンコのようにも見えてきました。オチンチンの穴がオマンコ代わりになる男子だなんて、やっぱり変態なのです。

ところで、力ずくで押し込んだ小指は、尿道の穴の中に、ピッタリはまってしまっていました。容易には外せそうにないのです。その状況で、いじめっ子は、適当にそこらを歩き回ってみせました。すると、オカマ君の方も、相手の小指が入ったオチンチンに引っ張られる形で、後ろから付いて歩くしかなかったのでした。まるで、オカマ君はいじめっ子に連れ回されるペットのようで、実に滑稽なのです。そこに居た全員が、ゲラゲラと笑いました。

最後に、いじめっ子たちは、大きな裁ちバサミを持ってきました。彼らは、オカマ君のすでに萎縮していたオチンチンを、根元から、そのハサミの両刃で挟んでしまったのです。鋭い刃先は、ガッチリと、オカマ君のオチンチンの皮に食い込んでいました。これって、もしかして、全ての仕上げとして、オカマ君を去勢しちゃうのでしょうか。

「ねえねえ！切っちゃうの？ほんとに切っちゃうの？どうなっちゃうのよ」私は、ドキドキしながら、聞きました。

「どうもしねえよ。こいつは、竿なしになって、本物のオカマになっちゃうだけさ」ヤンチャな男子は、悪びれる様子もなく、笑いながら、そう教えてくれたのでした。

さて、以上は、もう１０年も前のお話です。

今では、私も、社会に出て、立派なＯＬとなって働いていました。だけど、私は、この１０年前の鮮烈な出来事が忘れられずにいて、そんな次第から、私生活では、Ｍっ気のある男と付き合う事にして、すっかり、この彼氏を相手に尿道プレイをして遊ぶようになったのでした。

了

チンポ責め（後書き）

ヤンキー男子の一人が、ぐいっと、オカマ君のオチンチンの皮を引っ張りました。すると、縮んでいた包皮は、亀頭を中に入れたまま、ピンと長く伸びちゃったのです。皮のたるみも無くなって、ハサミの刃が、よりピタリと、オカマ君のオチンチンの付け根に密着しました。

オカマ君も、ハサミの刃の冷たい感触を、オチンチンの表面でひしひしと感じて、大事なオチンチンを切り落とされてしまう実感が湧いてきたのでしょう。彼は、真っ赤な顔で、目には涙を浮かべたのでした。

そして、ついに、オチンチンをちょん切るスペシャルリンチが始まったのです。

「なんだよ、こいつのチンポ。ブヨブヨで、ぜんぜん切れないじゃねえか」開始早々、ヤンキー男子は、そう言って、苦笑しました。

そう、いくら伸ばしても、オチンチンの厚い皮は、思った以上に、刃物を受け付けないのです。

しかし、ハサミの刃を強く押し付けて、グリグリ擦っているうちに、シゴいているような刺激を受けてしまったのか、オカマ君のオチンチンは次第に勃起しだしたのでした。

こうして、太く、固くなってくれたら、作業もやり易くなるのです。

いつしか、ハサミの刃の半分以上が、オカマ君のオチンチンの中にめり込んでいました。刃の表面も、じんわりと赤い血で染まっています。どうやら、表皮だけではなく、内側の肉にまでハサミの先端は達したようなのです。きっと、海綿体にも、ざっくりと刃が刺さっているのです。

「ああ、ああ」と、オカマ君が、うつろな目で、欲情したような声

を漏らしました。

実は、この時、恐怖とショックで錯乱していたオカマ君の心には、なぜか、クラスで隣の席だった女子の裸が思い浮かんでいたのでした。その子の清らかな裸体が、まるで目の前にいるかのように、鮮明に、細部まで、はっきりと見えていたのです。別に好きでもなかったはずの女子なのに、こうしてヌードになると、たまらなく愛おしくて、魅力的なのでした。あくまで自分の想像したものだと分かっていたのにです。

それは、神経が研ぎ澄まされた事で生み出された、オカマ君の最後の願望の妄想（ビジョン）だったのかもしれません。彼の本能は、オチンチンが無くなる前に、せめてセックスしたかったと望んでいて、思い詰めているうちに、本当に切実になってきてしまい、焦って、身近にいた女子の体を欲し求めたのでした。

下着になった男

俺は、同級生の蛙里いずみに、ひそかに、恋心を抱いていた。

と言っても、完全な片思いなのである。パッとしない一男子生徒に過ぎなかった俺に対して、彼女は、うちの高校のスターなのであり、体操部の花形選手だったのだ。

部活の最中や、大会に参加した時などのレオタード姿のいずみは、まさに体育館に降り立った妖精のようだった。彼女は、白いハイレグのレオタードを愛用していたのだが、そのレオタードに身を包むと、彼女の美しいプロポーションは、より魅力的に引き立って、その姿で、彼女は華麗で素晴らしい体操を舞ってみせたのだ。

特に、彼女がI字バランスを披露してみせた時は、その眩しさに、俺は、つい見とれてしまったものだった。あの麗しきいずみが、はしたなくも、自分から、お股を周囲へと見せつけているのである。ギリギリの面積で、彼女の股間を覆っていたレオタードの布の奥には、間違いなく、彼女の大事な女性器もあるのだ。

そんな事を考えてしまうと、俺の血は自然とカアーッと熱くなってしまい、俺は、いずみのこの股間の部分をギュッと鷲掴みにしてみたいと言う思いにとらわれて、もう居ても立っても居られなくなってしまったのだった。

ある日、下校中の俺は交通事故にあった。それは、本当に一瞬の出来事だった。大きなトラックが、いきなり、俺の方に飛び込んできたのである。それでおしまいだ。次の瞬間には、俺は人間としての生涯を終えていたのである。

だが、すぐに俺は意識を取り戻していた。どうやら、間も置かずに、もう転生してしまったらしい。しかし、すぐには、自分が何に生まれ変わったのかは、思い浮かばなかったのである。

俺は、女の子の部屋の中に横たわっていた。それで、すぐ、この

部屋が蛙里いずみのものだとピンときたのだ。なんと、俺の強力な願いが天に通じて、本当に叶ってしまったらしい。俺は、いずみの傍にいる何かに転身したようなのである。でも、それ以上のことは、まだ、よく分からないのだ。

俺は生き物ではなかった。どうも、細い布のような物体なのである。生物ではなく、いずみの持ち物の中に俺の魂は宿ってしまったみたいなのだ。

では、俺が入り込んだ、この布は、一体、何なのだろうか。形や大きさ的には、ヘアバンドのような感じもする。いずみの頭におぶさり続ける生活というのも、まあ、それほど悪くはなさそうなのだ。

その時、主人であるいずみが、この部屋へと入ってきた。彼女は、今、シャワーを浴びてきたのである。そして、バスタオルだけを体の上に巻いて、この自分の部屋に戻ってきたのだ。

彼女は、パアーッと、自分の身を覆っていたバスタオルを取り去った。俺の前で、彼女は、一糸まとわぬヌードになったのである。

それは、神々しいまでに素晴らしい裸体だった。やっぱり、この子は、抜群のプロポーションの持ち主なのだ。彼女は、レオタードの内側に、ここまで美しい肉体を隠していたのである。こんな素敵なものを拝めるなんて、俺は、全く、どこまで幸せな生まれ変わりができたのであろう。

彼女は、裸になると、今度は、続いて、絆創膏のように小さなニップレスを、ペタペタッと、自分の両方の乳首の上にと貼り付けた。彼女は、胸の形を崩さない為に、ブラジャーは使っていなかったのだ。代わりに、最低限のマナーとして、ニップレスだけで、見せちゃいけない部分を隠していたのである。

それだけではなかった。

次に、彼女は、俺のことを持ち上げた。そして、俺を縦にして構えると、そのまま自分の股間へと押し当てたのである。

俺は、激しい衝撃を受けた。

彼女は、俺のことを、縦に一直線にして、自分の股間の上に巻き

つけたのである。俺は、ただの布ではなく、中には柔らかい針金も入っていた。だから、曲げると、その形に固定させる事もできたのである。だから、俺は、いずみの股の周りに、そのまま、U字状にピタリとくっついてしまったのだ。彼女の恥丘から始まって、女陰部を経由し、お尻の割れ目にかけて、俺の全身はキレイに密着してしまったのである。俺は、望み通りに、本当に、彼女の股間を鷲掴みにしてしまったのだ。

のちに俺も全てを理解した。俺は、ヘアバンドなどではなく、Cストリングと呼ばれる女性用の下着だったのである。腰の両サイドの部分が存在しなくて、股間のピンポイントしか隠さない、特殊な形状の下着（パンティ）なのだ。まさに、女体のギリギリの部分までを晒す事ができる、夢のランジェリーなのである。

いずみが、あんな透けそうな白レオタードをつけていても、堂々とI字バランスができた秘密は、この下着にあった。彼女は、レオタードの下には、いつも、このCストリングとニップレスをつけていたのである。それで、どんな格好をしようと、全く見えてしまう事を気にせずに、平気で体操し続ける事ができたのだ。どうやら、俺もすっかり彼女に騙されていたようである。

でも、いいのだ。

今や、俺自身が、彼女のことを優しく包み込むCストリングなのである。

彼女は、実は、普段から、Cストリングとニップレスを着用していた。レオタードを着た時だけではなく、ラフな服装の時も、学校の制服姿の時も、このCストリングとニップレスだけを、インナーとして用いていたのである。多分、普通の下着で締め付ける事によって、胸や腰の線（ライン）が歪んでしまうのを恐れたのであろう。こんな最先端の下着を常日頃から使用しているなんて、やっぱり、学校一の美人は違うのだ。

そんな訳で、今の俺は、とっても幸せなのである。いつだって、彼女と一緒に居られるからだ。どんな場所でも、俺は、彼女の大事

な部分を抱きかかえ、その感触を味わい、独り占めにしているのである。

了

下着になった男（後書き）

Cストリングのことを調べていたら、なんだか、この下着をネタにした話を書きたくなってきて、いろいろ練ってみた末に、本作のような形になりました。

突撃ルミちゃん（前書き）

ネットの通販サイトで見た、橋本ありなの赤いワンピース水着姿が可愛かったので、つい、こんな話を書いてみました。このワンピース水着の画像を原案にしてますので、ヒロインの設定は、必ずしも、橋本ありな自身とは一致しておりません。

突撃ルミちゃん

夏休みの一番暑かった日の話である。僕たち生徒の十数名は、昼間、高校に出てきて、プールの床掃除をやらされていた。各学級から何人かずつ、くじで負けた生徒が狩り出されたのであり、これは我が校の恒例行事だったのだ。

でも、それにしても暑いのである。見張り役の先生は、いつの間にか、涼しい職員室に逃げ込んでしまっていたし、僕たちだけが、熱苦しい制服を着た状態で、プールの底にと取り残されて、辛い思いをしていたのだ。

と、掃除をしていた生徒の一人である、ムードメーカーのルミちゃんが、いきなり、プールの中の泥に滑って、てっ転んでしまった。

「もう、やだ！」と、制服が泥まみれになってしまった彼女は、叫んだ。

ルミちゃんは、ばんとデッキブラシを投げ捨てると、スタスタとプールの垂直はしごを上り、さっさと、この場から出て行ってしまったのである。

ルミちゃんのような、自由で無邪気な女の子には、この作業は耐えきれなかったのかな、と皆が思っていた矢先、すぐさま、ルミちゃんはプールへと戻ってきた。

しかも、彼女ときたら、汚れた制服は脱ぎ捨てて、私服の赤いワンピース水着にと着替えてきたのだ。どうやら、彼女は、この仕事が終わった後、市営のプールにでも行って、あらためて、泳いでくるつもりだったらしい。

「ルミ、これより、仕事に復帰します！」と、髪も後ろに束ねて、気合を入れていたルミちゃんは、ビシッと敬礼して、笑顔を浮かべてみせた。

その姿が、なぜだか、妙に愛らしくて、カッコイイのである。

ルミちゃんは、童顔で、胸は小さいし、まだ子供っぽい体つきをしていたので、その事を、いつも、皆からからかわれていたのだが、今の彼女は、背丈は変わっていないはずなのに、スレンダーで、やけにスラッとして見えた。

それもそのはずだったのだ。この子ったら、何と、思いっきりハイレグの水着を身につけていたのである。そのおかげで、足がよけい長いかのように、他人の目には写ったのだった。もっとも、代わりに、鼠径部は、そっくり、むき出しになっている。女子の股間部の肌にできた、Vラインの陰りは、ドキッとさせる生々しさだったのだが、ルミちゃん自身は、見られても、ぜんぜん気にしていないようだった。

「さあ、皆。ボッとしてないで、早く終わらせちゃうわよ」

僕たちが見とれて、まだ呆気にとられていたうちから、ルミちゃんは、早くも、元気に働きだした。マイペースの彼女は、僕たちに、ひとこと言う間さえも与えてくれないのである。

そんな次第で、彼女の勢いにつられて、僕たちも、そのまま、作業を再開したのだった。ルミちゃんが、可愛い声を出してリードしてくれるものだから、今までよりも、仕事の進行が早いのである。

ところが、一緒に働いていた女子たちが、ルミちゃんのある事に、目ざとく、気がついた。

「やだ、ルミ。その水着、Tバックじゃないの?」

「ええ!そんな事ないよぉ」と、ルミちゃんは、慌てて、否定した。でも、僕たちも、実を言うと、ルミちゃんの背中の露出が多めだった事には、さっきから、それとなく、気にかけていたのである。

「ねえ、ルミ。後ろ姿、もっとよおく見せてよ」

仲良しの女子に、そうお願いされたルミちゃんは、躊躇しながらも、僕たちの方に背中を向けてくれた。

すると、やっぱり、この水着はTバックだったのである。彼女の水着の後ろ側は、どこも細い線状だったのだ。ルミちゃんの背中は、ほぼ全てが露出していた。お尻の部分も同じで、ルミちゃんの小ぶ

りなお尻は、帯のようなT字型の布の左右へと、すっかり、はみ出ていた。あまり膨らんでなかったとは言え、同学年の女子のお尻が、隠さずに丸ごと見えてしまっているのは、すっごく照れ臭いのである。

そそっかしいルミちゃんの事だ。よく確かめないで、正面のデザインだけ見て、この水着を買ってしまったのかもしれない。

でも、全体的に子供っぽい体型なものだから、そんなルミちゃんの後ろ姿は、実際には、ませた小学生の女の子の裸みたくも見えたのだった。背中もお尻も両足も、若々しくて、色白で、肌はとってもスベスベなのである。

「ほら、ルミ。やっぱり見えてるよぉ」と、仲良しの女子が指摘した。

「うそぉ。ちょっと、水着が小さめなだけだよ」ルミちゃんは、頑なに認めなかった。

そして、彼女は、この話題をそらすかのように、急に、猛烈に働きだしたのである。僕たちも、これでは、彼女に合わせて、作業に戻るしかなかったのだ。

とは言え、皆の目は、ついつい、ルミちゃんの眩しい水着姿の方に向きがちなのであり、誰もが、ルミちゃんを見ながら、ひそかにニヤついちゃったのである。

こうして、ルミちゃんが一生懸命に引っ張ってくれたおかげで、プール掃除も、瞬く間に終わってしまったのだった。功労者のルミちゃんも、掃除が終わった頃には、またもや、水着を泥だらけにしており、むき出しのお尻や美脚にも泥がついてしまっていた。しかし、何と言おうと、さすがは、彼女は我らがヒロインなのである。彼女のおかげで、しんどいプール掃除だって、楽しく、早く、やり終える事ができたのだ。

その夜、僕は、昼間見たルミちゃんの水着姿を思い出しながら、こっそり、センズリをさせてもらった。いや、いっそのこと、あの水着姿を元にして、ルミちゃんのオールヌードまで想像させてもら

って、気持ちよくヌかせてもらったのである。
僕の空想の中のルミちゃんは、まるで子供のような幼い体をしていたけど、でも、間違いなく生粋のバージンで、無垢な少女というものを体現していて、僕の方へと無邪気に微笑みかけてくれていた。
たとえ恋人ではなくても、この子と学校で会えると言うだけでも、十分に幸せなのだ。彼女の振る舞いや行動の一つ一つが、周囲の人々を和ませ、明るい気分にとさせてくれるのである。彼女のことが嫌いな生徒など、うちの高校には、一人もいない。ルミちゃんは、ほんとに、最高の我が校のマスコットなのだ。

了

裸の校庭

うちの高校は、とにかく、柄が悪かった。不良も多ければ、イジメの内容だって、半端ではないのだ。

男子生徒の間でよく行なわれていたイジメとしては、「校庭疾走」と言うものがあった。

これは、犠牲者（ターゲット）となる男子生徒の服を、校舎の玄関のところで、全部、脱がしてしまうのだ。制服も、下着も、全てである。当然、犠牲者は全裸になってしまう。その状態で、彼のことを、校庭へと押し出してしまうのである。校舎の玄関は、皆でガードして、犠牲者のことは、絶対に校舎の中には入れてはやらない。すると、この犠牲者は、哀れにも、校庭のど真ん中で、見晴らしのいい状態で、全校生徒から、素っ裸の自分を見られてしまうのだった。

これは、とびっきり恥ずかしい。この犠牲者にとって、残された隠れ場所は、校庭の隅にある物置小屋だけだった。

よって、彼は、皆の視線から身を隠すために、急いで、校庭を横切り、その物置小屋まで全力で突っ走るのである。すっぽんぽんの姿で、股間にある男の証しだけを両手で大事そうに隠しながら。

彼のこのブザマな全裸走りの様子は、さえぎるものもなく、まさに眺め放題の、生徒たちの楽しい余興となったのだった。

このイジメ遊びが、意外と、生徒の間ではウケが良かった。犠牲者の情けない姿を見物しながら、全校生徒で盛り上がったのだ。なぜか、女子たちの評判が、やたらに良かった。だから、ますます、不良男子たちも、このイジメを好んで行なったのである。クラスの弱い男子や真面目な男子たちが、このイジメの疾走者として引っ張り出された。中には、すっかり常連で走らされている、軟弱ないじめられっ子男子までいた。

その割に、先生たちは、このイジメを禁止しようともしなかった

のである。生徒全体が、笑って、湧き上がっていたものだから、イジメというよりも、ただの愉快な悪ふざけっぽくも見えたからなのだろう。犠牲者が、どれだけ恥ずかしくて、辛い思いをしていたとしてもある。

ある日、女生徒が、この校庭疾走のイジメに加わる事となった。これには、全校生徒も驚いた。と言うのも、これまでは、女子の不良たちにも、最低限の常識はあり、自分たちのイジメの対象に校庭疾走をやらせる事だけはなかったからである。ところが、こないだ入学してきた一年生の女子たちは、考え方が新しくて、そんな僅かな暗黙の了解（ルール）すら守る気が無かったようで、面白半分に、とうとう、自分たちがいじめていた大人しい同級生に、この学校の名物イジメを試してしまったのだ。

はじめて、女子の犠牲者が、裸で校庭に放り出されたのを見た時は、誰もが衝撃を受けた。タチの悪いオフザケなんてレベルではない。これじゃ、ガチのヌードショーなのである。男子と違って、女子は隠さねばならない体の部位が多すぎるのだ。全裸にされたら、二つの手だけでは、とうてい、体の全ては隠しきれないのである。

それでも、この校庭疾走は続行された。

可哀想な犠牲者の一年生の女子は、あたふたしながら、必死に、自分の体の恥ずかしい部分を隠そうとしていた。しかし、両手で股間を隠せば、胸が丸見えだし、胸と股間を片手づつで隠しても、それだと、両方の部分部分が外にはみ出ちゃうのだ。お尻にいたっては、手が回らず、完全に晒し続けたままだった。

こんな状態でも、彼女が行なわなければいけない事は、すでに決まっていた。先人の男子たちのやり方を見習って、全校生徒に見られるのを覚悟の上で、校舎を走り横切って、物置小屋へと逃げ込むのだ。

彼女は、その通りに実行した。彼女は、羞恥心で顔面蒼白になりながらも、思い切って、走り出したのだ。

でも、女子がこれをやると、やっぱり、勝手が違うのである。走

ると、体も動くものだから、ついつい手の隙間から、隠していたものがこぼれ出てしまうのだ。乳首とか、隠毛とかが、走りながら、チラチラと見えてしまうのである。観客たちも、そんなポロリがあるたびに、ドキッとして、ざわついたのだ。

でも、この疾走者（ランナー）の女子は、もう走るのに夢中で、そんな事までは構っていられなかったのである。彼女は、さんざん、自分の隠しどころを見せまくった末に、どうにか、物置小屋の中へと逃げ切ったのだった。彼女の恥ずかしすぎるイジメは、とりあえず、終わったのだ。

にしても、今回の、彼女の校庭疾走は、実に新鮮な試みであった。男子がやるのとは異なる緊張感があり、全校生徒が激しい興奮を覚えたのである。

その事は、いじめっ子グループもうっすら気付いたようだった。その結果、その後は、この犠牲者の女子は、たびたび、校庭疾走をやらされるようになってしまったのである。この子が校庭疾走をさせられる番を、男子の時以上に、見ている側も待ち望むようになったのだ。

女生徒に校庭疾走をやらせた方が、観客たちのウケがいい事は分かった。しかし、他の女子のいじめっ子たちは、なおも人間としての情けはあったので、自分たちから進んで校庭疾走をセッティングする事はなかった。よって、女子の中では、いつもの一年生の女生徒、つまり、この子一人のみが校庭疾走をやらされたのである。全校でたった一人の女子の校庭疾走要員なのだ。

男子生徒たちは校庭疾走をやらされたとしても、他にも同じ事をやらされている男子の仲間がいたので、自分だけ恥ずかしい目にあっていると言う孤独感も味わわなくて済んだのかもしれないが、この女生徒の方は、まさに、全女生徒の中でも一人だけの特別扱いだったのであり、それって、あまりに絶望的なミジメさと恥ずかしさだったに違いなくて、この学校での生活も、さぞ、針のむしろだった事だろう。

そのうち、この女生徒の校庭疾走を毎回、見物していた観客たちは、ある事に気がついた。やはり、高校生というのは、まだ育ち盛りなのであり、見るたびに、この女生徒の体が微妙に成長していたのである。小さかった胸も膨らみ、腰もくびれ、お尻が丸くなっていくのが、彼女が裸になるたびに、それとなく分かったのだ。

最初の校庭疾走に挑戦した時は、てんで色気のない幼児体型だった彼女も、高校三年の卒業の日が近くなった頃には、すっかり、魅力ある大人の女体にと変わっていた。裸で走らせると、大きな胸はゆさゆさ揺れるし、デカいお尻もプリプリ振って、局部を手で隠し押さえているのすら、まるでセクシーポーズのように見えて、男子生徒の見物人たちは大いに歓喜したのである。

我々は、校庭疾走によって、一人の女生徒の肉体の成長過程まで観察させてもらったのだった。

了

エロエロ水泳部

やはり、高校生の体と言うのは、まだまだ発育の真っ最中なのだ。その事は、うちの高校の女子たちの姿を見ていても、よおく実感できた。

彼女たちは、育ち盛りで、すぐに服のサイズが合わなくなってしまうのである。身長はそれほど伸びなくても、体型の変化が激しかったので、ほんのちょっとの期間で、これまで着ていた服もあっさりピチピチになってしまうのだ。特に、胸とかお尻の部分ばかりが大きくなって、アンバランスになってしまうのである。

その傾向は、制服よりも、なるべく今の体型に合わせていた体操着などの方が顕著だった。皆、服の大きさが合わなくなってきても、すぐには新しいサイズの新品に買い替えないものだから、胸やお尻、太ももなどの部分がバーンと強調して見える、グラマーな体操着姿になってしまったのである。

中でも、一番圧巻だったのが、水泳部の競泳水着だった。競泳水着は、もともとが、水の抵抗を減らすために、体にフィットしたものが選ばれている。そんな訳だから、肉体が少しでも成長してしまうと、たちまち、その事は水着のラインにも如実に浮き出てしまったのだ。

それなのに、なかなか、競泳水着を新調しようとしない部員も少なくはなかった。彼女たちは、水着がキツければキツいほど、体型に完全に合致して、水の抵抗量も少なくなり、早く泳げるだろう、と考えていたものだから、ギリギリまで水着を変える事を避けていたのである。

そんな理論を本気で信じている筆頭だったのが、水泳部の代表選手でもあったキャプテンだった。彼女は、スラリと高身長で、足も長かったものだから、水着がパンパンになってくると、よけいに目

立ったのである。水着の胸元はぼおんと前に突き出して、大きなお尻も、水着の足ぐりの左右からすっかりはみ出してしまい、まるでTバックの水着みたいになった。彼女の水着姿は、思いっきり、セクシーになってしまったのである。

なのに、キャプテンは、この競泳水着を普段からも着続けた。彼女が、この競泳水着で歩いている時などは、男子らは、自然と、キャプテンの迫力あるヒップに目を奪われてしまい、鼻の下もデレッと伸びてしまったのである。日常の学校生活の中で、こんなにも堂々とスター生徒のむき出しのお尻を見る事ができたなんて、全く、ヤバすぎるのだ。

それでも、キャプテンは、この水着を使う事をやめなかった。この水着の締め付けにも慣れてしまい、より裸のラインに近い状態で泳ぐ事ができて、水泳の記録の方も確かに伸びていたからである。

しかし、ついに事件が起こった。

大事なタイムを計っていた水泳大会でのことである。

キャプテンは、並みいるライバルを引き離し、トップでプールの中を泳いでいた。

ところが、突如、彼女の水着がバリバリと嫌な音を立てたのだ。長く使い続けていた彼女の水着は、かなり摩耗して、すでにくたびれきっていた。それを無理して、目いっぱいに引き伸ばして着ていたものだから、とうとう、限界がきてしまったのである。

続けて、キャプテンの水着の表面には、ギザギザの裂け目が走った。一ヶ所、破れ目ができたら、あとは全部がスルリと脱げてしまうのも早いのである。

観客席の方から、大きなどよめきが起こった。

プールの水面に、ぷっかりと、キャプテンの水着だけが浮かび上がったからである。

今、キャプテンは、水着なしで泳いでいた。オールヌードなのだ。その事は、彼女も、すぐ気付いたのであるが、せっかく良い記録が作れそうだったのに、こんなハプニングで泳ぐのをやめたりはした

くなかったのである。
　ついに彼女は一位でゴールインした。歓声を浴びる中、満足げな表情のキャプテンは、ゆっくりとプールの上へと上がったのである。そのグラマラスな裸体を、いっさい隠さず晒しながら。

了

男の娘（おとこのこ）

亮生くんは、とっても女の子っぽい高校生でした。と言っても、性同一障害やオカマだったのではありません。ただ、やたらとナヨナヨしていて、女子っぽかっただけなのです。女の子になりたかったような素振りは見せましたが、性的に男性の方が好きだった訳でもなかったみたいでした。

亮生くんは、むしろ、自分を女性みたいに着飾る事に興味があったようなのです。実際、彼は、なかなか可愛い顔をした男子でした。化粧したり、アクセサリーをつけると、ますます、女子よりも可愛く見えました。彼自身、そのような女性向けの化粧とかオシャレとかが、とっても大好きで詳しかったのです。

そんな次第で、亮生くんは、男のクラスメートよりも、女子との方が、ずっと話も合ったのでした。結果として、彼は、普段から、女子とばかり遊ぶようになり、よけい女々しくなっていったのです。

そんな亮生くんですが、だからと言って、男子たちからは妬まれていて、いじめられていたって事なのでもありませんでした。と言いますのも、むしろ、亮生くんを橋渡しの仲介役に使えば、気になる女子とも仲良くなれる事ができたからで、男子たちは、逆に、亮生くんの存在をとても大切にしてくれていたのです。

さて、修学旅行でのお話でした。

その日の夜も、亮生くんは、一人だけ、仲良しの女子たちが泊まっている部屋へと遊びに行って、ずっと入り浸っていました。

その宿泊場所は、観光名所の温泉宿でした。だから、皆は、夜は浴衣にと着替えていたのです。亮生くんや、友達の女生徒たちも例外ではありませんでした。皆、浴衣姿でくつろいで、修学旅行での楽しい夜のお喋りに花を咲かせていたのです。

ところが、そんな最中に、思わぬ事が起きました。

亮生くんたちは、皆ではしゃいで、じゃれ合っていたのですが、すると、つい、一人の女友達の手が亮生くんの浴衣の帯に当たってしまい、はずみで、それを引っ張り、ほどいてしまったのです。

亮生くんの浴衣の前の方がハラリと開いてしまいました。

それで、亮生くんも、周りの女友達らも、ハッとしてしまったのです。

なぜなら、亮生くんの裸の体が、モロに見えてしまったからです。

亮生くんだったら、浴衣の中には、下着をつけていなかったのです。

彼は、寝る時は、下着をつけない主義だったのでしょうか。

これには、亮生くんも動揺し、他の女子たちもビックリしてしまいました。

きっと、これが普段であったら、友達の女生徒たちも、理性的な判断をして、仲良しの亮生くんの照れ臭いヌードなど、ガン見したりもせずに、すぐ隠させてくれた事なのでしょう。

でも、今は、浮かれた気分の修学旅行の最中でした。それで、女子たちも、ちょっと陽気になり、羽目を外してしまったようなのです。

彼女たちの一人は、亮生くんが恥ずかしがっていたにも関わらず、面白がって、彼の体を後ろから羽交い締めにしてしまいした。

これでは、亮生くんは、はだけてしまった浴衣を元に戻す事ができません。彼の露出してしまった体の前面は、そのまま、見えちゃったままなのです。

亮生くんは、女の子よりヒ弱だったものだから、自分を押さえつけている女友達をはね飛ばす事もできなかったのでした。

そして、亮生くんの男性の体を見られたものだから、女友達らも大はしゃぎになってしまったのであります。実は、彼女たちは、彼氏がいても、一緒に寝る段階までは進んでいない子ばかりだったからです。

この亮生くんの裸が、はじめて、じっくりと目にした同世代の男の体だったのです。何たって、いくら女々しくても、亮生くんだっ

て立派な男の肉体をしていたのです。

でも、よく見ると、亮生くんの股間には、性毛が生えていませんでした。オチンチンも、皮を被ったままで、剥けてはいなかったのです。どうやら、自分が男性である事にコンプレックスを持っていた亮生くんは、自分の男性器の成長を受け入れる事ができず、隠毛も剃ってしまい、包茎の状態を保っていて、わざと子供のオチンチンの状態にしていたみたいなのでした。

そんな自分の体の秘密を仲良しの級友たちに知られてしまい、亮生くんは、当然ながら、激しく恥ずかしがりました。でも、女友達の方は、亮生くんが嫌がれば嫌がるほど、よけいに笑って、ふざけてしまったのです。

とうとう、彼女たちは、自撮り棒を持ってきて、その先で、亮生くんのオチンチンを突っついて、遊び始めました。いちおう、彼女たちも、まだ、うら若き乙女だったので、じかに男の人のイチモツを触るのは、照れ臭かったのです。それで、自撮り棒で、間接的に、興味津々のこの男のシンボルをいじらせてもらったのでした。

でも、亮生くんにしてみれば、こんな風な形で、自分の男性器を弄ばれる方が、もっと屈辱的なのです。

女の子たちにしてみれば、オチンチンやフクロがブラブラしているのが面白かったみたいでした。自撮り棒で、それらの部分を押して、揺らしてみて、ワクワクしているのです。

中には、亮生くんが顔をしかめちゃうほど、強く、彼の陰部を自撮り棒でピシピシ叩いちゃった女子もいました。こんな乱暴な扱われ方をしたら、亮生くんのデリケートな男性器も、赤く腫れてしまうのです。女の子に、大事なものをこんな目に遭わされて、亮生くんったら、男として恥ずかしすぎるのです。

しまいには、亮生くんのぺちゃんこな胸についた乳首の事まで面白がって、それを引っ張ったり、ぐりぐりする女友達も現れました。これでは、男の子の乳首だって、みっともないけど、立ってきちゃうのです。

とまあ、何やかんやで、しばらくしたあと、女の子たちも、ようやく、悪ふざけをやめてくれたのでした。さすがに、これだけ遊びまくったら、飽きてきたのでしょう。

一方で、羽交い締めから解放されて、やっと体を浴衣で覆う事ができた亮生くんは、半ベソをかきながらも、すっかり、ふて腐れてしまい、皆にはそっぽを向いて、床に座り込んでいました。

そんな亮生くんのそばに、女子の一人が、優しい笑顔を浮かべて、近付いてきたのでした。

「亮生くん、ごめんね。今度は、あたしたちの体を触ってもいいよ」

そう言うと、その子は、自分の浴衣を自ら、はだけてみせたのです。その子も、下着をつけていませんでした。いきなり、全裸になってしまったのです。突然、女友達のオールヌードを目の当たりにしたものだから、亮生くんも、すごくドキッとしてしまいました。

でも、面白がって、他の女の子たちも、その子の真似をして、その場で、我も我もと次々に浴衣を脱ぎ始めたのです。普通に下着をつけていた子もいましたが、それらの下着もあっさり取ってしまいました。

亮生くんの前で、女友達は、全員、裸になってしまったのです。それは、とっても眩しい光景でした。すでに成熟した女体の持ち主もいれば、まだ発育途中の子もいました。これらの裸が、普段は何の意識もせずに仲良く遊んでいる同級生の女子のものだったから、なおさら、亮生くんは、目のやり場に困ってしまったのです。

彼女たちは、ためらわず、亮生くんの周りを取り囲みました。そのまんま、彼女たちは、体を擦り付けるように、亮生くんに抱きついていったのです。皆で、亮生くんの表面を自分の裸で覆ってしまいました。

彼女たちは、今度は、そうやって、亮生くんのことをタジタジにさせて、ふざけ遊んでいるのです。

「どう、亮生くん。あたしの初体験は、キミでもいいのよ」

調子づいてきた女友達らは、楽しそうに、そんな事まで囁いてき

たものだから、さすがに、亮生くんも、顔が真っ赤になってしまったのでした。

了

潜入！ふんどし祭

皆さーん、聞こえてますかあ！これより、僕は、国立のエヌ女子高校にと、こっそりと、潜り込んでみたいと思っています。

エヌ女子高校では、毎年、男子禁制の謎のイベントが行なわれているのであります。そのイベントが実施される日こそが、本日なのです！そして、すでにイベントは始まっているものと推察されます。

僕は、決死の覚悟で、そのイベントの様子を、皆さんにもお伝えしたいと考えております。どうぞ、皆さん、最後まで、是非とも、お付き合いください。

さあ、僕は、さっそく、校内のグラウンドのそばにまで、やって来ました。隠れてますので、僕の存在は、校内の人間には、まだ誰にも知られておりません。

あ！早くも、イベントに参加しているらしき女生徒たちの姿を発見いたしました。グラウンドに、いっぱい群がっております。はて、運動会でもしているのでしょうか。

あ、あ、あ！なんて事でありましょう！

ふんどしです！女の子たちは、全員、赤いふんどしをつけております！他には、何も身につけていません。全裸の上に、赤ふんだけを腰に締めているのであります！

そうだったのかぁ！だから、男性は、このイベントへの参加を許してもらえなかったのでしょう。

きっと、これは、この学校の開校以来の神聖な儀式なのです。参加者が全員、裸になり、身を清めた状態で、何かを祝っているのです。一見、皆で、グラウンドいっぱいを使って、鬼ごっこをしているようにも見えます。

それにしても、なんと、悩ましい光景なのでしょうか。

高校生の女の子たちが、誰も彼も、ヌードなのです。まだまだ子

供のような体型をしている子もいれば、すっかり成熟した肉体の子もいます。そんな女子たちが、くんずほぐれつ、体じゅうを振り回して、大いに賑わいながら、よく分からない合戦を行なっているのです。

皆が、楽しそうです。笑っております。とても愉快なイベントなのでしょう。

あら、あら。あんまり暴れ回りすぎて、向こうにいる子なんて、赤ふんまで外れちゃっています。完全な真っ裸なのです。

ああ。素晴らしい。この光景は、いつまでも、眺めていられそうです。

うん？

あ、しまった！

僕とした事が、すっかり、声が大きくなってしまい、うっかり、校内の者に見つかってしまいました。

睨んでます！グラウンドにいる裸の女子たちが、全員で、僕の方を睨みつけております。

おお！果たして、このままだと、僕の身はどうなってしまうのでしょうか。

近づいて来ます！赤ふん姿の女の子たちが、いっせいに、僕の方へと走って来ました。圧巻です！なんて、興奮させられるシチュエーションなのでしょう！

わわわわ！もはや、これまでです！あああ、や、やめてえ！

み、皆さん、これにて実況の方も終わらせていただきます。さーよーならー！

了

顔のない私

「ねえ。絶対に消しておいてよ」と、私は彼に念を押した。
「ああ、もちろんだよ。心配しないで」と、彼は私に応えてくれた。
私たちは、今、直接会って、話をしているのではない。ＬＩＮＥで会話を交わしているのだ。
私たちは、ネットで知り合ったカップルだった。ついに、お互いに直に会う事はなかった。
でも、まだ高校生だった私にとって、この直接会う事のない交際は、とっても刺激的な恋愛となったのだ。どちらも、自分の詳しい素性は伏せていた。しかし、だからこそ、実生活には影響がない人物だという事で、私も、彼に対しては、羽目を外して、自分の何もかもを包み隠さず、晒す事ができたのである。
彼は、私に、裸の写真を送ってくるように要求しだした。私も、ドキドキしながら、その指示に従ったのである。いや、私自身も、自分の裸を他人に見せる遊びに、つい欲情しながら、ハマってしまったのだ。
私は、彼へと、沢山の自分のヌード画像を送った。全裸になり、女の子の体の全ての部分を、彼に見せてしまったのである。私も、その行為に大いに興奮して、彼に自分の大事な部分を見られていると思っただけでも、激しく体が疼いたのだった。
しかし、ついに、彼との大人の恋愛も終わらせる時が来たのである。さりげなく、彼から別れ話を振られて、私もそれに素直に応じるつもりになったのだ。ただし、気がかりだったのは、彼に大量に送ってしまった私のヌード画像だった。そこで、私が、その話を持ち出すと、彼も、このように、快く画像を全部、破棄する事を約束してくれたのである。
こうして、私は、後腐れなく、彼とは別れた。

それから、ひと月ほど経ってからの話である。私が、いつものように、学校へ行くと、親友が、弱ったような表情で、私のそばに寄ってきた。

「ちょっとぉ、あなた、知ってる?」と、彼女は私に話しかけてきた。

「何を?」

「うちのクラスの男子が、最近、こんな画像を回し見しているらしいのよ。何やら、いやらしいサイトから拾ってきた画像らしいんだけど」

そう言って、彼女は、自分のスマホに写し出した画像を、私に見せてくれた。

それを目にして、私は、思わず、息を飲んだのである。

それは、女の子の裸の画像だった。目元だけが、黒い線によって、ガッチリ隠されている。だけど、あとは、胸もおへそも股間も、あられもなく、すっかり晒しているのだ。これが、ほぼ間違いなく、私が彼に渡した、あの私のヌード画像だったのである。

「この画像の女の子さ、男子たちが言うには、あなたの顔に似てると言うのよ。でも、まさかね。他人の空似よね。あなたが、こんなイカガワシイ写真を変なサイトに売るはずがないもの」

親友は、顔をしかめながら、そう言ってくれたのだった。私も、ひたいにシワを寄せながら、ひたすら頷いてみせるしかなかったのである。

幸い、画像に写った私は、登校する時とは違う髪型をしていた。だから、かろうじて、別人だと誤魔化し切る事もできたのである。

それにしても、ＬＩＮＥの彼は、まんまと私を騙してくれたようだ。彼は、私のヌード画像を捨てずに、エッチなサイトに売り飛ばして、金儲けに使ってしまったのである。高校生の私が、こんな大人のサイトを見る事もないだろうし、顔さえ隠しておけば大丈夫だと思ったのかもしれないが、そんな訳にもいかなかったのだ。

あとで調べてみると、私のヌード画像は、そのほとんどが、あち

こちのエロ画像サイトに売られてしまっていた。例によって、目元だけは黒い線で隠されていたが、他の部分は全て、丸見えなのだ。出所不明の形で、私の全裸が、大量に世間に出回ってしまったのである。

恥ずかしい。私は、顔だけを秘密にして、その裸は全国の人間に見られてしまったのだ。私は、なんて、みっともない女子高生になってしまったのであろう。

せめてもの救いだったのは、うちの高校の生徒たちだけは、最後まで、このヌード画像が、私に似た別人のものだと信じてくれた事である。それでも、些細な特徴がヒントになって、いつか、このヌード画像の真実がバレてしまうのではないかと、私は、卒業するまで、ヒヤヒヤし続けたのだった。

ＳＮＳとは、実際には、とても怖い空間なのだ。ちょっと隙を見せれば、あなただって、いつ私のような目にあうかも分からないのである。

了

宇宙セールスマン

時は、まさに宇宙時代なのだ。

地球の衛星軌道上には、ぽっかりと、巨大な宇宙ステーションが浮かんでいた。そこには、すでに沢山の人間が住みついている。そして、我々の通っている高校も、そんな宇宙ステーションの中に開設されていた。

さて、その宇宙の高校での話である。

生徒たちは、前の授業を終え、教室の中で、つかの間の休憩時間を共にしていた。

すると、教室の中に、何者かが、いきなり、瞬間移動（テレポート）して、現われたのだ。でも、さして驚く話ではない。宇宙時代になってからは、よくある出来事なのである。どこかの天体の宇宙人が、こんな感じで、地球人にアポなしのコンタクトを求めてくるのも、ごく当たり前になっていたのだ。

今、教室に出現した輩も、そのたぐいらしかった。そいつは、形は地球人そっくりだったが、肌が濃い緑色だったのである。そして、そいつは、沢山の荷物を抱えていた。

「地球人の皆さん、初めまして。私は宇宙商人です。皆さんの役に立つようなものを、いっぱい持ってきましたよ。どうぞ、ご贔屓にしてくださいね」と、なんと、その宇宙人は、にこやかな笑顔を浮かべ、厚かましくも、教室の中で、行商をおっ始めたのだった。

もちろん、地球にだって、ルールやマナーは存在するのだ。たとえ、相手が宇宙人であろうと、勝手にビジネスを行なうような真似は、目をつぶる訳にはいかないのである。

その宇宙商人の前に、りんと立ちふさがったのが、このクラスの女学級委員だ。

「あなた。ここは神聖なる教育の場所なんです。うさん臭いものを

生徒たちに売りつけるような事はやめてくれませんか」と、彼女は、きっぱりと宇宙商人に言い放った。

それで、宇宙商人も、ちょっと不快そうな表情を浮かべたのである。

「私の星の方が、地球よりも何倍も科学が進んでいます。役に立たないものなど売ってはいませんよ」

「モグリの宇宙人の言葉なんて、信用できません」

その一言が、宇宙商人にも、かなりカチンときたらしい。

「いいでしょう。それなら、実際に、私の売ってる商品の質を見せてあげましょう」

次の瞬間、女学級委員は、宇宙商人の念力を受けて、突っ立ったまま、動けなくなってしまったのだ。

「な、何をするつもりですか！」

うろたえた女学級委員が訴えたが、それを無視して、宇宙商人は、自分の荷物の中から、一本の長剣を取り出した。

「これなる刀（ソード）は、人体にだけは絶対に傷をつけない、宇宙でもっとも安全な刃物です」

そう説明するなり、宇宙商人は、ババババッと、素早い動きで、その剣を振り回してみせたのだ。

と、続けざま、女学級委員の着ていたゴム製の制服（スーツ）が、細切れになり、あたりにパーッと散ってしまったのである。宇宙ステーションの住民は、皆、体にフィットした、この全身タイツ型のゴム制服を身につけていた。それを切り除かれたものだから、女学級委員はすっかり下着姿になってしまったのである。

「きゃあーっ。何するんですか！」と、彼女は、顔を赤くして、叫んだ。

今や、彼女は、あちこちの肌がむき出しになっていた。宇宙ステーションでは、人前でこの護身用ゴム制服を脱ぐ事は無かったので、これは、ありえなくて、とっても恥ずかしい事態なのだ。

ゴム制服ごしでも、うっすらと分っていた、女学級委員のグラマ

ーな体のラインが、服が無くなった事で、はっきりと確認できた。今の彼女は、完全なセミヌードで、かろうじて、まだ身につけていたのは、暖色系のシールブラとシールパンティのみで、乳房と腰まわりだけを隠した状態なのである。

そして、この普通なら見る事のできない光景に、教室の生徒たちは、困惑するどころか、逆に、ワーッと歓喜してしまったのである。特に、男子生徒たちが喜んでいた。

そういう周囲の反応に、宇宙商人も気を良くしたらしい。彼は、再び、剣を女学級委員むけて突き出して、達人のように軽やかに振ってみせたのである。

すると、今度は、女学級委員の大きな乳房をお椀のように覆っていたシールブラが、パーッと散ってしまった。シールブラは、先端にあったピンク色の星形の模様だけが残って、ニップレスみたくなってしまったのである。

同時に、彼女のシールパンティの方も切り裂かれていた。彼女の赤いパンティは、前の方だけを残して、後ろ側の布は何もかも無くなってしまったのである。これでは、まるでTバックだ。女学級委員のプリンとしたお尻も、白日のもとに晒されてしまったのである。

「やだーっ。もう、やめてえ!」女学級委員が悲鳴をあげた。でも、彼女は、宇宙商人の念力で縛られているものだから、逃げられないし、動く事もできないのである。

周囲が盛り上がっているものだから、宇宙商人の方も、完全に調子に乗ってしまっているのだ。

彼の次の一振りで、女学級委員のシールブラは、さらに細かく刻み込まれた。シールブラの星の形が、ぐんと小さくなり、わずかに乳首を隠すのみになってしまった。彼女の茶褐色の丸い乳輪は、もう、ブラの外にと、はっきりと、はみ出ていた。乳首が見えてなくても、女の子の乳輪だから、十分に照れ臭いのだ。

シールパンティの方も、同じように、もっと切り刻まれてしまい、恥丘の上に、かろうじて、ハート状の形で貼り付いているだけにな

ってしまった。真っ赤なハートマークの前貼りは、逆に、エロく誘惑しているようにも見えてしまうのである。

女学級委員の姿は、もはや、裸も同然だった。彼女の顔は、完全に青ざめ、引きつっていた。

でも、周囲にいる生徒たちの残酷な目は、まだ、これ以上のものを期待しているみたいなのである。皆は、ものすごい好奇心で、女学級委員の方を見守っているのだ。

宇宙商人は、その事を確認して、ニンマリと微笑むと、サッと最後の一太刀を振り下ろしたのだった。

了

銭湯の襲撃

スケ番グループが自分のことをつけ狙っていると聞いたので、あざといマキは、用心して、とても巧みに立ち回っていた。

学校では、スケ番グループのことを避けて、移動していたし、スケ番グループの監視の目から逃れる為、夜遅くまで、あちこちを歩き回って、自宅には深夜まで帰らなかった。こうして上手に逃げ回っていれば、いつまでも、スケ番グループを撒けるはずだと、マキは思っていたのだ。

しかし、実情は違ったのである。マキがまんまと逃げ切ってしまうほど、スケ番たちの怒りの念は、より強いものにと膨らんでいったのだ。

マキも、もともと、素行のいい女生徒ではなかった。スケ番グループの追求の手が激しくなれば、マキの方も、それだけ、生活環境を崩して、ますます、スケ番たちとは出会わないように工夫をしたのだ。

マキは、ついに、高校には顔を出さなくなった。自宅の方にも、スケ番グループの見張りがいない一瞬の隙にしか戻りはしなかった。自分の動向をくらます為に、友人たちとも会わなかった。これで、マキの居場所は、完全に、誰にも分からなくなったはずなのだ。

何と言っても、これはスマホもインターネットも普及していなかった昭和の頃のお話である。マキの行方は、もう、絶対に探し当てられないかのようにも見えた。

しかし、スケ番グループの情報網を舐めてはいけなかった。ついに、彼女たちは、マキのいる場所の決定的タレコミ情報をキャッチした。彼女たちは、すぐさま動き出したのである。

その頃、マキは、近所の銭湯にいた。その日の一番湯に浸かっていたのである。彼女だって、女の子だから、逃走中であっても、時

には体の汚れを落としたかったのだ。
この夕刻の早い時間帯の一番湯ならば、誰とも顔を合わす心配はないはずだった。実際に、マキ以外には、まだ入浴に来ていたお客はいなかったのである。彼女は、浴槽に身を沈めながら、のんびりと心と体の疲れを癒していたのだ。
ところが、次の瞬間、他のお客たちが、勢いよく、この浴場へと入って来た。それは、スケ番グループだった。彼女たちは、セーラー服のままで、この場所へと乗り込んで来たのである。
ギョッとしたマキは、慌てて、浴槽から立ち上がった。でも、そこで彼女は躊躇した。
今の彼女は、入浴中だったのである。当然、素っ裸なのだ。これでは、すぐには逃げられないのである。
当然、脱衣場にも、スケ番グループの誰かが見張りに立っている事だろう。マキとしては、自分の服を持ち出せる見込みはなく、このピンチからの脱出は、ほぼ無理そうなのだ。
「マキ！やっと見つけたよ！もう逃がさないからね！」スケ番が、ドスのきいた声で、マキを怒鳴りつけた。
マキは、全裸のままで、浴場の片隅に立ち、すっかり狼狽していた。
そんな彼女の周りを、スケ番たちはグルリと取り囲み、距離を縮めていったのである。
丸裸だったマキには、逃げるどころか、戦う事もできそうな感じではなかった。ただでさえ多勢に無勢なのに、一人だけ素っ裸で、セーラー服姿のスケ番たちに囲まれているマキの姿には、悲愴さすら漂っていた。
加えて、なまじっか、マキが美形で、肉付きのいい、きれいな体をしていたものだから、なんとなく、ＡＶの撮影現場っぽい雰囲気も醸し出していたのである。
「ごめん。本当に悪気はなかったのよ。お願い、許して」マキは、泣きそうな声で、慌てて謝った。

「許さねえよ！覚悟しろよ」と、スケ番が言い返した。
マキは、恐怖で目を見開き、ゴクリと息を飲んだ。彼女の湯上がりの裸体はガクガクと震えており、その内腿には、チビっちゃったオシッコが一筋の線になって伝っていったのだが、彼女の両足もまだ湯で濡れたままだったので、その事は、皆は気付いていなかったかもしれない。

了

銭湯の襲撃（後書き）

「くらやみのリンチ」に続く

くらやみのリンチ（前書き）

「銭湯の襲撃」の続き

くらやみのリンチ

スケ番グループにつけ狙われていたマキは、長い事、逃げ回っていたのだが、とうとう、銭湯で入浴していたところを連中に襲われ、捕まってしまった。

様子がおかしいと感じて、銭湯の管理人が、浴場を覗き込んだ時には、すでに、マキの姿もスケ番たちの姿もなかった。スケ番グループに拉致されたマキは、銭湯の裏口から外へと連れ出されていたのである。

素っ裸だったマキは、両手を縛られ、さるぐつわを噛まされた後、頭の上から黒いゴミ袋を被されてしまった。それで、彼女には、外部の様子が何も分からなくなってしまったのである。その状態で、彼女は、スケ番グループにどこかに連れていかれたのだ。

マキの上半身は、このように、完全に袋の中に閉じ込められてしまったが、下半身はむき出しのままだった。さながら、茶巾ずしにされたのと同じ状況なのだ。そして、それは、下半身が暴行され放題になっていた事も意味していた。

しばらく、スケ番たちに持ち上げられて移動していたマキの体が、ついに、どこかの床の上に投げ落とされた。目的地に着いたらしい。恐らくは、スケ番たちのアジトかと思われた。つまりは、誰にも見られていない場所で、いよいよ、スケ番たちの私刑（リンチ）が始まろうとしていたのだ。

床に転がったマキは、慌てて起き上がろうとしたが、すぐさま、上半身を再び床にと押し倒された。スケ番たちのクスクス笑う声が聞こえる。何も見えない真っ暗な中で、ますます、マキの恐怖心は煽られた。

突如、マキのむき出しの両足は押し広げられ、グッと押さえつけられて、固定された。マキは、仰向けのまま、本当に動けなかった。

完全に、スケ番たちのされるがままなのである。
次の瞬間、マキの内腿の一点に、ものすごい激痛が走った。痛いだけではなく、熱さも伴っているのだ。これは、明らかに、根性焼きされた時の感触なのである。
さるぐつわをされて、声を出せなかったマキは、それでも、悲鳴をあげようとして、顔をしかめ、必死にモガモガとわめき続けた。だが、多分、その声も、外には聞こえてはいないのだ。
ああ。太ももに根性焼きなどされたら、セックスするたびに、その丸い火傷の痕を、相手の男にも見られてしまうだろう。マキにとっては、自分の長い両足が、ピチピチしていて、健康そのものだったのが、自慢だったのに。
だが、スケ番たちのリンチが、この程度のもので終わるはずもなかったのだ。
続けて、マキは、恥丘のあたりがヒャッとするのを感じた。どうやら、恥丘に何かをつけられたらしいのだ。
それが、シェービングクリームだった事は、間もなく、分かった。と言うのも、そのあと、今度は、恥丘に、固い冷たいものが当てがわれたからである。その固いものは、マキの恥丘の表面を、滑りながら、繰り返し、行き来した。これは、カミソリの刃なのである。スケ番たちは、今は、マキのアンダーヘアを剃っていたのだ。
それに気がつくと、マキも迂闊に動く事はできなくなった。ちょっと誤ったら、肌までグサリと切られてしまうかもしれないからだ。
カミソリの刃は、恥丘の上を動き回るだけではとどまらず、マキの陰部の方にまで移動してきた。スケ番たちときたら、本当に丁寧に、隅々まで、マキのアンダーヘアを剃毛しているのだ。カミソリの刃が、陰唇のそばにまで寄ってきた時は、マキも、慎重に息を止め、身をこわばらせたのだった。
そして、この剃毛のリンチも終わったらしい。カミソリの刃が離れた後、マキは、股間がスースーするのを感じていた。スケ番も、ペチャペチャと、マキの恥丘の上を、平手で軽く叩いてみせた。

「マキ。分かるかい。お前の下の毛、全部、剃ってやったよ。やい、恥ずかしいだろ。さて、次は、あんたの大事なものも切っちゃおうかな」

スケ番は、そう言うと、いきなり、マキのクリトリスに、自分の指を押し当てたのだった。そのまま、指先を少しグリグリさせると、指を離した後、刺激されたクリトリスは、一気に勃起しだした。包皮をめくり上げて、無防備に、外へ飛び出してしまったのだ。

何も見えないマキには、スケ番たちの笑い声が聞こえたが、それが、マキのクリトリスを見ての嘲笑だった事は、ほぼ間違いなさそうだった。

マキは、ゾッと震え上がった。きっと、クリトリスを削ぎ落とされるんだ！

マキは、必死でもがいたが、スケ番たちに、よってかかって、体を押さえつけられていたので、全く、動く事すらもできなかったのである。

スケ番は、面白がって、また、マキのクリトリスをいじりだした。クリトリスの根元に、グイグイと爪を食い込ませてみて、ふざけているのだ。

顔をゴミ袋で覆われているマキには、それが、果たして、何をされているのかが、まるで分からないのだった。彼女には、本当に、クリトリスが切除されているようにも感じられたのである。

「ああ、ああ」と、マキは、上の空で、呻いた。

彼女の恐怖は、限界を超えた。下半身はすくみ、体のあちこちを制御できなくなってしまった。マキは、とうとう、失禁してしまったのである。いっぺんにオシッコを漏らしちゃったのだ。

下半身は丸出しで、パンツにさえぎられる事もなかったので、オシッコは、勢いよく、弧を描いて、飛んだ。他人に見られていると言うのに、とても大胆な放尿っぷりだった。さらに、なかなか止まらなくて、最後の一滴まで出し切っちゃったのである。

それを目にして、スケ番たちは、またまた、大笑いしてしまった

のだった。

誰にも見られないゴミ袋の中で、すっかり消沈していたマキは、グズグズ泣いていた。事実も知らずに、彼女は、もう、クリトリスを切り落とされてしまった気になっていたのである。

だが、そんなマキへと、スケ番たちは、なおも、呵責の手をゆるめなかった。

スケ番たちは、今度は、マキの体をひっくり返して、うつ伏せにしたのだ。その上で、への字の形になるよう、腰だけを上へと持ち上げる事を、マキへと強要した。こうして、マキのむき出しのデカい尻が一番てっぺんに突き出した格好になったのである。

マキは、相変わらず、上半身は黒いゴミ袋の中に押し込められたままで、ことわざ通りの、尻隠さずの状態だったものだから、これは、ますます、異様な見た目なのであった。

そして、当然、このようなポーズを取れば、お尻だけではなく、女性器も一緒にモロ見えになってしまうのである。スケ番は、マキのデカ尻を小気味よく、ポンポンと叩くと、今度は、この女性器にと狙いを定めたのだ。

マキは、お尻を上げた後、自分の膣（ヴァギナ）へ、何かが差し込まれる感触に襲われた。どうやら、棒状の異物を突っ込まれたらしい。それが何なのかは、マキにも、すぐに分かった。電動音とともに、その何かが小刻みに動きだしたからである。

スケ番たちは、特大サイズの電動バイブを、マキのヴァギナへと挿入したのだ。これもまた、スケ番の定番のリンチの一つなのである。

スケ番たちは、このバイブを使って、マキのことを、容赦なく、あえがせ始めた。マキもマキで、しょせん本能には勝てなくて、バイブが振動しだすと感じてきちゃったらしく、スケ番たちの思った通りに、悶えだしてしまったのである。

お尻を突き出した状態で、バックの体位で特大バイブを押し込まれている姿は、あまりにも、みっともないのだ。スケ番たちは、さ

らに、バイブをグリグリと回しながら、大笑いしながら、この様子を見物したのだった。

「このアバズレめ！ほんとは、こんなプレイが好きなんだろ！」スケ番が、喜々として、叫んだ。

たとえバイブが相手であろうと、得られる快楽は同じなのである。マキは、この後、たちまち、絶頂に達してしまったのだった。

しかし、スケ番たちは、まだバイブを引っこ抜いてはくれなかったのである。そのまま、さらにマキのアソコを責め立てたのだ。おかげで、マキは、バイブを刺されたまま、何度も何度も、イってしまったのだった。

マキだって、こんな格好で、突き出した尻にバイブを食い込まされて、それでヨガっているなんて、ちょっと変態じみてきたのである。

「どうだ、ドスケベ女！アソコがユルんで、ガバガバになるまで、遊んであげるよ！」

と言う事で、マキの暗闇の中でのリンチは、まだまだ終わらないのである。

了

マッサージ

教室で、男子のボスが、女子たちに片っ端から声をかけていました。

マッサージをしてやる、と言っているのです。そう言えば、昨日は、このボス男子は、取り巻きの男子生徒たちを椅子に座らせて、ねぎらうように、肩を揉んでやっていました。取り巻き男子たちも、お世辞なのか、皆、気持ちいいと感想を述べておりました。

どうやら、ボス男子にとって、マッサージが、ちょっとしたマイブームになっていたようです。きっと、今は、いろいろな人の体を揉んでみたいのでしょう。

でも、この世代は、女子だって、異性を意識している年ごろですから、安易に、ボス男子の誘いに乗る女生徒もいないのです。誰もが、ボス男子からの申し入れを、あっさり断ったのでした。

とうとう、残った女生徒は一人だけになりました。それで、ボス男子が、しつこく、その子を口説き続けたところ、ついに、了解を得る事ができたのでした。その女生徒は、とっても意思が弱かったのです。

さっそく、他の男子生徒たちにも取り囲まれた中で、ボス男子のマッサージが始まりました。

椅子に座った女生徒の肩を、ボス男子は、ゆっくりと揉みだします。

なかなか、うまいのでありました。そして、意志の弱い女生徒の方も、身を任せて、されるがままなのです。ボス男子に、気持ちいいだろ、と聞かれると、女生徒もおとなしく頷きました。

実は、ボス男子の方も、男とは異なる女の子の体の触り具合に、少しドキドキしていたのでした。彼は、肩を揉みつつ、女生徒の頭ごしに見える、その子の胸のあたりの膨らみが気になり始めていま

した。

そして、ボス男子は、ついに堪えられなくなってしまったのでした。肩を揉んでいたはずの指先を、じょじょに、女子の胸もとの方へとずらしていったのです。

怪しい状況に気づいた女生徒は、不安そうに、後ろにいるボス男子の方に振り返りました。

「ほら、気にしないで。ただのマッサージだよ」と、ボス男子は強引に言い切りました。

すると、女生徒の方は、全く、反論しなかったのでした。彼女は、そこまで、気が弱かったのです。

女生徒の抵抗を制したボス男子は、気を良くしたのか、だいぶ大胆になってきました。

女生徒の肩を揉んでいたはずの両手を、完全に、女生徒の胸の上へと移動させてしまったのです。そのようにして、ほんとに、マッサージかのように、女生徒の膨らんだ胸をグイグイ揉み始めたのでした。

女生徒は、すっかり、オロオロしていましたが、ボス男子は、いっこうに止めません。その様子を見ていた、周りの男子たちも、とめに入らないばかりか、一緒にドキドキしながら、その光景を眺めていたのでした。

だいぶ経って、ようやく、ボス男子は、マッサージを終わりにしてくれました。

解放された女生徒は、顔を赤くして、泣きそうな状態で、慌てて、この場から逃げ出したのでした。

しかし、ボス男子の方は、まだ興奮がおさまっていなかったのです。彼にとって、今のは、はじめて女性のおっぱいを触ってみた体験でした。しかも、この女生徒のおっぱいは、マシュマロみたいに柔らかくて、とっても感触が良かったのです。

翌日、ボス男子は、同じ女生徒に、再び、マッサージしてあげると申し出ました。

女生徒の方は、この日も拒絶する事ができなかったのでした。彼女は、とことん気弱な性格だったからです。昨日、胸を揉まれた事も、泣き寝入りして、誰にも話していませんでした。そんな訳で、今日も、男子に詰め寄られると、彼女は、嫌がる事ができなかったのです。

話がまとまると、早くも、ボス男子と女生徒の周りを、取り巻きの男生徒たちが、グルリと囲みました。彼らも、女の子が胸を揉まれる姿を、また見たかったからです。だから、とっても協力的なのです。こうやって、壁になって、ボス男子のやっている事を、周囲には隠してしまったのでした。

かくて、かわいそうな女生徒は、今日も、自分の意思に反して、胸をいっぱい揉まれてしまったのです。

きっと、この調子だと、この子は、明日以降も、毎日、男子たちの餌食にされてしまう事でしょう。男子たちは、ほんと、根はイヤラシイ奴ばかりなのです。

ボス男子だけではなく、他の男子たちも、彼女のことをマッサージすると言い出すかもしれません。

もっと効果的にマッサージしてあげると言って、制服をめくられてしまう可能性もあるでしょう。ついには、ブラジャーの中にも指を突っ込まれて、乳房をじかに揉まれてしまうのです。

それどころか、男子たちの要求は、さらにエスカレートして、他の場所も揉んであげる、と言い出すのではないのでしょうか。女生徒の脇腹や太ももとかも、マッサージと称して、ベタベタ触り出すかもしれません。あげくは、彼女のスカートもまくってしまい、女の子の一番大事な部分も、パンツごしに、がっちり揉まれちゃうのです。

そこまで行ってしまったら、裸にされて、よってかかって、男子一同に、全身マッサージをされてしまうのも時間の問題でしょう。しまいには、初体験の相手になる事だって強要されてしまうに違いありません。

全く、意志の弱い女生徒と言うのは、気をつけないと、こんな事になってしまうものなのです。

了

手乗り女子高生

私は、発売されたばかりの「手乗り女子高生」を購入してみた。
これが、なかなかの逸品なのだ。
名前から分かると思うが、これは、小さなサイズの人間の女の子なのである。しかも、生きていた。いわゆる、今流行りの合成ペットという奴なのだ。と言っても、本物の人間の遺伝子は組み込まれていないので、人権的な問題には引っ掛かっておらず、その点は安心していただきたい。
また、手乗りサイズと言うのも、多少、誤謬はあった。確かに、幼体時は、手のひらに乗るほど小さいのだが、成長すると、およそ４０センチほどの身長になるのである。ただし、実際に、一緒に暮らしてみると、小さすぎるよりは、４０センチぐらいの大きさになってからの方が扱いやすいのであった。私自身も、幼体から育てたのではなく、いきなり、成体を買ってきたのである。
幼体は、人間の女の子と言っても、幼稚園児のような形をしていた。それが、ひと月ほどかけて、成体となる。個体差はあるが、たいがいは、１０代の女の体型にと変わるのだ。そう、このペットは、肉体の細部までもが、本物の人間の女性そっくりだったのである。
知能の方も、人間の女子高生（ギャル）なみだった。おっと、失言。本当は、犬猫と同じぐらいの頭の良さである。それで、たいへん従順だった。よって、いっぱい愛情を注いで育てれば、とても、なついてくれる。難しい事もできないし、喋れもしないのだが、しかし、この小さな女の子とじゃれ遊ぶと、たいへん癒されたのだ。
と、これまでの話から、うっすらと勘づいたのではないかと思うが、この合成ペットは、基本的には、素っ裸だった。飼い主の判断で、服を着せたりもするのだ。このペット自身は恥ずかしがりもしないので、実際は、裸のままでも構わない訳なのだが、何しろ、あ

まりに人間そっくりなものだから、飼い主の方が照れて、つい服を着せてしまうらしかった。全く、よく出来た商売だ。

女子高生という商品名だけに、このペット用のミニサイズのセーラー服や女子校制服を着せる飼い主が多いみたいだった。しかも、制服だけではなく、このペットは利口なので、指示すると、下着も制服も、嫌がらずに重ね着してくれた。本物の女の子に服を着せてるような感覚を味わえるのだ。そのせいか、飼い主は、皆、つい制服だけではなく、下着や装飾品なども買ってしまい、この可愛いペットを着飾りたくなってしまうのである。

そういう私も、自分が飼っている子には、着替え用の制服や下着、アクセサリーなどをいっぱい購入してしまったのだった。着せ替え人形みたいに、このペットをきれいにコーディネートして眺めるのが、次第に楽しくなってきちゃうのである。このペットは、自分から衣装を欲しがる訳ではなく、こちらの指図どおりに、どんな服だって着てくれるから、なおさらなのだ。

その他の点においても、このペットは、犬猫と、それほど変わった部分はなかった。餌は人間と同じものを行儀よく食べてくれるし、きちんと躾ければ、排泄だって専用のミニトイレでのみ行なってくれた。病気になれば、動物病院で、普通に治療もしてもらえる。特殊な買い方ルールなどはなく、実に手間がかからなかったのだ。

飼い主の言う事は、言葉の内容ではなく、ご主人の表情や態度を伺いながら、理解していたらしい。こちらが機嫌のいい時は、自分から無邪気にじゃれついてきたし、こちらの気分が沈んでいる時は、このペットも心配そうな顔をしながら、慰めてくれた。人間の姿をしていながら、全く、動物そのものもピュアさや無垢さを持ち合わせていて、誠実さにおいても、とことん理想的な存在だったのである。

人懐っこく、甘えん坊だったからこそ、頻繁に僕にと抱かれたがったのだった。もちろん、僕の方も、ペットとして抱いてやったの

だが、何しろ、人間の女の子そっくりだったものだから、抱いているうちに、奇妙な感覚にも襲われてきたのである。

このペットは、人間の女性の体と同じ作りをしているのだ。撫でたりしていると、本物の人間の女を触っているような興奮も覚えてしまったのである。

寝る時は、私は、このペットも連れて、寝てみた。このペットは、布団の中に入れてやると、喜んで、飼い主と添い寝してくれるのである。私は、就寝中は、人間と同じように、このペットの服も脱がせてみた。裸にしてしまったのだ。すると、まるで、人間の女と一緒に寝ているような気分にもなれたのだった。

思わず、このペットの乳房や性器を触ってみた。サイズが小さいだけで、まるで、本物の人間のそれを愛撫しているみたいなのだ。さらに、このペットには羞恥心がないものだから、自分の体をいくらでも触らせてくれた。それこそ、人間のカノジョ相手だと怒られそうな行為まで出来ちゃったのである。

もっとも、大きさが違うから、このペットとセックスする事だけは不可能だった。それ以前に、このペットは無性であり、繁殖能力が無かったのである。そのくせして、体をさすられると気持ちよかったのか、まるで欲情したような反応を見せて、喜んでくれたのだ。

この子は、最高に素敵なペットであったとも言える。欠点があったとすれば、それは寿命であろう。このペットは、せいぜい１０年程度しか生き長らえなかったのである。せっかく、強い愛情と絆で十分に結ばれた頃に、突然、このペットはあっさり死んでしまう訳だから、多くの飼い主は、激しいペットロスに陥ってしまうに違いあるまい。そして、また新たな手乗り合成ペットを飼ってしまう事になるのだろうから、このペットの製造主の方も、つくづく、うまく考えたものだ。

さて、この手乗り女子高生の気になるお値段なのだが、私が買った時は、約２００万円であった。新品のほとんどは、このぐらいの値段である。果たして、あなたには高いと感じるであろうか。でも、

今のご時世だと、チョコレート1枚を買うよりは、はるかに安いのである。全然、お買い得じゃないかと思うのだ。

私は、あなたにも、ぜひ、手乗り女子高生を一匹、飼ってみる事をお勧めする次第なのである。

了

チアリーダー

僕の彼女は、うちの高校のチアリーダー部に所属していた。自分で言うのも何だが、僕の彼女は、チアリーダー部の中では、一番かわいい女子だった。

僕にとって、少し不満に感じていたのは、そんな彼女と交際し始めてから、もう2年以上が経つのに、僕と彼女の間の距離をなかなか縮められなかった、と言う事であった。

いつも二人で一緒に下校しているぐらい、僕と彼女は、周囲も認めた恋仲だったにも関わらず、彼女は、僕にまるで身を任せてくれなかったのである。せいぜい、手を握り合うのが、やっとなのだ。それ以上の行為に発展する事は、巧みに話をずらして、彼女はまるで許さなかった。キスだって、した事もない。高校生にもなって、ほんとに、プラトニックな恋愛をしていたのである。

僕の方は、全然、もっとディープな関係になる事だって望んでいたのだが、彼女に強引に迫ってみた結果、彼女を失望させて、破局してしまうのが怖くて、それが出来なかった。

なぜ、そこまで、彼女が純潔を守るのか、彼女自身が、それとなく教えてくれた事がある。今の彼女は、チアリーダーの一人として、学園のアイドルなのだ。アイドルは、皆のものでなくてはいけない。だから、公認の彼氏の僕に対してさえ、一線を越える事はできない、と言うのであった。

分かるような、分からないような理屈なのである。しかし、彼女がそう言い張る以上は、この言い分に従うしかないのであった。

確かに、体育系部活の応援の為に、彼女が、チアリーダーの一人として、元気に踊っている姿は輝いていた。まさに、観客席に咲いた華麗な花、学園のスター集団だった。

でも、それだけに、こんな可愛い子を彼女にしていながら、その

彼氏である僕が、この子の体をろくに自由に出来なかった事が、ますます、残念に感じられたのである。

僕が、特に気にかかっていたのは、彼女が激しくチアダンスを舞った時、チアリーダーの衣装のミニスカートがめくれて、彼女の眩しい生足や、さらには、スカートの中の白いものまでもがチラチラ見えていた点だった。

そんなのチアリーダーだから当たり前だろうと、皆さんは言われるかもしれないが、そもそも、彼女は、僕一人の前では、素足や下着は全く見せてくれた事もなかったのである。

それなのに、彼氏の僕にも見せた事のない、自分の秘密のかしょを、彼女は、全校生徒の前では、堂々と、あっけらかんと、お披露目していたのだ。その本来の恋人同士とは真逆とも言える状態に、僕は、より納得のいかないものを感じていたのだった。

やがて、僕たちも三年生となり、彼女もチアリーダー部から引退する日が訪れた。

彼女の最後の応援ダンスを、僕も見届けてあげると、彼女は、ダンス終了後、すぐに僕の元に駆け寄ってきた。

「このあと、一緒に帰ろう。待ってて」と、チアリーダーの衣装のまま、彼女は僕に告げたのだった。

僕は、言われた通りにした。彼女が、部室に行き、着替えてくるのを、その場で待っていたのである。

やがて、学校の制服に着替えた彼女がやって来た。二人は、並んで歩き出すと、普段通りに、二人だけで帰る事にしたのだ。

しかし、今日は、ちょっと様子が違うようだった。彼女は、帰路の途中にあった、小さな公園に寄っていこう、と言い出したのだ。

僕は、事情も分からぬまま、すんなりと彼女の提案を受け入れた。

二人は、まっすぐ、その小さな公園にと立ち寄ったのである。

その公園は、まるで人気がなかった。居たのは、僕たち二人だけである。

彼女は、僕に待っているように言って、公園のトイレにと入って

いった。でも、用を足したかったのが目的ではなさそうだった。
やがて、トイレの中から、チアリーダーの衣装に着替えた彼女が現れたのだ。二人っきりの時に、彼女がチアリーダー姿を見せてくれたのは初めてだった。そのせいか、僕は、妙に照れてしまったのである。彼女のチアリーダーの衣装は、肌の露出が多く、派手な色が使われていて、非常にセクシーでもあったからだ。そんな彼女を、今は、僕が独り占めにしているのである。
「この服を着るのも、これで終わりよ。私の最後のダンスで、キミを応援してあげる」と、彼女は言った。
彼女は、サプライズで、本当に、僕だけのチアリーダーになってくれたのだ。なんて、粋な事を考えてくれる、素敵な恋人だったのだろう。
そして、誰もいない公園の中で、彼女は舞い始めた。僕一人だけが見物人のチアダンスだ。こんな間近で、彼女が踊る姿を見る事からして初めてだったので、僕はとてもドキドキしてしまった。
アイドルのようなケバケバしい衣装で踊る彼女は、たいへん可愛くて、キラキラしているのだ。でも、そのうち、僕はおかしな事に気が付いたのである。
いつもの彼女のダンスでは、チラチラと目に入ってきた、彼女のスカートの中の白い色が、今回は、全く気にならなかったのだ。いや、それもそのはずである。今の彼女のスカートの内側には、そもそも、白いものがなかったのである。彼女は、どうやら、ノーパンで踊っていたのだ。
それが分かると、僕は、よけいドッキリしてしまったのだった。
でも、そんな僕の気持ちなど構わずに、笑顔を浮かべる彼女は、元気に踊り続けた。
僕は、初体験のノーパンチアダンスに、それも、自分の彼女が踊っていたものに、すっかり目が釘付けになってしまったのだった。これまで以上に、彼女のスカートの周辺ばかりに注目してしまったのである。

かつてないチラリズムだった。今にも見えそうな彼女の秘部ばかりを、僕は気にし続け、しかし、彼女が絶妙に踊ってみせるから、ついに、最後まで、それがハッキリと見える事はなかったのである。

そして、とうとう、ダンスが終わってしまった。踊っている最中に、彼女のスカートの隙間から、お尻の丸みや、ワサッとした黒艶などがチラチラと見えはしたものの、全貌が確認できるまでは至らなかった。

だけど、僕が何となくモヤッとしていると、このダンスの終了直後に、彼女は、僕の前でしゃがみこんでみせてくれたのである。

僕は、つい目を見開いてしまった。

座り込んだ彼女のスカートが、思いっきり捲り上がってしまい、今度こそ、彼女の股間は、僕の目前で全て、晒されてしまったのである。黒い陰毛に覆われた、リアルな女の陰部がだ。

そんなものをサラッと見せつつ、彼女は照れ笑いしてみせたのだった。

「この、エッチ。キミってさ、私が踊っていた時は、いつも、スカートばっかり、覗いてたでしょ。だから、今日は、パンツを履かないで、踊ってあげたよ。どうだった？」

それは、まさに、チアリーダー部を卒部した事で、学園の生徒全員のアイドルである事もやめて、これからは、僕だけの女の子になる事を誓った、彼女の誠意がこもったパフォーマンスだったのである。

このあと、彼女は、僕の家へと来てくれた。そして、僕たち二人は、僕の部屋の中にこっそり閉じ篭ると、生まれた時の姿に戻って、これまでお預けにしてきた、あらゆる愛の歓びを共有したのである。

了

プロレス同好会

うちの学校の女生徒たちは、勝手に、女子プロレス同好会などを旗揚げして、楽しんでいた。彼女たちは、本気でレスリングに打ち込んでいる訳でもなく、ただ、プロレスの真似事だけをして喜んでいたのである。

それでも、めっぽう強い子が一人だけ居た。プロレス同好会の部長である。彼女は、プロレス同好会の発起人だけあって、遊びではあっても、プロレスへの熱の入れ具合が違って、メンバーの中でも群を抜いて強かったのだ。

彼女たちは、廃部になったボクシング部のトレーニング室に入り浸って、そこを自分たちの部室代わりに用いて、リングも無断で使わせてもらって、遊んでいたのだが、練習試合をした時も、正式な試合をした時も、部長に勝てる相手は、まず居なかった。このプロレス同好会の中で、部長は、ほぼ無敵の王者として君臨していたのである。

何せ、遊びの同好会だったのだから、彼女たちには具体的な目標もなく、無理にプロレスが上手くなる必要もなかった。だから、なおさら、他のメンバーたちは、努力や必死の訓練をする事もなく、それゆえに、なかなか、部長より強くなれなかったのだが、それでも、彼女たちが、いつも部長に負けてばかりいて、悔しく思っていたのだけは事実だった。

そこで、ある日、彼女たちは、部長抜きで集まって、いろいろと相談しあったのだ。強すぎる部長に、何とか、一泡ふかせたくて、皆で策を練ったのである。

それから、何日か過ぎて、このプロレス同好会の興行試合が行なわれる事となった。どシロウトのくせに、彼女たちは、たまに観客を集めて、無料で、自分たちの試合を、校内の生徒たちにも見せて

いたのだ。そんな部分まで、本物のプロレスに似せて、楽しんでいたのである。

その日の興行でも、それなりの数の生徒が、見物人として集まっていた。アマチュア女生徒らのじゃれ合いみたいなキャットファイトの鑑賞は、まあまあの暇つぶしにもなったからだ。

この日の見世物は、バトルロイヤルだった。同好会のメンバー全員が、リングの上に上がって、皆が敵同士となり、誰が最後まで勝ち残るかを競い合うのである。もちろん、優勝候補は、同好会の部長だった。

頃合いを見計らって、参加レスラーたちが、ぞくぞくとリングに上り始めた。全員が、スポーツブラにボクサーパンツという、いでたちである。彼女らは、レスラーが使う本格的なシングレットを買うほどのお金は無かったので、それらの服で安っぽく代用していたのだ。

参加者が全員、リングに揃って、ついに試合は始まった。

ご存知かもしれないが、バトルロイヤルの場合は、まず、もっとも手強い参加者が、皆の集中攻撃を受けて、ノックアウトさせられて、真っ先に排除されるものだ。

この試合の場合は、一番に狙われているのは、やはり、部長だった。その事は、部長の方もしっかりと心得ていたので、彼女もグッと体を構えていたのである。

案の定、他のメンバーは、全員で、いっせいに、部長めがけて襲いかかった。すぐさま、部長の周りは、他のメンバーによって、埋め尽くされた。中央にいた部長の姿は、外から見えなくなってしまったのである。

その状態がほんの少し続いたあと、部長の周りに群らがっていたメンバーたちは、サーッと、いっぺんに、部長のもとから離れてしまった。部長に対して、何の効果的な技も仕掛けていなかったにも関わらずだ。

ポカンとしていた部長だったが、次の瞬間、彼女はハッとした。

なんと、今の彼女は、スポーツブラもボクサーパンツも付けておらず、素っ裸になっていたのである。彼女は、顔を赤らめ、キャーッと悲鳴をあげて、その場に座り込んでしまった。観客たちも、思わぬ展開に、オオーッと歓声をあげたのだ。

全ては、他のメンバーたちの仕業だった。彼女たちは、共謀して、ひそかに凶器のハサミやカッターをリング上にと持ち込み、部長の周囲に群らがった時に、気付かれないように、でも敏速に、部長の服を切り破き、脱がしてしまったのである。部長の方も、皆からの技や体当たり攻撃ばかりを警戒していたものだから、この意表を突いた行動は察知できず、まんまとしてやられてしまったのだ。

こうして、他のメンバーたちは、首尾よく、部長にと一矢報いたのだった。

了

たった一人の女生徒

その時代、地球人類の男女比率は、今（２１世紀）とは全く変わってしまっていた。

原因や過程はよく分からないが、女性の人数が、ほんの一握りになってしまったのだ。あとの何十億という人類は、全て、男性である。それでも、人類の血が途絶えずに、まだ繁栄し続けていたのは、この時代の生殖方法が、合成クローンばかりになっていたからでもあった。

しかし、必ずしも、異常な社会構造だったとも言えまい。蜂の社会だって、その構成員のほとんどはメスなのだ。オスは、生殖用にのみ、僅かな数が、蜂の世界では存在を許されたのである。だから、人類が、男だらけになってしまったのも、意外と、自然の摂理だったのかもしれないのだ。

この人類社会で、どうしても、男ばかりがクローンされてしまったのには、男の方が労働力としても兵力としても適していた、と言う事も挙げられた。この時代は、世界全体に、強大な独裁体制が敷かれていたので、国民にも効率化が求められたのである。その結果、体力的に男よりも劣る女性が減っていっても、気にされずに、放置されていたのだった。

それでも、女性種は、どうにか滅び切る事もなく、細々と残り続けていた。だが、あまりにも、その人口数が少なかったものだから、男の群れの中にと混ざると、何やら、違う動物のようにも見えてきてしまったのだった。

我々が通っている高校にも、女の生徒が一人だけ通学していた。幼少期は、我々男性とかなり似た体の構造をしていた女子も、高校生にもなると、その肉体の差異がはっきりとしてきて、その生徒が女だと明白に区別できるようになっていく。我が校においても、彼

女の存在は、居るだけで、抜群に目立ったのである。
この時代は、長年の温暖化の影響で、一年中が暑くて、人々は半ズボンしか身につけないようになっていた。その為、女生徒が我々男子と異なっていた部分は、よりストレートに見分けられたのだ。
と言うのも、彼女は、胸部に、大きな丸い膨らみを二つ、持っていたからである。全員が上半身裸で居る場所では、なおさら、彼女のその特徴は、ひときわ、目についたのだ。
男からしてみれば、胸がそんなに膨れ上がっているのは、とても異様に感じられた。それどころか、動く際に、その大きな乳房はたいへん邪魔にもなっていたようなのである。彼女は、その乳房の重みのせいで、バランスが取りづらく、走るのも遅いし、動作も緩慢になりがちだった。さらに、格闘の訓練試合をする際は、容易に、この胸を狙われてしまい、そのせいで負けやすかったのである。
全く、こんな乳房は無駄でしかない。国家の方針として、このような乳房を持った人間をクローンしなくなったのも、何となく分かると言うものなのだ。
その女生徒自身もまた、こんな使えない乳房を持ってしまった事を、ひどく悔しがり、ひそかに悩んでいたようだった。ほんと、女と言う生き物は可哀想なものなのだ。
ちなみに、昔の男性は、この女性の乳房を見て、興奮したとも聞くのだが、我々には、そんな感情はいっさい湧き上がらなかった。もう長い事、クローン生殖ばかりが行なわれていた結果、人間たちの性欲とか性本能とかが、すっかり衰えていたからである。それらは必要のない機能なので、自然と退化してしまったのだ。
そんな次第で、我々は、女に対して、人間として好意を持ったり、同情したりはしたが、恋愛相手や性的対象として意識する事は、完全に無かったのである。
女生徒にとって、恐らく、もっとも屈辱を感じていたであろう学校での時間は、年に二回、実施される身体検査であった。この検査の時ばかりは、正確な数値を調べる為に、生徒たちは半ズボンをも

脱ぎ、全裸にならなくてはいけなかったからだ。
女生徒もまた、普段は、人に見せるのを激しく嫌がっていた自分の体を、何もかも、皆の前に晒さねばならなかった。
ところが、彼女が半ズボンを脱いだ時、そこには、大きなオチンチンが、どこにも付いていなかったのである。我々男生徒にとって、立派なイチモツは、自慢でもあり、誇りでもあった。それなのに、彼女ときたら、その一番大事な部位を持ち合わせていなかったのだ。
代わりに、彼女の股間には、深い割れ目のようなものがあった。外に突き出した貫禄あふれるペニスとは、全く対象的な、たらこ唇のような形をしていたのである。その彼女の引っ込んだ性器は、あまりにも醜く、情けなくて、みっともなかった。まるで去勢されて、ごっそりエグられちゃったみたいなのである。何よりも、この子は、豪快に、長いペニスの先端からオシッコを吹き出す事さえもできないのだ。
我々も、思わず、彼女のブザマな股間を、奇異な目で眺めてしまったのである。
男子一同が、うっすらと侮蔑していたり、憐れんでいた事は、多分、女生徒も勘づいていた事であろう。そんな時、この哀れな女生徒の方も、ますます、屈辱に打ち震えて、泣きかけていて、辛そうな顔をしていたのであった。

了

一日女子高生

私たちの高校では、昔ながらの古風なセーラー服が採用されていました。でも、その為に、私たちは、あんな事にと巻き込まれてしまったようなのであります。

ある日の放課後、私たちは、5、6人の仲良しの友達同士で、ガヤガヤと騒ぎながら、なごやかに帰路を歩いていました。すると、そんな私たちの方へ、一人の女学生が近付いてきたのです。

その女学生も、うちの高校のものとよく似たデザインのセーラー服を身につけていました。それが、私たちよりも、ずっとセーラー服姿がしっくりして見えるのです。彼女の外見が、落ち着いていて、とても大人びていたからかもしれません。だから、古めかしいセーラー服もうまく着こなせているように感じられたのです。しかも、彼女は、かなりの美人なのでした。

そんな彼女が、私たちのすぐ側にまで寄ってくると、ニッコリと微笑んできたのです。

「ねえ、あなたたち。私も、同じ方向へ帰るところなのよ。一人で歩くのは寂しいから、ちょっとの間、仲間に混ぜてもらってもいいかしら」

私たちの仲間は、能天気な、警戒心のない、人のいいヤツばかりでした。何よりも、その謎の女学生は、魅力的ではあっても、悪意のようなものは何も感じさせなかったのです。だから、私たちは、全く躊躇する事もなく、彼女のことを快く受け入れたのでした。

そのあとは、私たちは、その女学生のことも加えて、一緒に、しばらく歩き続けました。彼女も混ぜて、楽しく、雑談にふけったのです。でも、彼女は、私たちの話に積極的に参加する様子ではありませんでした。どうも、私たちの話題についてこれてない感じなのです。彼女は、ただニコニコ笑っていたり、私たちの話に頷いてい

るだけだったのでした。

だけど、私たちの方は、それでも構わなかったのです。大人っぽくて、美人の彼女は、何となく、優しいお姉さんといるような気分にさせてくれました。私たちも、なぜか、その事がひどく心地よく感じられたのです。

やがて、その彼女が立ち止まりました。この先は帰る方向が違うので、ここで別れる、と言い出したのです。私たちは、その言葉を素直に信じ、彼女とは、笑いながら、そこで別れたのでした。

それから、しばらく歩いてからの事です。私は、学校に忘れ物をしてきた事に気が付きました。それは、どうしても、今日、うちに持ち帰らないといけないものなのです。私は、慌てて、今来た道を引き返す事にしました。すると、仲のいい皆も、ためらう事もなく、一緒に付き添ってくれる事になったのでした。

私たちは、早足で、どんどん、道を戻って行きました。そして、ちょうど、あの不思議な女学生と別れたあたりまでたどり着いた時の事です。私は、道の片側にと広がった草むらの中で、とんでもない事が起きているのを、ひょっこり、見つけてしまったのでした。

そこでは、さっきまで一緒だった、あの美人の女生徒が、二人のゴツい男に襲われていたのです。彼女は、セーラー服も下着も脱がされていました。全裸の彼女の上に、男たちは乱暴に馬乗りになっていたのです。つまりは、彼女は、男たちによって強姦されていたのであります。

こんなものを偶然にも目撃してしまい、私たちは慌ててしまいました。全く素性も知らない子だとは言え、ほんの先ほどまでは、一緒に仲良くお喋りしていた女子なのです。このような被害者になっていると言うのに、知らんぷりなんかは出来ないのであります。

私たちは、大声で騒ぎ立てながら、道から駆け下りて、犯されている女学生を助けに行こうとしました。しかし、その矢先、冷静な仲間の一人が、静かに私たちの行動を制止したのでした。

その子は、黙って、別の方向を指さしました。そちらに目を向け

ると、そこには、大きなカメラを持った青年が突っ立っているのです。カメラの先は、女学生らの方にと向けられていました。それだけではなく、声を張り上げて指示を出し続けている黒眼鏡の中年男や、レフ板を持った青年の姿も、周辺からは見つける事ができたのです。

実は、彼らは、映画を撮っている最中だったのでした。それも、エッチな成人用のビデオをです。あの不思議な女学生は、どうやら、ＡＶ女優だったのでした。道理で、大人びていたはずです。彼女は、本当は立派な二十歳（はたち）を過ぎた女性で、役作りで、女学生のふりをしていたのです。

恐らく、彼女が、私たちに話しかけてきて、わざと混ざってきたのも、映画の撮影のためだったのでしょう。きっと、映画の導入部分として、彼女がレイプ魔に襲われる前に、普通に友達の女学生と一緒に戯れているシーンが欲しかったのに違いありません。でも、映画を製作する側としては、エキストラを雇うお金を節約したかったので、本物の女子高生である私たちを、こっそりと内緒で利用したのです。と言う事は、さっきまでの、ＡＶ女優の女学生と一緒にいた時の私たちの姿は、多分、ずっと隠し撮りされていたと言う事なのでありましょう。

私たちは、この場から、おとなしく、立ち去る事にしました。謎が解けた以上、余計なことはすべきではないからであります。首をつっこむべきではないのです。でも、私たちは、ちょっとだけ、知らなかったグレーな大人の世界と言うものを覗き見ちゃったような気分にもさせられたのでした。

了

田舎娘

都会のヤリマンの女にはウンザリしだしていた俺は、新鮮なバージンを求めて、郊外へと乗り出した。

そんな訳で、まるで車も通らないような地方の一本道で、じっくりと物色を続けていると、さっそく、格好の獲物を見つけたのだった。

この地域に住んでいるらしき女子高生だ。その子は、学校の指定のものと思われる、ダサい暖色の体操着（ジャージ）の上下を着ていた。彼女は、不用心にも、一人で道を歩いていたのだ。いや、のどかなド田舎だったからこそ、逆に、こんなにも彼女は無防備だったのかもしれない。

だから、よく考える事もなく、俺は、その子のそばへと寄っていったのだ。彼女は、善良すぎるのか、こんな怪しい男が近づいてきても、まるで恐れもしなかった。それどころか、俺が道を尋ねるふりをすると、親切にも、自分から道案内まで始めてくれたのであった。

その子は、決して美人ではなかった。むしろ、露骨なスッピンで、いかにも垢抜けない、のっぺらした素朴な顔立ちをしていた。体型だって、だいぶ、ふくよかなのだ。田舎で、おいしい栄養価のあるものばかり食べていると、ついつい太って、ガタイもよくなってしまうのだろうか。

でも、まあ、そんな細かいことは拘らないのである。俺の一番のお目当は、処女だからだ。このような山出しの子の方が、より確実にバージンくさそうなのである。

二人で一緒に寂れた道を歩き続けて、人気のない公衆便所の前にまでやって来た時、俺は、ついに本性を現わした。俺は、その子のことを、力づくで、公衆便所の中に連れ込んだのである。

最初、彼女は、何が起きたのかが、分かっていないようだった。
そこで、俺は、すぐに模造品のナイフを取り出して、彼女の顔に近づけてみせた。抵抗したら切りつけると、凄みをきかせて、威嚇したのだ。これで、その子は、呆然としながら、いっさい手向かわなくなったのだった。
実は、俺が持っていたナイフは、オモチャなので、少しも切れはしなかった。俺だって、本気で彼女を傷つける気は無かったので、このナイフは脅し用だったのであり、それで十分に事足りたのだ。
このあと、俺は、ジッと立ち尽くしてくれた彼女に対して、様々なワイセツ行為を仕掛けてみたのだった。この子も、こんな犯罪に巻き込まれること自体、これまで考えた事もなかったようで、対処の仕方が分からなかったらしくて、バカ正直に俺の言いなりになってくれたのだ。
まず、俺は、この子にキスをしてみた。お互いの口を重ね、舌も入れてみたのだ。彼女は戸惑い、その口は拒絶的だったのだが、それは、別に、俺が相手のキスが嫌だったせいばかりではあるまい。この子は、きっと、キスする行為そのものが初体験だったのだ。それで、上手に返してこなかったのであろう。俺は、この子の貴重なファーストキスを奪っちゃった訳だ。
調子づいてきたので、俺は、もっと悪どい事を試してみた。俺のペニスを外に出して、彼女にフェラチオをやらせてみたのである。彼女は、俺の勃起したペニスを見ただけでも、はや血の気が引いていた。多分、実物を見たのは初めてだったのだ。その上で、そのペニスを自分の口へと押し付けられたのである。この時の彼女の抵抗は、並ならぬものだった。歯をがっしり噛み締めて、自分の口内へのペニスの侵入をかたくなに拒んだのだ。
俺は、この子に対して、あらためて、ナイフでの威嚇を繰り返した。すると、彼女は、目を潤ませながら、俺のペニスを、ようやく、くわえてくれたのだった。ウブな彼女にしてみれば、男のモノを口に入れること自体が、ありえない行為に思えていたに違いあるまい。

怯える彼女にペニスをしゃぶってもらえて、俺はひどくゾクゾクしてきた。この純朴な少女に、フェラチオと言う行為はあまりにも似合わなすぎて、罪悪感すら湧き上がってきたのだ。

この興奮が冷めやまぬうちに、俺は、体操着越し（ジャージ）に、彼女の体をまさぐってみた。どこも、とても柔らかいのである。ただ太っているのでもないのだ。胸も、かなり大きめな方だった。そして、柔軟で、触り心地もいいのである。さらには、彼女の股間にも手を当てて、強めに握ってみた。この子の大事な部分を鷲掴みにしてやったのだ。ビクッとした彼女は、思わず内股になり、両足をよじらせた。やはり、大切な場所を他人に触られたのも、これが初めてだったのだろう。

続いて、俺は、彼女の上半身の服を、乱暴に脱がし始めたのだった。ナイフで脅していたから、彼女は、相変わらず、人形のように、されるがままだったのである。何の色気もないスポーツブラまで剥ぎ取ってしまうと、彼女は、腰から上が、あられもないセミヌードになってしまった。

この子ときたら、高校生らしい、とっても健康そうな体をしていたのである。ウエストは太かったが、肌の色はたいへん白く、オッパイはかなり大きかった。田舎の子は、栄養いっぱいの獲れたて野菜や肉をいっぱい食べているから、胸も肉体もよく育つのだろうか。こんな目立たないような子には、勿体ないぐらいの立派なバストなのだ。

さっそく、俺は、この乳房をじかに揉ませてもらった。体操着越（ジャージ）しに触った時以上に、その炊きたての餅のような柔らかさが実感できたのである。きっと、この子は、これほどのお宝を、俺に初めて触られたのだ。何とも、嬉しくなってきちゃうのである。

ツンと立っていた乳首も、摘んでみると、その感触はスポンジみたいだった。引っ張ってみると、ゴム紐のように、長く伸びちゃうのだ。俺は、冗談半分に、引っ張った乳首の根元にとナイフの刃をあてがって、切り落としちゃうかのような素振りをしてみせた。

すると、この子は、いきなり失禁してしまったのだった。本当に、乳首を削がれると思ったのであろう。彼女の体操着（ジャージ）のズボンの股のあたりが、漏らした小便で、ドス黒く変色してしまい、彼女の足はガクガク震えていた。

俺は、そんな彼女のことをキッと睨みつけて、凄んでみせた。

「お前、なに、チビってんだよ」

怖くて、漏らしちゃったと言うのに、もっと恫喝されてしまうなんて、この子も、踏んだり蹴ったりなのである。目からは涙をボロボロこぼして、今にも泣き叫びそうだった彼女は、これで、またグッと息を飲んで、おとなしくなったのだった。

今度は、俺は、彼女の下半身の衣類も脱がし始めた。小便で濡れた体操着（ジャージ）のズボンをおろすと、その下には、まだ体操着（ジャージ）の短パンを履いていた。いかにも、田舎の生徒らしい着合わせなのだ。その短パンもずらすと、厚手の子供っぽいパンティが出てきて、それも脱がしてしまうと、ついに彼女は下半身も裸になってしまったのである。

彼女の下腹部には、ボサボサの陰毛が生えていた。ムダ毛処理もしてなかったのかもしれないが、その都会の女子とは違う野生的な体がまた、そそられもするのだ。

全裸になってしまった彼女に対して、俺は、恥じらう余裕すらも与えなかった。すぐに、彼女の股間をまさぐらせてもらったからである。

俺の手は、彼女のオマンコの感触を、ひしひしと噛みしめた。意外にも、俺の知ってる女のどのオマンコよりもサイズが大きいようなのだ。やはり、乳房と同じで、田舎で暮らしているから発育がいいのだろうか。ふっくらとしていて、ほんのりと温かく、触り心地も上級なのである。

執拗に彼女のオマンコを撫で回しているうちに、そのオマンコが、じんわりと湿ってきた事に、俺は気が付いた。この子は、まだガキのように見えても、体は、やっぱり、きちんと感じてしまうような

のである。

俺は、もっと激しく、彼女のオマンコを愛撫してみた。そのうち、膣の穴も見つけてしまったものだから、ついつい、勢いで、その中にも指を突っ込んでしまったのである。三本ほど、入れてみた。それで、威勢よく、膣の中をこすってみたのだ。

バリッと破れる感触を、俺の指は察知した。俺は、ついムチャをしてしまい、彼女の処女膜を裂いてしまったようである。まだまだ無傷で、まっさらだった、彼女の大事な処女膜をだ。

俺は、自分の指を引っ張り出してみた。指には、赤い血が滲んでいただけではなく、かなりの量の愛液が、粘っこく、こびり付いていた。

そこで、彼女の方を見てみると、意気消沈しているどころか、顔を真っ赤にして、発情しており、荒い吐息を漏らして、今にもイキかけていたのだった。処女喪失でショックを受けるよりも、体はすっかり快感にとシビレていたらしい。これまで全く未体験だった分、なおさら刺激には免疫がなかったようである。

指でロストバージンしたなんて、この子にとっても、たいへん不名誉な話であろう。だから、俺は、きちんと、セックスで、この子の処女膜を正式に破いてあげる事にした。

彼女を四つ這いにして、その突き出した安産型の大きなお尻めがけて、俺は、バックで、ペニスを突っ込んだ。俺のペニスは、見事に彼女の体を貫いた。俺は、こうして、この子を一人前にしてやったのである。

処女だった割には、この子のオマンコはユルかった。はじめてだと言うのに、俺のペニスはすっぽりと奥まで入ってしまったのである。

俺があらゆるテクニックを使ってヨガらせてやると、この子は、嫌がる事をも忘れて、素直に、喘ぎ、悶えまくった。ガバガバのくせに、悦楽だけは人並みに感じているのだ。仕上げに、俺は、濃厚なスペルマを、たっぷりと、彼女のマンコの中へとブチ込んでやっ

たのである。
　悶絶したようで、彼女は静かに床に倒れて、動かなくなった。それを見届けると、俺は、速やかに、この公衆便所を後にしたのである。俺の面が割れて、このあと、捕まるような事は、まず無いはずだった。
　本当なら、結婚して初夜を迎える時まで、ずっと手付かずであったのだろう処女を、こうやって、先に耕してやるのは、なんとも言えぬ痛快さなのである。

了

「恋していいよ！」

僕には、幼稚園の頃から一緒だった幼なじみの女の子がいた。彼女とは、高校まで、いつも同じ学校に通っていたのだ。クラスまで同じだった時も少なくなかった。

ただし、すごく仲が良かった訳でもない。あくまで、異性の同級生として、たまに話をかわす程度の関係だったのである。成長するほど、僕たちは、同性の友達とばかり遊ぶようになり、疎遠になっていった。

でも、本当のことを言えば、けっこう早い時期から、僕は、彼女のことが気になり始めていたみたいだったのである。そう、なんとなく、ほのかな恋心が芽生えていたようなのだ。

彼女は、純粋な日本人ではなかった。クウォーターであり、父親の方が白人系だったと言う。そのせいか、名前もちょっと外国人っぽかった。もっとも、彼女の母親は、その外人の夫とは、すでに離婚しており、彼女は、母親と二人で、質素に日本で暮らしていたのだった。

さすがは、外国人の血が混ざっていただけあり、彼女は、微妙に日本人っぽくない顔をしていた。それを見て、かわいい顔に思える人もいれば、異質さを感じた人もいた事だろう。僕自身は、小さい頃から見慣れていたので、彼女のルックスをあまり意識した事はなかった。だけど、それが、次第に気になりだした訳なのだから、あるいは、僕も、彼女の顔を実は愛らしいと思っていたのかもしれない。

見た目だけでじゃなく、行動的な部分も、彼女は日本人らしくない部分が強かった。多くの日本人が群がったり、長いものに巻かれる傾向があるのに対して、彼女は、あくまで自己アピールをするタイプで、自由奔放だったのだ。それもまた、外国人の父親の影響だ

ったのか、遺伝だったのかもしれない。
ただし、そうした外見や性格の違いから、彼女は周囲とは交われない側面もあったみたいだった。
クラスの中における彼女の立ち位置は、たいがいは、いじられキャラであった。個性も強いし、皆と合わせようともしないから、結局は、そうなってしまうのだ。彼女が、クラス内で孤立している場合も多かった。でも、我の強い彼女は、そんな時でも、持ち前の明るさで、周囲の冷ややかな態度にもめげずに、なんとか乗り切っていたのである。
僕はと言えば、そんな彼女の姿を、特に味方する訳でもなく、いつも遠くから、干渉せずに見守っていた。そのような、ちょっと目立つ、気になる存在だったからこそ、僕も、知らずに、じょじょに彼女に惹かれていったのかもしれない。
彼女の学校生活での、もう一つの大きな問題点が、その学力の低さだった。あれほど利発なのだから、ほんとに頭が悪かった訳ではないのだろうが、どうも、彼女は勉強をするのは不得手だったみたいなのである。その事は、学年が上がるほど、如実にはっきりし始めた。中学の半ばごろには、彼女は、もう完全に、学校の授業にはついて来れなくなっていた。この学習行為への苦手さもまた、彼女の性格が起因したものだったのだろうか。
彼女は、かろうじて、僕の進学した高校へと滑り込み入学したが、この時には、すでに、あからさまな劣等生となっていた。進級のたびに落第が危ぶまれ、相変わらず、クラスメートからは小バカにされ続けていたし、そんな事が続いたものだから、彼女もいい加減、嫌になってきたのか、次第に、彼女が学校に来ない日、不登校する日も増えてきたのだった。
そんなある日、彼女の新たなニュースによって、学校中に衝撃が走った。
彼女が、いつの間にか、芸能人デビューして、いきなり写真集まで出したと言うのである。

驚いた僕も、慌てて、その件の写真集を買ってきた。「恋していいよ！」と言うタイトルだった。その本を開いてみて、僕はさらに驚嘆してしまったのだった。

その写真集の中の彼女が、めちゃくちゃ可愛くて、美しかったからである。やはり、僕の感じていた直感は間違ってはいなかったのだ。上手にお化粧して、プロのカメラマンが最高のセッテイングで撮っていたのだとしても、ここまで美しかったのは、やはり、元の素材が良かったからだとしか言いようがないだろう。審美眼のある人にかかれば、彼女の隠された魅力は、一目で見抜けたのである。

僕は、この彼女の写真集を喰い入るように眺め続けて、すっかり溜め息が出てしまったのだった。この写真集が、ちょっと大胆でエッチな内容だったからだ。今まで見た事のなかった、セクシーな姿の彼女の写真がたくさん掲載されていた。健全そのもののビキニの水着で写ったグラビアもあれば、色っぽい下着姿の写真もある。全裸としか思えないカットすら混ざっていたのだった。もっとも、逆光や影、小物で隠したりして、彼女の肝心な部分は絶妙に見えないようにはされていたのだが。

思えば、もし、彼女と交際していたのならば、この素晴らしい肉体を、今ごろ、自分だけのものに出来ていたはずなのである。幼なじみの僕だったら、そのようになっていたチャンスも、これまで、いくらでもあったのだ。それなのに、あと少し決心できなかったばかりに、僕は、彼女と恋人になる幸せを完全に逃してしまったのである。

現在、彼女は、うちの高校には通っていない。この写真集を機に、高校を中退し、本格的な芸能人になってしまったのだ。個性的で、機転の効く、面白いキャラの彼女は、すぐ、お茶の間の人気者となった。テレビのバラエティ番組やロケ番組などでも、今や、顔を見ない日はない。彼女は、僕にとっては、もう絶対に手の届かない存在になってしまったのである。

その後の僕は、彼女の写真集「恋していいよ！」を何度も眺め直

しながら、彼女が、かつて、僕のすぐそばにいた頃のことを思い出し、感傷に浸り、懐かしむような日々を送るようになったのだった。

了

「恋していいよ！」（後書き）

本作は、藤田ニコルの写真集「好きになるよ?」を眺めていて、勝手に妄想を膨らませてみた裏エピソードです。

ＣＧ性教育

近い未来、学校では、ＣＧによる映像教材がガンガン採用されるようになっていた。より実物に近いものを見せる事で、子供たちの理解度を高められるのであれば、次々に最新技術を取り入れるに越した事はないのである。

そのようなＣＧを用いた授業は、高校での性教育の時間にも応用される事になった。生徒たちは、文章や簡単なイラストだけで、性の仕組みを学ばされるのではなくて、ＣＧのリアルな映像によって、より正確に、命の誕生のことを教えてもらえるようになったのだ。

この性教育用の映像資料には、いきなり、素っ裸の男女の人間のＣＧが登場した。これが、なかなかのプロポーションの美男美女である上に、全く、本物の人間の映像にしか見えないのだ。でも、ここまで実物そっくりであっても、実際はＣＧなのである。そして、あくまで作りもののＣＧなのだから、こんな裸の人間の映像であろうと、生徒たちに見せても、ぜんぜん構わないのだった。これは、名画の中のヌードがワイセツ扱いにならないのと同じ理屈なのである。

とは言え、これまで真面目に生きてきた生徒ほど、この性教育のＣＧ映像は刺激的だった事であろう。何しろ、今まで、うっすらとしか知らなかった異性の裸体を、はじめて、はっきりと目にしてしまうからだ。そのぐらい、この性教育用のＣＧ映像は精密だった。男の性器も、女性の外陰部も、どの部分も欠く事なく、本物と寸分変わらぬように描かれていたのである。アンダーヘアさえ、略される事なく、丁寧に描写されていたのだった。

しかし、そこまで実物そのものでも、やはり、これらの映像は全て、ＣＧだったのであろう。映像が動き出し、いよいよ授業が始まると、その事を存分に思い知らされる事になったのである。

例えば、手始めとして、性器の成長過程が提示された。生まれたての赤ちゃんが、あっと言う間に、大人になってしまうCG映像が映し出されるのである。この映像では、子供の稚拙だった性器が、流れるような一続きの早送り映像で、大人の性器に変形していく様子を、こと細かく、皆に見せてくれたのだ。確かに、こんなものは、実際の人間を写した映像では撮影不可能であり、CGに違いないのである。

続いて、それぞれの性器の機能を解説するシーンでは、さらに、CGの映像である事がフルに生かされる事となった。この教材映像の中の性器が、透視したように、内側が丸見えになってしまうのだ。こんな映像は、やはり、CGでなければ、作り出す事ができないのである。

この透視映像によって、男性器が射精するメカニズムとか、女性器の生理のサイクルとかが、分かりやすく説明された。精液が輸精管や尿道を経由して、外へ放出される仕組みとか、受精されなかった卵子がいかに生理の血に変わってしまうかなどが、内側が見える解剖図のような性器の映像によって、ストレートに視覚的に教えてもらえるのだ。ここまで露骨に見せてもらえたら、さすがに、誰だって、完璧に理解できるのである。

そのあと、セックスする状況までもが、この透視映像によって、紹介されたのだった。ペニスが膣の中に入っている光景を、断面図として、拝む事ができるのだ。このセックス場面において、膣の内側で射精された精子は、子宮の奥にある卵子と見事に結びつく。いよいよ、子供が作られるのである。この先は、子宮の中で発生した小さな胎児が、ぐんぐん成長して、大きくなっていく様子を、またもや早回しの映像で、黙々と見せられるのだ。

ラストは、出産日を迎えた胎児が、子宮から膣へと押し出されていき、ついには母親の外性器の穴をくぐり抜けて、一つの新生児として、外の世界で誕生する瞬間が、感動的に映し出されるのである。

そして、ここまでリアルな性の実態を知り尽くしてしまうと、生

徒たちの方も、さすがにお腹いっぱいになってしまって、好奇心から自分もセックスしてみようと言う気持ちも失せてしまうのであった。

了

みんなでシャワー

有名なアイドル若手女優が主演するメジャー映画に、私も出演できる事になり、私は大喜びしていました。

私だって、女優に憧れて、１０代の頃から、ずっと細々と活動を続けていたのです。なかなか脚光を浴びる事もなく、業界の片隅で、エキストラだったり、ほとんどチョイ役の再現ＶＴＲ女優とかをやったりしながら、いつかチャンスがある事を、ひそかに期待し続けていたのでした。

そして、今回、ついに、こんな素晴らしい出演の話が、私へと持ちかけられてきたのでした。

もっとも、一点だけ、難がありました。私の役は、ヌードを見せるシーンがあると言うのです。だけど、よおく話を聞くと、私だけではなく、主演のアイドル女優も、脇を固める共演女優たちも、全員でヌードになるシーンだとの事なので、私も少しホッとして、迷わず、引き受ける事にしたのでした。皆が裸になるのなら、そこまで嫌がる事でもないのです。皆で脱ぐなら怖くない、なのであります。

こうして、その映画の撮影が始まりました。

私の出演シーンは、ほんとに僅かでした。主演のアイドル女優が演じる女子高生と同じ体育系部活動に所属している女子部員の役です。そして、その部活動の練習を終えた後、主演のアイドル女優や脇役女優たちも含めた全員で、学校のシャワー室を使わせてもらって、運動したあとの汗を流すシーンに、私も加わる事になったのでした。

どうやら、このシーンは、男性の観客向けの、ちょっとエッチなサービスショットの部分だったようです。皆のアイドルである主演女優たちの爽やかな裸体をギリギリまで披露しちゃおう、と言う趣

旨みたいなのであります。

私たちは、このシャワーシーンを撮る為に、一人ずつ、順番に、個室のシャワールームに入る事になりました。それぞれが別々のシャワールームで水を浴びていると言う設定だからです。主演女優から始まって、撮影は順調に進んでいき、最後に私の撮影の番が訪れました。私は、スタッフに言われるがままに、全裸となり、全力で、自然体のシャワーを浴びる姿を演じ切ったのです。カメラマンも、そんな私の渾身の演技を、丁寧に、じっくりと写してくれたのであります。きっと、あの大物の主演女優たちと同じように撮ってもらえたのだろうと思うと、撮影が終わったあと、私も、この上ない満足感に包まれたのでした。

それから何ヶ月か経ち、私の出た映画は完成し、劇場でも大々的に上映される事になりました。端役の私は、試写会に呼ばれる事はありませんでしたが、それでも、映画館で観る為の無料チケットだけは貰えたのです。だから、さっそく、私はこの映画を鑑賞しに行ったのでした。

実際に映画を観てみると、私の出演シーンは、本当にちょっとでした。エンドロールでも、私の名前は紹介されていません。しかし、そんな事よりも、完成品を観た事で、私の使われ方の真実をやっと理解して、愕然としてしまったのでした。

先に言いましたように、私の出演したパートは、主演女優たちと一緒のシャワーシーンです。ヌードとは言っても、清楚なアイドル女優たちのものですから、爽やかで、健全なアングルで撮られていました。肩から上とか、背中とか、足もとだけと言った、部分のみを写して、シャワーを浴びている状況が表現されていたのです。

ところが、私の番になった途端、私のシャワーシーンだけは、ほぼ全身を写したものに切り替わったのでした。おっぱいも乳首もお尻もバッチリ見えてしまっています。さすがに、モザイクを入れないといけないような際どい部分までは写っていませんでしたが、それでも、確実なオールヌードなのです。

私は、なぜ、私のような無名エキストラが、こんなメジャー映画に出演させてもらえたのか、その理由がやっと分かりました。私は、はじめっから、このシーンの為のお色気要員だったのです。著名な女優たちの本物の裸は出せませんので、男性の観客たちを喜ばす為に、どうでもいい私にだけ、丸出しの裸を披露させたのでした。

映画を最後まで観終えたあと、私の心の中には、メジャー映画に出られた嬉しさよりも、暗い落胆ばかりが残っていたのでした。せっかくの初のメジャー映画での顔出しだと言うのに、私は、恥ずかしいヌードになってしまったのです。この映画は大ヒットするはずなので、沢山の人間に、私の裸を見られてしまうに違いありません。きっと、多くの人にとっては、私のことは、このシャワーのシーンの裸のイメージしか残らなかったのではないかと思います。

そもそも、最初っから、私一人がオールヌードになるのだと分かっていたのでしたら、まあ、それなりに気持ちを割り切る事もできたのでありましょう。しかし、この映画の場合は、皆がシャワーを浴びるシーンを写していたにも関わらず、私だけが恥ずかしい部分まで見せちゃっているのです。この役者格差みたいなものが、私には、余計にやるせなく感じられたのであります。

私は、なんだか、一人だけ晒し者になったような孤独感で、さらに深く落ち込んでいったのでした。

了

変態チャンネル

俺は、自分のＹｏｕＴｕｂｅチャンネルを持っていた。いわゆる、高校生ユーチューバーなのだ。

今の俺にとって、学校での授業や生活などは、もう、どうでも良くなっていた。自分のＹｏｕＴｕｂｅを盛り上げる事こそが、現在の俺の最優先目的なのである。それでも、まだ高校に通い続けていたのは、あくまで、ＹｏｕＴｕｂｅにあげる題材探しに利用していたからに過ぎない。

今日だって、俺は、自分の授業の方はさっさと自主欠席にしてしまい、ＹｏｕＴｕｂｅ用の面白いネタを見つける為に、授業時間中の校舎の中をコソコソとさまよい歩いていたのである。

俺が、今回、目につけた動画向けの舞台は更衣室だった。それも、女子用の更衣室だ。この場所でのゲリラ撮影は、俺のチャンネルを登録しているファンたちにも受けが良くて、俺も、卒中、お世話になっていたのだ。今のような授業中が、特に絶好の狙い目だった。ちょうど体育の授業の最中だったりして、沢山の女生徒の脱衣した制服などが置きっ放しになっていたからである。

もちろん、俺は、事前に、必要な情報だって調べ上げていた。今の時間は、二学年の女子らが、水泳の実習を行なっているはずなのだ。つまりは、更衣室には、制服だけではなく、下着だって置かれていた事になるのである。

俺は、ウキウキしながら、女子更衣室の中に潜入した。案の定、誰もいない。無人なのだ。俺もイタズラをし放題なのである。

俺は、さっそく、更衣室の中を探検し始めた。元々が俺の高校はだらしない方だったので、更衣室内の机やら椅子の上にも、無造作に服を脱ぎ捨てている女生徒が、いっぱい居たのである。そして、その方が、俺としても、わざわざロッカーをこじ開けたりする手間

が省けたのだった。

俺は、更衣室内のあちこちに置かれている女生徒たちの制服を、早くも、スマホの動画で写し始めた。現役女子高生たちのリアルな制服なのである。おじさん視聴者とかには、こう言う動画が、何よりも受けるのだ。しかも、今日は水泳の授業である。制服をよけてみれば、その下には、隠すように、下着類まで置かれているのだった。ほんのさっきまで、女子どもが履いていた、ガチの生下着だ。

でも、実際には、現実の女子高生の私物の下着なんて、アダルトＤＶＤのＡＶ女優が演じる女子高生のものみたいに、清潔で、魅惑的なものなんかではなかった。ほんとに生々しくて、幻滅するほど汚らしいのだ。

俺は、その事をリアルに視聴者にと伝えてやるのだった。女生徒どものパンティやブラジャーをつまみあげてみて、細部まで接写で撮ってみせるのだ。すると、一見、可愛い感じのパンティだって、すでに何度も履かれていて、ヨレていて、黄ばんだシミが出来ていたり、陰毛がくっついていたりするのが、全て、ありのままに暴露されてしまうのだった。動画からは分からないものの、臭いだって、なかなかのものなのだ。

気分が乗ってきた俺は、そのまま、もっとエスカレートした行為へと突入した。

俺の方も服を脱いで、裸になってしまうと、適当に選んだ女子の服を、俺自身が着てみせて、動画に写しちゃうのだ。当然、制服だけではなく、下着も付けさせてもらう。その女子の服の着心地までも、ＹｏｕＴｕｂｅで紹介しちゃうのである。

このイタズラは、俺も、かなりドキドキできた。俺なんかに服を着られてしまった女生徒も、とんだ災難だが、女装する事に、俺も激しい興奮を覚えたのである。しかも、同じ高校の女生徒の自前の服を着ると言う行為に対して。

こうやって写した俺の女装姿は、視聴者にはバカ受けだった。俺もついつい調子づいてしまい、女の子の服を着たまま、色々なゲス

なパフォーマンスも披露してしまったのである。派手に動き回って、やり過ぎてしまい、着ていた女子の服を破いてしまったり、汚してしまうような事も、卒中の話だった。

さて、授業の時間が終了する前に、俺は、速やかに、更衣室からは立ち去る。いじった服については、適当に戻しておくので、多分、俺が忍び込んだ事については、今まで一度も気付かれた事はなかったはずだ。自分の下着をバッチリ見られてしまって、中には、俺に着られてしまった子もいると言うのに、その事を誰も知らないのかと思うと、マジで笑えちゃうのだ。

最後に、俺は、こっそりと人探しをしてみる。俺に制服を着られちゃった女生徒が、結局、どんな顔をしていたのかを追跡調査するのだ。制服の中に入っていた生徒手帳から、名前はすぐに判明したのである。

そして、その子を発見できたら、やはり、その子が休み時間に普通に佇んでいる姿を、遠くからスマホで盗み撮りさせてもらった。たいていは、まあまあの可愛い子なのである。気の毒にも、この子は、今は、俺も着た制服や下着を、何も知らずに、身につけているのだ。俺は、勝手に、彼女とヘンな一体感も抱いてきて、ちょっとゾクゾクもしてきたのだった。

こうして、その子を隠し撮りして写した動画を、先ほどの更衣室での動画の最後の部分にと繋げる。ほとんどの場合は、これ以上、編集したり、加工する事もない。

こんな感じで完成させた動画を、俺のＹｏｕＴｕｂｅチャンネルにアップしておくと、すぐに、何１０万回もの再生数がラクに稼げたのであった。

了

コロナのカップル

高校二年の冬、僕にも初めてのカノジョができました。相手は、同じクラスの女子です。僕たちは、前から、気になっていた者同士でした。それが、やっと、お互いの気持ちを告白しあえて、本物の恋人同士になれたのです。

ところが、その矢先に、あの新型コロナによる自粛騒動が起きたのでした。僕たちは付き合い始めたばかりだったと言うのに、いきなり、引き離されてしまいました。学校は一斉休校になり、クラスメイト間で安易に会う事すら出来なくなってしまったのです。

僕が、再び、カノジョとじかに顔を合わせられるようになったのは、それから二ヶ月ほど経ってからでした。その時には、すっかり学年をまたいでしまい、二人とも、もう三年生になってしまっていました。僕たちは、進級してからの新しい教室にて再会したのです。

久しぶりに目の前で見たカノジョは、これまで焦がれていた分の心理も加わって、なおさら可愛くて、まぶしくて、僕の心を時めかせました。

しかし、喜ぶのにはまだ早くて、いぜん、厄介な問題が残っていたのでした。いちおう、全国的な自粛や休校などは解除はされたのですが、なおもコロナの感染自体は収まっていませんでしたので、国民には、引き続き、厳重な感染対策の実施が強いられる事になったのです。

誰がコロナウイルスを持っているのか分からない状態でしたので、とにかく、皆がマスクをつける事を求められました。三密になるのもいけません。他人とベタベタ触り合うなんて、もっての外なのです。

こうして、僕とカノジョは、せっかく会えるようになったのに、愛しい相手に近づく事も出来なかったのであります。だけど、僕た

ちって、まだ、手も握った事もなかったような関係だったのです。ほんとに、プラトニックの状態のままで、僕たちの恋はストップしてしまったのでした。

でも、またしばらく経つと、新型コロナについて、色々と新しい事実が分かってきました。どうやら、このウイルスは、人の口から口へと感染するらしいのです。つまり、もし一方の人間がコロナ感染者だったとしても、上手にさえ振る舞えば、ウイルスがうつってしまう恐れはなさそうなのであります。

僕とカノジョは、思春期の若者らしく、お互いの体のことも早く知りたくて、ウズウズしていた有様でしたので、耐えきれなくて、じょじょに、肉体的にも接近し始めるようになりました。感染の危険が少ないと分かったので、二人の体を押し当ててみたり、ハグとかも試してみるようになりだしたのです。

ただし、キスだけは行ないませんでした。それが、一番、ウイルスをうつす心配のある行為だったからです。その結果、僕たちは、キスの段階は抜かしてしまい、代わりに、それより先の行為にと手をつけ始めたのでした。

やがて、大胆なカノジョは、セックスに挑戦する事も提案してきました。口さえ完全に封じていれば、性行為だって問題ないはずだ、と言い切るのです。

多少の不安はありましたが、僕も、カノジョの魅力には勝てませんでした。それで、僕も、カノジョと性交する事を承諾したのです。

僕たちは、十分に納得しあってから、ともに裸になりました。愛し合っている者同士として、体の隅々までもを、きちんと見せあったのです。でも、マスクだけは、がっちりと付けていました。全裸なのに、マスクだけは外していないなんて、なんとも滑稽なのです。

カノジョは、僕へと、コンドームをつける事も要求してきました。

「チンポからは、コロナは感染しないだろ?」僕は言いました。

「バカ。避妊の為につけるのよ」と、カノジョはクールに答えたのでした。

こうして、僕たちは、キスやオーラルセックスは絶対にしないけど、それ以外の前戯や挿入行為については、躊躇せず、いくらでも行なう、濃厚接触者同士になったのでした。

了

私を食べないで（前書き）

諸星大二郎氏の短編マンガ「美少女を食べる」のタイトルより、私が最初に思い浮かべたイメージを、文章にしてみました。

私を食べないで

私は、秘密の会食クラブであるサイクロプス協会に、一夜だけ、ゲストとして参加してみる事にした。と言うのも、このクラブでは、特別な料理、すなわち人肉料理が食べられる、と聞いたからである。

もちろん、それは非合法なのだが、犯罪になる恐れはないらしい。なぜならば、人間の体を食ってはいけないと言う法律は存在しないからだ。本人の承諾を得て、その肉を提供してもらうのであれば、必ずしも法に触れるものでもない訳である。

私は、大金を払って、サイクロプス協会の極秘（シークレット）のディナー会場にと招待してもらった。問題の料理を食べる事ができる人間は、私一人である。協会は、私だけの為に、今日のディナーを開いてくれて、特別料理の方も用意してくれるのだ。

こうして、私がディナー会場でテーブルにつき、静かに給仕を待っていると、いきなり、協会の召使いが飛び込んできた。なんでも、食材が逃げ出したのだと言う。

その食材が居なければ、今回のディナーもオジャンなのだ。でも、幸い、その食材は、この会場の建物の外にまでは逃げ出していなかった。これより、あらためて、その食材を捕らえに行くと言うので、食前の余興として、私も、その様子を見物させてもらう事にしたのである。

協会メンバーのあとをついていくと、すでに、食材は、長い廊下の片隅にと追い詰められていた。出口のドアが頑丈に閉ざされていたので、それ以上は逃げる事ができなかったのだ。

その食材とは、高校生ぐらいの娘だった。素っ裸なのである。今から食われる以上は、服が脱がされていたのも当然なのだ。そして、彼女のむき出しの肌の上には、あちこちに線が引かれ、バラだの、モモだの、ロースなどの文字が書かれていたのだった。

彼女は、別に、誘拐されたとか、脅迫されたとかで、食材になったのではない。もともとは、この子は家出娘だったのである。それをサイクロプス協会が拾ってきて、きちんと多額な報酬を渡して、同意のもとで、食材になる事を引き受けさせたのだ。

ただ、彼女は、若干、正確なことを理解していなかったのかもしれない。「体を売る」と言うのを、売春するとか、あるいは、臓器提供者になる事とかと勘違いしていたようである。それが、体に食肉用の文字を書かれたりしたものだから、急に怖くなってきて、錯乱して、このように、いきなり逃げ出してしまったのであろう。

だが、契約してしまった以上は、彼女は、もう嫌がる事はできないのだ。何よりも、家出娘として、彼女には帰る場所がなかったのが好都合だった。それゆえ、多少の無茶を彼女に強いても、表沙汰になる心配はないのである。

怯えて震えていた彼女は、とうとう、協会の警備員（ボディガード）たちに捕えられてしまった。それから、私が見ている前で、彼女は強力な麻酔注射を打たれて、ぐっすりと眠ってしまったのだ。ついに、彼女も、私に食べられる準備が整ったのである。

私はディナー会場へと戻り、眠っている食材の娘も連れてこられた。ただ食べるだけではなく、食材を切り取る過程も、バッチリと見せてもらえるのだ。もっとも、完全に解体してしまうのではない。そんな事をすれば、この子は本当に死んでしまう。殺せば、明らかに犯罪なのだ。よって、あくまで、命に別状のない範囲で、肉や内臓を切り取らせてもらって、それだけを食べさせてもらうのである。

だから、この会場には、コックだけではなく、優秀な外科医も同席していた。医者が、食材の娘から上手に肉を切除して、その肉をコックが新鮮なうちに調理してくれるのである。筋肉や臓物も、部分的に切り取られただけなら、機能が全て失われる事もない。また、時間をかけて回復させれば、かなりの程度の治癒だって望めるだろう。そんな風に、死なせないようにして、この娘の肉体のあちこちを頂戴していくのだ。

かくて、私の為だけの人肉料理ディナーショーは始まったのである。

医者とコックが綿密に相談しながら、台の上に寝そべった昏睡中の娘の体を切り始めた。背中の肉、お尻の肉、太ももの肉と、次々に切り取っていく。それが終われば、全身をひっくり返して、今度は、乳房の肉やお腹の肉などをもぎ取っていくのだ。いずれも少量であったが、私一人が味わえる分だけあれば良いので、それで十分なのである。

全く、食材を女の子にしてもらえて、良かったのだ。やはり、肉が若かったし、とても柔らかいのである。調理の仕方も上手かった。このコックは、そうとう、人肉料理を扱い慣れていたらしい。

さて、ここまでの話を読んで、体のあちこちを切り取られた食材の娘に同情してしまった人もいた事だろう。しかし、考えようによっては、これは単なる手術なのである。体じゅうに大怪我をしても、きっと、この程度の患部は切除した事であろう。それと同じなのだ。もっとも、私のディナーの場合は、ついでに、取り除いた患部を食用に使わせてもらっている、と言うだけの話なのである。

食材の採取も、いよいよ、第二段階にと入っていった。次は、この娘の腹部を切り開いて、モツも食べさせてもらうのである。やはり、腸にせよ、横隔膜にせよ、少しずつ切り取るのであれば、この子を死なせる危険性もないのだ。こうして、私は、この娘の内側まで、たっぷり賞味させてもらったのである。

とは言え、全ての体の部位を食べる事ができた訳なのでもなかった。心臓とか肺など、特に重要な器官は、さすがにメスを入れる事はできないのだ。取り去ってしまうと、自己治癒力だけでは再生する見込みのない部分も、基本的には、食べるのはＮＧだった。私としては、ほんとは、子宮（こぶくろ）をリクエストしていたのだが、それも許可してもらえなかったのである。

それでも、私は色々と交渉してみて、小陰唇（ラビア）は食べてもいい事になった。その娘の小陰唇は大きめだったので、多少なら切っても大

丈夫そうだったのである。おかげで、私は、普通の動物の料理でも、まず食べる事のない珍味にありつける事ができたのだ。

さらに、コックと医師とよく話し合う事で、卵巣も、一つだけなら除去しても問題ないだろうと言う事になった。せっかく、女の体を食べる以上は、女性しか持っていないものを食べてみたいのである。睾丸料理だって存在するのだから、卵巣を食べてみるのもアリなのだ。

こうして、デザートは、生の卵巣がテーブルにと出される事となった。まさに、これこそ、正真正銘の「人の玉子」なのだ。この娘の健康な卵巣は、本来の用途である子作りに生かされる事なく、そっくり、食べ物になってしまったのだった。

了

ヌード演劇部

僕は、高校では、ヌーディスト演劇部に所属していた。

ヌードと言っても、ただ真っ裸になって芝居するって訳なのでもない。正式には、ボディペインティング演劇部なのだ。つまり、肌の上に絵の具を塗って、その模様を衣装がわりにして、舞台劇を行なうと言う、最新の前衛演劇なのである。

このボディペインティング方式だと、普通に衣装を着るのとは異なる効果を得る事ができた。演者の体の線（ライン）を、レオタード以上に、しっかりと観客に見せられるのだ。その事によって、微妙な演技や内面的なものまで観客にと伝える事ができて、独特な演劇舞台を構築する事が可能だったのである。

男子の演者の場合は、股間にイチモツをブラブラさせていたら見っともないので、股に前バリをつけたが、女子の演者は、その心配もなかったので、完全な素裸の上にペインティングを実行した。それでも、色さえ付けてしまえば、裸だとは全然分からなかったので、部員は一人も臆したりはしなかったのだ。

中でも、部長は、このヌーディスト演劇の第一人者だった。彼女のヌード演技は本当に素晴らしかった。それを観た者は、誰もがが圧倒されて、感動した。部長自身も、自分の実力のほどを、十分に自負していたのである。

そんな部長が、飽くなき演劇への探求心から、ヌーディスト演劇の新天地を開拓した。

それは、従来のボディペインティングをやめて、代わりに、プロジェクションマッピングを用いて、体の上に模様や衣装を浮かび上がらせようと言う試みだった。

確かに、これまでのボディペインティングでは、一つの劇の中で、途中で役者が衣装替えできないと言う欠点があったのである。しか

し、これをプロジェクションマッピングに置き換えたのならば、何度でも衣装替えできるようになるだけではなく、舞台上での一瞬の早着替えまで可能になるのだ。

現在のプロジェクションマッピングの装置は大変に優秀で、センサーによって、動く物体を自動で追いかけて、その上に映像を投影し続ける機能だって付いていた。なるほど、この機能を活用すれば、舞台の上で躍動する役者の表面に映像をずっと映し続ける事も、決して無理な話ではないのだ。

しかし、そうであっても、映像どおりに自分のポーズや動作を的確に合わせ続ける役者側の才能や技量は必要なのである。それは並大抵の難易度ではなく、やはり、まだ、我が部の部長しか出来そうにない神業なのであった。

こうして、部長は、努力に努力を重ねて、この新しい舞台演出のテクニックを磨き続けた。やがて、彼女は、ついに、舞台で一人芝居を公演できるだけのレベルにと漕ぎ付いたのだ。

もちろん、我が演劇部は全面バックアップして、部長が実際に学内で単独公演ができるようにと、周辺の準備を整えていった。部長の栄光は、そのまま、我ら部員の喜びでもあったのだ。

そして、とうとう、部長の晴れ舞台の日がやって来たのだった。当然、観客席は満席なのである。

「副部長。じゃあ、機械の操作の方はお願いしたわよ」舞台に出て行く前に、部長は僕に声をかけた。

「任せてください。部長も、他の事はいっさい気にせずに、存分に演じてきて下さいね」僕も、自信満々に、部長に答えたのだった。

いよいよ、部長の一世一代の一人芝居は始まったのである。

真っ暗な舞台の中で、プロジェクションマッピングに照らされて、ぱあっと部長の姿だけが浮かび上がった。その体の表面には映像が投影されて、実に鮮やかなのだ。観客席からも、どよめきが起こったのだった。

あとは、文字どおり、部長の一人舞台なのである。舞台の上を、

所狭しと動き回る部長のことを、僕が担当していたプロジェクションマッピングの装置は、的確に追いかけて、明るく照らし続けた。部長の全身は、サイケに、絶え間なく、華麗な色と模様に変化して、それを観ているだけでも、皆は激しく感銘してしまったのだった。

ところが、途中で、予期せぬトラブルが起こった。

「あれ。映像が出なくなったぞ」僕は、思わず呟いた。

そう、機械が故障してしまったらしく、芝居の最中だったと言うのに、プロジェクションマッピングの装置は映像を投影しなくなってしまったのである。それでも、装置は、光だけは放ち続けていて、部長の体を照らしているのであった。

そんな事態になっていたとも知らずに、部長はまだ夢中で演技を続けていた。暗闇の舞台の中に、部長の姿だけがライトでくっきりと光っていて、その裸身が、本来の色形で、皆の目には見えていたのだった。

了

挿入地獄

うちの教室（クラス）には、マドンナ女生徒がいた。本当に、クラスの男子全員が彼女にと惚れていたのだ。

そのマドンナ女子は、スタイル抜群で美少女だっただけではなく、気品があって、知的であり、性格もしっかりしていて、全ての面において、お嬢様のような雰囲気を漂わせていた。

そんな訳だから、クラスの男子たちは、彼女に恋い焦がれていたにも関わらず、とてもじゃないけど自分は釣り合わないと、引け目を感じてしまい、結局は、誰一人として、彼女と親密な関係になろうと企む者すら現われなかったのだった。

でも、それで良かったのである。だからこそ、連中は一致した認識を持つ事ができて、誰もが抜け駆けするような事もなく、全員で、マドンナ女子の事を、影ながら、親衛隊のように見守り続ける事ができたのである。

むしろ、皆は、マドンナ女子に、早く、相応の彼氏が出来てくれる事を望んでいた。そしたら、完全に彼女のことも諦めがつくからだ。そして、ほんとに、彼女の純粋な親衛隊となって、残りの学校生活を安穏と過ごす事ができそうだったのである。

ところが、なかなか、マドンナ女子に彼氏ができたと言う情報を聞く事もなかった。お相手は、全然、他校のイケメン男子でも構わなかったと言うのにだ。どうやら、彼氏の存在を隠していたとかではなく、彼女は恋沙汰にまるで関心がなかったらしくて、本気で交際の噂すらも流れる事がなかったのである。

そうなると、ずっと我慢してきたクラスの男子たちも、次第に苛立ってきた。これでは、自分たちが、せっかく一歩引いて、遠慮していたのも、意味がないのである。

その結果、自分を抑えきれなくなった一部の男子が、とうとう、

マドンナ女子に告白してみると言い出したのだった。もちろん、現状のようなクラスの空気では、とても他の男子を出し抜いたりはできそうにない。だから、男子たちは、いったん全員で真剣に話し合う事となり、その相談した結論として、皆でマドンナ女子のもとに押しかけてみて、彼女の真意を確認してみようと言う事に決まったのである。

誰もが、それを気にかけていた訳だから、話がまとまれば、実行も早かった。

その日の放課後、男子たちは、マドンナ女子が一人で下校しているところを見計らって、いっせいに押し寄せたのである。これには、マドンナ女子も、さすがに驚いたようだ。これまで、自分のことを遠巻きに見ていた男子たちが、初めて、まとまって押しかけてきたからである。

しかし、彼女も、なかなか沈着冷静で、肝が座っていた。周囲を取り巻いている男子たちに冷静に対応し、きちんと対話をする事になったのである。このような状況では、ヘンに動揺して、騒いだりしたら、逆に相手の気分を損ねて、最悪の事態を招いてしまう危険性があると言う事も、マドンナ女子は十分に心得ていたのだ。

男子たちに連れられて、マドンナ女子は、近所の廃屋へとやって来た。この、誰にも見られない場所で、男子たちはマドンナ女子に告白し、失恋したとしても、その事実を外に漏れないようにしようと考えたのである。

男子たちは、待ちきれなくて、さっそく、マドンナ女子にプロポーズをし始めた。しかし、分かっていた話ながら、マドンナ女子は、誰に対しても、つれない返事をして、乗る気じゃない、つまらなそうな態度なのだった。彼女は、本当に男には全く興味がなかったようなのである。

彼女の反応があまりにも淡白すぎたものだから、その事が、逆に、男子たちの感情を激しく逆撫でしてしまったみたいだった。男子たちは、ほんとに、彼女のことが、好きで好きで仕方がなかったのだ。

その思いを今まで必死に押し殺していたと言うのに、ここまで彼女の方が醒めていると、なんだか、その気持ちのぶつける場所が無くなってしまったのである。

とうとう、本心を抑え込めなくなった男子の数人が、いきなり、マドンナ女子に襲い掛かった。他の多数の男子は、まだ冷静さを保っていたが、それでも、その暴挙を制止しきれなかったのである。マドンナ女子の方も、この男子たちは自分を敬っていると見くびり過ぎていたものだから、この唐突な行動には驚いてしまい、動揺して、うまく歯向かう事ができなかった。

ついには、暴徒と化した一部の男子は、マドンナ女子の服を引っぺがしてしまったのである。彼らの前には、憧れの女生徒が丸裸でいると言う、興奮するシチュエーションが、現実となってしまったのだ。

「これ以上はやめるんだ」と、さすがに止めにはいる男子も現われた。

「嫌だよ。せめて、俺は、今までの堪えていた思いを叶えさせてもらうんだ」暴徒となった男子も、泣きそうな顔で、躍起になって、なかなか引こうとはしないのだった。

「お願い。私、淑女のマナーとして、婚前交渉だけは避けたいの。どうか、セックスだけは許して」マドンナ女子も、半泣きで、そう訴えてきたのであった。

彼女の裸体を揉みくちゃにイジっていた悪者側の男子たちも、ちょっと理性を取り戻して、哀れな感じのマドンナ女子の頼みを受け入れかけたのだが、そこで、ある事が判明した。

「あ、あ。こいつ、処女じゃないぞ！」暴徒になった男子の一人が、急に、そう叫んだのだ。

彼は、つい悪ノリしてしまい、マドンナ女子のアソコまで触っていたのである。その途中、彼女の穴（ヴァギナ）にも指を突っ込んでしまい、この意外な事実が発覚してしまったのだ。

これには、今までマドンナ女子を庇おうとしていた男子たちも愕

然としてしまった。

「どう言う事だよ」「男に興味がないのと違ったのか?」「なんだよ。ほんとはセックスしてたのかよ」「何が、婚前交渉はやめてだ!」

この場にいた男子たちは、いきり立って、殺伐とした様子で、マドンナ女子に詰め寄った。

絶体絶命の状態に追い込まれたマドンナ女子は、もはや、一言の弁明もできなくなってしまい、うろたえて、固まってしまったのである。

「分かった!こいつ、自分で破っちゃったんだぜ!なんて野郎だ!男とはヤリたくなくても、気持ち良くはなりたかったのかよ!」男子の一人が、ふと、そう怒鳴ったのだった。

マドンナ女子の男嫌いぶりを考えると、実際に、この推察が正解だったのかもしれない。しかし、だとすると、その方が、余計に男子たちに不快感を与えたのである。

「この野郎!そんなに俺たちの事は不潔で、汚いと思ってるのかよ!そんなにチンポでは自分の体を汚してほしくないのか!なんて傲慢な女なんだ」男子の誰もが、そのように思っていた。まさに、可愛さ余って憎さ百倍となってしまったのだ。

惨めなマドンナ女子は、すっかり縮み上がって、震えてしまっていた。

「分かったよ!そんなに、セックスはしたくないなら、チンポは突っ込まねえ!その代わり、お前の大好きな指で犯してやるさ!」

もはや、抵抗する気力も失せていたマドンナ女子のことを、怒れる男子たちは力づくで押さえ込んだ。そして、彼らは、順番に、マドンナ女子のアソコに、自分の指を突っ込んで、弄び始めたのである。これはこれで、女性にとっては、きちんと強姦される以上の屈辱なのだ。

マドンナ女子は、泣いて嫌がったが、男子たちも、決して許そうとはしなかった。彼らの「裏切られた」と言う失望と怒りは、そこ

まで強かったのだ。
男子たちの責めは、エスカレートしていく一方だった。一本ではなく、数本の指を入れるのも、試してみた。マドンナ女子自身の指を、彼女の穴の中に突っ込ませたりもした。ついには、その場にあった鉛筆とか木の枝とかも、挿入しだした。
だが、それでも、まだまだ、男子たちの気持ちは収まらなかったのである。
「おい。誰か、電動バイブを買ってこいよ。どうせ、この女は、自分ちでは、バイブでも遊んでたんだろ」
マドンナ女子の顔からはサーッと血の気が引き、その体は小刻みに震えていた。
こうして、モテない男子たちの復讐は、えんえんと続いたのである。

了

ウブメ

「おや。どこへ行くんだい？」友人が尋ねてきた。
「ちょっと、旧校舎まで」僕は答えた。
「やめておいた方がいいよ。旧校舎には、ウブメが出るらしい」
「ウブメ？」
妖怪の産女（うぶめ）のことは、僕も、水木しげるのマンガや佐藤有文の妖怪図鑑などを読んで、なんとなく知っていた。だから、僕は、特に怯える事もなく、そのまま、旧校舎の中に入ってみたのだ。
すると、本当にウブメは現われたのである。
「うふふ。あたし、初心（うぶめ）娘よ」
そのウブメは、少女の姿をしていた。僕と同じ、高校生ぐらいの年頃じゃないかと思われる。そして、彼女は全裸だった。そのプロポーションは、まだ大人になりきっておらず、あどけなかったが、その方が可愛い顔をした彼女には似合っていたようにも感じられた。
僕は、逃げ出す事もなく、正面からウブメと対峙した。
「あたしね、男のことを何も知らないまま、死んでしまったの。あなたって、男の子でしょう？ねえ、あなたの事をいろいろと教えてくれる？」ウブメは、僕にそう話しかけてきた。
不思議と、僕には、彼女のことが怖くは思えなかったのだった。それで、僕は彼女の願いを聞き入れてあげる事にしたのだ。
「男の人の体って、どうなっているの？ねえ、あなたの体を見せてもらえる？」
ウブメは、立ち尽くしている僕のそばに寄ってきて、僕の腰にと手を当てた。彼女の姿は半透明だったが、きちんと感触も固さもあったのである。そして、彼女は、一方的に、無抵抗の僕のスラックスとブリーフを下におろしてしまったのだ。
ウブメの目の前で、僕の男性器がむき出しになった。ウブメは、

とても興味津々に、実に楽しそうに、僕の性器を眺めているのである。

「うふふ。これが男の人の持ち物なのね。じかに見たのは初めてだわ。こんなんだったんだ。触っていい？」

「うわ！痛い、痛い。そんなに強く握ったらダメだよ。キンタマは、もっと優しく扱わないと」

「あら、そうなの？」

「女には分からないかもしれないけど、キンタマは、とてもデリケートなんだ」

「へえ。じゃあ、このサヤの方は？あたしが知っている形とは違うわ。あなたって、包茎と言われるオチンチンだったの？」

「違うよ。本当に何も知らないんだね。ペニスは変形するんだ。よおく触ってみてごらん。先の方は、皮をむく事ができるから。いいよ、君の手で、むいてごらんよ」

「あ、あ。ほんとだ。皮の内側に、もう一つ、オチンチンがあるわ。あたしが知っているオチンチンは、こっちの方よ。ふうん、こんな風になってたんだ。え、え、え？あれ、あなたのオチンチン、固くなってきたわよ」

「そうだよ。ペニスは刺激されると、ピンと立つんだ。すると、女の人の体の中にも入れられるようになるのさ」

「あたし、まだ、ファックって、した事がないわ」

「じゃあ、僕と試してみるかい」

「いいの？」

「ほら。セックスできるような姿勢をとってごらん」

ウブメは四つん這いになった。僕は、迷わず、勃起したばかりのペニスを、彼女の体にあてがったのである。

ウブメの処女の性器（ヴァギナ）は、生きた少女のそれと、なんら変わりはなかった。きちんと挿入もできたし、その内部の感触もあったのだ。

そこで、僕も、ごくごく普通に性交を行なってみたのである。

どんどん、僕も気持ち良くなってきた。ウブメの方も、同じらし

かった。彼女は、僕に貫かれながら、なまめかしい喘ぎ声をあげ出した。

「ああ。僕は、もうすぐイキそうだよ。君も一緒にいこう。準備はいいかい」

「ええ。すごく気持ちいい。ねえ、どうなっちゃうの。ねえぇ」

次の瞬間、僕はウブメの中で膣内射精した。どうやら、ウブメも、うまく、僕と同時に絶頂に達してくれたらしかった。彼女は、叫ぶようなエクスタシーの声を発した。

すると、ウブメの姿は、パッと消えてしまったのだった。彼女は、生前の未練が無くなって、無事に成仏したのである。あとには、チンポ丸出しの僕だけが残されたのであった。

世の中には、このような素敵なお化けだって存在するのです。

了

いじめられっ子の朝

女子高生のA子は、学校ではいじめられていた。彼女の一日は、たいがいは、両親と朝食をとる事から始まる。A子が自分の部屋から起きてくると、出勤前の父はすでに食卓につき、専業主婦の母はまだキッチンで食事の準備を行なっていた。

父は、朝、制服姿のA子を見るたびにニヤついてしまう。全く、娘が可愛くて仕方のない、親バカなのだ。

「お前も、すっかり大きくなって、綺麗になったな。友達の間でも、さぞ人気者なんだろう?」父は、そんな事を平気でA子にと聞いてきた。

「そんな事ないよ」と、そのような時、A子は素っ気なく返す。

しかし、彼女の答えには嘘が混じっていた。確かに、彼女は、教室では、いつも、皆の中心にいたのである。ただし、クラスメートたちは、A子のことを見下して、笑い者にして遊んでいたから、A子の周りには、いつもクラスの皆が群らがっていたのだ。

「いくら皆にチヤホヤされて、おだてられたからって、お互いの体の見せっことかは、してはダメよ」キッチンの方から、母が、心配そうに、そうクギを刺してきた。

「バカねえ。する訳ないじゃない」と、A子も言い返す。

だが、これも嘘なのだった。A子は、教室では、いじめっ子たちから何度も服を全部脱がされていて、その裸を見られて、なぶり者にされていたのである。

このように学校ではいじめられていたと言う事実を、A子は、何一つ、両親には教えてはいなかった。打ち明けたところで、親や教師たちはイジメを解決できない事を、彼女は経験的に知っていたからだ。大人は、しょせん、上っ面の対処しか行なってくれないのである。結果的に、のちに、すぐにイジメは再発して、A子はもっと

もっと酷いイジメを受けるようになってしまうだけなのだ。
「男子からも、モテモテなんだろう?」父が、またもや、そんな事を言って、冷やかしてきた。
「モテる訳ないじゃない」と、A子。
「どうだ?好きな男子はいるのか?」
「いないってば」
そう、モテたりはしてないし、好きな男子もいないのである。ただし、A子は、クラス内で同じようにバカにされていた冴えない男子生徒と、勝手にカップル扱いにされて、卒中、からかわれていたのであった。
「男の子と付き合っちゃダメとは言わないわ。でも、お願いよ。くれぐれも、度を過ぎた事には手を出さないようにね」キッチンの方から、母が、再び、慎重に、そう話し掛けてきた。
ところが、実際には、A子は、いじめっ子たちの指図で、例の冴えない男子と、強制的にキスしたり、ハグするような事もやらされていたのである。
「分かるでしょう?ほら、女の子の大切なもの。せめて、それだけでも大事にしてね」
「やだあ。ママったら、何を言い出すのよ!」
あんまり母が真剣なものだから、A子も、つい大声で、そう言い返すのだった。
しかし、本当は、男とのセックスこそ、していなかったものの、A子はとうに非処女だったのである。いじめっ子たちに裸にされた時、面白半分に膣(アソコ)に異物を挿入されて、処女膜を破かれてしまったのだ。この事も、とてもじゃないけど、親には絶対に話せそうにはないのであった。
このように、A子は、朝は、両親を相手に、最後までポーカーフェイスを貫き通す。そして、今日もいじめられるのを十分に承知の上で、このあと、学校へと登校するのである。

了

おとなしい子

下校中の道で、少し前方を、一人の女子高生が先に歩いているのを、見つけた。よく観察すると、クラスメートのMさんなのであった。

Mさんは、うちのクラスの中でも、特におとなしい事で知られていた。その為、女子生徒の間では、よくイジられたり、パシリをやらされたりしていて、つまりは、いじめられっ子だったのである。

しかし、僕は、先生から「皆、仲良くしなさい」と言われていた事を思い出した。そこで、僕は、先生の教えに従って、Mさんとも親交を持ってみる事にしたのである。

僕は、スタスタと、Mさんの横にまで駆け寄った。

「Mさん。僕の家も、こっちの方角なんだ。一緒に帰ろう」

Mさんは、キョトンとした表情を僕の方に向けたが、不安そうな表情を浮かべただけで、特に何も言おうとはしなかった。それほどまで、彼女は意志薄弱で、内気だったのである。

僕は、かまわず、彼女の横に並んで歩き出した。きちんと断らなかった以上は、僕の思った通りに行動させてもらうのである。

Mさんは、本当におとなしかった。彼女の方からは、全く、僕へと干渉してこないのである。僕から話しかけてみても、モゴモゴと小さな声で短く答えるだけだった。なるほど、こんなんだから、女子たちも、ついMさんの事をいじめてしまうのであろう。もっとも、僕は先生の言いつけを守るほどのマジメ生徒なのだから、こんなMさんであろうと、決して意地悪したりはしないのだ。

でも、Mさんが隣にいると、ちょっとヘンな気分になってきた。ドキドキしてきちゃったのである。僕自身は、もっと女の子慣れしていたつもりだったのだが、果たして、どうした事なのだろう。

Mさんは、決して美人などではなかった。むしろ、ダサい女子だ

ったとも言える。体型だって、ふくよかな方だった。それなのに、なぜ、彼女のそばにいると、興奮してくるのであろうか。

もしかすると、Mさんは、まるで見かけないタイプの女子だったからなのかもしれない。あまりに静かで、害がないものだから、僕には、彼女のことが人形か小動物（ペット）のように感じられてきてしまったようなのである。

僕は、思い切って、さりげなく彼女の手を握ってみた。彼女は、明らかに困惑していた様子だったが、やはり消極的で、何も逆らいはしないのだった。僕は、このまま、彼女と手を繋いで、歩き続けたのである。

女の子とは、これまでだって、何度も手を触れ合った事があったのに、どういう訳だか、僕は非常にゾクゾクしちゃったのだった。今までに無かったほどのトキメキを感じるのである。

僕は、Mさん相手に、もっと色々な事を試したくなってきた。わざと、彼女の方に体を擦り寄せてみた。彼女は、どうやら戸惑っていたようだが、そんな事は気にしない。

「Mさん。こっちを向いて」

彼女は、言われた通りに、振り向いてくれた。その唇に、すかさず、僕はチュッとキスをしてみたのである。

彼女の顔は、真っ赤になってしまった。明らかに、動揺しているのだ。でも、それ以上の激しい反応や抵抗は見せなかったのだった。

彼女は、もしかすると、これがファーストキスだったのかもしれない。僕の方は、女の子とのキスは経験済みだったが、それでも、このような略奪キスは、とっても楽しくて、ドキドキさせられたのだ。

「Mさん。ジッとしてて。もう一回、やるよ」

彼女は、相変わらず、歯向かわなかった。だから、僕は、今度のキスは、もっと濃厚に、舌も使って、ディープに行なってみたのである。ここまで、本格的なキスは、僕の方も初めてだった。それだけに、僕も、より感動や衝撃が強かったのである。

キスを終えた後、Mさんは泣きそうな表情になっていた。しかし、それでも、彼女は、積極的に僕から逃げ出そうともしなかったのである。

すぐそばにある雑木林が、僕の目に留まった。

「まっすぐ帰らないで、ちょっと遊んでいこうか」

僕は、Mさんの体を力強く押さえ込むと、強引に、雑木林の方に引っ張っていった。Mさんは、どうやら嫌だったみたいなのだが、やっぱり、モゴモゴと聞き取れない程度の声しか出さなかったので、そんなのは無視して、僕は彼女を雑木林の中に連れ込んでしまったのである。この林の奥の方にまで入ってしまえば、そこで何をしていようが、もう外からは絶対に見つからないはずなのだ。

僕は、ようやく安心して、思うがままに、自分の欲求を解放してみたのだった。

「Mさん。おっぱいを触らせて」

「スカート、めくらせてよ。どんなパンツ、履いてるの?」

「お尻を撫でてもいい?」

「君もマン毛は生えてるの?ねえ、見せてよ」

僕は、やってみたかった事を、次々にMさんに仕掛けてみた。そして、こんな状況であっても、Mさんは、僕のされるがままだったのである。

いつしか、僕は、Mさんの服を全部、脱がしてしまっていた。僕の目の前には、体の全てを晒した丸裸のMさんがいたのである。それを見て、僕はあらためてムラムラしてきた。

「ねえ、Mさん。セックスさせて」

僕は、今までにも何人かの女子と付き合っていたが、セックスをしたのは、これが初めてだった。Mさんの方も、これが初体験だったようである。僕は、彼女の処女を頂いちゃったのだ。

このあと、僕は、急に情熱が冷めてしまい、Mさんとも、さっさと別れて、家に帰ってしまったのだった。Mさんは、最後まで、おとなしくて、無抵抗なままなのであった。僕に力づくで犯されたと

言うのに、その事に対してすら、何の自分の意志も示さなかったのである。

いずれ、彼女がロストバージンしていた事は、どこかでバレてしまう事になり、それが大きな影響をもたらす事にもなるかもしれない。でも、そんな事は、僕の知った事ではないのだ。どうせ、彼女は、自分が非処女だった件を問われたとしても、例によって、モゴモゴとしか言わないだろうからである。僕の名前が表に出てしまうような心配は、きっと、絶対にないはずなのであった。

了

オナニー娘の校舎

女子高校生と言うのは、実際には、皆が考えている以上にスケベなのだ。

なるほど、沢山の人の中に紛れ込んでいる時は、彼女たちは、全く没個性的に、平凡な少女として振舞ってはいるが、それが、いざ、一人きりになってしまうと、突如として、彼女たちの本性は露見してしまうのだ。

その場所が、神聖なる高校（まなびや）であったとしても、関係ない。ふとしたキッカケでスイッチが入ってしまうと、彼女たちの内に秘めていた愛欲の情念が、一気に外へと噴き出してしまうのである。

例えば、放課後、教室の中に一人だけで居残りをしていた女生徒がいたとしよう。彼女も、最初の間は、その居残りをしている理由の何かに、おとなしく集中している。しかし、その居残りの目的を終えた一瞬に、いきなり、彼女の本能的な熱い思いが、はたと目覚めたりするのだ。

学校の中では、ずっと、程よい緊張状態が続いているので、それが僅かでも緩んだりすると、なおさら、激しい情念の誘惑にと襲われてしまうのだろう。ついには、彼女は、その欲望に負けて、誰にも見つからないのをいい事に、肉欲の快楽にと一途に傾向してしまうのである。

はっきり言ってしまうと、彼女たちは、学校内であろうと、オナニーを始めてしまうのであった。当然、彼女たちは、自分の家でも、密かに、オナニーをたしなんでいたのだと思われる。この子たちは、ついには、まだ学校にいる時間であっても、オナニーするのを我慢できなくなってしまうのだ。

日中の学校での共同生活の中で、ずっと自分の心を押さえつけていると、その張り詰めた神経が解放された瞬間は、なおさら、オナ

ニーによる快感で、たまらない至福感を味わえたのかもしれない。校舎の中で卑猥な事をしていると言う罪悪意識も、ますます、彼女たちの気分を高揚させたようだ。

とにかく、やり始めたら、彼女たちも、あとは、とことん、その一人遊びの行為にと励んだのである。

ほとんどの場合、彼女たちの学校内でのオナニーは、角オナニーと言う形式をとった。自分の指だけでも楽しめるかもしれないが、せっかくだから、もっと興奮するプレイに手を出すのである。

彼女たちは、自分以外は誰もいない教室やら部室やらの中で、机の角や椅子の背もたれ等に、自身の股間を押し当て、激しく擦り付けた。他の生徒たちも授業や日常生活で使っているものに、こうして、卑猥な事をする事で、彼女たちの緊迫感も増すのである。より興奮して、発情できるのだ。

ついには、制服のスカートもめくり上げてしまう。高校生らしい、可愛らしい柄のパンティや、色とりどりの下着をむき出しにして、今度は、それらの衣類をじかに机や椅子などに押し付けて、さらなる強い快をむさぼるのだ。そんな事をして、きっと、本人もやましい気持ちでドキドキしているのかもしれないが、はたから見ても、かなり破廉恥に感じられる光景なのである。

もっとイカれちゃってる女子(こ)だと、部活で一人で居残り練習をした後、部室で着替えている最中に、急に欲情してきてしまって、そのままオナニーを始めてしまう。学校の中で服を脱ぐ、あるいは、裸になってしまうと言う、特殊なシチュエーションが、彼女のことを、つい、エッチな気分にと駆り立ててしまうらしい。

かくて、彼女は、半裸で、あるいは、完全に裸の状態で、オナニーに熱中してしまうのである。恐らく、このような淫らな姿の方が、制服を着たままでオナニーするよりも、過度に欲情できるのであろう。万が一、他人に見つかるような事があったとしても、着替え中だと言い訳もできるので、問題はないのだ。

最終的に、彼女たちは、きちんとイっちゃうまで、オナニー行為

を続けてしまう。個人差はあるのだろうが、誰もが、スッキリするまでやり遂げると、ようやく、その行為をやめ、急に醒めた態度になって、痕跡を残さぬように周囲の後片付けを済ましてから、そそくさと、その場所より逃げ出してしまうのであった。

さて、昨今の学校というのは、実は、校内の各所に隠しカメラが設置されるようになっていた。生徒たちのイジメや不良行為を、秘密裏に監視して、上手に取り締まる為だ。もちろん、この事は学校関係者しか知らない極秘事項であり、生徒やＰＴＡたちは、いっさい知らなかったのだった。分かっていたら、当然、人権やらプライバシーなどの名目で反対されるであろうし、また、皆にバレバレの監視カメラなどでは、十分な任務は果たせなかったからである。

ところが、この監視カメラに、先ほど書いたような女生徒たちのオナニー現場が、まんまと写り込んでいたのであった。真面目な優等生だと思っていた女生徒ほど、このような思いもよらぬ校内オナニーなどをしていて、その証拠映像がバッチリと残ってしまっているのだ。女生徒たちにとっても恥ずかしい話だったかもしれないが、監視カメラの内容をチェックしている最中に、こんなオナニー光景をたんまりと見せられてしまう教師たちの方だって、これには、なんとも言えない心情になってしまうのであった。

オナニー自体は、悪い行為だと判断して、禁止する訳にもいくまい。だから、オナニーしていた女生徒を呼び出して、注意するという事もできないのだ。何よりも、そんな事をしたら、校内に監視カメラを設置していた事までもが、生徒たちにバレてしまう。それでは、本来、暴きたかったイジメや不良行為の現場も押さえる事ができなくなってしまうのである。

そんな次第で、女生徒たちの校内オナニーに関しては、以後も、そのまま黙認され、放置され続けたのだった。

了

プレゼント（前書き）

本作は、「チンポ責め」のオマケのオマケの部分から派生したエピソードです。

プレゼント

クラスの不良男子が僕のことをリンチして、面白半分にチンチンをちょん切りだした事があったのですが、その時、僕の目の前には、なぜか、教室で僕の隣の席に座っていた女子の姿が浮かび上がったのでした。

しかも、ただ、彼女の幻のビジョンが見えたのではなく、それはヌードの彼女だったのです。まだチンチンが無事なうちに、男としての性的欲求を満足させてあげようとして、僕の無意識が、あえて、そんな幻覚を僕に見せてくれたのかもしれません。

でも、そんな事があってから、僕は、隣の席の女子のことが、とっても気になるようになってしまったのでした。僕は、彼女のヌードを、いつでも、鮮明に思い浮かべられるようになり、すっかり、彼女のことを女性として意識するようになってしまったのです。

制服を着ている彼女を目にしても、うっかり、その内側にある彼女の裸体が透けて見えてきてしまいます。そんな有様だから、教室の中で、彼女の隣の席に座っているだけでも、ドキドキし通しなのです。

制服姿でも、そこまで心を乱されちゃうのですから、体育の授業やら部活動やらで、彼女が体操着やレオタードを身につけていた時は、もっと大変でした。何たって、すでに彼女の四肢の肌は見えてましたし、制服の時以上に、彼女の体の線も正確に判断できましたので、より彼女の裸をはっきりと脳裏に描けたのです。

教室の中で黙って授業を聞いている時とも全く違う印象で、グラウンドの上や体育館の中を、オールヌードの彼女が、快活に、大きく体を広げて、元気に跳ね回っているのが、鮮やかに、僕の目には写っていました。ああ、なんて、眩しい光景なのでしょう。もう照れ臭すぎて、とても直視はし続けられないのです。

本当は、彼女はそこまで美人な子でもありませんでした。むしろ、どちらかと言えば、平凡な、目立たない方です。性格も温厚で、物静かで、僕も、これまで、そんなに言葉を交わした事もなかったのでした。明らかに、クラス内でも、あまり注目されていない存在だったのです。

それなのに、こんな奇妙な事情があったものだから、僕にとっては、彼女は、理屈なしで愛おしい女の子になってしまったのでした。その思いは深まっていくばかりなのです。まさに、これが恋わずらいと言うものなのでしょうか。僕は、彼女に惹かれ、彼女のことばかりを考え耽るようになっていました。

こうして、もう、この気持ちを、これ以上、押さえ込めなくなってしまったのです。

僕は、もはや、ダメでもともとで、彼女に、愛を告白する決心をしました。

そして、いざ、僕の気持ちを伝えてみると、予想外にも、彼女は、こんな僕みたいな三流男子でも認めてくれたのでした。いや、彼女自身の方も、そんなモテる女子ではありませんでしたので、まさかの男子からの交際の申し込みに、ビックリしていたようだったのであります。

そんな訳で、今の僕は、とっても幸せなのでした。すでに、さんざん、その裸を想起させてもらった女子と、本当のカップルになれたからです。でも、もう十分に彼女の裸は夢想によって拝見させてもらったので、この先、実際に見せてもらいたいとも思わないのです。

むしろ、恋人関係になった以上、僕は、彼女に違う事をしたいと企んでいました。それは、彼女に、特別なプレゼントを贈りたい、と考えていたのです。

そう、僕は、自分の切り落としたチンチンを彼女にあげたいと、ひそかに望んでいたのであります。セックスなんか出来なくても、構いません。好きな子に、自分の体の一部を貰ってもらえる方が、

僕には、ずっと興奮できたのです。チンチンを切られながら、彼女のヌードをフラッシュバックして、そうして好きになっちゃった、あの衝撃的な感覚を、僕は再び味わいたかったのであります。

実は、僕には、彼女のオマンコすらも、すでに見えてしまっていました。女のモノの実物がどんな形状かは知らなかったはずなのに、どうしてだか、分かったのです。女の子のアソコが、こんな風だったと知った時は、とっても興味深くて、つい見入ってしまいました。

でも、醜く突き出した男の性器（チンチン）なんかよりも、ツルッと平坦な女性器（オマンコ）の方が、フォルムもほんとに美しいのです。僕も、最初っから、このような優雅な性器を持ちたかったと、つくづく思ってしまったぐらいであります。

愛する彼女も、このきれいな性器を用いて、普段はオナニーもしているのでしょうか。アソコに、もうモノを入れた事もあるのかしら。僕が見た、幻覚の彼女のアソコは、少なくても処女ではありませんでした。あの穴は、ぽっかりと口を開いてしまい、かなり使いこなされていたのです。これって、もしかして、彼女のアソコの現実を反映したものだったのでしょうか。

僕自身は、彼女とじかに性交（まじ）われなくてもいいのです。それよりも、もし、僕のチンチンを彼女にあげたら、今度からは、僕のチンチンを性具（ディルド）代わりに使って、アソコに突っ込んでみて、彼女も気持ちよくなってくれたら嬉しいな、などと、今の僕は、ずっと、そんな事を願っていたのでした。

了

テレセックス

『なあ。テレセックスを試してみないか』と、クラスメートでもある彼氏が、あたしにと持ちかけてきた。

実は、あたしは超能力者なのである。この彼氏も、同じく超能力者だった。その事は、あたしたち二人と一部の人間しか知らない秘密なのだ。

諸事情があって、あたしたちは、長い事、ステイホームの生活を強いられていた。高校にも行けず、あたしと彼氏も、しばらく、じかには会っていなかった。代わりに、今は、お互いに自宅にいながら、テレパシーでひそかに二人だけの会話などをして、楽しんでいたのである。しかし、彼の方は、まだ付き合いたてだった事もあって、どうやら、お喋りだけでは物足りなくなってきたらしく、あたしの肉体まで求めてきだしたのだ。

『いやよ。あたし、まだバージンなのよ』と、あたしはテレパシーで答えた。

『バーカ。テレセックスなら、処女は失わないだろ』彼は、笑って、言い返してきたのだった。

こうして、彼に説得されて、あたしはテレセックスをやってみる事にしたのである。

遠く離れた場所に居ながら、男女が擬似的に性交を行なうテレセックスを実現させる為には、さまざまな超能力の組み合わせが必要だった。

まずは、双方が、自宅の寝具の上で裸になる。その姿を、お互いに透視しあう事で、実際にそばに居るかのような感覚になって、気分を高揚させていくのだ。

続いて、念力の出番となる。遠隔地から念波を送って、相手の体の各部位に的確な刺激を与えるのだが、これには、かなり高度なテ

クニックが要求された。だけど、本当に愛し合っている者同士であれば、このへんの微妙なサジ加減も、次第に上手になっていくものなのだ。

『ああ、素敵。気持ちいいわ』

『ぼ、僕もだ』

双方がテレパシーを飛ばしあって、随時、相手の状況を探り合う。そうする事によって、自分が送る念波も巧みに微調整するのだ。もっとも、相手の様子を伺いながら、愛撫を行なうと言う点では、ノーマルなセックスであっても、同じ話なのである。

ただし、念動力（サイコキネシス）を用いた愛撫だと、普通のペッティングでは有りえないような体位や触り方も出来たのだった。

『うう。僕は、もうすぐ、イっちゃいそうだよ』

『あ、あたしもよ。先にいかないで』

『じゃあ、一緒にいこう』

『はああぁ。い、いきそぅ』

『よし！いくぞお！』

『いや。あっ、あああーん』

かくて、あたしと彼は、同時に絶頂に達して、見事に、初のテレセックスもやり遂げたのであった。プレイ後のあたしの処女膜も、彼が保証してくれた通り、確かに無事だった。

ところが、それから間もなく、とんだ不手際が発覚してしまったのである。あたしは何ともなかったのだが、彼の方が妊娠してしまったのだ。やっぱり、慎重に遊んでいたつもりでも、どこかで余計な超能力（のうりょく）まで作動させてしまっていたらしい。

あたしが彼の相手であった事は、誰にも知られていなかった。だから、あたしも、彼の妊娠については、まるで無関係なフリをさせてもらったのだった。

やはり、テレセックスなどは、安易に行なったりするものではないのである。

了

女柔道部

うちの高校の女子柔道部は、毎回、県大会で入賞するほどの強豪であり、学内の生徒たちからは、憧れと羨望の目で敬われていたが、その練習風景に関しては、いっさい、一般の見物が許可されていなかった。特に、男子に対しては、柔道部の道場への入館自体が全面禁止となっていたのである。

ここまで徹底した秘密主義を貫かれると、逆に、どうなっているのかが知りたくなってくるものなのだ。しかし、実際に覗いてみると、そこには、驚くべき光景が広がっていたのだった。

女子柔道部は、まさに我が校の誇りである為、その毎年の新しい入部者も大勢いた。もちろん、中学時代から柔道を継続している本格派の部員もいれば、ちょっとした憧れから何となく入部してしまった全くのシロウト部員だって少なくないのだ。

そうした新たに入ってきた部員たちは、全員、我が部最強の女主将の稽古試合の洗礼を受ける事が、柔道部のしきたりとなっていたのだった。

何と言っても、我が女子柔道部の女主将は、各大会では常に記録を残すような強者なのだ。その練習相手として、一度でもいいから組み手ができるなんて、栄誉であるとともに、ものすごい話なのであった。

当然だが、この豪腕の女主将にかかっては、いくら中学時代からの柔道経験者であっても、赤子をひねるようなものなのである。このように、ケタ違いの力にねじ伏せてもらえる事で、多少の強さで慢心していた新入生たちも、あらためて努力する気持ちを持てるようになる訳だ。

ただし、それは、あくまで柔道経験者の新入部員たちの話なのであって、ミーハー感覚でうっかりと柔道部に入ってしまったシロウ

ト部員たちには、この女主将の猛特訓は、かなりハードルが高すぎたようだった。でも、彼女たちも、分け隔てなく、この組み手稽古は受けさせられたのである。

シロウト部員が相手だろうと、女主将は決して手を抜いたりはしなかった。ヘンに手加減をすれば、逆に事故になる恐れもあるからだ。また、全力でぶつかる事で、生半可な気持ちで入部してしまったシロウト部員たちにも、この柔道部の真の厳しさを分からせたかったのである。

では、その結果、どのような事になってしまったかと言うと、力の差が有りすぎる余りに、もはや、シロウト新入部員が投げ飛ばされてしまう以前の問題なのであり、女主将の猛烈なパワーの前では、人そのものは置き去りになってしまって、掴まれていた柔道着だけが勢いよく引っぺがされてしまうのだった。

シロウト部員たちは、もともとが軟弱だったものだから、柔道着だってガッチリとは着ていなかった。あまり帯の締め付けがユルいと、女主将の怪力によって、簡単に持っていかれてしまい、柔道着だけ脱がされてしまうようなハメになってしまったのだ。

しかも、この部では、部活中の下着の着用が認められていなかった。下着の肌触りや締め付けが、精神集中を鈍らせる事があったからだ。よって、女主将に柔道着を奪われた新入部員は、裸にされて、おっぱい丸出しになってしまうのだった。

だらしない新入部員の場合は、柔道着を引っ張り取られた時の勢いで、下ばきまでもが脱げてしまう。すると、ほんとの丸裸のすっぽんぽんになってしまうのだった。

これは、みっともない。まさに、実力者と新人のレベルの違いを見せつけられたような感じなのであった。このような屈辱を受けて、ガッカリして、すぐに、泣きながら部を辞めてしまうか、あるいは、あらためて柔の道の厳しさを知って、気を締めて、部活に取り組むようになるかは、あとは、本人次第なのである。

女主将が、新入部員相手に連続試合稽古を実施した時などには、

こんな風に、道場内のあちこちに、柔道着を脱がされた半裸や全裸の部員たちが散らばる事となった。

確かに、これでは、部外者には、とても、練習風景は見せられないのである。

了

野獣の掟

暴走族の総長の彼女である女子高生が、浮気相手の男性と一緒に逃げ出した。その浮気相手と言うのが、よりによって、一般生徒のイケメンの優男だったのである。

もし、相手が同じような暴走族の一員だったならば、一対一で勝負して、あらためて女の奪い合いをしても良かったのだが、一般生徒が相手では、そう言う訳にもいかないのだ。

直ちに、この暴走族の全ての構成員が召集された。彼らは、総長の号令によって、ばっと地域全体にと散らばったのだ。

たちまち、総長の彼女だった女子高生と浮気相手の男は、逃走の途中を見つけられてしまい、捕まってしまった。暴走族の優れた情報網の前では、まんまと駆け落ちするなど、最初っから不可能だったのである。

その女と浮気相手の男は、総長の元へと連れてこられた。こうなってしまったら、もう、この二人には絶対に逃れる術はないのである。

総長の鋭い睨みを受けて、二人はすっかり青ざめて、縮み上がっていた。女はひたすら謝って、総長の許しを請うていたが、男の方は、泣きながら、全部、彼女の方から誘ってきたんだと言って、責任をいっさい彼女になすりつけている始末だった。

だが、彼らがいかなる態度を取ろうと、総長の考えていた処分は、すでに決まっていたのだ。

総長がくいっと顎をひねると、取り巻いていた子分たちが、いっせいに二人へと襲いかかった。そして、すでに戦意喪失して、無抵抗だった二人の服を剥いで、裸にしてしまったのである。全裸の二人は、ブルブル震えながら、抱き合っていた。しかし、真の制裁はこれからなのだ。

続いて、二人は、子分たちの手で、ボコボコに袋叩きにされた。一般生徒相手であろうと、まるで容赦はない。それほど、総長の逆鱗に触れた罪は重かったのだ。

たちまち、二人は、体じゅうを傷だらけにされてしまった。血を流し、体の一面が赤く腫れ上がっていた。二人の顔面も例外ではない。美人かった総長の彼女も、見るも無残な形相になってしまった。せっかくの美男美女も、思いっきり台無しなのである。

だが、ここまでされても、暴走族の制裁は、まだ全てが終わった訳ではなかったのだ。もはや、完全にグロッキー状態だった二人は、そのまま、単車の後部座席にと放り込まれた。こうして、一同は、近郊にある山へと大移動を始めたのだ。

すでに、夜も更けていた。暴走族の一行が、山頂近くにまで到着した頃には、周囲もすっかり薄暗く、静まり返っていた。この二人が暴走族に誘拐られた事は、まず、誰にも気付かれなかったであろう。警察が乗り出してくる事だって、無いはずなのだ。当の誘拐られた二人も、この頃には、もう諦めモードで、とことん絶望していたに違いない。

山頂の木々に囲まれた場所で、やっと、二人は降ろされた。もはや、彼らも憔悴しきっており、隙を見て逃げ出すだけの元気も残っていなかった。このまま、すぐに殺されて、山の土の中にと埋められても、おかしくない状況だったのである。しかし、暴走族たちは、そのような事はせず、二人を、適当な樹木の一つに、背中合わせの形で、座った状態で縛り付けた。もちろん、まだ裸のままでだ。

「お、お願い。助けて」総長の彼女だった女は、最後の力を振り絞って、ようやく、泣きながら、そのように懇願した。

しかし、暴走族たちは、どこまでも非情だったのである。総長が、再び、顎だけで命令を下すと、子分たちは、用意してきた物質を、ベタベタと、二人の罪人の体にと塗り始めたのだ。

その物質は、ドロドロした、ジャムに似た何かだった。いや、色が白いだけで、匂いもプーンと甘かったのだ。それを、子分たちは、

女ならば胸（チチ）と股間（ワレメ）の二ヶ所に、男の方は股間（キュウショ）にだけ、集中的に塗りたくったのである。何とも、異様な処刑法であった。

それを施されている犠牲者の二人も、恐怖で、すっかり血の気も引いてしまっているのである。

こうして、全ての準備が終わった時、総長（ヘッド）が、ようやく、口を開いたのだった。

「よし。これで、お前たちの事も解放してやる。あとは自力で何とか逃げ出すんだな。ただし、お前らに塗ったのは、砂糖や蜜などを混ぜて作った、特別製の御馳走（デザート）だ。早く逃げないと、この森じゅうの虫やら動物やらが集まってくるだろう。せいぜい、頑張れや」

これこそが、恋愛（イロゴト）でトラブルを起こした相手にのみ行なわれる、暴走族（ゾク）独特の処刑（リンチ）だったのだ。

説明されて、犠牲者の二人は、どちらも、戦慄して、目を見開いていた。実は、すでに、蟻や小バエなどの小さな虫が、匂いに引かれて、彼らの体にと集（たか）り始めていたのである。連中（むしども）は、この甘い物質を全て食べ尽くすまで、二人の体も一緒に噛（かじ）って、牙を刺して、ズタズタに皮膚を食い破り続ける事だろう。

二人は必死にあがいていたが、疲れ切っていた上に、縄もガッチリと体を縛り付けていた。悲鳴をあげたとしても、こんな山奥では、誰にも聞こえず、助けが来そうな見込みもないのだ。

暴走族（ゾク）たちは、そんな彼らのことを、もはや、見向きもしないで、冷たく去っていったのだった。

やがて、暗い森の夜空には、悲痛な泣き叫ぶ声が響き渡った。

了

エロい女子

私がオナニーを覚えたのは、中学生の時でした。

ほんとは、それ以前から、オッパイやオマ○コを触ってみると、何だかワクワクした気分になれる事には気付いていたのです。でも、それが発情と言う生理現象であって、オナニーという形に昇華したら、もっと気持ちよくなれると知ったのは、中学生になってからなのでした。

そんな訳で、あちこちから入ってくる情報を参考に、ついに、私が本気でオナニーに取り組んでみたのが、中学2年の頃だったのです。ただし、はじめてのオナニーは、自分の体を揉み回してみて、あくまで適度の快感を味わってみる程度のものでした。やがて、私も、もっと性の知識に詳しくなり、「イっちゃう」事とか、経血が出てくる穴にもモノを入れていい事が、分かるようになっていくのです。

好奇心旺盛だった私は、オナニーを定期的にたしなむようになって、さほど時間を置かぬうちに、イっちゃう事にも挑戦するようになりました。とは言え、人づてに聞いた知識ゆえ、それがどのような状態だったのかを知らなかったものだから、はじめて絶頂まで達するには、何度も失敗しました。いくら性器を愛撫してみても、気持ちの方がうまくオーガニズムに向かわなかったのです。

それでも、繰り返しオナニーしながら試しているうちに、ある日、いきなり、その時が訪れて、私もようやく一人前にとなれたのでした。もちろん、やっと成功した絶頂は、素晴らしいほどの感動であり、それ以降、私は、オナニーをする時は、必ずイっちゃうまで続けるようになったのです。

膣の穴にも、中学3年になってから、じょじょにモノを入れるようになりました。最初は、恐る恐る、自分の指を押し入れてみて、

その行為そのものにドキドキさせられたのです。まだ処女膜がついていた私は、こんな小さな穴に、もっと大きなモノでも入れられるらしいと知って、不思議に思っていました。でも、他人が出来るんだったら、私にも出来るはずなのです。だから、私は、怖々でも、いつも、自分の穴に指とか鉛筆とかを入れて、遊ぶようになっていったのでした。

そんな事を続けているうちに、この穴は、四方に押し開いて、広げる事ができると気付きました。なるほど、こうやって、他の人は、もっと大きなモノでも、この穴の中に入れていたんだ。そう感心しながら、私自身も、面白半分に、どんどん太いモノを膣の穴に突っ込んでみるようになりました。

その結果、ちょっと無茶してしまったものだから、私は、オナニーの最中に、処女膜を破いてしまったのでした。この時は、本当に慌てました。処女膜が裂けて、穴は拡がっちゃうし、真っ赤な血も垂れ出てきます。急いで、インターネットで対処法を調べた結果、ことの真相を知って、どうにか私も落ち着く事ができたのですが、それでも、この日の興奮は、しばらく尾をひく事となりました。

だけど、今思えば、それで良かったんだと思います。だって、以後は、私も、何の心配もなく、膣の中にモノを入れられるようになったのですから。しかも、挿入オナニーの方が、ずっと色々な快感を得られるのです。バージンは好きな男性にあげるまで取っておく、なんて考え方もあるのかもしれませんが、少なくても、私は、そこまで我慢しているよりは、充実したオナニーを楽しめる方が嬉しかったのでした。

高校生になってから、私のオナニー癖は、もっとエスカレートしていきました。さらに性テクニックの知識の方も増えましたので、こっそりと、オナニー用の玩具も買い集めだしたのです。今の時代は便利なので、上手に立ち回れば、家族や学校にも内緒で、好きなだけアダルトグッズも手に入れられたのでした。

こうして、電動バイブやローター、電気アンマなどを、次々に購

入していきました。ディルドも、様々なタイプのものを揃えました。買い始めると、つい何でも欲しくなってしまうのです。

もう、この時期になると、私も、家族にバレる事も、そこまで恐れなくなっていましたので、自分の部屋で、いつでも、堂々とオナニーをやっていました。気が向いた時に、ベッドの上で全裸になり、お気に入りの玩具を使いながら、思いっきりイっちゃうのが、実に爽快だったのです。

特に、ディルドを使ったオナニーが好きでした。どうせなら、より太いモノを、私の穴に入れてみたかったからです。その方が、明らかに気持ちがいいのです。でも、そうやって、大きなサイズのディルドに挑戦しだしたら、どんどんデカいものを使うようになってしまいました。だって、思った以上に、どんなディルドでも挿入できちゃうのです。そして、そんな大きなものほど、私に、より深い快感をもたらしてくれるのでした。

だから、いつの間にか、ビッグサイズのディルドでばかり、遊ぶようになっていました。グイッと、そのディルドを私の穴の中に押し込むのです。結構、あっさり入ってしまうのです。それをズボズボと出し入れして、動かしてみます。それだけでも十分に感じちゃうのですが、せっかくなので、ずっと奥まで押し入れてみます。すると、ディルドは丸ごと、私の中に入ってしまったのでした。私の膣の中は、ディルドが詰まって、パンパンの状態となるのです。この時が、私も、一番、気分が高揚しました。

それでも、全然、痛いなんて事はありませんでした。膣の内側が、満遍なく刺激されて、とっても快感なだけだったのです。もしかしたら、私ってガバガバなのかもしれない、と思ってしまう事もあります。でも、いいんです。こんなに幸せな気持ちに浸れるんですから。

もっとも、こんな感じで、毎日のようにオナニー遊びをしていたものだから、いつ頃からか、私の膣の穴はパッカリと開いたまま、ずっと閉じなくなってしまいました。いつも、だらしなく口が開い

た状態なのです。あるいは、挿入行為を少し控えれば、自然と閉じてくれたのかもしれませんが、だけど、それは今の私には出来ない話でした。

私のオマ○コは、ほんとは、とても綺麗だったのです。全体的に整っており、鮮やかなピンク色で、陰唇の太さや長さのバランスも良く、自慢したくなるぐらいの美形なのです。それが、膣の穴だけは、普段から半開きのような状態になってしまったのでした。これって、ちょっと恥ずかしいのです。

さて、こんなにエッチな事が好きだったのですから、当然、私は、早く、男の人の持ち物も自分の中に入れてみたいと望んでいました。つまり、私は、学生時代から、いつでもセックスOKだったのです。

なのに、なぜか、私には、なかなか彼氏はできなかったのでした。自分で言うのもなんですが、私はそこそこに美人だったと思っています。学校でも明るく振る舞っていて、軽そうなヤンチャ男子とも積極的に絡むようにしていました。だけど、男子たちは、まるで私には興味を示そうとしなかったのでした。

一度、ヤンチャな男子の一人に、冗談混ざりに、言い寄ってみた事がありました。すると、その男子はヨソヨソしくなり、「お前のことは、友達としては最高に面白いけど、恋人（カノジョ）のイメージはまるで湧かない」と言われてしまったのでした。やれやれ、男の人の恋愛感覚って、そんなものなのでしょうか。

ところが、このような感じでモテない女子だったはずの私に、最近、いきなり、待望の彼氏ができたのでした。相手はクラスメートの男子の一人です。彼の方から、私に交際を申し込んできてくれたのでした。全く、世の中というのは、ほんと、分からないものなのです。

ただ一つ、予定外の事がありました。それは、この男子と言うのが、うちのクラスでも特に生真面目で、おとなしい男子だったのです。騒がしいタイプの女子である私とは、まるで正反対の生徒でした。人と言うのは、やっぱり、自分には無いものに惹かれるものな

んでしょうかね？

まあ、私の方は、誰が彼氏になってくれても良かったのです。いつか、セックスさえ出来れば、それで満足でしたので。しかし、この男子くんが、私が考えていた以上に、優等生すぎたのでした。

だって、正式に付き合い始めたと言うのに、いまだに、彼ったら、私の手を握る事すら照れてるんです。しかも、ウブ過ぎて、私の顔も、ろくに直視できないみたいなのです。確かに、まだ高校生かもしれませんが、でも、一体、どこまでプラトニックなのでしょう。

こんなんでは、私の方からも「セックスしよう」とは言いづらいのであります。いや、積極的にアタックなどしたら、彼は尻込みして、私から逃げ出しちゃうかもしれません。私としても、ようやく出来た彼氏なので、そうも簡単には手放したくないのです。

そんな状況なもんですから、私は、せっかく彼氏を手に入れて、これほどエッチにも関心があったと言うのに、まだまだ、セックスは経験していなかったのでした。どうも煮え切らない毎日なのであります。

いえ、実を言うと、近ごろは、ちょっと違う事も妄想するようになり始めていました。それは、もう、こうなったら、この彼氏くんと交われなくてもいいから、代わりに、私だけがいつものオナニーをしてみせて、この子に見せてやるのはどうだろう、と言うものなのです。彼の前で、私は裸になり、自分の穴に豪快にディルドを入れてみせます。本来なら、彼のオチンチンが入る予定だった穴の中に。そして、私は、ディルドが小気味よく私の穴に出入りしながら、クチャクチャと音を立てているのを彼に聞かせながら、一人で悶えて、最後は壮大にイっちゃうのです。果たして、彼は、こんなイヤらしい私を目の当たりにして、どんな反応をする事でしょう？

かくして、そんな風に、愛する彼氏くんに見られている状況を夢想しながら一人遊びする事で、私はより激しくオナニーで燃えるようになったのでした。

了

水着泥棒

今年も暑い夏がやって来た。普通の多くの若者は、きっと、海や山へと遊びに出かけて、楽しい青春を謳歌したのであろうが、苦学生の僕はそうもいかないのだ。

それでも、せめて、ささやかな避暑地にでも使えればいいと考えて、僕は、夏休みは、地方の寂れた海辺にて、海の家の給仕のバイトをする事にしたのである。そこは、本当に冴えない場所だった。宣伝不足なのか、泳ぎにくる観光客もまばらなのだ。でも、その方が、バイトの仕事は楽だったし、夜は涼しい環境で読書や勉強とかも出来たので、僕にとっては逆に好都合なのであった。

もっとも、だからこそ、こんな場所を穴場だと睨んで、わざと狙って、訪れる観光客もいた訳なのだ。

彼女たちも、そうみたいだった。見たところ、彼女たちは、女子高生の仲良しグループだったのではないかと思う。数人ほどのギャルたちで、彼女たちは、近くの民宿にでも泊まっていたらしく、ある時から、毎日、この海岸へと泳ぎに来るようになったのである。

僕がバイトしていた海の家にも、彼女たちは、頻繁に訪れていた。この海岸には、他に、くつろげるような休憩所がなかったので、まあ、そうなるのも必然なのだろう。

しかし、太陽のように明るい彼女たちの姿は、貧乏な暗い生活を送っていた僕の目には、はなはだ眩し過ぎたのであった。皆、肌の露出が多い水着姿で、僕の前でも、陽気に、お構いなしに歩き回っていたのである。

彼女たちは、給仕の僕の存在など、まるで気にも掛けていないようだった。だが、僕の方は、簡単に手が届きそうなところにいる若い女の水着姿にドキドキされ通しだったのである。しかも、彼女たちは可愛い子ばかりだった。特に、細めのビキニを着ていた子は、

テレビに出てくるアイドルタレントなみの美少女だったのだ。
おかげで、僕はすっかり心を掻き乱されてしまった。夜になって、従業員用の宿舎に戻っても、彼女たちの姿が瞼の裏にチラついてしまい、神経も過敏なままで、ろくに勉強もはかどらなくなったのである。
僕は、彼女たちに復讐してやろうと決心した。そう、あくまで、これは復讐なのである。翌日、僕は、すぐに、その思い付きを実行に移したのだ。
その日も、彼女たちは、海辺に泳ぎにやって来て、ひと泳ぎする前の習慣として、僕のいる海の家にも訪れた。彼女たちは、まず、この海の家で、軽くスイーツを食べて、腹ごしらえしてから、泳いでいたのだ。
この海の家の隣に、簡素な脱衣小屋があった。一般に、この海岸の遊泳客は、私服でやって来た後、この脱衣小屋で水着に着替えて、泳いでいた。彼女たちも例外ではなかった。しかも、彼女たちは、あまりにも他の客がいないものだから、すっかり気が緩んでしまい、この脱衣小屋に、持って来た水着のバッグを置いたまま、まずは、私服姿で海の家にとスイーツを食べに来るようになっていたのである。
彼女たちの行動パターンは、全て、調べ尽くしていた。
僕は、仕事の方が一息つくと、彼女たちがテーブル席でまだまだお喋りで盛り上がっているのを確認して、それから、こっそりと、隣の脱衣小屋の中へと忍び込んでみたのである。
脱衣小屋には、もともと、鍵なども掛かっていなかった。誰でも入り放題だったし、さらに、今は、他に使用している客も居なかったのである。まさに、絶好のチャンスなのだ。
そして、僕は、脱衣小屋にて、バッチリと、彼女たちの水着入りのバッグも見つけ出したのである。
最初は、ビキニそのものを盗んでやるつもりだった。ビキニが紛失したら、あの一番きれいな子は、今日は波を浴びる事すらも出来

まい。その困っている姿を見て、楽しんでやろうと思ったのだ。
しかし、いざ、彼女の水着のバッグの中に手を突っ込んでみると、僕は、ビキニ以外にも何かが入っているのを発見したのだった。
それは、肌色（ベージュ）のパンティであった。こんな替え用のパンティなんかを、彼女は、なぜ、持って来ていたのだろうか。しかも、オシャレな彼女には似つかわしくない、ヨレていて、やたらと布の面積の広いショーツなのだ。それでいて、ナイロンかポリエステル製らしく、ツルッとした素材なのである。
そのショーツを両手で持って、訝しがっているうち、はたと、僕は、そのショーツの正体に気が付いたのだった。これは、ただの下着でもビキニでもなく、水着インナーなのだ。水着の内側に履く下着なのである。このようなものの存在は聞いた事があったが、実際に使われているものを見たのは、初めてであった。
女性たちは、小さな水着の隙間から、性器とか陰毛とかがハミ出して、他人に見られてしまうのを防ぐ為に、このような水着インナーも着用しているのである。なるほど、そうだったのか。この子は、この水着インナーを付けてたからこそ、あんな攻めたビキニを愛用していたのだ。
そんな事を思案しているうちに、僕はカーッと体が熱くなってきた。考えようによっては、この水着インナーは、彼女の第二の肌なのだ。ビキニそのもの以上に、彼女の体に密着した存在なのである。そう、この水着インナーの内側は、彼女の腰まわりに直に触れていて、その感触をも知っているのだ。
そんな妄想を膨らませているうちに、僕は、居ても立っても居られなくなってきて、当初の予定を変更して、ビキニではなく、この水着インナーを掴んで、外へ飛び出してしまったのだった。
僕が脱衣小屋に侵入した事は、誰にも気付かれていなかったようである。僅かな時間であったし、皆は、僕がずっと仕事をしていたと信じていたであろうから、きっと、バレる事はないはずなのだ。
その後、海の家をあとにした彼女たちは、少し経ってから、何事

もなかったかのように、浜辺で泳ぎ出したのだった。あのビキニの子もいた。どうやら、彼女は、水着インナー無しで泳ぐ事にしたらしかった。

脱衣小屋の中で、私服を全て脱ぎ、いざビキニに着替えようとした時、直前で、水着インナーが無かった事が分かって、彼女も、さぞ困惑した事であろう。しかし、すぐに盗難を疑うべきでもないし、きっと、民宿に置き忘れたのだと考える事にして、彼女も、思い切って、今日は水着インナーを付けずに遊ぶ事にしたのだ。

でも、だとすれば、本日の彼女は、あの細いビキニのパンツの内側は、まるで無防備だという事になる。油断すると、ヘアや陰部がチラリと見えてしまうかもしれないのだ。そんな事を想像すると、僕は、彼女たちの姿を遠目で観察しながら、勝手に興奮してきてしまったのだった。

翌日から、彼女たちは、この海岸にも海の家にも現われなかった。多分、宿泊期間が昨日までだったので、都会へと帰ってしまったのだ。水着インナーは見つからず仕舞いだろうが、自分で無くしたと思って、けっこう簡単に諦めもついたのかもしれない。これが、ビキニのパンツや、本物の下着が紛失したのであれば、もっと騒ぎになっていた可能性もある。よりによって、水着インナーだけが盗まれるとは、思いもつかなかったのかもしれない。

で、その問題の水着インナーはと言うと、今は、もちろん、僕の手元にあるのだ。

女の子が、ビキニの下に、こっそりと履いていたアイテムである。それって、実は、普通のパンティ以上に、彼女のシークレットな下着だったのだとも考えられないだろうか。名前も知らないし、二度と会う事もないであろう女の子なのに、こんな大事な水着インナーだけを僕に置いていって、あのビキニの少女は、ほんとに照れ臭くて、けしからん子なのである。

この彼女の水着インナーを、ずっと黙々と触っていると、なんだか、僕の方が妙な気分にもなってきたのだった。この水着インナー

は、彼女の恥ずかしい部分にもベッタリくっついていて、彼女の匂いもまだ染みついていたのである。そんな彼女のこん跡を噛み締めて、彼女のあのエロいビキニ姿を思い出すと、淡い恋焦がれだって感じてきたし、甘酸っぱい感情も込み上げてきて、僕は、この水着インナーで、欲情して、気持ち良くなってしまったのだった。

了

正座体罰

うちのクラスの担任の先生は、生徒の身だしなみに、本当に厳しかった。他の校則違反には、けっこう寛容だったのだが、服装の乱れにだけは、とにかく、やたらとウルサかったのだ。それは、体罰も辞さないほどのものだったのである。

カッコつけたがる不良男子らが、卒中、先生の体罰指導のエジキとなっていた。彼らは、まるで学習しないし、自分の意地の方を大事にするものだから、何度、先生に叱られても、オシャレのつもりの乱れた制服を直そうとはしなかったのである。

おっかない先生の体罰は、主に、下校前のホームルームの時間に行なわれた。該当者となる校則違反者は、教室の前へと呼び出された。逃げ出したり、拒否する事は許されない。いろいろな意味で、担任の先生は強かったので、生徒は絶対に逆らえなかったのである。

違反者の生徒は、教壇の上にと立たされた。教卓は、すでに横へと退かされている。この先生の体罰は、公開処刑の形をとっていたのだ。

このあと、犠牲者の生徒たちは、教壇の上で正座をして、その反省させられている姿を、しばらくの間、他のクラスメートたちに晒さなくてはいけなかったのである。

ただし、これが、普通の正座ではなかった。担任の先生は、正座を始める前に、先に、ズボンを脱いでしまう事を、罪人にと強要したのだ。つまり、彼らは、なんとも恥ずかしいブリーフ丸出しの姿で、正座しなくてはいけなかったのである。これは、いくら普段はトガっていた不良男子でも、かなりキツかったであろう。

ズボン脱ぎのオプションルールが加わった理由としては、最近、正座のシビレを柔らげる装置とかが出回り始めていた事があげられる。用心深い担任の先生は、罪人の生徒がコッソリとこの装置を付

けていないかをチェックをする為にズボンを脱がして、それから、生足で正座をさせるようになったのだった。

さて、ある時、クラス内でも特に美人だった女子が、うっかり、制服基準に引っかかってしまった。担任の先生は、たとえ、相手が女子であろうと容赦はしないのである。この美人生徒の方も、こんな些細な制服違反を怒られて、つむじを曲げてしまったのか、素直に謝らなかったのだ。

かくて、その日のホームルームは、彼女が正座の罰を受ける事になってしまったのである。

この期に及んでも、その女生徒は、反抗的な態度を取り続けた。たとえ、正座の刑を受けさせられようとも、自分の信念だけは押し通す気みたいなのだった。

ところが、担任の先生は、彼女にまで、制服のスカートを脱ぐ事を命じてきたのである。

これには、女生徒もうろたえたようだった。しかし、ここで、許しを請うて、急に自分の非を認めたりしたら、今まで逆らっていたのがムダになってしまうのだ。

彼女は、意を決して、クラスメート全員が見ている前であっても、自分のスカートを脱いでみせたのだった。

だが、それが全くのやぶ蛇になってしまったのである！

彼女の履いていたパンティがむき出しになったが、それを見て、担任の先生は、ますます激怒してしまったのだった。と言うのも、この女子は、校則違反である、白色以外の下着を付けていたからである。しかも、かなりケバケバした、カラフルなパンティだった。

怒り心頭になった担任の先生は、さらに、女生徒に、制服のワイシャツも脱ぐ事を命令してきたのだ。こうなると、もう、この先生を押さえつける事は無理なのだった。女生徒は、嫌でも、従わざるを得なかった。

彼女は、オロオロと、制服のワイシャツも脱いだ。すると、その下からも、やはり、パンティにも負けていない、とてもカラフルな

ブラジャーが出てきてしまったのだった。

担任の先生の怒りっぷりは、もう、並大抵のものではない。先生は、とうとう、この女生徒に対して、校則違反の下着も全部脱ぎ捨てて、その状態で正座をする事を、言い渡したのだった。そして、こうなってしまったら、彼女の方も、それを受け入れるしかなかったのである。

哀れにも、この女生徒は、クラスの友達に見守られながら、下着を取って、素っ裸になってしまった。これは、とてつもない屈辱なのである。彼女は、必死に胸と股間だけは手で隠していたが、正座になってからは、その手の置き場所にまで、厳格な指示が入ってしまった。

彼女は、辛そうに、両手を体の横にと揃えた。すると、彼女の裸体は、正面からは、完全に丸見えになってしまったのである。

クラスメートたちは、男子も女子も、食い入るような視線で、それを眺めた。この女子は、美人だったが、スタイルの方もなかなかのものであり、実に美しいヌードだったのだ。それに加えて、正座というポージングがまた、不思議な色気を引き出していたものだから、皆は、この驚愕の光景にすっかり見入ってしまったのだった。

こんな生唾もののショーだって、時には拝見できたので、この担任の先生の横暴な体罰指導を、生徒たちは、結局は、誰も止めたりはしなかったのである。

了

二人いっしょ

僕と、同級生のカノジョは、周囲の人々全員が認めてくれている、相思相愛のカップルだった。皆は、僕たちの仲睦まじさを、心から祝福してくれていた。

僕とカノジョは、ほんとに、お互いに好きで好きで仕方がなくて、片時も離れたくはなかったのだ。もっと正確に言えば、いつだって一緒にいて、同じ事をして、二人の心をシンクロさせ続けたかったのである。

だから、授業中とかに、席が少しでも離れてしまうと、それだけでも、辛くて辛くて、どうしようもなかった。

同じ教室の中にいるのだから、そこまで寂しがる事もないだろう、と呆れる人もいるかもしれないが、そう言う事じゃないのだ。僕たちは、ただ相手の近くに居たかったのではなくて、お互いの行動を完全にピッタリと合わせたかったのである。そうする事によって、超越した一体感に浸りたかったのだ。

例えば、授業中なら、二人で一緒に、ノートを取りたかった。それがどんな事なのかと言うと、カノジョがノートを取っているところに、僕が後ろから優しく覆い被さり、カノジョの手にも僕の手をピッタリと寄り合わせて、二人が同じ動作をして、一つのノートに文字とかを書きたかった、と言う事なのである。

同様に、カバンとかも、同じ部分に手を当てて、二人で力を合わせて、持ちたかった。食事なども、二人で横並びになって、一つのパンとかを同時に食べたかった。

結婚式の時に、新郎新婦は、夫婦の初めての共同作業として、ケーキの入刀を行なうが、僕たちは、普段の生活の場でも、ありとあらゆる事を共同作業で行ないたかったのである。

学校が終わった後の放課後も、僕とカノジョは、ずっとベタベタ

していた。たいがいは、どちらかの家へと、もう一方が上がり込んで、そのまま、二人っきりで、時も忘れて、愛し合い続けたのだ。

僕たちは、もう高校生なので、お気付きのように、ママゴトのような恋愛のやり取りは、すでにしていなかった。でも、かと言って、積極的にセックスを楽しんでいたのかと言うと、そうでもなかったのだ。

なぜならば、セックスでは、一体になると言っても、二人は向かい合った状態なのであり、僕たちが好きだった、二人とも同じ形にはならなかったからである。

僕たちは、むしろ、オナニーをするのを好んでいた。片方が、もう一人のオナニーを手伝ってやって、気持ちよくイかせてあげるのである。その方が、セックスするよりも、はるかに興奮できたのだ。

カノジョが主体になる時は、僕がサポートにまわった。カノジョが自分で胸を揉んでいたら、僕も一緒に手を添えて、カノジョの乳房を優しく撫で回してあげた。カノジョが、女性器を触り始めると、僕も、すぐに、そちらへと指先を向かわせた。二人で、カノジョの陰部を愛撫してあげるのである。この二段構えのペッティングは、そうとうな快感だったらしい。カノジョは、セックスなんかしなくても、この共同オナニーだけでも、十分に満足して、絶頂に達してしまったのだった。

逆に、僕が主体になった時は、彼女の方がサポートを務めてくれた。僕が、まずは自分のペニスを少しシゴいて、勃起させると、そこでカノジョも僕のペニスを握ってくれたのだ。このあとは、二人掛かりで僕のペニスをシゴき続けた。つまり、自慰と手コキを同時に行なっているような状態になるのだ。二人の息はぴったりと合っているので、それはそれは、不思議な感覚のセンズリとなったのだった。この素敵すぎる甘美なプレイを、ほぼ完全な形で堪能していたのは、あるいは、世界で僕だけだったかもしれない。

もっとも、キスとかハグとかは、皆さんが行なっているものと変わりはしなかった。やはり、お互いが向かい合って、唇を重ねあっ

たり、抱擁しあったのである。
　だが、このようなキスやハグ、さらにはセックスなどについては、僕もカノジョも、ほとほと嫌気を感じていた。僕たちは、あくまで、どこまでも、二人が同じ動作をシンクロさせて、快を得ることを望んでいたのである。
「全く、どうにかならないのかしら」と、オナニー後の裸のカノジョがぼやいた。
「ほんとだよ。僕も、なんとか、君と、ベストの形でキスやハグをしたいよ」
「ねえ。何か、名案はないの？」
「うーん。そうだな。いや、待てよ。僕たち以外に、もう一人を加えてみるのは、どうだろう？」
「え。それって？」
「つまり、二対一のプレイをするんだ。僕と君の二人で、左右から、もう一人の体を抱きしめてやる。または、二人で、もう一人の口へと、同時にキスをする。これで、僕と君は、同じ格好でキスやハグを出来るはずだ」
「なるほど。面白そうね」
「よし。そうと決まれば、さっそく、試してみよう。僕は、僕たちの仲間に加わってくれそうな同級生か下級生でも探してみるよ」
「ねえ。セックスも出来るかしら？」
「ああ、出来るとも！二人で同時にそいつの事を犯したり、そいつに二人まとめて犯してもらうんだ」
　僕が声を弾ませて言うと、カノジョも嬉しそうに笑ったのだった。

了

恐怖のカツアゲ

クラスのヤンキー男子が、これからカツアゲをする、と言うので、あたしは、暇つぶしに、その様子を見物させてもらう事にした。

ヤンキーどもの溜まり場に向かってみると、そこには、すでに、カツアゲされる犠牲者が連れてこられていた。隣のクラスの一般男子だ。あたしも、チラッと見た事がある程度の、あまり面識のない生徒だった。

彼に対するカツアゲ行為は、すでに始まっており、その男子生徒は、制服も下着も脱がされて、素っ裸で立っていた。その周りを、ヤンキー生徒たちがグルリと取り囲んでいる。

このような危機的状況に置かれていたにも関わらず、その男子は、金品を差し出すのを、まだ拒んでいたらしく、カツアゲは難航していたようだった。どうやら、ヤンキーどもも、かなり無茶な金額をせしめようとしていたらしい。

「ええい。お前ら、何やってる。下手くそだなあ。オレに任せろ！」

あたしを連れてきたヤンキー男子が、他のヤンキーたちを押しのけて、ツカツカと、犠牲者の男子の前へと歩み寄った。下っぱのヤンキーたちが、犠牲者の体を頑丈に押さえつけた。

で、そのあと、ボスのヤンキーが何をしたのかと言うと、その場にしゃがみ込み、無造作に、目の前にある犠牲者の男子の陰嚢を、両手で握りしめたのだった。

これまでヤンキーたちに屈しようとしなかった男子生徒が、はじめて、悲痛な叫び声を出した。キンタマを掴まれるのは、それほど痛かったらしい。

彼がどんなに泣きわめいても、ヤンキー男子は、なかなか、この拷問を止めようとはしなかった。それが連中のやり口なのだ。

ようやく、ヤンキー男子は、手を引っ込めた。見ると、犠牲者の

男子の陰嚢の皮は、すっかり赤く腫れ上がってしまっていた。そうとう力強く握られていたらしい。

「どうだ？お金を持ってくる気になったか？」ヤンキー男子が尋ねた。

しかし、犠牲者の男子の方は、渋い表情を浮かべて、すぐには何も答えようとはしなかったのだった。きっと、そこまで躊躇するほどの大金を強要されていたのだ。

この男子生徒の態度にムカついたヤンキー男子は、拷問の方を再開したのだった。先ほどと同じように、ぐっと、男子の陰嚢を思いっきり握り込んだのだ。

再び、犠牲者の男子の泣き声が響き渡った。

今度は、先刻よりも、もっと握力を強めていたらしい。しかも、握っている時間も長かった。

こうして、この犠牲者の男子は、とうとう、ネをあげてしまったのだった。泣きながら、お金を持ってくる事を必死に訴えて、これ以上、キンタマを握り続けるのを許してもらったのである。

男子の解放された陰嚢は、さらに酷く腫れてしまっていた。見た目も、なんだか、パンパンに膨らんでいたようで、拷問前と比べたら、明らかに、一回り、大きくなっていたようなのだ。恐らくは、この陰嚢の中では、いじめ抜かれたキンタマそのものが、腫れて、肥大化してしまっていたのだろう。

ヤンキーたちは、キンタマへの拷問をやめた後も、まだ、この男子生徒の事を脅し続けていた。もし明日までに約束の金を持ってこなければ、また今の拷問にかけてやると言うし、あるいは、今日の事を誰かにチクるような事をしても、この拷問で仕返ししてやると、徹底的に脅迫したのだ。これでは、この男子も、カツアゲの要求に応じる以外、助かるすべがない訳である。

ようやく、犠牲者の男子生徒は、このヤンキーの溜まり場から帰らせてもらえた。脱がされた服を元どおりに着ようにも、股間が腫れ上がっていて、ブリーフやスラックスを履くのは、ものすごく辛

そうだった。歩く時も、陰嚢に刺激を与えないようにして、すっかりガニ股になってしまったのである。

彼は、ヤンキーたちに笑われながら、見送られ、この場所から去っていったのだった。

で、その後、ヤンキーたちは、この男子生徒から、見事、大金をカツアゲできたのかと言うと、実は、そうはならなかったのである。なぜなら、この男子は、翌日、朝早くに自殺してしまったからだ。

投身自殺だった。遺書は無かったらしい。落下して、地面にぶつかった時に、肉体はグチャグチャに潰れたであろうから、彼の陰嚢が異常に腫れ上がっていた事も、検死では気付かれなかったのではないかと思う。

多分、この男子は、ヤンキーたちのカツアゲのせいで、そこまで追い詰められてしまったのだ。そもそも要求された大金は用意できなかったし、あのキンタマへの拷問も、これ以上は受けたくはない。となれば、彼には、もう、死ぬ以外に救われる道はなかったのである。

それにしても、男の人にとって、キンタマを握られると言うのは、死んだ方がマシだと思えてしまうほど、そこまで辛い事なのだろうか。女のあたしには、そのへんの心理は、ちょっと分からないのだった。

そして、あのヤンキー男子たちは、今回の一件も表沙汰にならなかった事だし、今でも、キンタマ潰しの拷問を使って、新たなカモを相手にカツアゲをしているのである。

了

個人授業

私の家に、一人の女の子が訪れた。セーラー服を着た、かわいい女子高生だ。

「紹介されてきました。こちらの先生は、難関校でも合格できる特別授業を受けさせてくださると聞いたのですが」彼女は言った。

私は、彼女が差し出した履歴書に目を通しながら、彼女に話し掛けた。

「見たところ、学力の方は問題なさそうだね。君が鍛えたいのは、メンタルの方なのかな?」

「はい。先生は、強い精神力を磨いてくださると聞きました。私は、試験となると、いつも集中力が続かなくて、十分な実力を発揮できないのです。そのへんを直していただきたいのです」

「よろしい、分かった。辛い訓練かもしれないが、耐え抜く自信はあるね?」

「はい。頑張ります」

そういう訳で、私は、さっそく、その日から、彼女への個人的なトレーニングを開始したのだった。

私は、彼女用の椅子を一脚、用意した。

「この家では、君は、この椅子に座って、勉強をしてもらう。しかし、腰掛ける前に、まずは、着ている服を全て脱ぎなさい。下着まで一つ残らずだ」

「え?なぜ、そのような事を?」

「集中力を養いたいのだろう?たとえ裸を見られていようとも、気にしないぐらいの心の強さを身につけないと、とうてい、受験で勝ち抜く事はできないよ」

私に諭されて、彼女は言う通りに従ったのだった。

彼女は全裸になった。その姿で、訓練用の椅子にと、姿勢正しく

座ったのである。
思っていた以上に、肉付きのいい子なのだった。しかも、豊満で、適当に筋肉もついており、実に明るい若さを感じさせる、爽やかなヌードなのだ。
「体がよく引き締まってるね。高校では、スポーツでもしてたのかな？」
「バレー部に所属していました」
「なるほど」
そして、私の特別な授業も始まったのである。
私は、椅子に座っている彼女にと、入試の問題集を持たせた。それから、肩と平行になるまで、両手を上げさせて、その格好で、黙読で問題集の中身を解く事を命じたのだ。
彼女は、指示どおりにした。
次は、私の番なのである。私は、彼女の姿をあらためて観察したが、まんまと、彼女の首から下は、隙だらけになっていた。両手も肩まで上がっていたので、妨害物もなく、体の各所をよおく拝めたのである。
私は、彼女の椅子の後ろに立った。続いて、ギリギリまで彼女のそばに近寄ると、背後から抱きしめられる位置で、彼女の胸へと私の両手を伸ばしたのである。
私の指先は、彼女の大きな乳房にと触れた。そのド迫力だったデカパイは、感触はマシュマロみたいなのである。私は、遠慮なく、彼女の乳房を揉みしだき始めた。
「せ、先生」動揺した彼女が、不安そうな声を発した。
「こら、喋るんじゃない。ここは、試験会場だと思いなさい。胸を触られたぐらいで、そんなに慌てたりしたら、もっと困った事態が起きた時、とても集中力は持続しないよ」
私に言われて、彼女は黙ったのだった。
私は、さらに彼女の乳房を撫で回し続けたのである。
最初の間、彼女も、明らかに感じていたようだった。時々、悶え

るように、体をねじらせた。しかし、私は、彼女が、全く反応しなくなるまで、胸を揉む行為をやめなかったのだ。

彼女の大きなおっぱいは、とても触りごたえがあった。でも、いくら愛撫し続けても、固くはならなかったのである。ついでなので、彼女の乳首にもイタズラしてみた。元からデカく膨らんでいて、豆みたいだった乳首は、案の定、乳房よりも敏感だったようなのである。触られた瞬間、彼女は、つい小さな声を漏らした。また、グリグリしているうちに、乳首はどんどん固くなって、さらに膨れあがったのだった。

それでも、こんな事をずっと続けていると、ついには、彼女は、胸をいじられている事も、全く気にしなくなってきたのである。私のおっぱい攻撃にも、いっさい動じなくなった。彼女は、当初の目的だった平常心の域にと到達したのだ。

これにて、私は、彼女に対する訓練を、第二段階へと引き上げる事にしたのだった。

私は、彼女に、内股に閉じていた両足を、大きく広げるように指示した。彼女は、椅子に座った状態で、命じられるまま、足を左右に広げた。浅く座って、腰の部分を前に突き出し、上半身を奥に傾けるようにも、告げた。彼女は、そのようにした。

これで、次のステップでの彼女の構えは完成したのである。前方から眺めると、彼女の陰部は、バッチリと晒されてしまっていた。まだ色艶もいい、１０代のヴァギナなのだ。そのヴァギナの周りには、手入れしていないモサモサの濃い陰毛が生えていた。ほぼ手付かずの、いかにも若い娘らしい性器なのである。

そして、今度は、この格好で、彼女に、先と同じように、問題集の黙読をやらせたのだった。

私の方も、その間に、次の準備を進めていた。彼女に見つからぬように、私が、ひそかに、この場に持ってきたものは、ディルドであった。すなわち、ペニスの形をした、女性のオナニー用のおもちゃである。それも、けっこう太めのサイズのものなのだ。

これを、私は、彼女が問題集に夢中になっているうちに、こっそりと、彼女のヴァギナにと押し当てた。

その事に気付き、彼女も、はじめはドキリとしたようだった。しかし、今度も、動じない為の訓練なのだと、すぐに悟ったのか、彼女は、何も逆らったりはしなかったのである。

だから、私は、ディルドの先端を、彼女のピンク色のヴァギナに押し付けて、ねちっこく、こねくり回し続けた。すると、彼女のきれいな花弁も押し開いていき、その奥へとディルドの先も潜ってしまったのだ。

さすがに、その瞬間は、簡単に、彼女も狼狽したみたいだった。彼女の腰が、ピクッと動いた。でも、私は、情けはかけずに、ディルドをもっと奥へと押し込んでいったのだ。

案外、ディルドは、簡単に、彼女の穴の中へと入っていった。でも、ユルくはない。穴の内側もちょうどいい広さで、ディルドもぴったりハマった状態で、気持ちよく、潜り込んでいったのである。バレーボールで、下半身の筋肉も鍛えていただけはあるのだ。若くて、弾力もある膣は、まさに、今が旬なのである。

感じちゃったからなのか、時たま、彼女の膣は、ディルドをグイッと締めつけた。その感触が、ディルド越しに私の手にも伝わってきたのだが、きっと、ディルドではなく、本物のペニスを挿入していても、このぐらい、ご機嫌に迎えてくれたのであろう。

彼女は、絶えず、身をよじらせていた。それは、膣がディルドを締めつけた後の時が多かったので、どうやら、性器だけではなく、全身がシビれてしまっていたようだった。

次第に、膣の中へ出し入れさせているディルドの滑りも良くなっていった。こちらは、恐らく、彼女のヴァギナ内に愛液が満遍なく潤い始めたからだ。それならそれで、私も、動かしやすくなったのを幸いに、ディルドを押し引きするスピードを、さらに早めてやったのである。

突如、彼女が「うっ」と鈍い声で唸った。その事を見落とすよう

な私ではなかった。声の出たあとは、彼女の膣の締めつけ具合も、一気に緩んでしまったのである。

「君！さては、今、イっちゃったね？」

「そ、それは・・・」と、彼女は、困ったようなトーンで答えた。

「ごまかすんじゃない！全て、分かるんだからね。もう、どうするんだい、このぐらいの刺激でイっちゃったりして。そんなヤワな根性では、とうてい、試験会場の緊張感なんて、耐えられそうにないよ。君は、志望校に一発合格したかったのと違ったのかね？」

「せ、先生！私、もっと頑張ります！」

「そうだ、その気合いだ。よおし、少し休んだら、今の特訓を、もう一度、繰り返すよ」

そう言って、私は、彼女の膣から、ディルドを引っ張り出したのだった。ディルドの表面は、彼女の愛液で濡れて、てかっていた。それだけではなく、ディルドと一緒に飛び出した愛液そのものも、彼女の穴からベッチョリと垂れていたのだった。セックスしても、すぐイってしまわないレベルになるまでは、まだまだ時間がかかりそうなのである。

こうした訓練を、私は、彼女に対して、数日に分けて、びっしりと施してやったのだった。

それから三ヶ月後、彼女は、大学受験にと挑んだ。その結果は、見事に合格だった。

私の特別授業は、確かに成果を出しているのである。

了

標本　～チンポコ無残～

その時、僕は、ナンパした女子高生と、彼女の部屋で、セックスをしていた。

僕の方も、後腐れのない恋を求めて、繁華街で女を漁っていたのかもしれないが、彼女の方も、行きずりの刺激が欲しかったかのように、僕の誘いに積極的に乗ってきたのである。

で、一時間後には、僕は彼女の家に案内されていて、こんな関係になっていたのだ。

彼女の自宅は、かなり豪勢なお屋敷だった。彼女の部屋も、同様である。僕が家に通された時間、他に家の者はいなかった。見たところ、彼女は、かなり甘やかされて、育てられていたらしい。

とにかく、なんだかんだで、僕と彼女は、出会って、すぐセックスする間柄となり、その初めてのセックスも、今、やり終えたのだ。彼女は、セックス中、ずっと喘ぎ続けており、どうやら、僕は、彼女に対して、十分な愛を与える事ができていたようにも思われた。ちなみに、彼女は、処女ではなかった。

僕は、行為が終わった後も、さっさとお暇（いとま）したりはせず、もうしばらく、裸のまま、彼女のベッドの上で、煙草なぞ吸って、くつろいでいたのだ。

「君、なかなか良かったよ。でも、最初に約束した通り、付き合いは一夜限りだからね。泣きつこうが、僕の方からは、もう絶対に連絡は取らないよ」僕は、さっぱりした感じで、彼女へと話しかけた。

彼女の方も、まだ裸であり、さっさとベッドから降りて、鏡台の前で、なにかゴソゴソとやっていたのだ。

「安心して。僕も、この家の場所を覚えたからと言って、この先、いきなり顔を出すようなマネはしないから」

そこで、僕は、ヘンな事に気付いたのであった。タバコの灰を灰

皿に落とそうとしたのだが、うまく手を動かせないのだ。まるで、手が石に変わったしまったかのようで、感覚すらないのである。

「こ、これは・・・」僕はうろたえた。

どうやら、手だけではなく、全身が同じような状況になっているらしく、寝そべった状態のまま、まるで動かないのだった。かろうじて動いていたのは、目と口と、そして、脳みそだけだ。

彼女は、怪しい笑みを浮かべながら、ようやく、こちらに振り返った。

「うふふ。程よく効いてきたみたいね。ごめんなさい。さっき、あなたに飲ませたジュースの中に、しびれ薬を混ぜておいたのよ。体だけをマヒさせる強力なヤツをね」

「な、なぜ、そんな事を。一回だけセックスをすれば、満足なのと違ったのか？」

「そう、記念に一度のセックスで良かったわ。でも、私の本当のお目当はね、あんたの性器。それを、完全に私だけのものにしたかったのよ」

「な、何だって！それって、どこかで聞いた事がある話だぞ。あ、さては、お前、ヨミノギャルだったのか！」（注・ヨミノギャルについては、本シリーズの一編「ヨミノギャル」を参照のこと）

「そうよ。今、分かったの？」

「ヨミノギャルって、もっとハデな化粧をして、特殊なヨミノ言葉ばかり使うのかと思っていた。君みたいに、ぜんぜん平凡な女子高生のように見える子もいたなんて・・・」

「ヨミノの流行の移り変わりは激しいわ。今は、普通っぽいのが最先端なのよ。でも、変わらないブームだってある。それが、セックスした相手の性器狩りよ」

彼女の手には、鏡台から取り出したナイフや小道具が握られていた！

「い、いやだ！見逃してくれ！オチンチンを切られたくないよお！」

僕は叫んだ。

彼女は、おもむろに、部屋の片隅へと歩み寄ったのである。そこは、カーテンがかかっていて、壁の一角がその奥にと隠されていたのだが、彼女は、そのカーテンをさっと開いてみせたのだ。

僕は、驚きで、目を見開いてしまった。

そこの壁には、大量の男の性器が飾られていたからである。さまざまな大きさや形の、陰嚢付きのペニスが、表札のような板に打ち付けられており、それらが標本みたく、壁一面に掛けてあったのだ。

「あんたのオチンチンも、この仲間入りをさせてあげるわ」

彼女は、まだ使用前の板と釘、それに金づちを持っていた。その格好で、僕の方にと迫ってきたのだ。

「やだあ、やだあ。やめてくれえ！」僕は叫んだ。しかし、体はまるで動かないのである。

彼女は、僕を仰向けにした。それから、無防備な僕の亀頭めがけて、容赦なく、釘を突き刺したのだ。

「うわあああっ！」と、僕は、凄まじい悲鳴をあげた。

でも、悲しい事に、ものすごい酷い事をされたはずなのに、体がシビれているものだから、僕は、全く、その痛さが分からないのである。

釘は僕の亀頭を一直線に貫き、下に置かれた板にと刺さっていた。僕のペニスは、壁にかかっていた男性器と同じように、磔にされてしまったのだ。何とも、ショックな光景であった。

「さあ、あとは、根元から切り落とせば、完成よ」彼女は、ナイフを手に、喜々として、僕に近付いてきた。

「やめてえ、やめてくれえ！何でもするから、お願いだよお！チンポを切るのだけは、許してえ！」僕は、恥も外見もなく、涙をボロボロこぼして、わめき続けた。

ところが、そのブザマな姿が、思った以上に、彼女の同情を引く事に成功したらしい。

僕の性器を手に取り、今にも、その根元にナイフを食い込ませんとしていた彼女は、ちょっと、その手を休めた。

「そこまで、オチンチンを切られたくないの？」と、彼女は聞いてきた。

「もちろん！助けてくれたら、僕は、君のために、どんな事だってする！君のこのヤバい遊びのことも、誰にもチクったりしないよ。だから、お願い！どうか、お慈悲を！」僕は必死に頼み込んだ。

その熱心さが伝わったのか、彼女は、いったん、僕の性器から手を引っ込め、何かを真剣に思案し始めたのだった。

それから、一ヶ月が経つ。僕は、かろうじて、ペニスを削がれるのだけは免れたのだった。ただし、彼女は、僕を自分のコレクションに加えること自体は、決して諦めてはくれなかった。僕は、手足を縛られ、口には猿ぐつわを咬まされた。そして、生きたまま、人間の本体ごと、彼女の部屋にと飾られる事になってしまったのだった。もちろん、ペニスは板に打ち付けられた状態のままで。

了

コンプレックス

私は、自分の体の一部に激しい劣等感を抱いていました。その体の一部とは、他でもない、女にとって大切なオマンコだったのです。

だけど、小さな頃は、そこまで意識もしていなかったのです。同性の股間部を見る機会は何度もありましたし、自分のものと比べても、特に気に留めるような事もありませんでした。

それが、中学生になり、体が成長していくに従って、何だか、皆と自分が違っている事にも気が付き始めたのです。

中学の修学旅行の時、私は、仲の良い友人たちと一緒に、宿泊先の大浴場に入ったのですが、そこで、その異常をはっきりと認識したのでした。仲間は、全く、あっけらかんと、自分の股間を晒していたのですが、その形状が、私のものとだいぶ異なっていて、その事で、私は強いショックを受けたのです。

この時、動揺した私は、仲間の前では、ずっと、自分の股間は隠していました。手ぬぐいなどで覆って、絶対に、皆には見られないようにしたのです。多分、友人たちも、私にそんな事情があったなどとは、最後まで分からなかったのではないかと思います。

私のオマンコは、他の同性のものと比べても、ビラビラの部分がかなり大きめだったのです。それは、歳を重ねるほど、酷くなりました。ほぼ大人のオマンコになった頃には、すっかり、他の女子のオマンコとは別物じゃないかと思えるぐらいに変貌していたのでした。

他の女性のオマンコは、こじんまりと整っていて、股間も平坦でしたが、私のオマンコは、大きすぎるビラビラが、醜く、外へとはみ出していました。困った事に、大きめだったのは、ビラビラだけじゃなかったのです。小陰唇（ビラビラ）のすぐ外側にある肉の膨らみも、かなり厚めだったのでした。

だから、私の股間を正面から見ますと、このデカすぎる大陰唇が、いびつに、股の下へと盛り出ていました。陰裂（ワレメ）も、幼児なみにクッキリと浮き出ていましたし、何よりも、大陰唇自体の皮膚の色が赤みを帯びていた為、股の間に異物のある事が、より著しく目立ったのでした。さらに、私の悩みのタネとして、この大陰唇に加えて、長すぎるビラビラも、時々、この大陰唇の隙間から顔を出している、と言う問題がありました。

訳あって、いじった後とか、私のビラビラは、生理的に興奮して、だいぶ伸びてしまったのです。また、刺激を与えなくても、ひどくリラックスしていた時も、同じように、たるんだビラビラが広がっている事がありました。そんな時は、このビラビラは、当たり前のように、ワレメの外まで飛び出してしまい、私の股間を、より見苦しい姿にと変えてしまったのでした。

母だって普通の女性器だったのに、なぜ、私だけ、こんな奇形のようなオマンコなのでしょう。実際には、私のような形状のオマンコの持ち主は、けっこう居たみたいなのですが、それでも、私は、こんなオマンコで生まれてしまった事を、ひどく悔やみ、恨んだのでした。

そんなある日、あの事件が起きたのです。

その朝、私が、いつも通りに、高校へ行くと、教室では、何やら、女子も男子も、クラスメートたちが、それぞれにザワついていました。

どうしたのか、私は友人にと尋ねてみましたが、すると、その子が言うには、男子生徒の一人がイタズラして、学校の更衣室に隠しカメラを仕掛けていた、と言うのです。詳しく話を伺っているうちに、私はびっくりしました。

その隠しカメラを仕掛けた時間帯や位置と言うのが、どうも、私がその更衣室にいた時刻に一致していたのです。しかも、カメラが設置されていた場所から推察しますと、なんと、私の股間のあたりがアップで写っていたっぽいのです。思い出せば、私は、その時間

帯は、下着まで脱いで、裸になっていました。

さあ、大変です。もしや、私は、悪質な男子のせいで、恥ずかしいヌードの動画を撮られてしまったのでしょうか。

男子たちは男子たちで、勝手に盛り上がっています。彼らは、隠しカメラに映った映像を、皆で回し見して、楽しむ魂胆なのです。思春期の男の子たちにとっては、女の子の股間部の映像は、さぞ興味津々な事でしょう。きっと、彼らの脳裏にと完全に焼き付いて、話のタネとして、卒業するまで語られ続けるに違いありません。ああ、私ったら、なんて、恥ずかしい事になってしまったのでしょう。

ところが、そのあと、男子たちの高まっていた熱は、たちまち、醒めてしまったのでした。と言いますのも、隠しカメラの映像を確認したところ、期待したものが映っていなかったらしいからです。聞いた話によると、女子のヌードどころか、接写したオチンチンしか映っていなかったと言うのであります。確かに、これでは、男子たちもガッカリでしょう。よって、この隠しカメラの一件も、特に大きな騒動にもならずに、沈静化していったのでした。

それにしても、なぜ、私の裸は、この隠しカメラに映っていなかったのでしょうか？どう考えても、間違いなく、このカメラの前に、肝心の時間は、私は居たはずなのです。

しかし、私は、自分の股間をあらためて見直しているうちに、ハッと、その謎が解けたのでした。

きっと、私の異様な陰部（オマンコ）は、カメラに映っていた時、ちょうど、伸びたビラビラが、大陰唇の外に飛び出ていたのです。それが、どうやら、見る角度によっては、皮被（ホーケイ）りのオチンチンのように映っていたらしいのでした。しかも、私の大陰唇も、ぐんと股の下の方へと伸びています。それもまた、アップにしてしまうと、男の陰嚢っぽく見えたみたいなのでした。全ては、絶妙なアングルが生んだトリックです。全く、多くの偶然が重なって、私の醜いオマンコは、男子たちの目には、オチンチンに勘違いしてもらえたようなのでありました。

こうして、私は、大事なアソコを男子に見られてしまった不名誉な女子になる事もなく、それぱかりか、男子たちの隠しカメラの悪どいイタズラまでもを見事にやめさせたのでした。

了

捕食者・序章

その女子高生は、一見、どこにでもいる普通の娘のように見えた。だが、彼女には、彼女自身も知らないような秘密があったのである。

もう空が薄暗い、夕刻の時間帯だった。その女子高生は、下校中だったのか、学校の制服姿のままで、一人で道を歩いていた。寂しい小道で、周囲には、他に、まるで人影がないのだ。

女子高生は、少し不安になってきて、震えるように肩をすくめた。と言うのも、最近、この区域では、行方不明者が続出していたからである。その原因が、事故なのか事件なのかも、まだ、はっきりとは分かっていなかった。

女子高生の怯える心に応えるかのように、彼女の目の前には、突然、怪しい男が現われた。個性のない、地味な服を着込んだ、見るからに不審な男なのである。

女子高生は、一気に恐怖に駆られた。外見だけで人を判断するのは良くない事だが、それでも、今は、明らかにヤバそうな状況なのである。

彼女は、謎の男に背を向けて、わざと知らんぷりをして、来た道を引き返そうとした。ところが、その時、謎の男はバッと走り出して、勢いよく、女子高生に飛びかかったのだ。

女子高生は、恐ろしさで、動揺した。しかし、騒ぐ事も、大声を出す事もできなかった。男は、すぐさま、彼女の顔にナイフの刃を突きつけたからである。

「お前。こっちに来てもらおうか」と、男は、太い声で言った。

女子高生は、これでは逆らう事もできず、やむなく、この男の命令に従ったのである。

男は、この女子高生の事を、ナイフで脅しながら、近くにあった廃屋にまで、連れていった。そして、二人で廃屋の中に閉じこもっ

てしまうと、男は、素早くハンカチを取り出して、そのハンカチで女子高生の口を覆ったのだ。

ハンカチには、眠り薬が染み込ませてあった。女子高生は、少しだけ、もがいたが、間もなく、意識を失い、その場に倒れ込んでしまったのである。

暗い中で、男は、足元に寝そべっている女子高生の事を、じっと眺めていた。

「確かに、この子だ。間違いない」と、男は呟いた。

彼は、変質者などではなかった。それどころか、この男は、行方不明になった人間の知人の一人だったのだ。彼は、その行方不明者がいなくなる直前に、その人物からＬＩＮＥのメッセージを受けっとっていた。そこには、「助けてくれ」の一文とともに、この女子高生の画像も添えられていたのだ。

「ただの女の子のようにも見えるが、この子が連続行方不明とも関与しているのだろうか」

男は、しばらく、眠っている女子高生の姿を観察し続けていたが、やがて、次の行動を開始した。彼女の持ち物を調べ始めたのである。カバンの中身や、ポケットの中の小物などを漁って、それだけでは何も分からなかったものだから、とうとう、彼は、女子高生の服まで脱がしだしたのだ。

女子高生は、下着まで剥がされて、全裸にされた。それでも、男が求めていたような手掛かりは見つからなかったのである。

男の目の前には、女子高生の美しい裸体が、静かに転がっていた。この特殊な状況が興奮する気持ちを高めるのか、彼女のヌードは、よりエロチックに見えるのである。男は、つい、ゴクリと息を飲んだ。

その時だった。

女子高生の白い肌に、突如、異変が生じたのだ。彼女の体の表面には、何の予告もなく、ボツボツとイボのようなものが吹き出し始めた。イボに見えたものは、さらに、スルスルと長く伸びて、細い

触手にと変化したのだ。
男はギョッとした。一体、何が起きたのだろうか?思考が停止した為、彼は、ほんの一瞬、逃げ遅れた。だが、その僅かな時間が命取りとなったのである。
女子高生の体の一面からは、無数の触手が飛び出していた。しかも、それはニョロニョロと活発に動いているのである。のみならず、次の瞬間、その触手は、男の方に向かって、襲いかかって来たのだ。
男は、完全に回避し損ねてしまった。触手は、バアッと、男の体を包み込んだのである。
「うわあ!何だ、これは!やめろ、やめろ!」
男は、必死に抵抗したが、無駄だった。この触手の正体は不明だが、もの凄い怪力なのである。どんなに暴れても、振りほどく事ができないのだ。しかも、こんな人気のない廃屋にいたのでは、悲鳴をあげたって、誰も助けには来そうになかった。一人で行方不明事件の謎に迫ろうとした彼の行動は、全て、裏目に出てしまったのだ。
触手は、グイグイと、男の体を、寝ている女子高生の方に引き寄せていた。ついには、男が、女子高生のすぐ真上にまで連れてこられてしまった時、彼の体にも異常が起き始めた。ジュウジュウと音を立てて、彼の肉体が溶け始めたのだ。まるで、触手によって消化されて、女子高生の皮膚の表面に吸収されているかのようにも見えた。
「ぎゃあ!いやだあ、いやだあ!」男は叫び続けていたが、声は、どんどん、か細くなっていく。
そのうち、彼も、暴れなくなった。もはや、瀕死の状態なのである。ここまで来たら、あとは、完全に溶かされるのを待つのみなのだ。
そして、全てが終わった時、そこには、男の姿は何一つ残っていなかった。彼は全身を液状にされて、この女子高生に何もかもを吸収されてしまったのである。
ザワザワと動いていた触手も、作業が完了すると、速やかに縮み

始めた。どんどん小さくなっていき、ついには、女子高生の体の中に、全て、戻ってしまったのである。

今となっては、その場所には、裸の女子高生だけが残されていたのだった。男の衣服まで消滅してしまい、ここに、もう一人、男がいたと言う形跡は、いっさい残っていなかったのである。

やがて、女子高生は、ぼんやりと目を覚ました。ようやく、眠り薬が切れたのである。だが、薬の効果は絶大であり、眠っていた間だけではなく、その前後の記憶までもを、よく思い出せない、曖昧なものにとさせていた。

ふと、彼女は、自分が素っ裸になっている事に気が付いた。人に見られていた訳でもないが、彼女は、恥ずかしそうに、自分の体を手で隠した。さらに、不安になって、体のあちこちを触ってみたが、特に傷つけられた部分とかも見つからなかったのである。

彼女は、うろたえながら、こんな事を思っていた。

自分は、ここで何をしていたのだろう?何だか、同じような事が、前にもあったような気もするのだけど・・・。

彼女は、間もなく、すぐそばに、自分の衣服が散らばっていたのを発見した。彼女は、慌てて、それらの衣類を身につけたのだった。

キョロキョロと見回してみたが、やはり、周囲には、自分以外の人間は見当たらなかったのである。

彼女は、ゆっくりと立ち上がった。何が起きたのかは、結局、よく分からなかったが、それでも、自分にさえ異常がないようなのであれば、無理に詮索しない方がいいのである。

彼女は、廃屋の外へ出た。もはや、屋外は夜なのだ。彼女の姿も、目立たないシルエットになった。そのシルエットは、何事もなかったかのように、暗い夜道を去っていったのだった。

こうして、おぞましい惨劇は、これからも繰り返される事となるのである。

了

捕食者・序章（後書き）

タイトルは「序章」となってますが、この続きを書く予定はありません。

魔法少女の仕返し

あたしはルルー。魔法界から日本へ、人間のことを学びに来訪したプリンセスです。今のあたしは、周りにいる人々の記憶を魔法で書き換える事で、ただの女子高生として、さりげなく、人間の世界で生活しているのです。

ある日、クラスメートの親友の女子が、あたしに泣きついてきました。

「ねえ、ルルー。聞いてよお。ひどいのよお！私さ、最近、上級生のイケメンの男子と付き合ったんだけど、彼ったら、私のことは、ただの遊びだったのよ。彼は、何股もかけていたプレイボーイで、あっさり私のことを振っちゃったんだから！もう、許せないよお！」

その話を聞いて、あたしも憤りました。そんな悪い男は、懲らしめてやるしかないのです。

こうして、今回も、あたし、魔女っ子ルルーは、正義の為に、立ち上がったのでした。

（ここで、♫魔女っ子ルルーのテーマ曲）

あたしは、わざと、そのプレイボーイの上級生の前で、うろついてみせました。すると、そいつは、まんまと引っかかって、チャラく、あたしをナンパしてきたのです。

「お前、魔女っ子ルルーだろ？お前のことは聞いた事があるぜ。どうだ、オレと付き合わねえか？きっと、最高のカップルになれると思うぜ」

あたしは、何も知らないフリをして、彼の誘いに乗ってやったのでした。

1時間後、あたしと彼は、早くも、ラブホテルの中にいました。この男ときたら、思った以上に、手が早いのです。

でも、あたしは、あえて、彼に従ってやったのでした。ラブホテ

ルの一室のベッドの上で、あたしも彼も裸になり、さっそく、愛し合う事になりました。

「お前って、チビで幼児体型だけど、そんな女も嫌いじゃないぜ」

彼は、あたしが一番気にしていた事も平気で口にしました。それで、あたしの怒りもマックスになったのです。

彼とあたしがセックスして、一体化した時、ついにお仕置きの時間がやって来ました。

「ねえ。あなたって、他にも、女の子をいっぱい抱いてきたんでしょう？」

「さあな。今は、お前が一番だよ。このマンコの締め具合だってね」

「同じ事を、皆にも言ってきたの？」

「関係ねえだろ。今さえ、楽しければ」

「関係なくないわよ。それで、皆が悲しい思いをしてきたのよ。あなたには、やっぱり、お仕置きが必要ね」

「お仕置きだって？こうやって、歓ばせてやってるのに、何言ってやがる」彼はせせら笑いました。

もはや、情状酌量の余地なしなのです。

「罪深き悪人を、魔法界の賢者の名のもとに罰します！」あたしは、大声で宣言しました。

途端に、あたしのオマンコは、彼のオチンチンをがっちりと咥えたまま、放さなくなったのです。

「わ、わ。どうなってるんだ」と、彼がおののきます。

だけど、本番はこれからなのです。

「魔術・地獄の劫火！」あたしは、叫びました。

すると、あたしのオマンコの中は、灼熱の状態になったのでした。

そんな中に、オチンチンを突っ込んでいたら、そりゃあ、堪りません。彼は絶叫しました。

しかし、まだまだ、こんなものでは済まないのです。

「魔術・絶対零度！」

今度は、あたしのオマンコの中は、カチンカチンの冷凍状態にな

りました。彼は、すっかり目を剥いてしまいましたが、あたしの中に入れたオチンチンを抜き出す事はできないのです。

「魔術・ハリ千本！」

あたしのオマンコの内側には、ギザギザのトゲが一面に生えて、彼のオチンチンを四方から突き刺しました。

「魔術・トルネード！」

あたしのオマンコがグルグル回り出したものだから、一緒に、彼のオチンチンもグイグイと絞られました。

「とどめは、魔術・１万トンよ！」

あたしのオマンコは、鉄のように固くなりました。そのまま、プレス機のように、ギューッと収縮したものだから、中にあった彼のオチンチンもペチャンコになってしまったのでした。

彼は、とうとう、悶絶してしまいました。

こうして、このプレイボーイ野郎も、しばらくは女漁りができなくなった事でしょう。

このように、あたし、魔女っ子ルルーは、また一つ、人間たちの為に、素敵な良い事をしたのでした。

了

下のお口

俺と相棒の鷹やんが待っていたスタジオに、その女子高生は本当にやって来た。

「東先生ですね！すご腕の映像監督だと、かねがね、ウワサでは聞いていました。私ごときがコラボしていただけるなんて、まことに光栄です。私、ユーチューバーとして、どうしても成功したいんです。東先生に撮っていただけたら、絶対にバズりますよね！私、どんな指示にだって従います。今日は、よろしくお願いします！」彼女は、そう言って、俺たちにペコリと頭を下げた。

それを見ていて、俺は、おかしくて、つい笑いそうになってしまったのだった。この子は、俺たちがポルノ専門の映像クリエイターだったと知らなかったらしい。その伝説の映像監督の名ばかりが一人歩きして、世の中では知れ渡ってしまったようで、この女子高生も、その事だけに憧れて、俺にユーチューブのコラボを申し込んできたのだ。

「事前の打ち合わせ通りの衣装で、来てくれたのかな？」まずは、俺は、優しく、彼女に話し掛けてみた。

「はい！」と、彼女は、元気よく、着ている制服を脱ぎ出した。

制服の下に、彼女は、ブルーのレオタードを着ていたのだった。しかも、超ハイレグレオタードと呼ばれている奴なのだ。彼女の素肌は、過剰に剥き出しになっていた。鼠蹊部のみならず、脇腹まで露出していて、高校生が着るには、かなり際どいシロモノなのである。

「あのう。こんな大胆なレオタードでユーチューブに出て、大丈夫なんでしょうか」彼女は、照れながら、言った。

「心配するな。このぐらい過激でなくっちゃ、ユーチューブでも名前は売れないよ」俺は、彼女の戸惑いなど一蹴して、押し切ってや

ったのだった。
カメラマンの鷹やんも、さっそく、超ハイレグレオタード姿の彼女のことを写し始めた。すると、彼女の方も、踏ん切りがついたのか、自ら進んで、ポーズなどを取り出したのだった。
「う〜ん。まだインパクトが足りないかなあ」
撮影の最中に、さりげない感じで、俺は水をさしてやった。
「ええ、そんなあ。だったら、次は、どうすればいいのでしょう?」
彼女は、不安そうな表情になった。
「よし。こうなったら、そのレオタードも脱いじゃおうか」
「え?でも、そんな事したら・・・」
「僕たちのことを信じて!あとで編集して、ヤバい部分が写ったショットは、全部、カットしてやるからさ。若いハツラツとした君のギリギリ見せたセクシー映像なら、バズること間違いなしだよ」
俺の甘い言葉に乗せられて、彼女はマジでレオタードも脱ぎ始めたのだった。
男二人が目の前にいると言うのに、彼女は全裸になった。彼女は、そこまで、俺たちのことをプロの映像作家だと思って、信用してくれていたのである。
案の定、彼女のヌードは、女子高生らしく、とても新鮮だった。この子だったら、警戒心を解いてしまい、小ぶりの乳房も、色白のお尻も、粗い性毛の生えた女性器も、すっかり晒しちゃったのである。
鷹やんは、今度は、彼女のそんなオールヌードを写し始めた。ギリギリ攻めたショットだなんて、真っ赤な嘘だ。鷹やんは、彼女の発育途中の体を、手加減なしで、思いっ切りビデオにと収めまくっているのである。
その途中で、またまた、俺は新しいアイディアを閃いたのだった。
「面白い演出を思い付いた。君、ちょっと、ここに座ってもらえないかな。体育座りで」
彼女は、狼狽した表情を浮かべながらも、俺の指図に従った。さ

らに、その体育座りの状態で、彼女に両足を開かせた。裸なので、正面からは、彼女の外陰部が丸見えになってしまったのだった。

「うん、なるほど、なるほど。睨んだ通りだ」俺は、笑みをこぼしながら、彼女の陰部をいじった。

「ああぁ。何するんですかぁ」と、彼女は弱った。でも、まだ俺たちに強い信頼を寄せていたものだから、積極的に拒んだりはしなかったのである。

「ほら、こうやって、君の小陰唇（ビラビラ）を、指で左右に押し広げてみるんだ。すると、まるで、口そっくりに見えるじゃないか。これを、本物の口だと偽って、ユーチューブで公開してやるんだよ。皆、何かと思って、釘付けになって、見てくれるぞ。こりゃあ、１００万再生も夢じゃない！」

「で、でも、ほんとに口になんか見えますか？」

「見えるとも。僕のことを信用して！」

事実、彼女のヴァギナは、小陰唇を押し開けば、かなり口に近い形状に変わったのだった。

濃いピンク色の小陰唇は、かなりの割合で、唇に酷似していた。この小陰唇をグッと引っ張れば、本物の唇を引き伸ばした時のような色合いや皮膚感に化けたのだ。

しかも、小陰唇を左右に広げた事によって、ぱっかりと開いてしまった彼女の膣の穴ときたら、破いた処女膜の残骸でも残っていたのか、あるいは、そんな特殊なヒダの持ち主だったのか、歯ぐきがあるようにも見えたのだった。なおかつ、この膣の穴が大きめだったものだから、小陰唇の内側の空間は、ほぼ、この口のような膣口だけで占められていたのである。

まさに、カメラを９０度回転させた角度で写した、顔の口なのだ。これを、どアップで撮ってしまえば、女陰部を見慣れていない人では、すぐには、これが何なのかすらも分かなかったはずであろう。

俺の意図をすぐに察してくれた鷹やんは、さっそく、彼女の陰部を接写し始めた。

彼女も、困惑したままで、まだ自分では決断できかねていたような感じだったので、俺も、ここは、彼女の理性が働かないうちに、畳み掛けるように、行動にと移ったのだ。

「まずは、唇をなぞって、と・・・」

そう言いながら、俺は、彼女のピンと張らせた小陰唇を愛撫した。やはり、触り心地は唇に似ているのである。

「次は、指しゃぶりだ」

いきなり、不意をつくように、俺は、小陰唇を愛でていた人差し指を、彼女の膣の穴へと突っ込んだ。広がっていた膣の中に、指はスポッと入ってしまった。彼女は、ピクンと痙攣した。

「高校生にもなって、指しゃぶりが大好きだなんて、いけない子でしゅね～」

俺は、わざと赤ちゃん言葉で、彼女の事をからかったのだった。

彼女は、恥ずかしそうに、赤面していた。実際に、この下の口で、よく、指しゃぶりをしていたからなのかもしれない。挿入した俺の指に反応して、彼女の膣の中は、ピクピクと小気味よく動いた。

それだけではなく、性器を触られて、過敏に気持ち良くなっているのか、この子ときたら、チョビチョビとオシッコも漏らしていたのだった。尿道からしみ出た微量のオシッコは、小陰唇や膣の穴の上を伝って、その周辺を濡らしてから、床へと落ちていった。それは、まるで、ヨダレのようにも見えたのだった。ますます、口らしいのだ。

面白くなってきた俺は、いったん、彼女の穴から、指を引き抜いた。指の先には、彼女のネバネバした愛液が付いている。これもまた、濃厚な唾液のようにも、俺の目には写ったのだ。

「さて、今度は、口のまわりのカスでも取りましょうねえ～」

俺は、先の尖った爪楊枝を取り出した。

「え？それを使うのですか。やだ、怖い」と、彼女は怯えた。

「大丈夫。上手に扱うから」

俺は、強引に爪楊枝のプレイを始めたのだった。

俺は、爪楊枝を彼女の膣の穴へと挿入してみた。膣の穴がポカンと開いているので、全く、余裕でくぐらせる事ができたのである。

だが、彼女の方は、そんな実情を知らなかったので、爪楊枝の鋭い先端が、今にも、膣の内壁を傷つけるのではないかと、ヒヤヒヤしていたようなのだった。もっとも、その恐怖が、逆に、彼女の気持ちを高揚させたらしい。彼女は、明らかに、これまで以上に発情しだしたのである。

彼女の鼻息が荒くなっていた。彼女の陰部も熱く火照りだしているのである。

だから、俺は、わざと彼女の性器を、チョンと爪楊枝で突いてみたりもしたのだ。彼女は、ビクンと体を引きつらせた。同時に、だいぶ感じちゃっているようなのである。制御が効かないのか、彼女の尿道からは、またもや、少量のオシッコがしたたり垂れていた。この子は、気持ちいいと漏らしちゃう体質のようだ。

俺は、そろそろ、彼女をガチでイかせてしまう事にしたのだった。

彼女の膣の中に入れてあった爪楊枝を抜き出した。それから、爪楊枝の先で、彼女の小陰唇の上を、一通りグルリとなぞった後、最後に、その矛先をクリトリスにと定めたのだ。

敏感なクリトリスは、触れただけでも、すぐに強烈に感じたらしく、彼女は色っぽい声を発した。

「あらら。こんなところにデキモノがありましゅね〜。ニキビかなあ？唇に吹き出物だなんて、女の子が、みっともないでしゅねえー。爪楊枝を刺して、潰してしまいましょうか〜」俺は、わざと、そんな事を言ってみせた。

「だ、だめぇ。そ、それ、ニキビじゃないぃ。それはーー」と、彼女はうろたえた。

でも、口ではそう言っても、彼女は、そこまで必死に嫌がっている風でもなかったのだった。さっきから意地悪く性器をいじり回されて、Mっ気が芽生えてきたのだろう。きっと、ホンネでは、クリトリスをイジメられる事で、どんな快感を味わえるのか、密かな期

待していたのだ。
俺の方も、本気でクリトリスに爪楊枝をぶっ刺す気はなかった。あくまで、彼女をドキドキさせて、その興奮を高めているだけだったのだ。事実、クリトリスを責められ始めてからは、彼女のテンションも一気に上がったようだった。やはり、女にとっては、クリトリスは一番の性感帯なのだ。
「ああ、もうダメ。い、いくぅ」彼女がうめいた。
俺は、構わずに、彼女のクリトリスを刺激し続けた。
次の瞬間、今までより多めの量のオシッコが、彼女の尿道からピュッと噴き出たのだった。オシッコと言うより、まるで、歯の隙間からツバが飛んだような光景であった。この時、彼女もイってしまったのである。
彼女の体からは、途端に全部の力が抜けてしまったようだった。俺も、これ以上責めるのはヤメて、爪楊枝を引っ込めた。彼女がしっかりと絶頂に達したので、これで撮影の方も終わりなのである。
こうして、彼女は、初々しい女子高生がヨガっているところを、それも、ヴァギナがオーガニズムを感じた瞬間を、どアップで、いっさい隠さずに、映されてしまったのだった。
こんな映像、とてもじゃないけど、普通の動画サイトには上げられるはずがないのである。
彼女に、今撮った映像のラッシュフィルムを見せてやると、当然の事ながら、自分のサイトでの使用を拒否した。だから、これらの映像については、俺たちの方で、丸ごと貰って、俺たちの持っているアダルトサイトで有料公開させてもらったのだ。もちろん、この映像も、記録的な再生回数を叩き出したのであり、今回も、俺たちは、笑いの止まらない荒稼ぎをさせてもらったのだった。

了

ダイエット

放課後、校舎内の見回りをしていると、何やら、体育館の中で、一人、ジョギングをしている女生徒を発見した。

私も授業を教えていた、三学年のSである。彼女ときたら、制服のままで、体育館のコースの上を回っていた。

私は、彼女に声を掛けてみた。

「あ、先生」と、Sは嬉しそうな顔を私の方へと向けた。

話を聞いてみると、彼女は、ダイエットをしたくて、今、走っていたのだと言う。こんな遅い時間に運動していたのは、体育系の部活の生徒たちが体育館から居なくなるのを待っていたからだ。もともと、Sは帰宅組だったのであり、ダイエットを始めた事は、他の生徒に知られたくなかったのである。

そのような事情であれば、私も、ちょっと、彼女に協力してあげたくなってきたのだった。ダイエットのコーチをしてあげる旨を伝えてみると、Sは喜んで、それを受け入れてくれたのである。

さて、そうと決まれば、もっと計画的に運動をした方がいいだろう。

私は、今のSの体型を知りたくて、彼女に、制服を脱いで、見せてみるように言った。

Sは、最初、モジモジしていたが、それでも、私の指示に従ってくれた。彼女は、制服を脱ぎ、私の前で、下着だけの姿になったのである。

ブラジャーは清楚な白色だったが、パンティは、肌にピッチリの水色のものを履いていた。Sは、どちらかと言えば、おとなしめの生徒だったが、それでも、今どきの女子らしく、こんなシャレた下着を付けているのである。その下着の内側にある肉体は、肥満ではなかったが、確かに、若干ふくよかだった印象を受けた。

私は、少し肉を落とす方向性のトレーニング法を考案して、Sに勧めてみたのである。

まず、ジョギングについては、このまま、下着だけで行なう事を提案した。運動するのに不向きな制服姿で走ったりすると、均等に体が痩せない恐れがあるからだ。少しでも身軽な状態で走った方がいいのである。

この意見を受け入れて、以後、彼女は、いつも、下着姿でダイエットをするようになったのだった。

自分のダイエットを応援してくれる人が現われた事で、どうやら、Sも張り切りだしたみたいである。私も、放課後、彼女が体育館でこっそりトレーニングしている時は、内緒で付き合ってあげる事にしたのだ。

ジョギングばかりではなく、腹筋運動や背筋運動も、彼女には積極的にやらせた。ただ痩せるだけではなく、主に腹部や下半身に筋肉を付けていき、脂肪を削っていく事が正しいダイエット法だからだ。

腹筋・背筋運動をする時は、私も、彼女の足を押さえて、手伝ってあげた。足を持つだけではなく、私は、Sのパンティの上にも手を置いて、固定させる事で、より運動の効果を高めた。背中を屈伸させる途中で、腰まで動いてしまうと、その分、お腹の筋肉の負荷が減ってしまうからである。

このような練習を続けていくうちに、Sは、目に見えて、体型が整ってきたのだった。全体的には、そこまで細くなってなくても、腹部や脚に、はっきりと筋ができてきたのだ。脂肪が取れて、理想の筋肉が付いてきた証拠である。彼女は、体育系の部活をしている女子に近い体格になってきたのだ。同時に、余計な肉は削げて、どんどん体重も落ちてきているはずなのだった。

ある日、Sは、瞳をキラキラさせて、私に報告してきた。

「先生、ありがとうございます！5キロの減量に成功しました！」

私は、Sを褒めて、祝福してあげた。

すると、いつものように下着姿だったSは、いきなり、その下着をも脱ぎ始めたのだった。ブラジャーとパンティを取り、真の全裸になったSは、静かに、私にと抱きついてきた。

戸惑った私は、そっと彼女の体を離し、遠のけた。彼女の方も、困っていたような雰囲気だった。

このあと、Sは、私にオドオドとお辞儀をすると、脱いであった自分の衣服を抱えて、そそくさと、私の前から走り去ってしまったのである。

彼女との関係は、これっきりだった。その日を境に、Sは、放課後の体育館には顔を出さなくなったのだ。

別に、彼女は学校そのものから居なくなった訳でもなかったので、私は、日常の生活の場では、その後も、彼女と何度も顔を合わせていた。しかし、ダイエットをしていた頃のような親密さはなく、ただの先生と生徒の間柄に戻ってしまったのである。そのうち、Sは卒業してしまい、本当に、この高校から去っていってしまったのだった。

思えば、Sは、あのダイエットの特訓を通して、私にほのかな愛情も持ち始めていたのかもしれない。その気持ちが起爆剤となって、彼女も本気でダイエットに取り組んで、それに成功したのだ。彼女は、その最後の仕上げで、私に、自分の愛を打ち明けたつもりだったのであろう。なのに、私は、彼女の心を撥ね付けてしまった。果たして、その対応は正しかったのだろうかと、今でも私は悩んでいる次第なのである。

了

パラレルワールド

友人の天才博士が、パラレルワールド転移装置を発明した。

パラレルワールドとは、要するに、異次元のことだ。世界には、我々の住んでいる宇宙以外にも、同じような宇宙が、次元軸をずらして、無数に存在していて、それを並行宇宙とかパラレルワールドなどと呼ぶのである。博士は、そのパラレルワールドに行けるマシンを開発したのだった。

博士は、オレに、その試験パイロットを依頼してきた。オレは、博士の才能を信じきっていたので、その申し入れを喜んで引き受けたのである。

「これから行くパラレルワールドは、我々の世界と、ほとんど違いがない。三時間経つと離脱して、こちらの世界へ自動で戻ってこられるから、普段はやりたくても我慢していた事を、向こうの世界で思う存分に楽しんでみたらいいよ」博士は、オレにそう告げたのだった。

そして、オレはパラレルワールドにやって来たのである。その世界は、オレが住んでいた日本と、確かに、何もかもソックリなのだった。実は、パラレルワールドになんか来てなかった、なんて楽屋オチなどではない。オレは、間違いなく、パラレルワールドに降り立っていたのだ。

このパラレルワールドは、俺が元いた世界と同じだったのだから、当然、ここにもオレ自身が存在していた。こちらの世界に来たオレは、そのもう一人のオレの中に入り込む事で、パラレルワールドの移動を実現させていたのだった。こうして、オレが体を乗っ取ってしまったものだから、前から居たもう一人のオレの心は、その間、強制的に眠らされてしまっていたようだ。ともあれ、今、オレは、別世界（パラレルワールド）で実在しているのである。

さて、博士が勧めてくれたように、この世界で、たっぷりと遊ばせてもらう事にしよう。その事で、他人に迷惑をかけたり、今後の生活に影響が出たとしても、どうせ、三時間後には、オレは、この世界には居ないのだから、知った話じゃないのだ。

しかし、そこで、あらためて考え込んでみると、特にやりたい事も思いつかないのだった。

欲しかった物の爆買いでもしたかったところだが、そもそも、オレは、十分なお金を持っていなかった。だから、このパラレルワールドのオレも、全くの文無しだったのだ。しかも、この世界から出て行く時に、買った物までは、元の世界に持っていけないのだから、それでは全然つまらないのである。

いっそ、美味しいものでも、たらふく食べてやろうかとも考えたのだが、それが可能なだけの予算すら、オレの手元には無かったのだった。全く、オレの貧乏ぶりには、今さらながら、呆れてしまうのだ。

かと言って、強盗をしたり、サギを働いたりして、不当な方法で、手っ取り早く、お金を手に入れようと言う気にもならなかった。オレは、その手の犯罪行為をやってみたい異常心理者などではないのである。

とにかく、せっかくパラレルワールドに来たと言うのに、やりたい事やできる事が何も見つからないのだ。

よくよく考えた末に、オレは、道を歩いていた一人の女子高生に声を掛けてみた。オレが具合の悪そうなフリをしてみせると、その女子高生は、まんまとオレの演技に引っ掛かって、介抱してくれたのだった。彼女は、オレに肩を貸してくれて、病院まで連れていってくれようとした。

でも、人気のない公園のそばまで来た時、オレは態度を豹変させた。逆に、その女子高生に摑みかかると、彼女の体を押さえつけて、公園の中に引っ張っていったのだ。それから、彼女と一緒に草むらの中に身を隠すと、そこで彼女の衣類を引っ剥がして、そのまま彼

女を手篭めにしてしまったのである。
事が済んだ頃に、ちょうどタイムアウトだ。オレは、パラレルワールドの女の子相手に、後腐れのないエッチだけを楽しんで、こっちの世界に戻って来たのだった。
皆さんは、オレのこうした行動に、否定的な感想もお持ちになったかもしれない。だが、たった三時間、パラレルワールドに居ただけで、果たして、他に何をする事ができたと言うのだ?誰だって、結局は、オレみたいに、最後はエロい欲望を満たす方向にと走ってしまうものなのではなかろうか。
そして、我々の世界でも、時々、理性を失ったような無差別犯罪を行なう人を見かけるが、そう言う人たちとは、実は、別のパラレルワールドから来た人間が取り憑いていたのではないか、とも思ったりするのである。

了

蒸発

巷では、人間の蒸発事件が多発していた。目撃者のいない状態で、いきなり、人が消えてしまったのである。蒸発する人々には、何の繋がりも共通点もなかった。年齢も性別も身分も人種も全く関係なく、その人は、突然、どんな場所からでも居なくなってしまったのだ。あとには、その人が着ていた衣服だけが残されていた。

路上で行方不明になるパターンが多かったので、サイクロプスに喰われてしまったのではないか、と推測する人たちもいたのだが、これも、確たる根拠はなかった。

いつも衣服だけが残っていたと書いたが、これに関しても、衣服は、乱雑に撒き散らすように置き去られていたのである。となると、服の内側にいた人間だけが瞬時に消滅した訳ではなく、服を一枚ずつ脱いだあと、中身の人間だけが居なくなってしまった、と言う事だったのであろう。

ある朝の登校時、僕が、一人で通学路を歩いていると、その途中に、衣類が散らばっているのを見つけた。まさしく、これは例の蒸発事件の跡なのだ。とうとう、僕の身近でも、この奇怪な人間蒸発が起きてしまったのである。

地面に落ちていた服は、セーラー服だった。つまり、どこか近所の学校の女生徒が、今回の蒸発事件に巻き込まれてしまったようなのだ。

こんな事件と出くわすなんて、とても珍しい体験なのである。僕は、騒いだり、すぐに通報したりはせず、もうしばらく、この事件現場を見物させてもらったのだった。

すると、僕は、次第にドキドキしてきてしまったのである。なぜならば、路上には、セーラー服といっしょに、蒸発した女の子の履いていた下着も落ちていたからだ。それって、ごく自然な成り行き

のようで、しかし、実際に目の当たりにすると、激しい欲情を促したのである。

特に、パンティは、ヨレヨレで、色あせており、いかにも使い古した風だった。そもそも、たった今まで本当に履いていたパンティだったのだから、当たり前なのである。でも、それが、新品のパンティからは感じ取ることのできない、生々しい色香があったのだ。

女生徒が蒸発したばかりなのであれば、このパンティには、まだまだ、彼女の体液や匂いが染み付いたままかもしれない。さらに、これらの服が脱げた直前の裸の彼女の姿を想像すると、僕は、ますますカーッと熱くなってきてしまったのである。

つい、僕は、このパンティだけを拾い上げてしまった。やっぱり、ぬくもりや湿り気がまだ残っているのだ。しかも、年季がはいったパンティらしく、布の表面に恥ずかしいシミがあるのまで見つけちゃったのである。まさに、女学生のリアルな生パンティだ。

このあと、僕は、周囲に他に人が居ないのをよく確認すると、そのパンティをギュッと握って、この事件現場から、急いで、走り逃げてしまったのである。

きっと、この事件現場は、すぐに別の人が発見してくれたであろう。その人は、きちんと警察にも通報してくれたに違いあるまい。セーラー服の種類から、この蒸発した子が、どこの学校に通っている誰なのかも、難なく特定されたはずだ。しかし、残留品の衣類の中から、パンティだけが無くなっていた事は、恐らく、何者も気付きはしまい。ブラジャーやスリップはあるのに、パンティだけは事件現場に置かれていないのである。この女生徒は、大胆にも、学校にはノーパンで行く子だったと、皆からは思われる事となるのだ。

了

少女女優

私は、３歳の時から、テレビのドラマや映画などに出演していました。つまり、子役をやっていたのです。

その為、女優としての芸歴自体はとても長かったのですが、しかし、なかなか芽がでなくて、いつも、ちょい役やエキストラでの参加ばかりだったのでした。だけど、いいんです。私は、このお仕事が好きでしたし、演技ができるだけでも満足していましたから。

私のマネージャーは、私のママが勤めていました。このへんも、子役あるあるだと言えます。ママは、私以上に、私の俳優業には熱心でした。だから、ママは、私のために、次々に、どんな仕事でも貰ってきたのです。

おかげで、一般での知名度は上がらないものの、現場では私はとても重宝されるようになっていきました。こうして、他の役者がやりたがらないヨゴレ役とか、リスクの多い難役なども、私に回ってくるようになったのです。

私も、スタッフの期待に応えるように、いつも、一生懸命に頑張りました。ママも、たいへん厳しく指導する事で、私にいっぱい努力させたのでした。

私が、ピアノの練習をして、上手に弾けるようになったのは、そのような配役をいただいたからです。バレエを習ったのも、同じ理由からでした。他にも、書道をマスターしたのも、スケートを滑れるようになったのも、性毛を全部剃って、パイパンになったのだって、いずれも、映画の中で、そのようなシーンを撮るのに必要だったからなのです。

このように、新しい映画に出演するたびに、さまざまな技術を身につけたものだから、高校生になった現在では、私はオールマイティに何でも出来る役者になっていました。なのに、残念ながら、映

画ファンからの人気が得られなかったが為に、私は、いっこうに、主演や重要な助演などは担当する事がなかったのでした。

技能的なものに限らず、異性交際についても、私は、俳優業とともに歩んできました。ほんとは、私生活での私は、あまり恋愛には関心がなかったのです。しかし、私自身が年ごろになるにつれて、男性と肉体的に愛し合うような役柄も増えてきたのでした。

正直に告白しますと、私のファーストキスや男の人との最初のハグは、映画の撮影内でのものだったのです。相手の男優は、多少は美男子だったかもしれませんが、私は特に好意を寄せてもいませんでした。そもそも、私は、自分の演技にしか興味はなかったのです。私は、無機的に、好きでもない男たちに、女の子の恋愛の大事な通過点を、どれもこれも捧げてきたのでした。

ある時、ママが、私にベットシーンの仕事を持ってきました。女子高生がセックスをすると言う、インモラルな演出です。そんな役まで、私にはオファーが来たのでした。

このシーンを演じるにあたって、ママは、迫真の場面にする為、本当にセックスしなさい、と私に言いつけました。もちろん、この時の私はまだバージンだったのです。でも、私は、信頼するママの言いつけを、素直に承諾したのでした。話によると、これは監督からの至上命令だったらしく、現場の方では、もう、本物のセックス場面を撮ると言う事で、準備は整っていたようなのであります。

そして、その撮影日がやって来ました。スタジオに着いた私は、すぐに、セットのベッドの上で裸となり、例によって、何の感情も抱いてない男優にと身を預けたのです。この相手の男優も、本気でセックスするように指示されていたらしくて、がんがん攻めてきたのでした。私にとっても、何もかもが初めての経験なのです。

ギャラリーでは、この様子を、私のママがしっかりと見守っていました。ママ公認の性行為です。

いや、それどころか、周囲のスタッフの間には、一般人の見学者まで混ざっていたのでした。最近では、映画の良い宣伝になると言

うので、映画の撮影の際には、積極的に一般人も見物させるような傾向となっていたのです。しかも、よりによって、今回の撮影には、私の学校の同級生が、何人も見にきていたのでした。

こんな気まずい環境だと分かっていても、私は、この撮影を放棄するようなマネはできません。いえ、絶対にそんな事などはしないのです。だって、私はプロの女優なのですから。

こうして、私は、ママや学校の友人に見られながら、大切な処女を喪失したのでした。のみならず、私の初体験の様子は、映画の一部となり、誰でも鑑賞できる事になったのです。

了

ある女生徒の死

クラスメートのチビが自殺した。

確かに、彼女は、このクラスでは、いじられキャラではあったのだ。しかし、いじめられっ子ではなかったはずなのである。誰も、チビのことを仲間外れにはしなかったし、彼女の悪口を言い触らすようなマネもしなかった。ましてや、パシリをやらせたり、お金や金品を持ってこさせるなんてのは、絶対になかった話なのだ。

では、どうして、彼女は自殺してしまったのだろう?家庭の事情や学校の成績などで悩んでいた訳でもなかったらしい。遺書もなく、動機はいっこうに不明のままなのだ。

クラスの皆が、一同に集まった。そして、チビの日常のことで、何か気付いた事がなかったかを、腹を割って、話し合ってみる事にしたのである。

すると、いきなり、チビにオナニーをやらせちゃった、と打ち明けた女子が現われたのだった。彼女の話によれば、別に、意地悪のつもりで、そんな事をしたのではなかったのだと言う。むしろ、精神的に幼かったチビが、まだオナニーをした事がなさそうだったので、歳相応に、その快感や歓びを教えてあげただけだった、と言うのである。

「実際、オナニーを覚えた後のチビは、クセになったらしくて、下校の時、こっそりと雑木林に立ち寄って、その中で、一人で隠れて、オナニーをやっていたみたいだよ。だから、この事は自殺の原因じゃないよ」と、その女子は言い訳したのだった。

今度は、チビにお漏らしをさせてしまった、と白状する女子たちが現われた。

彼女たちの場合は、チビも混ぜて、一緒に自転車で下校しようとした時の話であった。実は、学校を出る前から、チビはモジモジし

ていて、オシッコを我慢していたみたいなのだが、彼女は気が小さかったので、それを言い出せなかったのだ。周りの友人たちも、それとなく察してはいたのに、あえて、トイレに行く事を勧めたりはしなかった。

その結果、チビは、路上で自転車をこいでいる最中に、尿意がピークに達してしまったのである。もう限界スレスレなのだ。これ以上動くと、膀胱が緩んで、出ちゃうのである。チビは、自転車にまたがったまま、全く身動きできなくなってしまった。一緒にいた友人たちも、その様子を可笑しがっているだけで、何も助けてあげなかったのである。

少しの間、悶えた末に、とうとう、チビは自転車の上で、失禁してしまった。高校生にもなって、みっともない話なのだ。周りを囲んでいた友人たちは、このお漏らしを見て、大笑いしたのである。

「でも、皆に知られたら恥ずかしいからって、今まで、きちんと内緒にしておいてあげたのよ」と、その女子たちは弁解したのだった。

さらには、ふざけて、チビの服を脱がしちゃった、と言い出す女子も出てきた。その子の場合は、こんな感じだ。

あくまで、たわいもないオフザケのつもりだったのである。彼女は、チビと一緒に体育館の道具室の中にいた時、戯れながら、面白半分に、チビの服を全部、剥いじゃったのである。もちろん、取り上げた服は、授業が始まるまでには、彼女に返してやるつもりだった。ところが、チビがスネちゃったものだから、こっちもムキになってしまい、パンティだけは渡してやらなかったのだ。

代わりに、その場にあった縄跳びを、チビへと突きつけた。そして、ふんどしの締め方で、その縄跳びをチビにつけさせたのである。非力なチビでは、その悪ふざけに対して、逆らう事ができなかった。彼女は、ほんとに、縄跳びのふんどしを履かされるハメになってしまったのだ。下着なしで、縄だけを股間に巻いたなんて、顔から火が出るほど恥ずかしいのである。

そのまま、チビは、ずっと、自分のパンティを返してもらえなか

った。その縄の下着で、以降の時間の授業も受ける事になってしまったのである。すっかり、パンティを返してやるのを忘れてしまったものだから、チビは、その日は、縄を下半身につけたままで、自分ちにも帰ったようなのだった。

のちに、チビに、縄の下着の履き心地を聞いたところ、股の間に縄がガッチリと食い込んでしまい、それが気になって、授業にも集中できなかったのだそうだ。そんな話を聞かされると、チビにそれをやらせた女子の方も、何だか、アソコがムズムズしてきて、ひそかに興奮しちゃったのである。

クラスの皆で正直に告白し合った事で、チビにまつわる、そんな秘密にしていた話が、どんどん、明るみになっていったのだった。

ある女子は、王様ゲームの命令を出すにあたって、つい勢いで、チビには本物のオシッコを飲ませてしまった、と語った。また、別の女子は、ＶＩＯのムダ毛処理に、チビにも付き合ってもらった際、チビの番では、面白半分に、ムダ毛どころか、股間をツルツルに剃ってしまった、と話した。そんな軽いイタズラの話が次々に出てきて、誰もが「チビが嫌いだった訳じゃない。ちょっとフザけただけだった」と言い添えたのだった。

たとえ一回きりの悪意であっても、それが幾つも重なっていくと、人を死にも追いやるのである。

了

教室の彼女

正直なところ、男子校の中学から男女共学の高校へ進むと言うのは、僕にとっては、期待以上に困惑しか無かった。三年間、女子と離れていた環境にいた事で、その接し方がすっかり分からなくなっていたのである。ヘンに女子を意識しすぎても目立つだろうし、女子に対してガツガツした態度を取りすぎても笑われてしまう事だろう。

しかし、実際に入学してみると、そこまで心配する事もなかったみたいなのだった。僕の入った高校は進学校だったので、男子も女子も全体的におとなしい子ばかりだったのである。だから、皆が奥手っぽくて、積極的に男女で交わる必要性もなかったのだ。もちろん、用事があれば、男女間で簡単な会話のやり取りぐらいはする。しかし、そこから親密な仲にムリに発展させなくてはいけなかった訳なのでもなく、学校の中は、さながら、違う二種類の人種が混ざって生活しているような雰囲気なのであった。

その事でホッとした一方で、やや拍子抜けしたのも事実である。ホンネを言えば、僕は、女子もいる学校生活と言うものに、ちょっと関心も抱いてはいたからだ。

要領の悪い僕は、一学年の時は、いきなり、学級委員を押し付けられてしまった。やむなく、その係を引き受けた僕は、たびたび、生徒会会議にと出席した。クラスからは一人でその会議にと参加し、その会議は放課後に開かれていたので、終わった頃には、下校するのも、かなり遅くなった。僕が教室に戻ってきた頃には、当然だが、他にまだ教室に残っている生徒などは居なかったのである。

のはずなのだが、その日は、教室に戻ってみると、一人だけ、まだ帰っていない生徒がいたのだった。

顔を知っていた程度の女子のアイである。彼女は、うちのクラス

の中では美人の方に入り、大人びて、ませていたので、何となく、やさぐれ感も漂わせていた。僕が、特に近づきがたい印象を持っていた女子の一人だった。

そのアイが、一人っきりで、自分の席に座って、何かをしていた。モゾモゾと体を動かしているのである。この時点では、僕には、それ以上の事はよく分からなかったし、気に留めてもいなかった。

僕とアイは、目が合ったので、いちおう、軽く会釈だけはした。あくまで、二人は、その程度の付き合いであった。アイの方は平然としており、少し笑みを受かべたようにも見えた。

僕は、教室に居残る用事もないので、すぐに帰る事にした。僕が出て行く時、アイは、きちんと僕にサヨナラを言ってくれた。僕も、その挨拶に対して、短く返した。彼女と言葉を交わしたのは、実に、これが初めてであった。彼女は、想像したよりも印象が良くて、僕も悪い気はしなかったのである。そして、これが彼女との腐れ縁の始まりだったのだ。

何週間か経ち、僕が、生徒会会議のため、再び、下校が遅くなると、その時も、アイは、一人だけで、まだ教室に残っていた。この時は、彼女の様子も、だいぶ奇妙だったのである。

その日のアイは、生徒用の机の前で立っていて、その机に自分の身を寄り掛からせていた。ちょうど腰のあたりに、机の角が当たる姿勢でだ。その格好で彼女は軽く体を揺らし続けていた。

なぜ、そんな事を彼女がしていたのか、僕には、すぐには見当もつかなかった。筋トレだったとしても、こんなポーズのストレッチは今まで聞いた事がないのである。ただ、彼女を背後から見ると、くの字に後ろへ突き出したお尻が、やたらと色っぽかったのだった。女子のお尻って、制服のスカート越しに眺めても、こんなに大きくて、そそられるものだったのだ。

この時も、僕は、振り返ったアイと目が合ったので、軽く挨拶だけを交わしておいた。彼女のことは気にはなったが、僕は、そのまま、さっさと教室から出ていったのである。廊下を歩き去っていく

途中で、教室の方からは、うっすらと、アイの喘ぐような声が聞こえた気もしたのだった。

さて、そのあと、自分の家でよくよく考え込んだ結果、僕には、唐突に、アイの行動の謎が、全て、解けてしまったのであった。

アイは、あの時、教室で角オナニーをしていたのだ。間違いない。いや、そうとしか考えられないのだ。彼女は、そうやって、誰もいない放課後を見計らって、教室内でオナニーするのを、密かな習慣としていたのである。だとすれば、最初に、下校時に彼女と会った時も、彼女はオナニーをしていたのだろう。机に座っていて、僕からは見えなかったが、机の下では、彼女は自分の股間を揉んでいたのだ。この事も、のちに、はっきりと判明するのである。

それにしても、なぜ、アイは、教室でなんか、自慰行為をしていたのであろうか。何よりも、僕がいても、全然へっちゃらで、オナニーを止めようとしなかった、その大胆さが、よく分からなかった。もしかして、彼女だけではなく、女子の誰もが、実はこんな感じだったのだろうか。

とにかく、僕は、その後も、アイがオナニーしている現場には、ちょくちょく出くわす事となったのである。

次に、放課後の教室で彼女と会った時の、彼女の様子は、まさに衝撃的であった。

この日の彼女は、椅子の背もたれの上にまたがっていたのである。しかも、制服のスカートを脱いだ状態でだ。彼女のパンティと生足がむき出しになっていた。プロポーションの良かったアイの、スラッとした両足とお洒落なパンティは、あまりにも目に毒だったのだ。そして、彼女は、椅子の背もたれに自分の股間を擦り付けていたのである。

教室に入るなり、この光景を目にした僕は、さすがにイケないものを見たと直感して、体が固まってしまった。ところが、アイの方から、僕に声を掛けてくれたのである。

「ごめん。気にしないで。すぐ終わらすから」と、しかめた顔で、

彼女は言った。
　それから、彼女は、オナニーする勢いを速めて、僕の前で、一気にイってしまったのだ。女の子のこんな光景は、僕も初めて見たのであった。
　オナニーをやり終えた後のアイは、全然、ケロッとしていた。僕に見られていた事も、まるで気にしていないようなのだ。気まずそうな表情も見せずに、彼女は笑っていた。何だか、弁当を食べているのを見られた程度の感じなのである。そして、この日は、彼女は、スッキリした様子で、僕より先に帰ってしまったのだった。
　僕の方もまた、この日の彼女の姿は、鮮烈に頭にと焼き付いていた。それで、その夜は、僕も、彼女のオナニーしている情景を思い出しながら、それをサカナに、気持ちよく抜かせてもらったのである。
　こんな感じでのアイとのやり取りが、時間の遅い放課後の教室で、それからも、何度も繰り返される事となったのだ。しかし、だからと言って、僕とアイの距離が縮まった訳なのでもなかった。日中になれば、二人は、まるで会話もしない関係に戻ったのである。恋仲になるなんてのは、とてもとても程遠い話だったのだ。
　アイにとって、オナニーとは、勉強をするのと同じぐらい、ごく普通の行為だったのかもしれない。あるいは、全ての女子が、そんな認識だったのであろうか。また、アイが、僕以外の生徒がいる前でも、平気でオナニーを見せていたのかさえも分からなかった。確認しようがないのだ。他の人にさりげなく聞いてもみたいが、「アイが教室でオナニーしている」などと口にしたら、そんな事を言い広めた僕の方が変態に思われてしまうかもしれないだろう。もしかしたら、そこまで計算していたからこそ、アイは僕にオナニーを見せていたのかもしれないのだ。
　アイの放課後の素行は、オナニーばかりではなくて、他の事をしている時もあった。
　ある時は、彼女は、教室の中で下着を取り替えていた。つまり、

全裸になっていたのだ。たまたま、僕が教室に入った時に、その瞬間にかち合ってしまったのだった。ちょうど、彼女は素っ裸だったのである。そこまで見られても、彼女は気にしていなかった。僕の方もまた、同世代の女子のヌードを間近で見たのは初めてなのだった。

ただでさえ、美人でナイスプロポーションのアイのヌードなのだ。滑らかに膨らんだ乳房も、黒艶のある性毛も、大きなお尻も、あっけらかんと晒していて、かなり刺激が強かった。僕は、この時、アイに、女性のヌードがいかに美しかったかを教えてもらったのである。

また、アイが、教室の中で、生理用品をつけ替えているのに、出くわしてしまった事もあった。女子は生理用品の交換をトイレの中でやるものだと思っていたが、こだわりを持つアイは、そんな汚い場所ではやりたくなかったらしい。よって、彼女は、またまた、教室にて、生理用品の取り替えをしていたのである。彼女は、血まみれになったタンポンやナプキンを、あっさり、僕にも見せてくれた。実際に、女子が生理用品を扱っている姿と言うのは、男子の僕にしてみれば、衝撃的なだけではなく、ひどく女性の勉強にもなったのである。

彼女は、このように、オナニーをしていても、裸になっていても、それを見られる事に、何の抵抗もないようなのだった。こんな出来事が続くうちに、やがて、僕の方も、彼女の行動には慣れてきて、気を利かせて、彼女の前からすぐに撤退したりはしなくなったのだ。彼女のオナニーも着替えも生理用品の交換も、目をそらさずに、最後まで見物させてもらうようになっていって、彼女だって、それを少しも気にしていなかったのである。

僕は、アイが絶頂に達する瞬間を、何度も見せてもらった。アイは、エクスタシーを感じると、まるで甘いスイートを食べた後みたいな、満足げな、恍惚とした表情を浮かべたのである。とても愛らしい顔だった。そのうち、そんな彼女の姿を眺めていると、僕の方

まで、何となく嬉しくなってきたのである。それで、ますます、僕も、楽しく、彼女のオナニーは拝見するようになったし、彼女の方だって、見られる事で興奮して、むしろ、より気持ちよくイっていたのではないかとも思えるようになってきたのだった。

ここまで誘うようなマネをしている女子に対して、よく理性を保ち続けられたものだ、と感心した人もいるかもしれない。だが、裸やオナニーを見られても、彼女の方があまりにも当たり前に振る舞っているものだから、僕も、一線を越えるような態度は取れなかったのである。何よりも、強気に迫ったりする事で、彼女を怒らせたり、嫌われてしまう事が怖かった。僕にとっては、アイは、相変わらず、一番苦手なタイプの女子には違いなかったのである。

それよりかは、現状を維持していれば、これからも、彼女のヌードやオナニーしている姿を、ごく普通に見せてもらう事ができたのだ。僕には、彼女と本格的な恋人同士になるよりも、その方が、ずっと心地よかったのである。

放課後、僕とアイは、二人だけの秘密のエロチックな時間を共有し続けた。それは、僕にとって、学校に行く一番の楽しみにもなり始めていた。男子しか居ない学校ではあり得ない娯楽なのである。

やがて、僕の学級委員の役職も任期を終える事となった。だが、僕は、引き続き、放課後に会議が行なわれるようなクラスの職務にと就かせてもらったのだった。だから、その後も、時々、アイとは、放課後の教室で顔を合わせられるようになったのである。あくまで、さりげない感じに。

うちの高校では、進級しても、クラス替えはなかった。よって、僕は、アイとはずっと同じクラスで居続けたのである。それで、僕も、結局は、三年間、途切らせずに、何かかにかの役職にと就き続けたのだった。そして、下校が遅くなった日には、時たまでもいいから、アイと会えるようにしてきたのであった。

そうして、いつしか高校生活も終わる時期がやって来た。僕もアイもその他の沢山の同級生たちも卒業式を迎え、僕たちはそれぞれ

の場所へと巣立っていったのだ。
僕とアイは、ついに、付き合うような関係にまでは進展しなかった。元々が親しい友人という関係でもなかったので、高校から離れると、完全に顔を合わす事も無くなってしまったのである。もちろん、わざわざ、あらためて個人的に相手と連絡を取るような真似もしなかった。しょせんは、その程度の仲だった。僕たちは、すっかり他人同士になってしまったのだ。
でも、今になって思い出せば、アイと過ごした高校生活は、なまじ本当の恋人関係になってしまうよりも、思春期の高校生の男子にとっては、ずっと理想的な、夢のごとき毎日だったようにも思えたのであった。

了

温泉ビデオ（前書き）

本作は、「脱衣ゲーム」シリーズの新作「温泉ビデオ」より、その冒頭および結尾の部分を抜粋して、転載させていただきました。

温泉ビデオ

リキ温泉の旅館に宿泊した客は、誰でも、この旅館制作のオリジナルの施設案内ビデオを観る事ができた。お客用の部屋にはテレビが設置されており、そのテレビを指定のチャンネルに合わせると、そこでは、いつでも、その施設案内ビデオが、エンドレスで流されていたのだ。部屋を使っている全員が、好きな時に、自由に見物する事ができて、いわば、無料のサービスなのである。

その案内ビデオでは、まだ若い、高校生ぐらいの女の子がナビゲーターを務めていた。彼女は、実は、ミス・リキ温泉なのだ。

この町のシロウトの女性だから、都会のモデル並みではなかったものの、いちおうは、ミスコンの優勝者なので、それなりに可愛い顔の少女なのである。色白で、眼鼻立ちがはっきりした、この土地の典型的な美人なのだ。何よりも、健全なミス温泉にふさわしく、爽やかで、明るく、健康そのものの見た目だった。

ところが、この子が、この案内ビデオの中では、裸になってしまうのである。服を全部とって、完全にオールヌードになるのだ。そして、自らが温泉に浸ってみせて、視覚的に、その入り心地を宿泊客へと伝えてくれたのだった。

普通、入浴シーンと言えば、水着をつけたり、バスタオルを体に巻いたりして、入湯するところだろう。しかし、実際の温泉では、そうした半着衣での入浴は許可されていない。ビデオの鑑賞者に誤解を与えない為にも、このビデオでは、ミス温泉の彼女は、あえて、リアルな全裸で入浴しているのだった。

昨今の若者の中には、自分の裸を見られる事を恥ずかしがる子も少なくない。そんな子たちは、もし、この案内ビデオで、お手本となるナビゲーターが水着やバスタオルなどを使っていたら、自分もこの格好で入浴してもいいのだ、と都合よく解釈してしまうだろう。

そのへんを配慮した訳だ。

思えば、このミス温泉の女性に、ナビゲーター役を任せたのは、絶妙のキャスティングだったのかもしれない。もし、男にやらせたならば、ゴツゴツした男性のヌードなんて、むさ苦しいだけだったし、かと言って、十分な熟女の裸だと、色香が強くて、きっとエロい感じの映像に仕上がってしまっていたであろう。反対に、小さな幼児を使えば、それはそれで、児童ポルノに引っかかってしまうのだ。結局は、ほどよい若さの娘のヌードこそが、一番、清潔感があって、画としても見苦しくなく、もっとも標準な人間の裸だったとも考えられそうなのである。

この温泉旅館には、様々なタイプの観光客が訪れていた。そのほとんどの宿泊者が、この施設案内ビデオを、しっかりと鑑賞していたようなのだった。

一人旅ならば、何の問題もない。男の個人客なら、このビデオの中のナビゲーターの子が裸になったところで、無料のアダルトビデオのつもりで、喜んで、見物させてもらった事だろう。寂しい独り身ならば、なおさら、宿が用意してくれた擬似のコンパニオンだと思わせてもらって、楽しんだはずである。それも、この地方での美人を味見できたのだから、ますますご満悦なのだ。

しかし、女の個人客でも、このビデオは、つい観てしまったみたいなのだった。女性は女性で、自分の体と比較しながら、他の同性の裸と言うのも、どうも気になってしまうようなのだ。さらには、このビデオを観ているうちに、ナビゲーターの子に自分を重ね合わせてしまって、自分が裸を見られているような気分になりながら、興奮しちゃったような子もいたらしいのである。ＡＶではなく、普通のビデオで女の人が裸になっているものだから、よけい、そんな感覚にとらわれてしまった女性もいたのかもしれない。

これが、友達グループや職場の慰安旅行でこの旅館に来ていたとしても、やはり、皆でこのビデオを観てしまうようなのだった。こ

の場合だと、ビデオの中に裸が出てきたら、その事を笑ってヒヤかしながらも、そのまま、テレビはつけっ放しとなるのだ。厳格になって、テレビを消そうと言い出す人も現われない。このような状況では、そんな真面目な態度をとる人の方が、裸を意識しすぎてるように思われて、からかわれるからだ。そして、気が付くと、いつの間にか、皆の視線はビデオの方に向いていて、その内容で皆が盛り上がっていたりもするのだった。そんな中で、仲間には話さないものの、このビデオがひどく心に残ってしまった人とかも出てきたらしいのである。

カップルや夫婦と言った、二人だけの宿泊客であったとしても、似たような感じで、このビデオは観始めるようだった。ビデオの中のナビゲーターの子が裸になりだすと、カップルの間には、やや気まずい空気も流れるのだが、ほとんどのケースでは、テレビを止めずに、観続ける。そのうち、このナビゲーターの子の裸体をサカナにして、カップルの会話が弾み出すのだ。男がナビゲーターの子の裸を褒めたりすると、女の方も対抗心を燃やし出す。男の方だって、ナビゲーターの子の裸に欲情してきて、早く、自分の本当のパートナーの裸が見たくなってくるのだ。つまり、意外にも、ナビゲーターの子が裸になったのは、むしろ、カップルが発情する為の良い奮発剤にも使われていたみたいなのだった。彼女のヌードは、けっこう、宿泊客の役に立っていたのである。

ただ、家族連れでは、そうもいかない部分もあったようだった。特に、幼い子も混ざっているような家族旅行だと、さすがに、女の裸は堂々とテレビでは流せないのである。だから、子供が一緒にいる時は、親や大人たちは、とても注意して、この案内ビデオはつけないようにしていた。そして、子供が部屋の外に遊びに出ていた時とか、夜に寝静まってから、こっそりと、未成年じゃない者だけで、このビデオは拝見させてもらったのである。

もっとも、親たちよりも一枚上の子供たちもいた。彼らは、この案内ビデオで女の裸を観る事ができると気が付くと、今度は、逆に、

大人たちが部屋にいない時間を見計らって、子供たちだけで、このビデオを隠れて見物させてもらったのだった。何たって、好奇心旺盛で、性に興味を持ち始めたばかりの年頃の子供たちだ。この案内ビデオのミス温泉の女性は、そんな子供たちにとっても、はじめて見ちゃった身内以外の大人の女性のヌードとして、彼らの幼い記憶には深く焼きつく事になったのである。

リキ温泉の旅館に泊まったお客の中には、温泉で楽しんだ思い出よりも、この施設案内ビデオの内容の方が、強く印象に残ってしまった人も、決して少なくはなかったようである。そうしたお客は、この旅館のリピーターとなり、このビデオ目当てで、また部屋に泊まるようになったのである。

もっとも、きちんと旅館内を歩き回っていた宿泊客ならば、お土産売り場の片隅で、実は、この施設案内ビデオのソフト自体も売られていた事に気付いたはずだろう。そう、評判が良かったものだから、このビデオは、すでに商品化もされていたのである。

いちおう、このビデオは、温泉の宣伝目的という名義で販売されていた。でも、ビデオのパッケージの写真には、カラオケコーナーで歌っていた時のナビゲーターの子の凛々しい立ち姿が採用されていて、すっかり、この子のイメージビデオかのような装丁なのだ。

しかも、ビデオのパッケージの裏面では、大浴場で彼女が入浴した時のスナップ写真が使われていた。正面から撮った彼女の全身の写真で、股間のマズい一点だけは赤いハートマークで塗りつぶされていたが、体の残りの部分は全て、あらわだった。つまり、思いっきりオールヌードなのだ。

健全な入浴中をイメージした写真として、その裸は清潔で素朴ではあったのだが、それでも、普通に、他のお土産と一緒に並べて置かれていると、ちょっと照れ臭くて、気まずいのである。

そして、このビデオは、あくまで、温泉ビデオにと分類されていて、R指定ではなかったのだった。だから、たとえ子供であろうと、

自由に、好きに購入できたのである。誰もが、気軽に、記念として、あまり迷う事もなく、このビデオを買っていったのだ。

そんな訳で、地方のちょっと可愛いミス温泉が、ローカルながら、まぶしい裸を披露していた、限定版の企画ものビデオを、我が家でも心ゆくまで鑑賞できるのである。

了

青春の苦い傷あと（前書き）

教室にいた女子たちは、「放課後、スケ番グループが、ある女生徒にヤキを入れるらしい」と聞き、昼間っから、すっかりザワついていた。「オマンコに根性焼きする」と言うので、なおさら、皆は、赤面しながら、盛り上がっていたのである。

青春の苦い傷あと

「あああっ。だ、だめ。やめてぇ」
泣きそうな声で訴えていますが、かまわず、いつものように、
おとなしくて、気の弱い女子の服を、全部、脱がしてしまいます。

生意気に、高級ブランドのパンティなんか履いていました。

いじめられっ子のくせに、アソコの縮れっ毛は濃い方なのです。
汚そうに、クラスメートがこの毛を除去してしまうと、
彼女の下腹部は、子供に戻ったみたいにツルンとなり、
割れ目やその奥にあるものも、ぺろっと丸見えになりました。

「皆、ちゅうもーく！さあ、やるよー！」

すでにグロッキー状態だったいじめられっ子の股間に、
そおっと煙草の先端を近付けます。

「ぎゃあああーーーっ！」

大事なところに、いきなり、凄まじい熱さが走ったものだから、
いじめられっ子も、びっくりして飛び上がりました。
いつもは小声の彼女でも、こんなに大きな悲鳴が出せたのです。
やれやれ。無警戒に、女性器をだらしなく露出していたら、
こんな目に合っちゃうのです。

悪い生徒たちは、自分の体は使わないで、
クラスで一番弱い女子にだけ、

このような局部への根性焼きを受けさせてみるのでした。
エロチックで、とっても甘いスリルなのです。

「ひいいぃぃ。い、痛いし、熱いよぉ」

さらに煙草の火をグイグイと押し付けられて、
オマンコには、くっきりと丸い火傷のあとが出来ました。
やだ。この子ったら、
激痛に身悶えして、体がカアーッと熱くなっただけでなく、
アレが傷モノになっちゃいました。
高熱のエクスタシーの代償であり、
女高生の間での過激なマウンティングが招いた結果です。

このようにして陰部につけられた傷は深くて、
もはや一生、消える事はないです。
この焼印のせいで、この子は、恥ずかしくって、
もう男子とも付き合えなくなったのでした。
彼女は、高校生活での楽しい恋愛から脱落したのです。
恋のライバルが一人でも減るのは、
他の女子たちにとっても、好都合なのでした。
もっとも、こんなイジメをされるような女生徒は、その時点で、
ダサくて、カッコ悪くて、モテそうにはなかったのですが。

了

青春の苦い傷あと（後書き）

この小品（本編部分）は、パブーの方で公開した「半日天下の半公開エロ小説集」内に収録した画像付きエピソード（「いじめショータイム」）の文章部分だけを転載したものです。

いずみ先生

うちの男子校には、蛙里いずみと言う女教諭がおり、生徒たちは、全員、彼女の事が大好きだった。

いずみ先生が、とびっきりの美人で、イカした女だったのは言うまでもなく、普段は英語の授業を教えてくれていたのだが、勉強の進み具合によっては、彼女は、特別な授業まで行なってくれたのである。

最初は、たまたま、授業が早く終わって、時間が余ったものだから、冗談交じりに「先生の今日の下着、皆に見せてあげようか」なんて、彼女が口にしただけだったのだ。ところが、生徒たちが調子を合わせて「見たい、見たい」と返したら、先生は、本当にブラウスの前の方を開いて、自分のブラジャーを見せてくれたのだった。

そのブラジャーは、やたらと派手な柄だったので、恐らく、見せブラだったのではないかと思う。それでも、美人先生のセクシーな大奮発サービスは、生徒たちには大受けしたのであった。

それからと言うものの、生徒たちは、いずみ先生の授業時間は、真面目に、必死に勉強するようになって、何とか、時間を余らせるようにしだしたのである。そして、まんまと余った時間を作る事ができたら、先生にまた色っぽい事をしてくれるように、おねだりするようになったのだった。

「仕方ないわね。でも、皆も頑張って勉強してくれてるし、これはご褒美よ」いずみ先生もまた、さばけた性格だったものだから、そんな事を言って、毎回、生徒たちの要望に答えてくれるようになったのだ。

はじめは、スカートをめくってパンチラさせたり、ブラウスの裾をまくって、抜群のウエストやおへそを披露してくれる程度のものだった。しかし、そのような事が繰り返されていくうち、いずみ先

生も乗ってきたのか、どんどん際どい部分まで見せてくれるようになりだしたのだ。

とうとう、いずみ先生は、教室の中で、生徒全員にオールヌードまで拝ませてくれたのだった。それは、高校生の童貞どもには勿体ないほど美しい裸だったのである。

いや、いずみ先生のお色気サービスは、まだまだ、それ以上のものにとエスカレートしていったのだ。もはや、女体の仕組みや性行為のやり方の勉強会のような様相を呈してきて、とても文章では書けないような事まで、先生は生徒たちにレッスンしてくれたのである。

女性教諭が、自分の授業中に、そんないかがわしい事をしていたと言うのに、学校や校長たちが中止させようとする事態にはならなかった。いずみ先生自身はもちろん、生徒たちも全員、こんなエッチな授業を行なっていた事は、完全に第三者には内緒にしていたからだ。外にバレていない以上、問題になる事もないのである。むしろ、生徒たちは、このエッチ授業が目当てで、メインの英語の授業の方も一生懸命に勉強したので、英語の成績が明らかに良くなり、いずみ先生は校長から褒められていたぐらいなのだった。

また、こんな色っぽい挑発を行ない続けていた事で、いずみ先生に本気でのぼせてしまい、授業時間以外にも先生に手を出して、トラブルを起こすような生徒がいなかったのかと言うと、その辺も、かなりスレスレだったみたいなのであった。確かに、生徒たちは、誰もが、いずみ先生の事を自分のものにしたくて、すっかり心の方も高揚していた。しかし、もし、ここで問題でも起こして、外部にまで全ての事情が発覚してしまったら、もう二度と、いずみ先生のセクシー授業さえもが受けられなくなってしまうのである。そのリスクの大きさを考えると、誰もが早まった事は思いとどまってしまったようで、かろうじて、いずみ先生をめぐる強制わいせつ事件とかも発生しなかったのだった。

さて、ある日、いずみ先生が痴漢に襲われたと言うニュースが飛

び込んできた。痴漢したのは、うちの高校とは何の関係もない、どこかの変質者である。ところが、この痴漢の事を、いずみ先生は簡単に撃退してしまったと言うのだ。痴漢を捕まえたお手柄で、いずみ先生はニュースになったのだった。それで初めて分かったのだが、いずみ先生は、学生の頃は空手をやっていて、しかもチャンピオンだったのである。

実は、先生は、生徒たちが良からぬ事を考えて、束になって飛びかかってくるような事があったとしても、全然平気だったのであった。ラクに皆をはねつける事が出来たのだ。そんな秘密が判明した後でも、いずみ先生は、今までと変わらず、自分から、愛する生徒たちへと、心のこもった性教育授業を続けてくれたのだった。

了

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n6503es/

ハイスクール全裸

2024年5月18日16時44分発行